The Spirit Of Man

人間の精神

Robert Bridges

ロバート・ブリッジズ

日本語版

YASUMOTO KITAN

http://www1.odn.ne.jp/we_insist/

日本語版序文

ロバート・ブリッジズ「The Spirit Of Man」の 1916 年の出版から 100 年を機に日本語版としてまとめたものである。

まず、文献を引用させて頂いた執筆者の方々に、以下の目的のもと、引用の快諾を要請する。

翻訳は、コミュニケーションに関する根源的な問題を孕んでいる。言語の間で言葉の意味は異なるのに、言語間の翻訳はどのようにして可能なのだろうか。突き詰めると、経験、環境が異なる個人の間で、言語による意思疎通が本当に可能なのだろうか。さらには、詩というものが、論旨よりもリズムや印象を表現する芸術であることを思うとき、このような詩を、言語の間で翻訳し、異なる言語で理解することは、実質は無理だと認めざるを得ない。そのため、「The Spirit Of Man」でも原著を読むことを勧める。言い訳だが、本書はその手助けにしかならない。

原著のテーマである善というものは、矛盾に満ち、単純なものではない。序文にもあるが、現代に広く受け入れられている合理主義は、無目的な人間像を示し、善を暗に否定する。「The Spirit Of Man」で、過去の賢人達は、善に基づいて行動しようとし、迷い、苦しむ。このことは、数千年の歴史を経た現代でも、少しも改善していない。（それにしても、悪意が常に純粋で迷いのないものであることに対して、善意というものは、どうしてこれほどまでに、苦悩を伴うのだろう。）

原題「The Spirit Of Man」はこれまで「人間の精神」と訳されてきた。本来、Spirit は「蒸留によって得られる純粋で優れた成分」である。「The Spirit Of Man」は、一般的な人間精神を意味するのではなく、「賢人達による善に関する考察の、純粋で優れた部分」という意味で理解いただきたい。

最後に、ロバート・ブリッジズが「The Spirit Of Man」にて意図した善意が、読者に伝わる事を切に願う。

序文

この書を編するに当たり、私は一つの意図を持っている。この私の意図に対し、読者が満足しないのであれば、いくらこの序文にて説明を加えたところで、無駄であるだろうが、だからと言って、説明を加えてはいけないというものでもなかろう。

まず第一に、私が編した書の海で、読者は、一匹一匹の魚を捕まえるのではなく、できれば体ごと飛び込んでもらいたい。言い換えると、この書に採録した文章は、文脈の中で読んでもらいたい。そして、この目的のために、文中には、出典も作者も記載しなかった。それを入れてしまうと、注意がそらされて、読者の意識を奪い取ってしまい、その思考を支配してしまうと考えたからだ。文脈には順序があるが、前後の論理的なつながりがあるわけではない。実際の読書では、その時々の心の動きがあり、それを制約する事は出来ないのを認め、各ページの上部に、最低限の見出しを入れた。私の決めたこの順序は、原典の良さを損なうことなく、その良さを引き立てるようにと考えた。しかし、判っていただけると思うが、暗示されている主題は本質的なもので、例を挙げると、精神性は、人間性の基礎となるものであり、我々の生活は理想的な哲学、純粋な美において、達成しようとする目標と言うよりは、価値ある主題であるのだ。手短に述べると、人間は精神的な存在であり、心が正しく働けば、外界の出来事を気高い本性によって認識し、外界の物質的な諸相を克服して、精神に従わせる事ができる。

補足的な説明を、巻末の索引に加えた。しかし、誤解の無いように、読者に対してあらかじめ伝えておくが、文学が提供できる最善のものを集めており、これに対するなにか口実めいたものを加えたのではない。編者はこの書で目指した高い目標により、たとえこのような誤解を生んだとしても、結果として全体がよくなっていれば、それで良いと判断したい。どのような利点や魅力を持っていても、それは、私と言う一人の人間の、ある時点で出した結果である。その存在は、特性と共に、誰もが持つように欠点も持っている。それが完全に無くせるとは考えてはいない。

自由と人間性を達成しようとする人間の発展は、突然として阻まれ、その約束は、うわべだけの名誉に取り繕われた偉大な人物達の背信により信用を失った。彼らは今では、人間精神は物質的な力によって動かされていると明言するようになった。

この暗い時代の嵐の中で、希望の光は見えていないが、だからといって、それを諦めて見ているだけではいけない。議論する余地なく、はっきりしている事が２つある。一つは、プロシアによる近隣国の破壊計画は、長大でかつ、科学的に緻密なものであった事。２つめは、プロシアが、その計画をこれ以上は実行できず、縮小するであろうことである。

ゲルマン系の国々が、どこまでプロシアにプロシアという機械のしもべ、機械を君主に抱いた国に征服されるのか。どれほど彼らが世界統一に惑わされ、欺かれるのか。本来、知的であるべき教師が、公的に押し付

けられた欺瞞を意図的に黙認するのか。彼らの社会的な覚醒がどのようなものであるにせよ、我々には予想する事ができない。我々は、隣国の人々が善良で高潔な民族であると考えている。かの国にも率直な友人がいることを知っており、邪悪な精神によって制圧されている事を嘆いている。しかし今、政治的に大きな計画への野心によって一つに統一され、悪意ある手段や動機によって、残酷な軍隊、テロリズム、国家の惨状に流されている状況だ。

その結果引き起こされた不幸、非情で終わりのない殺し合い、憎しみと堕落、そういったものから再び平和を取り戻すには、穏やかでかつ力強い我々の精神が働かなければならない。我々は直感において、人類の先見ある者達、詩人達に従う。彼らの言葉は、親愛、慈愛のある神の言葉である。これに従えば、歴史の濁流に流されず耐えられるだろう。我々の習慣や思想は、確信の光に導かれるだろう。人間の生活は、平和を愛する世代が夢見たような安易なものではなく、哲学者や聖人が描き出したように、邪悪なものとの恐ろしい戦いなのである。そして、善や美に関する彼らの証言の中にこそ、我々が真実を求め、常に直面する悲しみかを回避する上での、サポートが含まれている。ここに加えるならば、全てを創造した神への信仰を持ち続ける事は当然必要だ。

わが国に巣食う愚かさ、罪悪はやがて戒めを受けるであろう。そして、この腐敗が明らかになった時には、我々は神聖であることはできない。我々はまだ心に自由と真実を持っていて、今ならばまだ悔い改めることも可能であるはずだ。我々自身の考えや行動を戒める、その苦しみを耐え忍ぶ力があれば、規律に感謝する事もできる。人類の希望の真実のために、我々にもたらされる、我々の国が神の国だと言う考えを受け入れ、神の声に尻込みする必要はない。今ここに我々は立ち上がろう。そして非難するだけではなく、慰めるのではなく、我々の価値を示そう。なぜなら、それが真に人間の情熱の希望であるから。善なる人間の友愛と世界平和への情熱だ。そのために我々は戦っているのだ。

イギリス人はこれまでもイギリスのために戦ってきた。そのイギリスは自由と栄光を主張する国だ。この世界に示された、自由と言う名声、これは、アルビオン、ブリテン、イングランドの名前から切っても切り離せない。そしてその名声は、アメリカ、南半球の国々、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドへと広がっている。また、アフリカにも、新たな広がりを持つ。これらは我々の栄光と幸福である。悲しみの中にあっても、幸福を見出し、戦争で失った同胞の死の中にあっても、幸福を見出した。何故なら、彼らは、気高いヒーローとして、かつ、聖人として死に、その心と手には、何の憎しみも汚れも無かったからである。

彼らが築いたこの町を歩いていく
邪悪なものから守られたこの街を

1

日常生活においてしばしば出逢われるようなものはおしなべて虚しく、恃むにたらないものであることを経験によって教えられ、また、これまで私にとって怖れのたねであり、まとであったものはすべて、それ自体で善とか悪とかいう性格をもっているのではなく、ただ心がそれらによって揺り動かされるかぎりにおけるにすぎないのである、ということを覚るにおよんで、私はとうとう決心した、すなわち、人間のあずかることのできる真の善であって、他の一切のものをなげうってまでも、ただそれだけで心が感動させられるようなものが何か存するかどうか、いや、ひとたびそれを見いだし獲得したからには間断のない無上の悦びを永遠に享受することのできるようなものが何か存するかどうか、探究しようと。とうとう決心した、と私はいう。なぜなら、一見したところ、まだ不確かなもののために確かなものをあえて抛棄しようとするのはなんとしても向う見ずのように思われたからである。

そこで私は、ひょっとしたら、私の生活の秩序と日常の態度を改めなくても新しい計画を達成することができはしまいか、あるいは、せめてそれについての確かな目安をつけることぐらいはできはしまいか、とあれこれ思いめぐらしてみた。だがこれは、なんべん試みてみても無駄であった。おもうに、人生においてごく普通に出逢われるもので、ひとびとの間で最高善であると評価されている――彼らの所作からそう推察できる――ものは、次の三つに還元される。すなわち、富と名誉と快楽であって、精神はこれら三つのものによって、何か他の善に想いをはせることが少しもできないほどにまで、すっかりひき惑わされてしまうのである。まず快楽についていえば、心はすっかりこれに絡みつかれて、あたかも何か善のうちにでも安住しているような気になり、このため他の善について考えることを大いにはばまれる。しかし、その享楽のあとにはこのうえない深い哀しみが続き、これは、精神を窒息させないにしても、撹乱し愚鈍にはさせる。

しかるに、永遠で無限なものに対する愛は純粋な悦びでもって心をはぐくみ、一切の哀しみを免れている。これこそ、まさに希求されるべきものであり、総力をあげて求められるべきものである。とはいえ私は、ただ真剣に考量しうるかぎり、という言葉をわけもなく用いたのではない。なぜなら、私は、上記のことを精神ではこれほど明らかに認めたのであるが、だからといって、利欲や官能欲や名誉欲をすっかり払いのけるというわけにはいかなかったからである。

私は一つのことに気がついた。それは、精神がこうした思索にたずさわっている間だけは、あの欲心から身を転じて新しい計画のことを真剣に考えていた、という事実である。このことは私にとっては大きな慰めとなった。というのも、あのわざわいはどんな対策によっても追い払うことができないようなたちのものではない、ということが判ったからである。そして、こうした期間は、はじめのうちこそ稀でありきわめて短い間しか続かなかったけれども、しかし、真の善がますますはっきりと私に知られてくるようになってからは、いっそうひんぱんに、また、いっそう長い間、続くようになったのである

2

ああ　どうしたことか、鎧の騎士よ、
色蒼ざめて　ひとりさまよう。
浜すげは　湖上に枯れて、
また　小鳥のうたう　歌もない。

ああ　どうしたことか、鎧の騎士よ、
かくも窶れて　かくも惨めに。
りすの穀倉は　いっぱいで、
穫り入れも　もうすんだ。

おまえの額は蒼ざめて、
苦悶と熱の　汗にぬれ、
おまえの頬は　色香もあせた薔薇の花
うち萎れるのも　はや間近。

牧場で出会った　おとめごは、
あやしくも美しく――小妖精のようだった、
その髪ながく、足かろやかに、
瞳はいきいきと　燃えていた。

おとめごの頭に　花の環をのせ、
花の腕環に　花の帯しめ。
おとめごは　恋する目差し向けて、
あまい吐息を　ついたものだ。

おとめごを　わが馬に乗せ、
あかず眺めて　日が暮れて、
おとめごは　彼方に目を向けて、
妖精の歌を　うたってた。

おとめごは　わたしに捜してくれた、
甘い香りの草の根と　野の蜂蜜と　甘露とを、
そして　不思議な言葉で　たしかに言った――
〈ほんに　おまえが好きです〉と。

おとめごは　わたしを洞穴に連れてゆき、
泣いて　悲嘆にくれたので、
いきいきとした瞳を　閉ざしてやった
やさしい四つの接吻で。

それから　おとめごの歌が　眠りに誘い、
そこでわたしは　夢を見た―― ああ！　忌わしい！
いま見た夢を　夢見たとこは
しとね冷たい　丘だった。

色蒼ざめた　王たちや　王子たちも、
騎士たちも　死人のように　みな蒼かつた。
みんなは叫んで　こう言った――〈つれなき美女が
おまえを　とりこにしている〉と。

暗闇に浮かんだ　かれらの飢えた唇は、
裂けんばかりに大きく開き　おどろおどろに告げていた、
そして目覚めて　気がつくと、
しとね冷たい　丘だった。

これがため　わたしはここに仮寝を結び、
色蒼ざめて　ひとり寂しくさまようが、
浜すげは　湖上に結れて、
また　小鳥のうたう　歌もない。

3
どうした、息子、その不安げな顔は、
気持ちが萎えたのか。さあ、元気を出せ。
余興はもう終わりだ。いまの役者たちは、
さっきも言ったように、みな妖精だ、そしてもう
空気に融けてしまった、希薄な空気に。
だが、礎を欠くいまの幻影と同じように、
雲をいただく高い塔、豪華な宮殿、
荘厳な寺院、巨大な地球そのものも、
そうとも、この地上のありとあらゆるものはやがて融け去り、

あの実体のない仮面劇がはかなく消えていったように、
あとにはひとすじの雲も残らない。我々は
夢と同じ糸で織り上げられている、ささやかな一生を
しめくくるのは眠りなのだ。なあ、君、私は苛立っている。
私の気弱さを許してくれ。この老いた頭は悩み苦しんでいる。
意気地ない私を気遣うことはない。
よければ、私の岩屋に引き取り、
休んでいてくれ。私はその辺を一回りしてくる、
乱れ打つ胸も鎮まるだろう。

4
ああ　ひまわりよ　時間に倦み
旅人の　旅路のはての
あの黄金の甘美な国を求め
太陽の歩みを　数える花よ

それを求めて　欲求不満のやつれたわこうども
雪白の経唯子を身にまとう蒼ざめたおとめも
かれらの墓から立ちあがり　あこがれる
わたしのひまわりが行くを願うあの国へ

5
詩人はこの場所では落ち着いてはいられない
彼はこの土地の持つ素朴な楽しみを愛していた
愛する仲間は去ってしまった
（影が地面に伸びていく）
ここにいるのは、羊飼いと老いた羊
人々の生活は
この暮らしに疲れ、悩んでいる
彼は出掛けたが、彼の歌声は災いをもたらした
幸せな土地に嵐がやってきた
嵐が過ぎ去るのを待つ間に、彼は死んでしまった

あまりにも急な失望、あなたはどこへ行ったのか
もうすぐ夏の祭りがやってくる

もうすぐカーネーションの花が咲く
もうすぐキンギョソウの花が咲く
優しいウィリアムの屋敷から香ってくる
芳しい花々を集めている
バラの花は谷の下の方に咲いている
ジャスミンの花をしつらえた生垣
庭の木々の木陰で昼食をとっている
やがて満月と共に白い星たちが輝く

6
踏む人のない海床に
みどりやむらさきの海草がまかれている
岸に投げつけられる波は
星のふるなかに溶け入る光のよう
ひとり浜べに坐していると――
まひるの海の閃光が
まわりにきらめき　その律動から
ひとつの調べがわきおこる

ああ！　わたしに　希望も　健康も
心の平和　まわりの静寂もなく
賢者が瞑想のうちに見いだし
内なる栄光で報いられてあゆむ

しかし　いまは絶望さえもやさしい
この風と海のように――
わたしは疲れた子どものように伏し
これまで耐え　なお耐えねばならない
憂きこの世を　泣いて忘れるとしよう

7
険しい道のり、扉は閉ざされたまま
生きる事は容易ではない
しかし、一度啓示を受けた私の魂は
炎の降り注ぐオリエントの山にでも登る事ができる

地上の靄の中を通り抜けて
天国へと昇る事ができる
天がどのような働きをするのかを知らないと言うのは
愚かな精神ではないだろうか

8
何事にも屈従した
無駄だつた青春よ
繊細さのために
私は生涯をそこなつたのだ、
おゝ！　心といふ心の
陶酔する時の来らんことを！

私は随分忍耐もした
決して忘れもしはすまい。
つもる怖れや苦しみは
空に向って昨日去（い）った。
今ただわけも分らぬ渇きが
私の血をば暗くする。

時よ来い、時よ来い、
陶酔の時よ、来い。

9
マーガレットよ　お前は黄金色をした
木立がその葉を落すのを嘆いているのか？
木の葉のことを　まるで人間の世界の事柄のように
その初初しい心で心配することができるのだろうか？
ああ！　心はだんだんと成長するにつれて
そのような光景には感動しなくなる
また森全体が生命をなくし　落葉があちこち
散らばるようになっても　溜息すら漏らさなくなる
それでいながら　お前は泣きじゃくってその訳を知りたがる
ねえ　お前　その訳なんてどうでもいいんだよ

かなしみの泉は同じなんだ
口も心も魂が聞いたことを
霊魂が推し量ったことを　言い表わせないんだ
人が生れて来たのは立ったまま　枯れて行くため
だからマーガレット　お前が悲しんでいるのは自分自身のことなんだよ

10
青空を流れていく白い雲を見なさい
その雲のように平原を進んでいく羊たちの群れ
目には映らないが、風は森を吹き渡っていく
喜びの馬車に続いていく従者の列
音楽と平和と幸福な愛を伴って進む
馬車を降り、新鮮な空気の中を歩く
翼の上に立つ美しい体、極上の白い花々
エレウシスのオリーブで作られた冠
しかしやがて、夜という恐ろしい女がやって来る
嵐が吹き荒れて、羊の群れを追い散らしてしまう
棺を運ぶための、巨大な雲を連れてくる
木々から葉を奪い
その若々しさも、喜びも、消えてしまう

11
西の海を　すみやかにすすめ
「夜」の精よ！
おまえが長い日中をひとり、
おまえを恐ろしくもなつかしくもさせる
歓びと恐怖の夢を織っていた
霧のふかい東の洞窟から
すみやかに飛んでこい！

おまえのすがたを
星を織りこんだ灰いろのマントにつつめ！
「昼」の眼を　おまえの髪でくらくし、
くちづけで「昼」を疲れさせ、
そして　ねむりの杖であらゆるものに触れながら

市を　海を　陸をさすらえ
さあ　待ちこがれたものよ！

わたしは起きてあけぼのを見たとき
わたしはおまえをおもい焦がれた。
陽が高くのぼり、霧が消え、
白昼が花や樹に重くのしかかり、
疲れた「昼」が　よろこばれぬ客のように
去りがてに　休息にむかうとき
わたしはおまえをおもい焦がれた。

おまえの兄弟の「死」が来てさけんだ――
わたしに来てほしいのか　と。
かすむ目の　おまえのいとし子「眠り」は、
白昼の蜜蜂のようにささやいた――
あなたのそばにおりましょうか
わたしに来てほしいのですか　と―― そこで　わたしは答えた
いや　おまえたちではない！

「死」は　おまえが力尽きたときにやってくる
はやく　あまりにもはやく――
「眠り」は　おまえが去ったときにやってくる。
だが　わたしはどちらの好意も求めない
愛する「夜」よ、わたしはおまえに求める――
すぐに飛んできておくれ、
さあ　はやく　はやく！

12
なにゆえ、悩む者に光を賜い、心の苦しむ者に命を賜わったのか。
このような人は死を望んでも来ない、／これを求めることは隠れた宝を／掘るよりも、はなはだしい。
彼らは墓を見いだすとき、非常に喜び楽しむのだ。
なにゆえ、その道の隠された人に、／神が、まがきをめぐらされた人に、光を賜わるのか。
わたしの嘆きはわが食物に代って来り、／わたしのうめきは水のように流れ出る。
わたしの恐れるものが、わたしに臨み、／わたしの恐れおののくものが、わが身に及ぶ。
わたしは安らかでなく、またおだやかでない。わたしは休みを得ない、ただ悩みのみが来る」。

13

今日の戦闘は、消えゆく雲が明るさを増す光と
競い合う、明け方の戦いにそっくりだ、
羊飼いが指先を息で温めながら、
もう朝かまだ夜かと迷っている時刻のようなもの。
大海原が潮流に勢いを借りて風と争うように、
いま形勢がこちらになびいたかと思うと、
同じ海が風の怒りに押されて退却するように、
もうあちらになびいている。
ある時は海が勝ち、ある時は風が勝つ、
いま一方が優位に立つと、すぐに他方がそれをしのぐ
双方が胸突きあわせ勝利者になろうと戦っているが、
まだどちらが勝者か敗者か決着はつかない。
両軍互角の激戦だ。
さあ、このモグラ塚のような丘に腰をおろそうか。
神のみ心にかなう方に勝利が訪れますよう。
妃のマーガレットは、それにクリフォードまでが、
私に戦場から離れていろと叱りつけた、二人とも
私がいなければ勝てると言い切る。
いっそ死んでしまいたい、それが神のみ心なら。
この世には苦しみと悲しみしかないのだから。
ああ、神よ！　朴訥な羊飼いの暮らしのほうが
私にはよほど幸せに思えます、
いまの私のように丘の上に腰をおろし、
日時計の目盛りを一つ一つ丹念に刻みつけ、
それを見て時の歩みを知る、
何分でちようど一時間になるか、
何時間で丸一日になるか、
何日で一年が終わるか、
何年で人の一生が尽きるか。
それが分かると、時間を振り分ける、
何時間、羊の世話にかけるべきか、
何時間、休息すべきか、
何時間、瞑想にふけるべきか、

何時間、楽しい気晴らしにかけるべきか、
何日たてば雌羊は仔をはらみ、
何週間たてばその無垢な生き物が子羊を産み落とすか、
何年たてば羊の毛が刈り取れるか。
そんなように何分、何時間、何日、何週、何ヶ月、何年かが
それぞれの使命を帯びて過ぎて行き、やがて
白髪頭を静かな墓に送り込んでくれる。
ああ、何と甘く素晴らしい人生だろう！
無邪気な羊たちを見守る羊飼いに
サンザシの茂みが落とす日陰は、
臣下の謀反を恐れる王たちを覆う、豪華な刺繍をほどこした
天蓋よりもはるかに心地よいのでは？
ああ、そうとも、一千倍も心地よい。
詰まるところ、羊飼いたちは自家製のチーズ、
革袋から飲む冷えた弱い酒、
さわやかな木陰での日々のまどろみなど
すべてを何のわずらいもなく満喫する、
それは、王侯が味わう山海の珍味、
黄金の杯のなかできらめく美酒、
贅を塊らしたベッドでの眠りよりずっといい、そこには
気苦労、不信、裏切りがかしずいているのだから。

14

さもあれ、見よ、人間のあらゆる地上の所有および達成の中で言語に絶して尊貴なものは、彼のもつ様々の「表象」（神聖なる、また神聖めきたる）である。人はこの人生の戦闘において、これをかざして奮進し、必勝を期して戦う。吾等はこれ等を彼の（実現せる理想）と呼び得る。これらの実現せる理想の中、他は暫く措き、ただ次の二つだけを考えよ。彼の教会、即ち、精神的導師と、彼の帝王、即ち現世的導師とをである。教会とや、世には何という言葉があったことぞ、ゴルコンダよりも全世界の財産よりも豊富なものではないか！人里遠い山々の真中に小さなカークが立っていて、死者は、いづれも白い墓石の下で、「幸福な復活を望みつつ」その周囲に眠っている。――ああ読者よ、若し如何なる時にも（例えば、かかるカークが幽霊のように中空に懸かって、萬有があたかも闇黒にのみ尽されたかと見えた哭哀々の真夜中にも）、それが諸君に言語に絶した、しかも諸君の心の心に徹り抜くような様々な事物を語らなかったとせば、彼は、たとひ「無窮の中心にありとも、二つの永劫の会流点にありとも」、それによって、なおかつ大丈夫らしく神と人に対した。茫然として際涯のない宇宙も、彼にとっては堅固な城市となり、勝手のわかった住所となったのである。「信仰」には、――いしくもいはれた「われ信ず」という言葉の中には、かかる功徳があっ

た。人々がそのクレドオを尊重し、これがために層重々たる堂塔と畏敬すべき聖職を創め、その資財の十分の一を捧げることも尤もではないか。これこを、為めに生くるに足り、為めに死するに足るものであった。

だが、そういう理想が何一つ生長も開花もしないあの頽廃時代については何うか。信仰と忠誠がともに地を拂って、ただそれ等の口舌のみの虚偽な反響よりのこっていない時代、あらゆる荘厳が浮華となった時代、権威ある人々の信条がイムベシリティか、マキャベリズムか二者のいずれかになった時代については何うか。ああ、これ等の時代をば世界史は全然度外視してよい、これ等の時代には、次第々々に圧縮さにれて来て、遂には人類の記録中から削除される、仮偽の時代として抹殺されるのである。――実際又、仮偽の時代ではある。不幸なる時代よ、いずれ如何なる時代かに生まれるにせよ、かかる時代に生まれることは、一つの不幸にほかならぬ。生まれて、そうしてあらゆる伝統と実例とによって、ただかかることを――神の宇宙はベリアル（悪魔）のものであり、虚偽であるということ、「世界一の大山師」が人間の大教主であるということを、知ることは！とはいえ、この嘆かわしくとも嘆かわしい信念のままで、幾時代かの人々全体が（二代、乃至時々は三代も相続いて）彼らの所謂生涯を送っては、――再び出世する機会もなしに、消滅してゆくのを吾等は見ているではないか。

15

伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である。
日の下で人が労するすべての労苦は、その身になんの益があるか。
世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変らない。
日はいで、日は没し、その出た所に急ぎ行く。
風は南に吹き、また転じて、北に向かい、めぐりにめぐって、またそのめぐる所に帰る。
川はみな、海に流れ入る、しかし海は満ちることがない。川はその出てきた所にまた帰って行く。
すべての事は人をうみ疲れさせる、人はこれを言いつくすことができない。目は見ることに飽きることがなく、耳は聞くことに満足することがない。
先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。日の下には新しいものはない。
「見よ、これは新しいものだ」と／言われるものがあるか、それはわれわれの前にあった世々に、すでにあったものである。
前の者のことは覚えられることがない、また、きたるべき後の者のことも、後に起る者はこれを覚えることがない。
伝道者であるわたしはエルサレムで、イスラエルの王であった。
わたしは心をつくし、知恵を用いて、天が下に行われるすべてのことを尋ね、また調べた。これは神が、人の子らに与えて、ほねおらせられる苦しい仕事である。
わたしは日の下で人が行うすべてのわざを見たが、みな空であって風を捕えるようである。
曲ったものは、まっすぐにすることができない、欠けたものは数えることができない。

わたしは心の中に語って言った、「わたしは、わたしより先にエルサレムを治めたすべての者にまさって、多くの知恵を得た。わたしの心は知恵と知識を多く得た」。
わたしは心をつくして知恵を知り、また狂気と愚痴とを知ろうとしたが、これもまた風を捕えるようなものであると悟った。
それは知恵が多ければ悩みが多く、知識を増す者は憂いを増すからである。

16
『そもそも思考のはたらき、つまりはことわりと共にあろうとする探究においては、おそらくは、われわれをはこぶ途は、　一種の〈間道〉でしかないだろう。なぜなら、われわれが生身の肉体をもち、われわれの魂がそのような悪にすっかり混じり合っているかぎりは、われわれの求めてやまぬもの―― まさに〔あることの〕真実というのがそれだとわれわれは主張するのだが―― それを完全に獲得することは、断じて不可能だからだ。というのも、どうしてもわれわれは肉体を養わねばならず、それゆえに、かずかぎりのない煩わしさがいつも肉体によってわれわれにはもたらされてくるからだ。そのうえ、なにか病気でもふりかかってきたとしたら、それこそわれわれの〈存在〉の狩は、その途を塞がれてしまうというわけ。でまた、この生身の肉体は、愛欲とか欲望とか恐怖などの、ありとあらゆる種類の幻影と、かずおおくの愚かしさでわれわれを充たし、その結果は、まさしくこのからだのおかげで、世にいうように、まことわれわれには考える機会すら何ひとつ片時も生じないのだ。というのもじじつ、戦争にしても内乱にしてもいろいろの争闘にしても、それらは、ほかならぬ肉体と、それのもつ欲望が生じせしめているのだからねえ！

われわれは肉体からは離れ去らねばならず、まさに魂それ自身によって、ことがらそれ自体を観なければならない。そしてわれわれが求めつづけているもの、それをこそ恋する者であると語っている当のもの、すなわち〈知〉が、われわれのものとなる時はといえば、それは、このことわりの示すところでは、どうやらわれわれの死んだときにおいてであり、生きている間はないということになるのだ。

というのはまさにその時においてこそ、魂は、肉体から離れて、ひとりそれ自身においてある魂そのものとなるであろうが、それ以前にはそのことは不可能だから、だ。

こうしてそのはてに、ひとたび肉体の愚かさからは離れ去って、清浄なる者となれば、――まさにしかるべきこととして―― それからのちは、おなじく清浄なる者たちと共にあることもできようし、また真のわれわれ自身を通じて、〈存在の純粋なるもの〉をすべて知識することもできようというのだ。そしておそらくは、この存在の純粋なるものこそが、〈真実〉というものにほかならないであろう。

17
友よ、生きている限り、神を求めなさい
生きている限り、神を知りなさい

神は私たちを人生の中へ解き放った
生きている限り、その絆を解いてはいけない
死を逃れるなど、どうして出来るでしょう？
魂は神と一体であるべきもの、虚ろな夢想ではない
魂は肉体から抜け出していくもの
今、見出す神を、その瞬間にも見出す
もしそうでないのなら、死の街へと向かう他ない
今、神と一体であるのなら、その瞬間にも神と一体でしょう
真実に身を浸し、本当の主を知る
正しい名を信じなさい

カビールは言いました
真実を求める心が救いをもたらす
私は真実を求める心のしもべです

18
私の家、家族
やさしい光につつまれ
暖炉の炎が眩しい
薪が焼ける香りがする

私の休息
疲れ果てるまで歩き回った
空腹を紛らわせ
新たな希望を探す

友のため
息が苦しくなるような夢
最後の力を振り絞り
輝く栄光を見つけ出す

19
この大きな空の下で、私は夜となく昼となくさまよい続ける
私の居場所はこの広い砂漠
病気や傷の苦しみこそないけれど

私は夜となく昼となく悲しみ続けている

主よ、家のない私はどこへ行けばいいでしょう
砂漠をさまよい、どこへ行くべきでしょう
あらゆる場所を断られ、あなたの所しかなく
あなたのドアまで閉じられるのならば、どこへ行けばいいのでしょう

あなたと共にある者は幸福です
主よ、あなたと共に語り合い、あなたと共に暮らす者は幸福です
私の手足は疲れきり、心は恐怖に震えています
あなたを求める者と共に、ここに座っています

喜びをもって飲み干す、あなたへの信仰
手も足も失った絶望、それもあなたへの信仰
私たちがナザレ人であっても、イスラム教徒であっても
私たちの宗教が何であろうと、あなたを信仰します

20
毎日、困難な仕事が山のようにあり、私たちはこの仕事をこなさなければならない。私は隠れるように一人でここに暮らしているが、その事を私自身は満足に思っている訳ではなく、悲しく感じている。一人静かに、その悲しみを感じながら座っていると、愛するピーターがやってきた。彼が幼い頃からの友人で、聖書も一緒に読んでいる。彼は私のところへ来て、興奮した調子でこういった。「どうしたのですか？何か悪い話でも？悲しそうな顔をして。」私は答えた。「毎日の生活の中で、私が感じる悲しみは、古くかつ、新しいものだ。ずっと以前から続いていて、日々、新たな悲しみが増していくという事だ。本当のところ、私の心は、仕事の中で傷つき、ずっと以前、僧院で暮らしていたときのような平静を求めている。日々の些細な事柄や、悩み事について考える事を止め、神の事だけを考えるには、どうしたらよいのか。いつかは死ぬこの肉体の中にあっても、情念を超えた思惟を行うには、どうすればよいのか。死は誰も逃れられないものだ。愛は、人生への入り口であり、努力への報酬である。しかし今、私の心は世の中の人々の仕事について関わっている。私の心は雑多な仕事の埃に汚れてしまった。人々を統治するにあたって、外界へとその方向を変えてしまった。そして、内面の精神的な事柄を求める事へ、戻る事が出来なくなってしまった。今、私は、自分の苦しみについて考えている。大切だと考えていながら、失ってしまった物についてだ。私はかけがえの無いものを、失ってしまったと考えている。私の心という船は、嵐の中で、波に揉まれている。嵐の中で、雨が叩きつけている。いや、これまでの人生を振り返ったとき、一度離れた陸地を振り返ってため息をつく気持ちだ。そして感じるのは、長い間人生の浮き沈みの中に身をやつしてきた事、そして、船が出港した港を見失ってしまったという事だ。そして、最後には、善を信じなくなった。でも、それを失ってし

まった事、善を忘れた事は判っていた。記憶の中には、善を行っていたときの記憶が残っていた。私の心の中には、為すべき事が浮かんできた。私は海の上で、目指すべき清らかな場所を見失っていたのだ。この世の中で、精神を奪われてしまった者たちを思い出し、悲しむ気持ちが膨らんでいった。私たちの登るべき高い場所の事を考えると、なんと低い場所にいるのだろうか。創造主に従って静かな生活を送っている者がいる一方で、残された者は、人間世界の出来事に心をすり減らしている。全能なる神は、現世での仕事で心をすり減らすような事を、望んではいないと言うのに。」

21
もう少し先まで案内の手を貸してくれ
この見えぬ足取りに、いま少し先まで
向こうの土手なら日向も日陰も選べる。
たまに奴隷の苦役から解放されることなどあれば、
私はそこに座るのが常。
ふだんは雑居房に閉じ込められて、
鎖に繋がれた囚人の身。
獄舎のむしむし、じめじめ、不健康な空気さえ
自由に吸えぬ。だがここならほっとする。
夜明けとともに吹き始める、清々しく心地よい天の息吹が
爽やかに吹いている。ここでこのまま一息入れさせてくれ

22
森の中に身を横たえてすわり、
楽しき思いの数々、わが心に、
悲しき思いをもたらす心地よき気分にあれば、
混りて響く百千の歌声を聞きぬ。

「自然」はその美しき創造物に、
わが心に流るる人間の魂を結びつけたり。
さても人間の作りし人間の態を思い、
わが心は深き愁に沈む。

心地よき樹陰の桜草の叢の中に、
雁来紅はまつわりすがる、
花みなはそのいぶきする大気をば、
たしなむとわれは信ずる。

あたりには小鳥は跳びかつ戯れぬ。
小鳥の思いはわれ知るを得ざれど、
そのいとも幽けき身動きすらも、
喜びのみぶるいとさえも思わるる。

そよ吹く風を捉えんと、
芽ぐむ小枝はその扇を開く。
そこには必らず喜びありと、
われ思わざるをえざるなり。

もしこの思い天より送られしものならば、
もしそは「自然」の聖き企みならば、
人間の作りし人間の態をも
悲しみ嘆く故なからずや。

23
五月の六日目の朝
柔らかな雨に彩られた
緑の葉と鮮やかな花が溢れている庭
庭師が丁寧に手入れして
この庭を作り上げた
このような美しい庭は他にはない
もしあるとすれば、それは楽園
鮮やかな花の色と香りが
心を生き生きさせる
よほどの大きな苦しみ、悲しみに襲われない限り
この庭は生まれた時の美しさのまま
それほどまでに喜びの美に満ち溢れている

24
松林の方へと歩いていった
海からの波が打ち寄せる浜辺
軽やかな風が住む所
嵐はどこかへ引き上げてしまった

眠たげな波がひそやかな音を立てる
雲は海の上で遊んでいるかのよう
深い海の胸元に
天国が微笑みながら横たわる
それはまるでこの一瞬の時が
空の上からの贈り物であるかのよう
大空の太陽から
楽園の光がこぼれるように降り注ぐ

松林の中でじっと立ち止まる
人の入らぬ広い林は
嵐で荒れてしまった
大きな蛇たちが絡み合い
青い音を立てて息をする
天国の下を流れていく
調和とその色彩
その優しさ
今、背の高い木々も眠りにつく
海の中で揺れる緑色の波のように
深い海のように静かに
海の底に広がる森のように

25
霧と　熟れたる　豊饒の季節よ、
恵みあふれる太陽の　親しい友だちよ。
茅のひさしに捲きついた葡萄づるには　重い房を
どんなに垂れ下げようかと、おまえは太陽と語らいたくらむ。
苔むした納屋の古木には　林檎をたわわに実らせ、
すべての果物を　その芯にまで熟れさせようとする。
また　ひょうたんを膨らまし、はしばみの皮を
甘い仁で大きくし、そして蜜蜂たちには
遅れ咲きの花を　もっともっと開かせようとする。
夏が蜜蜂の巣の蜜房に　ねばねばと満ちていて
暖かい日々の終わることが　ないだろうと思うまで。

誰が　収曜の時に　しばしばおまえを見かけなかったであろう。
ときおりおまえを　あちこち捜したものなら、
おまえが穀倉の床のうえで　吹き過ぎる風に髪をゆるやかになぶらせて、
ただぼんやりと坐っているのを　見かけたものだ。
あるいは　半ば刈りとられた畝で　罌粟の匂いに眠気を催し、
いっぽう　おまえの鎌は　次の麦株と絡まる
花々を惜しんで　ぐっすりと寝入っている。
またときおり　おまえは　落穂拾いの人のように、
荷をのせた頭をしっかりと保ち　川むこうに向けたりする。
あるいは　辛抱づよい目差しで　果物搾りから落ちる
最後の滴りを　いつまでもいつまでも見守っている。

春の歌ごえは　どこへ行ったのであろう。ああ、いまはどこに。
そのことを思うてはならぬ、おまえには　おまえの歌がある――
たなびく雲は　紅く沈まんとする夕陽に映え、
薔薇いろに　切株の畑を染めるとき、
ちいさな羽虫のむれは　かわやなぎの枝のなかで
かろやかな風が立ち　またやんだりするままに、
高く運ばれ　あるいは低く降りたりしながら　悲しげにうたう。
生長した仔羊が　むこうの丘から　啼きつつやってくる。
垣根のこおろぎが鳴く。そしていま　菜園に
駒鳥が　美しいソプラノで囀る。
また空には　南に帰る燕のむれが囀っている。

26
いざ立ちて行かばやなイニスフリーへ。
粘土拈り細枝編み小さき茅舎かしこに建てん。
九畝の豆、蜜蜂の巣をいとおしみ、ただ一人
住まわなん、蜂うたう林のなかに。

かくてわれそこばくの平和を得ん。
平和ぞおもむろに滴して、草蟲すだけるところ
あさあけの薄とばりを洩りこぼれ、真夜ほの光り
昼は輝き、紅雀夕を群れ翔ぶ。

いざ立ちて行かばやな、夜昼のけじめなく
水際にてかそけく波の声あれば。
黄塵の街路を行くも、なおわれは、
胸のおくがに沙々と鳴る、その声を聴く。

27
静かな水面、風も止んだ
青い海、陸地よりも心地よい
穏やかな笑み、その深さが心を和ませる
乱れていた私の心
深い海の唸る音を聞き
波が作る泡、崩れ落ちる波
大地と森の
退屈な生活からの変化
そこは風が吹き松林が清らかな風音を立てる

暗く一つだけ離れている小屋、海の辛い仕事
魚を採って暮らす、大したものではない
私はゆっくりと手足を投げ出す
水面の下、水音が聞こえると
静かな心を揺り動かす、邪魔なほどでもない

28
こちらに来て座りなさい、この豊かに茂る松の木の下へ
美しい巻き毛、西風の口づけに揺られながらため息をつく
私のフルートは水の底へ、泡を残して沈んでいく
甘美な喜びの記憶に、あなたは目を閉じて夢を見る

29
憩いの場所にと、人々は田園や海浜や山地を求める。おまえにもまた、そうしたものを熟望する習わしがある。しかし、欲するときにおまえは自己の内に憩えるにもかかわらず、なおかつ、そのような態度をとることは、そもそもこのうえなくばかげたことである。ひとはいずこにあっても、自己の心内に退いて憩うよりもより安らかに、諸事面倒から離れて、―― とはいかぬものである。ひとたびそれを覗き見るや、身はただちに快適のきわみとなるごとき拠りどころを、内に持つ者においては、ことにしかりである。ここに私のいう「快適」とは、「よき秩序」以外のなにものでもない。

されば、かかる憩いの場をたえずおまえ自身に与え、おまえの生気を新たにせよ。

30

だがしかし、他をはなれて、魂がみずからにおいて考察するときには、かしこ、純粋のもの永劫のもの、不死であり不変なるものへと赴き、さながらその存在との同族性を証するがごとく、まさに魂がひとりそれ自身にかえり、それが許されるときには、つねにかのものと共にありつづけるのである。そして、永劫不変の存在にふれるがゆえに、魂の彷徨はやみ、まさにかのものとかかわりつつ魂もまたつねに同一性においてある不変のものとなるのではないか。そしてまさに〈知〉とよばれるものは、魂のそのような状態にあることを名付けたもので、本来あったのではなかったのか

31

私の家は天神の宮殿の星をちりばめた
門の前にあって、輝く天人たちが
不朽の姿をして、静かに澄みわたった大空に
それぞれの分野を守って住み、
地球という畜舎の中で、人間どもがひしめきあい
くだらぬ事に心を痛め、いたずらに
はかない生の営みにあくせくしている
この暗い現世の塵煙を見おろしている。
そして人間どもは愚かにも『徳』が、
その真の下僕である肉体がほろびると、
よろずの神々と共に聖座にすわらせて、
不死の宝冠を授けるのも知らないのだ。
しかし又、この永遠の宮殿の扉を開く
黄金の鍵を手に入れようと、正しい道を
歩んでいる人もいる。私の使命はまさに
このような人のためである。この使命を果さないで
罪にけがれた塵の世の臭い吐息で
この純白の天衣をよごしたくはない。

32

さて、このようにしてわたしの母がこの世を去るべき日が近づいたとき――その日をわたしたちは知らなかったが、あなたは御存じであった――わたしはあのかくれた取り計らいと信ずるが、わたしと母とはただ二人、わたしたちが宿っていた家の庭が眺められるある窓にもたれていた。それはあのティベル河畔のオスティアであったが、わたしたちはここでこの世の雑踏から逃れ、長い旅路に疲れた身体を休め、（アフリカ

へ）船出する元気を養っていた。それで、わたしたちは二人だけでこの上なく愉快に語り合って、わたしたちは、「後にあるものを忘れ、前にあるものにひきつけられて」、真理なるあなた自身の御前で、「目も未だ見ず、耳も未だ聞かず、人の心に浮かんだこともない」聖徒たちの永遠の生命とはどのようなものであろうかとたずね合っていた。しかしわたしたちは、あなたの泉の、すなわち、「あなたのもとにある永遠の泉」の天上の流れにむかって、わたしたちの心の口を開き、能力のおよぶかぎり、この泉の水にうるおされて、何とかこのすばらしいものについて思いを巡らそうとしていた。

そしてわたしたちの話が、官能の快楽はどんなに大きくあろうとも、またどんなにまばゆく物体の光で輝こうとも、あの永遠の生活の楽しさに比べると、比較にならないのみではなく、語るにも値いしないように思われるという結論に到達したとき、わたしたちは「存在するもの」に対してますます激しい熱情をいだいて立ち上り、段階的にすべての物体的なものを通りすぎ、そこから日と月と星とが地上を照らす天をも通りすぎた。それからわたしたちは、心の中であなたの御業を思い、語り、驚嘆しながらなお高くのぼった。こうしてわたしたち自身の精神に到達したが、わたしたちはそれをも越えて、あの「永遠に豊かな国」に到達しようとした。この地はあなたが真理の糧をもって永遠にイスラエルを養うところであり、そこでは生命は知恵であり、この知恵によってすべてのものは、過ぎ去ったものも、まさに来たらんとするものも、成るのである。しかも、この知恵そのものは成ることがなく、かつてあったようにいまもあり、将来もつねにそうあるであろう。いや、むしろ知恵には「あった」とか、「あるであろう」とかいうことはなく、それは永遠であるから、ただあるのみである。というのは、「あった」とか、「あるであろう」とかいうことは永遠でないからである。わたしたちは、このようなものについて語り、このようなものにあこがれながら、全身の力を尽してわずかにそれに触れた。わたしたちは深い溜息をついて、そこに「御霊の初の実」を結び残して、初めと終わりがある分節的な人間の言語に帰った。

それで、わたしたちは次のようなことを語り合った。もしだれかのうちに、肉の騒ぎが静まったなら、地と水と空気の表象が静まったなら、天界も静まったなら、魂もそれ自身に沈黙し、もはやそれ自身のことを考えずに自分を乗り越えて行くなら、また夢と想像の示現がすべての口舌とすべての身振りと来たって過ぎ去るすべてのものがだれかのうちにまったく静まったなら――もしだれかこれらのもののいうことを聞く人があるなら、それらはみな「われわれがみずからわれわれを造ったのではなく、われわれを造ったのは、永遠にとどまられる方である」というであろうから――もしそれらのものがこういって耳をそれらのものの創造主の方に傾けたのち沈黙して、そして神自身がただひとり、それらのものによって語るのではなく、神自身で語られ、こうしてわたしたちは神自身のことばを人間の口舌によっても、天使の声によっても、雲の響きによっても、謎のようなたとえによっても聞くことなしに、わたしたちがこれらのものにおいて愛するかれのことばそのものをわたしたちがたったいま非常な緊張と急速な思惟によって万物の上にとどまる永遠の知恵に触れたように、直接に聞くことができるなら、そしてこのような状態が続いてこれとまったく類を異にした他の表象が消え失せ、ただこれのみがそれを観照するものの心を奪って、他のすべてを忘れさせ、内的な歓喜にひたらせるなら、こうしてわれわれがあえぎ求めていた認識の一刹那であったものがそのまま

永久の生命となるなら、そのときこそ、「汝の主のよろこびのうちにはいれ」といわれることができるのではなかろうか。

33
時間は短い、道のりも短い、知りうる限界を超えるまでには
甘くも苦いこの世界を超え、未知の世界までにも

時間は短い、道のりも短い、長居すれば戻れなくなる
いつか死ぬという事も忘れてしまう

34
あの愛らしい姉妹が通っていった小径、
松や杉や水松の木が
永遠に茂るほの暗き樹々のあたりの小径が
天の広い青空から隠されている、――
日の光も月の光も、雨も風も
こんもりと茂る樹陰には差しこめない、
何ものも。ただ、露の雲が
地を這う微風に吹き寄せられ、
年経りし樹々の幹の間を通り、
真珠の露を緑の月桂樹の、咲きそめた
ほのかな花の中に置いていき、
か弱く美しいひともとのアネモネの花を
うなだれさせ、しずかに消え行くときのほかは、――
また、星あまたある中で、
険しく傾斜する夜を昇りさすらう星が
隙間を見つけてそこを通り、
その光線を高きより深みに落とし、
留まることのない天の力で
運び去られぬうちに、
金色の光の雫が降らし、
一つになることのない雨脚のようにするときのほかは、――
そして、あたりは神々しい暗黒、――
そして、下は苔むす地。

そこでは、こだまたちが魅せられて渦の輪となり戯れる、
楽の音の言葉を話すこだまたちが。
渦の輪はデモゴルゴンの大いなる法則により、
心を溶かし、歓ばせ、楽しい畏れを与えつつ、
すべての精をあの秘められし道に引き寄せる、
さながら内陸の船が海のかなたへと急ぎ、
山の雪解けに勢いを得て流れくだるように、――
そして、まず、優しき歌声が、
語らいや眠りにかけるものたちに聞こえ、
運命の人々を目覚めさす、――穏やかな感情が
その心を惹きつけ、促す。眼開けしものらは言う、
かなたなる、後方の、息吹する大地から
羽を挙げよと促す風が沸き起こり、
彼らをその行く道に追いやるのだ、と。そして、
彼ら自身の疾い翼と足は
内なる願望に従っているのだと信じる、――
このようにしてかれらはその行く道を漂い行く、
なおも甘美に、だが音高く力強く
歌声の嵐は急ぎ運ばれて行く。
吸いこまれつつ、疾走しつつ、――急ぎ走り行く
その背後には大濤、増し集まり
かの運命の山へと向かい、彼らを運ぶ、
つつましい大気の中の雲のように。

第一のファウヌス

この精たちはどこに住んでいると思うか、
森の中でこんな優美な楽の音を奏でている。
訪れるものとてない洞穴のあたり、われらの歩きまわるところは、
木立の茂みの中。だから荒涼としたところのことは知っている、
だが、あの精たちには出会わない。その歌はよく耳にするが――
いったい、どこに隠れているのか。

第二のファウヌス

言い難いことだ――
精たちのことに詳しいものたちの言うのを聞いたことがある。

あの気泡は、太陽の不思議な業が
ほの白い水中花から吸っているもの、
その花は水清い湖や池の、軟泥の底に咲きつめている。
その気泡をあの精たちは天蓋として住み、浮かんでいる。
緑色と黄金色の気の下で、
織りなす樹々の葉の間を真昼がかきたてる気の下で、――
そしてこの気泡が、火のような純粋な空気、
この透きとおる堂宇の中で精たちが呼吸している空気が、
夜空に流れる流れ星のように立ちのぼってくると、
精たちはそれに乗り、猛烈な速さで突進し、
その気泡の燃える頭を下に向け、火となって
大地の水の中に再び滑り込んでいくという。

第一のファウヌス
それがその精たちの生き方なら、ほかの精の生き方は別なのか。
桃色の花の下や、牧場の花の冠の中では、
まだ閉じたままの濃い菫色の花の花冠の中で、
枯れゆくときの、失せなんとする香りの上や、
露の玉に映ゆる陽光の中では。

第二のファウヌス
そうなのだ、もっともっとある、それはよく分かるだろう。
だが、このように話していたら、昼になってしまい、
片意地なシレノスは、自分の山羊の乳を搾っていないのに気づき
あの分別ある愛すべき歌をうたいたがらなくなるだろう、
運命や機会、神、太古の混沌のことを、
愛のことや、鎖で縛られたタイタンの悲しい刑罰のことを、
どのようにして鎖から解き放たれ、地を
一つの兄弟とするようになるかなどの歌―― 喜ばしき歌、
孤独なあけぼのを楽しいものとしてくれる歌を、魅惑の力で、
妬みをしらぬ夜鶯を黙させてしまう歌を。

35
これは一体どうしたことだろう。
人を呼びとめる怪しい姿、うなづいて

さし招く恐ろしい影、砂浜や海岸に
そして不毛の荒野に、はっきりと
人の名を呼ぶ、うつろな声のような
無数の妄想が私の記憶に群がり始めた。

36
ひとの思いやすがたを　すべて
あなたは照らし出し　あなたの色できよめる
「美の精」よ――あなたはどこへ行ったか？
なぜ　あなたは消えてしまい　私らの世界　この
ひろい小暗い涙の谷を　うつろにわびしくするのか？
なぜ　陽光がいつまでも　あの
谷川のうえに　虹を織らないのか？
なぜ　かつて映えたものが色あせ消えていくのか？
なぜ　恐怖と　夢と　死と　生誕とが
このまひるの大地に　このようなかげを
投げかけるのか？――なぜ　ひとが
愛と憎しみ　絶望と希望のあいだに大きくゆらぐのか？

もっと崇高な世界から　これらの問いに
こたえる声は　賢者　詩人に聞えなかった――
そこで「悪魔」「幽霊」「天」の名は
かれらのむなしい努力の記録
力ない呪文としてのこり――その口にする魔力も
私らの耳目にふれるすべてのものから
疑惑　運命　無常を　切りはなつことはできない。
ただあなたの光だけが――嶺にながれる狭霧のように

夜半の小川にふりそそぐ月光のように
いのちの不安な夢に　魅惑と真実をもたらす。

「愛」や「希望」や「自負」は　大空をゆきかう
雲のように　つかの間しかとどまらぬ。
未知の　畏るべきあなたが　ひとの心に
あなたの栄光の仲間とともに　確固不動の位置をしめるなら

ひとは不死となり　全能となった。

私がまだ少年であったとき　幽霊が見たくて
耳を澄ます　多くの部屋を　洞窟を　廃墟を
星あかりの森を　おののく足で
死んだひとと高遠な話をする希望を追いかけた。
私は　私らの青春を育てた　忌わしい名前に呼びかけた
だれも答えるものはなかった――だれも姿をみせなかった――
ひとの運命に　深くおもいをひそめていると
風が　生命あるものすべてに言い寄り目ざめさせて
鳥や花のたよりをもたらす
あの美しい季節に――
突然　あなたの影が私のうえに落ちてきた。
私は叫び　洸惚として両手をにぎりしめた！

私は　あなたとあなたのものに　私の力のすべてを
ささげようと誓った――私は誓いをまもらなかったか？
胸おどらせ涙をあふれさせて　いまなお私は
声なき墓から　とおいむかしの亡霊をよび出す。
かれらは　学問の情熱や愛の歓びにみちた
まぼろしのすみかで　私といっしょに
ねたむ夜をあかした――
かれらは知っている　あなたがこの世を
くらい隷属から解放してくれる希望なしには
私のひたいが決して歓びにかがやかなかったことを

37
『さて、いろいろの美を順序を追って正しく観ながら、恋の道をここまで教え導かれて来た者は、今やその恋の道の窮極目標に面して、突如として、本性驚歎すべきある美を観得することでしょう。これこそ、ソクラテスよ、じつにそれまでの全努力の目的となっているところのかのものなのです。すなわち、それはまず第一に、永遠に存在して生成も消滅もせず、増大も減少もしないものです。次に、ある面では美しいが他の面では醜いというものではなく、ある時には美しいが他の時には醜いというのでも、ある関係では美しいが他の関係では醜いというのでもなく、またある人々にとっては美しいが他の人々にとっては醜いというように、ある所では美しいが他の所では醜い、というものでもないのです。さらにまた、その美は見る者に、何か顔のような恰好をして現れるものでなく、また手や、そのほか身体に属するいかなる部分の形をとって現

れることもないでしょう。それに、何かある言論や知識の形で現れることもなく、またどこかほかの何かのうちに、例えば動物とか大地とか天空とか、その他何ものかのうちにあるものとして現れることもないでしょう。かえってそれ自身、それ自身だけでそれ自身とともに、単一な形相をもつものとして永遠にあるのです。ところがそれ以外の美しいものはすべて、いま述べたあの至上の美を次のようなある仕方で分ち持っているのです。すなわち、　これらはかの美しいものが生成し消滅しても、かの美は決して大きくなったり小さくなったりせず、いかなる影響も外から受けないという仕方です。したがって、ひとが、自分の正しい少年愛のおかげで、この地上のもろもろの美から上昇して行って、かの美を観じ始めるときには、その者はほとんど窮極最奥のものに達したことになるでしょう。なぜならば、じつにそれが、自分で進むなり他人に導かれるなりして、恋の道を進む正しい進み方だからです。つまり、地上のもろもろの美しいものから出発して、絶えずかの美しいものを目的として上昇して行くのですが、その場合ちょうど階段を使うように、一つの美しい肉体から二つの美しい肉体へ、二つの美しい肉体からすべての美しい肉体へ、そして美しい肉体から美しいかずかずの人間の営みへ、人間の営みからもろもろの美しい学問へと登って行き、最終的にはそのもろもろの学問から、ほかならぬかの美そのものを対象とするところのかの学問に行き着いて、まさに美であるそのものを遂に知るに至るというわけなのです。』とこのマンティネイアから来ている異国の婦人は語るのだった『親愛なソクラテス、いやしくも人生のどこかにあるとするならば、まさに此処においてこそ、その生活が人間にとって生きるに価するものとなるのです。なぜなら、その者は美そのものを観ているからです。ひとたびあなたがこの美を見るならば、それは黄金や衣裳の比ではなく、世の美少年美青年の比でもないと思われるでしょう。現在のあなたは、その青少年たちを見て有頂天となり、またあなただけでなくほかの多くの人々も、もし自分の愛する少年を見ながら絶えずその者といっしょにいるのであるならば、飲食も、何とかできるものならば、摂らずにただただ彼を眺め彼といっしょにいたいものだ、という有様ですけれどもね』

『それでは』と彼女は続けた『いったいどういうことになるとわたしたちは考えるでしょうか―― もし誰かが美そのものを純粋清浄無雑の姿で見て、それを人間の肉や色や、そのほか数多くの死滅すべきつまらぬものにまみれた姿においてではなく、かえってその神的な美そのものを単一の形相をもった姿において観るということが、誰かに起る場合には。……人がかの美の方を眺めやり、用うべき本来の器官をもってかの美を観、それと共にいるとき、そもそもその生活がつまらぬものになると思いますか。それともあなたは考えてみないのですか』と彼女は続けた『ここにおいてのみ、すなわち、かの美を見るに必要な器官をもってそれを見ているこのときにのみ、次のようなことが起るであろうということを。それは、彼の手に触れているものが徳の幻像ではなくて真の徳であるからして、その生むものも徳の幻像でなく真の徳であるということを。さらにその者は、真の徳を生みそれを育てるがゆえに、神に愛される者となり、またいやしくも人間のうち誰か不死となることができるならば、まさにその者こそ不死の者となりうるのだということを』

38

あなたは大空だ。そしてまた鳥の巣だ。

おお美しきものよ、その巣の中で、さまざまな色と歌と香りによって魂を包んでくれるのは、あなたの愛だ。
朝がやって来て、その右手に美の花環を入れた黄金の籠を持ち、黙って大地に被せる。
そしてまた、家畜の群が去ったあと、淋しい草原に夜がやって来る。休息の西の海から黄金の瓶に静寂の清涼剤を入れて、道標のない道をやって来る。
しかし、魂がその翼を休める無限の空が広がるあたりには、汚れのない真白な光が輝いている。そこには昼も夜もない。形も色もない。そして言葉は少しもない。

39
そこで、或るものがあって、これは常に〔永遠に〕動かされつつ休みなき運動をしている。そしてこの運動は円運動である（このことはたんに言説においでのみでなく事実においても明らかである）。したがって、この第一の天界は永遠的なものであろう。だが、それゆえに、さらにこの第一の天界を動かすところの或るものがある。動かされ且つ動かすものは中間位にあるものであるから、動かされないで動かすところの或るものがあり、これは永遠なものであり、実体であり、現実態である。〔では、どのような仕方で動かすか？〕それは、あたかも欲求されるもの〔欲求対象〕や思惟的なもの〔思惟対象〕が、〔欲求者や思惟者を〕動かすような仕方で動かす、すなわち動かされ〔も動きもし〕ないで動かす。ところで、欲求の対象と思惟の対象とは、それぞれの第一のものにおいては、同一である。けだし、たんに欲望されるもの〔非理性的欲求の対象〕は見かけ上で〔現象的〕に美なるものであるが、願望されるもの〔理性的欲求の対象〕のうちの第一のものは真に存在する美なるものである。しかるに、われわれがそれを欲求するのは、それが美であると思われるがゆえにであって、われわれがそれを欲求するがゆえに美であると思われるのではない。そのわけは、思惟が始まりだからである。そして、理性〔思惟者〕は思惟的なものによって動かされるが、あの双欄表の一方の欄〔肯定的概念の欄〕あるものはそれ自体において思惟的なもの〔真に思惟の対象たるもの〕である、そして、この欄にあるもののうちでは実体が第一のものであり、実体のうちではとくに端的なそれ、現実態におけるそれが、第一のものである（ここに端的なと言ったが、端的なというのと一というのとは同じではない。一は或る尺度を意味するが、端的なものはなんらかそれ自らに特有の性をそなえているものである）。しかるに、〔欲求の対象たる〕美なるものやそれ自体で望ましいものもまた、この同じ欄のうちにある、しかるに、いずれにせよ第一のものは常に最善のものであり、すくなくも類比的に最善のものである。

ところで、なにかがそれのためにであるそれ〔すなわちそのなにかの目的〕が不動なものの部に属することは、それの意味を分割すれば明らかにされる。すなわち、なにかがそれのためにであると言われるそれ〔目的〕には、（a）（或ることが他のなにものか〔の利害・善悪〕のためになされるそのなにものかを意味する場合と、（ｂ）或ることがなにものかを目ざしてなされるところのそのなにものかを意味する場合とがあるが、これら両義のうち、後者は不動なものの部であるのに、前者はそうでない、だからして、後者は、愛されるものが動かすように、動かすのである。そして、他のものは、動かされて動かす。

ところで、もし或るなにものかが動かされるとすれば、その或るものは他でもありうるものである。したがって、或るものの現実活動が移動〔場所的転化〕のうちの第一のもの〔すなわち円運動〕であるなら、その或るものは、そのような運動をするものとしてのかぎり、なおいまだ他でもありうるものである（たとえ実体においてではないにしても、場所においては、他でもありうるものである）。しかるに、自らは不動でありながら動かす或る者が存在しており、現実態において存在しておるから、この或る者は、決して他ではありえない。なぜなら、諸種の転化のうちで第一のものは移動であり、移動のうちでも第一なのは〔天体の〕円運動であるが、さらにこれを動かすのがこの或る者なのだから。そうだとすれば、この或る者は必然によって存在するものである。そして、必然によって存在するものであるかぎり、善美に存在し、このように存在するものとしてのかぎり、この或る者は原理である。けだし、「必然的」というのにも諸義があって、強制によることが、衝動にさからうことだからとの理由で、必然的と言われる場合もあり、またそれがなくては善さえもありえないそれ〔不可欠的条件〕を指す場合もあるが、さらにそうあるより他ではありえないでただ端的に〔単純に〕そうあることを「必然的」と言う場合もあるからである。

このような原理に、それゆえ、天界と自然とは依繋しているのである。そして、この或る者の安楽な暮らしは、われわれ〔人間〕にとっても最善の、しかしわれわれにはほんのわずかの時しか楽しめないところの最善の生活である。というのは、この者は常にこのように〔最善の楽しい生活状態に〕あるのだからである（このようにあることはわれわれには不可能なことだが）、そのわけは、かれの現実態は同時にまた快楽でもあるからである。（そしてそれゆえに、かれにおいてはその覚醒も感覚も思惟も最も快なのであり、そしてその希望や追憶もこれらによるがゆえに快なのである。）そして、その思惟は自体的な思惟であって、それ自らで最も善なる者をその対象とし、そしてそれが最も優れた思惟であるだけにそれだけその対象も最も優れた者である。その理性〔思推するもの〕はその理性それ自身を思惟するが、それは、その理性がその思惟の対象の性を共有することによってである。というのは、この理性は、これがその思惟対象に接触しこれを思惟しているとき、すでに自らその思惟対象そのものになっているからであり、こうしてそれゆえ、ここでは理性〔思惟するもの〕とその思惟対象〔思惟されるもの〕とは同じものである。けだし、思惟の対象を、すなわち実体〔形相〕を、受け容れうるものは理性であるが、しかし、この理性が現実的に働くのは、これがその対象を〔受け容れて、現にそれを〕所有しているときにであるから、したがって、この理性がたもっていると思われる神的な状態は、その対象を受け容れうる状態〔可能態〕というよりもむしろそれを現に自ら所有している状態〔現実態〕ある。そしてこの観照は最も快であり最も善である。そこで、もしもこのような良い状態に―― われわれはほんのわずかの時しかいられないが――神は常に永遠にいるのだとすれば、それは驚嘆さるべきことである。それがさらに優れて良い状態であるなら、さらにそれだけ多く驚嘆さるべきである。ところが、神は現にそうなのである。しかもかれには生命さえも属している、というのは、かれの理性の現実態は生命であり、しかもかれこそはそうした現実態だからである。そして、かれの全くそれ自体での現実態は、最高善の生命であり永遠の生命である。だからしてわれわれは主張する、神は永遠にして最高善なる生き者であり、したがって連続的で永遠的な生命と永劫が神に属すると。けだし、これ

が神なのだから。

40

「それでは、話していくから、聞いてくれたまえ。わたしは、ケベス、若い頃には、あの『自然についての探究』とよばれる知識を求めることに、もう熱中していたのであった。なんと、それは並外れてすごい知識であることか、とわたしには思われたのだ。それぞれのものが、いったい何を原因として生じ、また何を原因として消滅し、また何を原因としていま存在しているのかという、その、おのおののまさに原因・根拠となるものを知るということは！　そこで、わたしは最初にまず、次のような問題の検討に着手しながら、自分の考えをなんども上へ下へと変転させ、まさにめくらむおもいをしたのであった。
――いったい、（生物が形づくられる）というのは、或る人々のいうように、熱と冷とが、或る種の腐敗にあずかるその時においてであろうか？
――また、（われわれが思考すること）をなさしめているのは、はたして、血液がなのであろうか。それとも気とか火というのが、それをなさしめているのだろうか。いな、それらのいずれでもなくて、頭脳こそが、聴くとか視るとか嗅ぐとかの感覚をわれわれにもたらすのであり、そうしたもろもろの感覚から、記憶と思いなしが生じ、さらにはその記憶と思いなしが定着してくるようになると、そこからまさに〈知識〉が生成してくるのであろうか？
さらにはまたひるがえって、以上のものどもがいかにして消滅するかを考察したのであり、その考察はまた、天空や大地の諸事象にまで及んだのであるが、―― いやはや！　その結果において、わたし自身は、この種の研究にはまったくおはなしにならないほどの生来不向きな人間であると、みずから思いいたった始末であった――。いや、それの充分な証拠を君に話そう。わたしはこのことなら明らかに知っているとそれまでは自分も思い、ひとにもみなそう思われている事柄についてすら、そのとき以上の考察によってすっかり暗くされ、わたしはみる力を失ってしまったのである。

ところが、ある人があるとき、アナクサゴラスの――ということだったが――その書物の中から、読んできかせてくれているうちに、――すべてをひとつに秩序づけ、すべての原因となるものは、ヌゥス（知性）である――というのを、語るのをきいて、この原因ならば、とわたしはよろこびを感じたのであった。そしてヌゥス（知性）をすべての原因であるとすることは、或る仕方で把握されるならば、まことによき考えであると、わたしには思われた。そしてこのように信じた。

ところがああ、これほどの期待からも、友よ、わたしはつき放されて、むなしく遠ざからざるを得なかったのだ。この書物を読みすすんでいくにつれ、ヌゥス（知性）をなんら役立てず、もろもろのものごとをひとつに秩序づけるいかなる原因も、それに帰することなく、かえって、気（空気）とかアイテールとか水とかその他にも多くのまさに場外れなもの！ を持出して、それらを原因だとする、そのような男を見つけたときにはねえ。

これでは、たとえば次のようなことをいう人と、すこしも変らないではないかと、わたしは思った。それはまず、
―― ソクラテスは、そのすべての行為を、ヌゥス（知性）によってなしている――といっておきながら、さてわたしのなす個々の行為についてその原因を語ろうとするくだりになると、まず、いまここに坐っていること、の原因について、こう語るとしてみたまえ。
―― ソクラテスの身体をつくっているものに、骨と腱がある。骨は、固く、各片は分離されて、関節のところでつながっている。他方、腱は伸縮自在なものであり、それが、肉やまた以上の全部をひとつに保持する皮膚とともに、骨を包んでいる。さて、そこで骨が、それの結合部において自由な動きをなすときに、腱が伸縮して、わたしがいま四肢を曲げるようなことを可能にするのであり、そしてじつにこの原因によって、わたしはいまここに脚をまげて坐っているのである――
さらにまた、いま、君たちと話し合っていることについても、それと似たことを原因として語るのだ。つまり、音声とか空気とか聴覚とか他にもそんなものを無数に持ち出す。そして、真に『原因』であるものは、これをいわずに放っておくのだ。いやそれは、ほかでもない、
――アテナイの人たちが、わたしに有罪の判決を下すほうが、〈よい〉と思ったこと、そしてそれ故に、わたしとしても、ここに坐っているほうが、〈よい〉と判断したこと、そして彼らの命ずる刑罰ならなにであれ、この地に留ってそれを受けることのほうが、〈正しい〉と判断したこと――
によるのである。そうたしかに、犬に誓ってもいい！　おもうにわたしが、国（ポリス）の課する刑罰ならなにであれ受けるべきであるということを、逃亡し脱出することよりも、〈正しい〉ことであり、〈うつくしい〉ことであると、もしそう考えなかったとしたら、最善ということの思いなしにみちびかれて、この腱も骨も、もうとっくに、メガラかボイオティアにでもあったことではないか。
いや、そのような種類のものを、原因、と呼ぶのが、そもそもまったくの奇怪事なのだ。
たしかにそれがもし、そういう種類のものをもつことなしには、つまりは骨とか腱とかその他わたしが持っているかぎりのものなしには、わたしがよいと思ったことをなすことはじじつできないいう主張なら、その言い方は真であろう。しかしながら、
――そのような種類のものを原因として、わたしはわたしのなしていることをなしている、しかもそのな していることは知性によってである、しかしけっしてもっとも〈よい〉ということを、選択することによってではない――
というのは、これはもう投げやりに、ただことばをつらねた言論にすぎないのだ。

41
知恵は呼ばわらないのか、悟りは声をあげないのか。

主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。
いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。
まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、わたしはすでに生れ、

山もまだ定められず、丘もまだなかった時、わたしはすでに生れた。
すなわち神がまだ地をも野をも、地のちりのもとをも造られなかった時である。
彼が天を造り、海のおもてに、大空を張られたとき、わたしはそこにあった。
彼が上に空を堅く立たせ、淵の泉をつよく定め、
海にその限界をたて、水にその岸を越えないようにし、また地の基を定められたとき、
わたしは、そのかたわらにあって、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽しみ、
その地で楽しみ、また世の人を喜んだ。

わたしの言うことを聞き、日々わたしの門のかたわらでうかがい、わたしの戸口の柱のわきで待つ人はさいわいである。
それは、わたしを得る者は命を得、主から恵みを得るからである。
わたしを失う者は自分の命をそこなう、すべてわたしを憎む者は死を愛する者である」。

42
初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
この言は初めに神と共にあった。
すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。
この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。
光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

43
神の秘密について語る事ができるでしょうか？
たとえ口にしたとしても、神はその通りであるかも知れない、違うかもしれない
神が私の中にあるといえば、宇宙に対して高慢であるし
神が私の外にあるといえば、それも違う
神は一人一人に、内界と外界を与えた
意識も無意識も神が座る場所
神は公にもされず、閉ざされもしない
神は現れもせず、隠される事もない
神を語る言葉などないのです

44
主よ、あなたはわたしを探り、わたしを知りつくされました。
あなたはわがすわるをも、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。
あなたはわが歩むをも、伏すをも探り出し、わがもろもろの道をことごとく知っておられます。

わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます。
あなたは後から、前からわたしを囲み、わたしの上にみ手をおかれます。
このような知識はあまりに不思議で、わたしには思いも及びません。これは高くて達することはできません。
わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。
わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。
わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、
あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。
「やみはわたしをおおい、わたしを囲む光は夜となれ」とわたしが言っても、
あなたには、やみも暗くはなく、夜も昼のように輝きます。あなたには、やみも光も異なることはありません。
あなたはわが内臓をつくり、わが母の胎内でわたしを組み立てられました。
わたしはあなたをほめたたえます。あなたは恐るべく、くすしき方だからです。あなたのみわざはくすしく、あなたは最もよくわたしを知っておられます。
わたしが隠れた所で造られ、地の深い所でつづり合わされたとき、わたしの骨はあなたに隠れることがなかった。
あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。わたしのためにつくられたわがよわいの日のまだ一日もなかったとき、その日はことごとくあなたの書にしるされた。
神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう。
わたしがこれを数えようとすれば、その数は砂よりも多い。わたしが目ざめるとき、わたしはなおあなたと共にいます。
神よ、どうか悪しき者を殺してください。血を流す者をわたしから離れ去らせてください。
彼らは敵意をもってあなたをあなどり、あなたに逆らって高ぶり、悪を行う人々です。
主よ、わたしはあなたを憎む者を憎み、あなたに逆らって起り立つ者をいとうではありませんか。
わたしは全く彼らを憎み、彼らをわたしの敵と思います。
神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。
わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください。

45
永遠につづくものの世界が
こころのうちを貫き流れ　激しく波立ちうねる
時には暗く――時にはきらめき――時には翳を映し――

時には光彩を添えながら　いくつもの隠れた泉から
人間の思考の源泉となる水の贈り物をもたらす
――なかばそれ独自の音を立てて、

おまえは　あの休みなき音の通り道なのだ――
目もくらむ「峡谷」よ！　おまえを見つめていると
崇高でふしぎな洸惚のうちに
私ひとりひそかな幻想にふけり
私自身の　私の人間としてのこころは　いつしか
すばやく感化力を与えたり受けたりしながら
まわりの鮮明なものの世界と
絶え間なく交流をつづける。
いろんなとっぴな考えが　さまよう翼に乗って
ある時はおまえの暗闇のうえに浮かび
ある時は暗闇もおまえも決して招かれぬ客ではない場所
「詩」の魔女の静かな洞窟に安らぎ
そばを通り過ぎる影　存在するものすべての
亡霊の中に　おまえらしきもの　ある幻影を
微かなすがたを　探し求めている、それらの逃れ出た胸が
それらを呼びもどすまで　おまえはそこにいるのだ！

遠い彼方の世界の微かな光が　眠れる魂を
しばしば訪れると人はいう――また死は微睡であり
そのすがたは　目ざめて生きている人たちの
せわしない思いよりも数でまさると――見上げれば
ある未知の全能者が　生と死とに幕を垂らしたのか？
あるいは　私は夢を見ていて　より強力な
眠りの世界が　その円周をもっと遠くへ
近寄りがたく　ひろげているのか？　なぜなら
精神までもが　絶壁から絶壁へ吹き追われて
目に見えぬ疾風のなかに消えていく
浮雲のように　追い払われるから！
はるかに　はるかに高く　無限の空を買いて
モン・ブランは姿を現わす―― しずかに　雪を冠り　清澄な――
したがう山々は　この世ならぬ形の　氷と岩を

まわりに積み上げ

その昔　地震の魔神が　その子らに破壊を教えた場所なのか？
これらが　かれらの遊び道具だったのか？　それとも
かつての火の海が　この静かな雪を包みこんだのか？
答える者はだれ一人いない――今はあらゆるものが永遠のようだ。
荒地は霊妙なる舌をもち　畏るべき懐疑か　あるいは
いとも穏和　荘厳　清澄な信仰を教えるので
人は　こうした信仰によってのみ
自然と和解できる。
偉大な「山」よ　おまえは欺瞞と悲哀の
大きな掟を破棄する声を持っている。
すべての人には理解されず　ただ賢者　偉大なる人　善き人のみが
それを理解し　悟らせ　深く感じ入る。

野原　湖　森　川
大洋　そうしてこの複雑精巧な地球に住む
生きとし生けるものすべて、稲妻　雨
地震　火の洪水　ハリケーン、
微かな夢が　まだ開かれぬ蕾を訪れ
夢なき眠りが　やがて葉や花となるもの
すべてを支配する冬眠期―― その忌わしい
昏睡から　それらが跳び出す躍動。
人間の営みと生きよう　それらの死と誕生
人間と人間のものとなるすべての　死と誕生
労苦と音をともなって動き　かつ呼吸するものはすべて
生まれて死に、循環し　衰え　よみがえる。
「力」はひとり超然と　深い静寂のうちに住む
遠く　清澄に　近寄りがたく。

46
私たちはどこにいるのか？神聖な愛のある場所
つつましい愛の命
恐れる事は無い
私たちはその眩しい愛を崇めている

47

神の衣の裾を、掴んで離さないように、神がどこかへ消えてしまわぬように
しかし、無理に引き寄せようとすれば、弓から放たれる矢のように、飛び去ってしまう
神をどのような姿と思うのか、神をどのように振舞うと思うのか
神の姿を思い描こうとすれば、神は頭の中から逃げ去ってしまう
神の姿を空に求めるのならば、神は月光のように水面に写っている
水の中へと探しに入れば、神は空へと逃げていく
神を狭いところに探せば、神は大きく広がっている
神を広く見ようとすれば、神は狭いところに隠れてしまう
神の名を捉らえる事は出来ず、その名を口にすれば、唇が強張って動かない
神は自由だとすら、口にする事ができない
神を捉える事は出来ない、その絵を描こうとしても
神の絵は、そこから抜け出してしまう、同じようにあなたの心の中からも

48

では、どうであろうか。星々（の魂）は、神を観たことも記憶していないのであろうか。
星々（の魂）は、常に神を観ているのである。だが、現に神を観ている限り、星々（の魂）が「神を観てしまった」ということは、明らかに不可能なのである。なぜなら、そのことばは、神を観ることを止めた星々（の魂）の状態をあらわしているからである。

49

父なる万能の神を信じている
人間を創り、裁き、富を治める
神を称えず、何か違うものを称える事など、出来るだろうか
創造者を忘れたものを愛する事などとは
神に向けられた苦しみ悲しみは、やがて自分に返ってくる
神との抱擁から身を引こうなどとは

しかし神は見る事も知る事も出来ない
地上の寺院を見て、神を正しく理解するなどとは
神の英知、天の意志は永遠である
思慮の無い秩序に従うべきだろうか
言い争いや誤解の中に身を置くなどとは
人間が作り出した方法で神が喜ぶだろうか

私の中にある心は美しさを愛し
邪悪なものを厭う、無価値なものを批判する

私は愛情の中に作られた自由に感謝する
この喜びに感謝する、これ以上の言葉は無い
たとえ、怒りや暗闇の時が訪れたとしても
神の偉大な力をいつも信じている

50
宇宙と秩序と同じように、混沌、無秩序に陥らずに生きるため私には神が必要である。
神の考えは私たちの精神に長い苦しみをもたらし、私たちの心には深い孤独をもたらす。

51
「若者よ、君はまだ若いのだ。だが、時が経つにつれて、君がいま抱いている考えの多くは、それとは反対のものへと変って行くだろう。だから君が、ひじょうに重要な事柄について判断を下そうとするなら、その時まで待つことだ。ところで、何よりもいちばん重要なのは、――今の君はそれを何でもないことと考えているけれども――、神々について正しい考えを持ちながら立派に生きるか、それとも、その反対の生き方をするか、ということだ。さて、そのことに関しては、まず最初に、君に大切なことを一つ知らせてあげても、わたしはけっして嘘をついていると見られはしないだろう。それはこういうことである。
神々について君のような考え方をしている者は、君一人だけではないし、また君の友人たちが最初で初めの人というわけでもない。いな、そのような病気にとりつかれている者は、多い少ないはあれ、いつの時代にも現われてくるものだ。そこで、わたしはこれまでにそのような連中に数多く出会ってきたから、君には次のことを言っておこう。それは、神々は存在しないのだという、そういう考えを若い時にいだいて、その考えを持ちつづけたままで老年にまで至った者は、かつて誰ひとりいなかったということである。しかしながら、神々についての、他の二つの間違った考えのほうは、持ちつづけられることがある。それは、数多くの人においてではないにしても、とにかく何人かの人においてはそうである。つまり、その一つは、神々は存在するけれども、人間のことを何ひとつ気づかってくれないと考えることであるし、そのつぎは、気づかってはくれるけれども、犠牲や祈願によってなだめて機嫌をとりやすいものであると考えることである。
そこで、もし君がわたしの忠告に従ってくれるなら、神々についての君の考えができるだけ明確なものになるまで、君はしばらく待ってみることだ。

52
「あなたは来世を信じますか？」彼は聞いた。
「来世を？」アンドレイはおうむ返しに言ったが、ピエールは彼に答えるいとまを与えずに、このおうむ返しのことばを否定と受け取った。彼はアンドレイの以前の無神論的な信念を知っていたので、なおさらだっ

た。
「あなたは、地上に善と真理の王国を見ることができない、とおっしゃっている。僕だってそんなものを見たことはないんです。それに、それは見ることができないんです、この人生をすべての終わりと見ている限りは。地上に、まさにこの地上には（ピエールは野原を指さした）、真理はありません―― すべてが虚偽と悪です。しかし、世界には、全世界には、真理の王国があるんです。そして、僕たちは今は地上の子ですが、永遠からすれば―― 全世界の子なのです。いったい、僕が感じないでしょうか？　自分がこの巨大な、調和した全体の一部だということを。いったい、僕が感じないでしょうか、神性が、最高の力が―― どちらでもお好きなように言ってください―― あらわれているこの無数の存在のなかで、僕が最低の存在から最高の存在にいたるひとつの環、ひとつの段階なのだということを。植物から人間にいたるこの段階を僕が見ている以上、はっきり見ている以上、どうして、下の端の見えないこの階段が、植物のなかで消えてしまうのだと、僕が考えるでしょうか。この階段が僕でとぎれてしまって、最高の存在にいたるまで、もっと先へ先へ通じていないと、どうして僕が考えるでしょうか。僕は感じるんです、世界のなかのものが何ひとつ消滅しないのと同じように、自分が消滅するはずはないばかりでなく、自分はいつまでも存在するのだし、いつも存在したのだって。僕は感じるんです、自分以外に、自分の上に霊的なものが生きているんだ、そして、この世界には真理があるんだって」
「うん、それはヘルダーの説だな」アンドレイは言った。「しかし、君、僕を信じさせるのはそんなものじゃなくて、生と死だ。これが僕を信じさせるんだ。自分にとってたいせつな、自分と結びついた、自分が罪を感じていて、償いをしようと思っていた存在が（アンドレイは声をふるわせて、顔をそむけた）、そういう存在が突然苦しみ、悶え、いなくなってしまう、このことが僕を信じさせるんだ……なんのためだ、これは？　答えがないわけがない！　だから、僕は答えがあると信じるんだ……これが僕を信じさせるんだ、これが僕を信じさせたんだよ」アンドレイは言った。
「そうなんです、そうなんですよ」ピエールは言った。「同じことじゃないですか、僕　が言っているのも！」
「ちがう。僕が言っているのはただ、来世の必然性を信じさせるのは理屈ではなくて、ある人間と手に手を取って人生を歩んでいて、突然その人間がどこでもない彼方に消えてしまい、自分はその深淵の前に立ちすくんで、彼方をのぞき見ているというときのことなんだ。僕はそこをのぞき見たんでね……」
「いや、それでいいんですよ！　あなたは彼方があること、だれかがいることを知っているんです。彼方というのは―― 来世です。だれかというのは―― 神です」
アンドレイは答えなかった。馬車と馬はもうずっと前に対岸に降ろされて、馬は馬車に付けられていた。そして、太陽はもうなかば隠れて、夕方の霜が渡し場のそばの車場を星のようにおおっていた。だが、ピエールとアンドレイは、従僕や、御者や、渡し守たちが驚いたことに、まだ渡しの筏の上に立って、話していた。
「もし神があり、来世があるとすれば、真理があり、善があるんです。そして、人間の幸福はその獲得を目ざすことにあるんです。生きなければなりません、愛さなければなりません、信じなければなりません」ピエールは言った。「今、ただこの地面の一隅にだけ生きているのではなくて、永遠にあそこに、すべてのな

かに（彼は空を指さした）生きてきたのだし、生き続けるのだということを」アンドレイは渡しの筏の手すりに肘をついて、立っていた。そして、ピエールのことばを聞きながら、目を離さずに、青みがかったあふれそうな水に映えている、赤い太陽の照り返しを見つめていた。ピエールは口をつぐんだ。本当に静かだった。渡しの筏はもうずっと前に岸に着いてしまい、ただ川の波がかすかな音を立てて、筏の底に当たっているだけだった。この波の当たる音がピエールのことばにつれて、「本当だ、これを信じるんだ」と言っているように、アンドレイには思えた。

53

おんみ　私を治めたまう
神よ！　呼吸とパンとを与えたまい
この世の支えであり　海の支配者であり
生ける者と死せる者の主よ
おんみは私の中に血管を走らせ　骨を束ね　固く肉付けを
して下さいましたのに　なんという恐しいことでしょう　折角のその御仕事を
駄目にしておしまいになりました　でもまた新たに私に
手を触れて下さるのでしょうか？　くり返し私はあなたの御手を感じ　あなたの御姿を見るのです

54

主よ、わたしはあなたを疑惑をもってではなく、確信をもって愛するのである。あなたはわたしの心をあなたの御言をもって貫かれたから、わたしはあなたを愛した。そのうえ天地も、天地の万物も、いたるところからわたしに語りかけて、わたしにあなたを愛するように語り、またすべての人に語りつづけて、
「かれらにいいのがれができないようにしている」。

しかし、わたしがあなたを愛するとき、わたしは何を愛するのであるか。それは物体の美しい形ではなく、時間的なものの優雅ではなく、わたしたちの目に快いうららかな光ではなく、さまざまな歌の美しい調べでもなく、花や香油や香料の香りでもなく、マナや蜜でもなく、また肉の抱擁にとって好ましい肢体でもない。わたしはわたしの神を愛するとき、このようなものを愛するのではない。しかもわたしの神を愛するとき、わたしは一種の光、　一種の音声、　一種の香気、　一種の食物、　一種の抱擁を愛するのである。わたしが愛するのは、内的人間の光であり、音声であり、香気であり、食物であり、抱擁である。そこではわたしの魂に、どんな場所もいれない光がかがやき、どんな時間も奪いさらない音がひびき、どんな風気も吹き散らさない香りがただよい、食っても減じない糧食が味わわれ、飽いても離れない抱擁がからみついているのである。そしてわたしが神を愛するとき、わたしが愛するのはこういうものである。

それではこういうものは何であろうか。わたしは地にたずねたが、地は「わたしではない」と答え、地にあるすべてのものも同じことを告白した。わたしは海と淵とそこに棲む生きものとにたずねたが、それらのも

のは、「わたしたちはあなたの神ではない。わたしたちの上にあるものを探せ」と答えた。わたしはざわついている空気にたずねたが、空気はみなその内に住むものとともに、口をそろえて、「アナクシメネスの説はまちがっている。わたしは神ではない」と答えるのであった。わたしは天と日と月と星とにたずねたが、それらのものは、「わたしたちはあなたの探している神ではない」というのであった。わたしはまた、わたしの肉の門戸をとりかこんでいるすべてのものに向かって、「君たちはわたしの神でないから、わたしの神についてわたしに語ってくれ。わたしの神について何事かを言ってくれ」といった。そうするとそれらのものは、声高らかに叫んで、「その方がわたしたちを造ったのだ」と答えた。わたしの問いは、すなわちわたしのそれらのものに対する考察であり、それらのものの答えは、すなわちそれらのものの形態の美であった。

55

扉の前にいるのは誰かと、神は尋ねた、あなたの哀れなしもべですと、私は答えた
そこで何をしているのかと、神は尋ねた、神よあなたに会いに来ましたと、私は答えた
いつまでいるのかと、神は尋ねた、あなたが呼び入れてくれるまでですと、私は答えた
いつからそのように考えているのかと、神は尋ねた、これまでずっとですと、私は答えた
あなたへの友愛を宣言し、それを厳粛に約束し、富、地位を求める事も止めました
あなたが宣言する信仰心はどのように判るのかと、神は尋ねた
涙と、青ざめた表情が信仰の証、と私は答えた
あなたの信仰は本物かと、その眼差しに惑いはないかと神は尋ねた
純粋で汚れの無い偉大な正義に心を動かされたと、私は答えた
あなたが私に求めるものは何かと、神は尋ねた、あなたの永遠性、友愛ですと、私は答えた
あなたの同朋は誰かと、神は尋ねた、王なるあなたですと、私は答えた
あなたをここへ呼んだのは誰かと、神は尋ねた、あなたの祝宴があると聞いてきたのですと、私は答えた
この話はここで終わり、神について語る事がまだあるでしょうか
障壁は壊しても良い、あなたを制限する囲いも扉もない

56

愛は　私に仰せられた、ようこそ！　と。だが私の魂は　たじろいだ
　塵挨と罪とに　心やましく。
でも　目敏い愛は　私が初めて内に入ったときから
　ひるみゆくのに　気づかれ給い
近寄りながら　優しく私に尋ねられた、
　この愛に　なにか欠けるものでもあるの？
私は応えた、ここに相応しい賓客が、と。
　愛は仰せられた、そなたこそが　その賓客なのです。

私がですって、この薄情で恩知らずの？　ああ　愛よ
　私は、御身を見ることもかないませんのに。
愛は　私の手をとり、微笑つつ応え給うた、
　誰がそなたの眼を創りました　私でなくして？

57
神と私との愛は、どのようにして成り立つでしょうか
水面の睡蓮とその葉のよう
神は主である。私はしもべである
一晩中、月を見上げているカッコーのよう
神は主である。私はしもべである
時の始まりから、時の終わりまで、神と私は愛で繋がれている
このような愛を消し去る事が出来るでしょうか

カビールは言いました
私の心が神に触れるさまは
海に流れ込んでいく河のようです

58
私が目を開けば　御身はきっと
そこにおわして　わが朝の魂と捧げ物とを
喜んでとらえ給う。

59
誰も代金を払わないような真珠があるでしょうか
この世界に、神から授かった以外のものがあるでしょうか
神に会えない事ほど大きな懲罰があるでしょうか
神の心に従わず役に立てない事ほどの苦しみがあるでしょうか
神の友愛を得る事が、あなたを押し潰してしまう、などという事があるでしょうか
壊れやすい物で満ちたこの世界が永続する事はなく、あなたの求める永遠性はそこには無い
私はこの心と精神が神の足元へと昇っていく事を願っている
汚れがあるのは精神であり、神の足元に汚れはない
不純な心が苦痛で焼き払われなければ、神の手から逃れる事は出来ない
主を崇める事に終わりは無い、信仰する人々を数え終わる事はない
神を崇める事なく踊る原子があるでしょうか

美と自負心を、空にて司る、シャムセ・タブリーズは言いました
心と精神が、神より大きい統治者などいるでしょうか

60
私は　御身の道に撒く花々を　摘んで来ました。
あまたの樹々から　幾多の枝をも　切って来ました。
ところが、御身ははや　夜明けまえに　起きあがり
御身の薫香を　持って来られた。

61
大地が芽吹く春という季節
眠りから覚めた美しい天使の子供たち
太陽が眩しくて、緑と金の翼で顔を覆う
母親の明るく優しい声に呼ばれて立ち上がる
良い事がありそうな予感
にこやかに輝く太陽を受けて立ち上がる
夢から覚め、喜びがこみ上げる
若々しく輝く大地、古い果樹園
滑らかな緑の葉、星座の光のようにきらめく花々
暖かな日の光を受けて、草木は活動を始める
海のつぼみも穏やかな波の中で花を開く
どれほど多くの花をつけても、本当に愛するものは一つだけ
自らの魂の後ろに隠れ、その姿を半分だけ見せる
春にようやく芽吹いたばかり
小さな木立の中で葉を翼のように広げる
どれほど多くの魂に夢想の翼があるだろう
その殻を破って
自分自身の足で歩き出す、世界へ向かって
夢の力に牽かれた馬車、遠いところへもひとっ飛び
嵐の風よりも速く、世界を狭く思うほど
辛い冬はもう過ぎ去った

62
一体跛の老人である私は、神を讃美するのでなければ、他の何ができるだろうか。とにかく、もし私が夜鳴

鳥であったとするならば、私は夜鳴鳥のすることをするだろうし、またもし白鳥であったとするならば、白鳥のすることをするだろう。ところで現に私は、理性的なものなのである、私は神をたたえねばならない。これが私の仕事である、私はそれをする、そして私に与えられてる限り、この地位を棄てないだろうし、また諸君をも同じこの歌をうたうように勧誘するだろう。

63

牧人たちは歌います。なのにこの身は　黙っているのでしょうか？
　神よ、御身をたたえる讃美歌は　私にはないのでしょうか？
わが魂も　牧人なのです。それは
　思い、言葉、行為の　羊の群を飼っております。
その牧場は　御身の御言葉、小川の流れは　牧場全体を
　豊かに潤す御身の御恵み。
牧人と羊たちとは歌いましょう、いや
　陽が落ちて暗くなるとも　わが力はなおもこぞって歌います。

64

「主よ、あなたは偉大であって、大いにほめられるべきである」。「あなたの力は偉大であって、あなたの知恵は測られない」。
あなたは人間を呼び起こして、あなたをほめたたえることをよろこびとされる。あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないからである。

65

主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょう。あなたの栄光は天の上にあり、みどりごと、ちのみごとの口によって、ほめたたえられています。あなたは敵と恨みを晴らす者とを静めるため、あだに備えて、とりでを設けられました。
わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。
人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。
ただ少しく人を神よりも低く造って、栄えと誉とをこうむらせ、
これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。
すべての羊と牛、また野の獣、
空の鳥と海の魚、海路を通うものまでも。
主、われらの主よ、あなたの名は地にあまねく、いかに尊いことでしょう。

66

踊りなさい、私の心、この喜びに

朝も夜も響き続ける、愛の旋律
世界が耳を傾ける、この音楽に

狂喜する、生も死も、この音楽に
踊りだす、山も海も、この地球も
世界中の人々が、笑い、涙する

なぜ僧衣を身にまとい、孤高の世界に生きようとするのか
様々な喜びに弾む心に気付けば、創造者も喜んでくださる

67
美しいものは、永遠の喜びとなる。
その愛らしさは増し、決して　無と
消え果てることがない。それのみか　われらに
静かな木蔭を保たしめ、また　甘美な夢と
健康と　静かな息吹きに充ち満ちた眠りを　与えてくれる。
だから　朝がくれば　われらを大地に
結びつける　花のきずなを編んでいる。
どんなに失意のときも、気品高い人間性に
欠けるときも、陰欝な日にも、また
われらの求める道が　どんなに不健康で
暗すぎようとも。そうだ、それでもなお
美しい姿は　暗いさまざまの心から　棺の被衣を
取り放ってくれる。

68
人類の世界のこだまが鳴り響いてくる、そして、告げる、
聞きとれぬほどの低い愛の声や、
鳩の眼のような思いやりが呟く苦痛のことや、楽の音のこと、
それ自体が心のこだまなる楽の音のことや、すべて、
人の生命を鍛え、改良し今や自由なるものとしているものなどを、――
それから、美しい数々の現象も、初めはおぼろだが、
やがて燦然と楽しく心が輝き、
心が美に抱かれて上がって来ては（様々な姿が
現象の化身となり）その化身に

実在という光を集めて当てる――
われらを訪れるのは、それらの現象の不滅のひこばえ、
絵画、彫刻、陶然とさせる詩歌、
未だ想像されずとも、やがて実在となる様々な芸術。
これはみな、人が成らんとするものの漂う声、
またその影、愛の仲立ち、
あの最善の崇拝なる愛、人とわれらが
与え、返し合う、―― 霊感の形象や楽の音、それはますます
人が賢く優しくなるに従い、優美に、穏やかとなっていく。
そして、ヴュールが一つ落ちるごとに、悪と過誤が落ちて行く――

69
なぜなら、いかなる美もかのものよりは後であって、かのものから発しているのだからである。それはちょうど昼間の光明がいずれも太陽から発しているようなものである。そして、このゆえに「語られもせず、記されもせず」というようなことが言われるのである。これをしかしわれわれが語ったり、書いたりするのは、ただ（人を） かのもののほうへと送りつけて、語ることから観ることへと目ざめさせるだけなのであって、それはちょうど何かを観ようと意う人のために道を指し示すようなものである。すなわち道や行程は教えられるけれども、実地を観ることは、すでに見ようと意った者の仕事なのである。

70
すべての美しいものは、それが稀であるほどに得がたいものである。

71
私は、新しい、不思議な、さしせまってくる悲しみから、遁れたような気がする。―― そしてそれは實にありがたいのだ。――永劫性の重荷というような恐しい暖かいものが心臓のあたりに感じられる。

72
私はあなたのために
あなたは私のために？
私の心が見つめているもの
岩に当たって砕ける波から来たのか
荒涼とした海から来たのか

私はあなたのために
あなたは私のために？

伏目がちに麗しく輝く心
きらめく海の上で
きらめくあなたの姿に見とれている私の眼差し

小さな私の力
私の情熱
あなたはどこに？
天に広がる雲から身を屈める
世界が沈む海から、潮が引いていく。

73

パンテア

ごらん、妹よ。精たちの一隊が集まっているところを、
快い春の日の雲の群れのように、
青い大気の中に群がっている。

イオネー

あ、見て。もっと来る、
そよとの風もないときの噴水の水煙のように、
列を乱しながら峡谷を昇って来る。
あ、聞いてみて。あれは、松の樹をわたる楽の音かしら、
湖かしら、滝かしら。

パンテア

何よりもずっと悲しくも、はるかに甘美なもの。

精たちのコーラス

人の記憶にもない時の代々から、われらは
優しき支配者、擁護者。
天の圧迫に苦しむ人間の、――
また、われらは大気を吸っても、
人類の思想の大気を吸っても衰えない――
暗く、活気なく、灰色であっても、
嵐にかき曇る日のように、
落日の薄明をよぎり行こうとも、――

あらゆるものがきららに、
雲なき空と風なき流れの間で、
静かに、透明に、清かに輝こうとも。
鳥が風にいだかれ、
魚が波にいだかれるように、
人、そのものの思想が
墓を超えた一切の中を浮かび行くように、
われらは、大気の中に清明な住処を作り、
雲のように自由に巡り行く、
果てしない元素の中を――

74
ヴェスタの杓の上の速い炎のように――
盲目のホメロスの胸の上をよぎる翼持つ想いのように、-――

75
オルフェウスがリュートをとれば
木々の梢も雪積む峰も
首うなだれて聞き惚れぬ
オルフェウスの調べにつれて
可憐な花も緑の草も
常春のごと萌え出でぬ

オルフェウスの歌声聞けば
高ぶる海の荒波さえも
頭をたれて静まりぬ
オルフェウスの妙なる曲に
胸の痛みも心の愛さも
眠りにつくごと消えはてぬ

76
音楽にこもった、霊妙な快い強制によって、
その「宿命」の娘の、三女神を寝つかせて、
変動する自然を、本来の法則にしたがわせ、
汚れた粗雑な耳の人体では、誰にも聞こえぬ、

この天上の妙楽の調べにあわせた、
律動的な運動で、下界をみちびく。

77
聖き音楽に憧れて、
その音に渇えて私の胸は委れる花のよう。
注ぎ出せ、音楽を魔の美酒の如く、
降り注げ、調べを、銀色の驟雨の如く、
草なき野辺が優しき雨に憧れるように、
私は喘ぎ気を失う、楽の調べが目覚すまでは。

あの甘美なる調べを飲ませよ、
もっと、おお、もっと沢山、――未だ私の喉は渇く
憂いが私の心を締め殺さんと巻きつけた蛇を、
楽の調べは解き放つ。
憂いを溶かす調べは全身の血管を巡り巡って、
私の心臓と頭脳に流れ込む。

78
さてはいつも責めさいなむ、憂い事を
よせつけぬように、不朽の詩に適合した、
柔和なリディア旋法の音曲で、われをつつめ。
それこそ、感応する魂に、しみわたるもの。
たくまざる注意と、気まぐれな技巧によって、
ながながとひきのばされた、快美の連環が、
蜿蜿とくねる旋回を頻発する調べとなって、
和音の、秘めた真髄をしばる鎖のすべてを
とき放ち、側隠の情をそそる柔らかな音声が、
錯綜した音節のなかを、よどみなくながれる。

79
牧場では、牧夫たちが、
夜明けの刻より、前に、
田舎風に居ならんで、素朴に、しゃべっていた。
そのときには、思いもよらぬ、

偉大な牧神が、なさけ深くも、
地上で、彼らと共に暮らすため、降臨したとは。
恐らくは、銘銘の恋人の事か、でなくば羊の事が、
単純な彼らの思慮を巡らす、精一杯のことだった。

そのとき、妙なる音楽が、
彼らの心にひびき、耳にも聞こえた。
人間の指では奏されたことのない、絶妙さで、
絃楽の、音にあわせて、神神しい、
美妙な旋律で、歌う声音である、
至福の法悦で、それぞれの魂を、魅了したほどだ。
大気は、こんな悦楽をなくすることに、未練があって、
聖楽の終曲の一つ一つを、千万の反響で尚も長びかす。

かような音楽は、言い伝えのとおり、
以前に奏されたことは、一度もない、
太古に、朝の愛児の、明けの星らが歌ったほかには。
それは、偉大な、造物主が、
さまざまな星座を、配置し、
釣衡よろしきを得た世界を、天極に支えてぶら下げ、
暗い土台を、底ふかくにかため、うねり波には、
泥の水底をつたえと、命じた間のことであった。

80
音楽が恋を育む食べ物なら、続けてくれ。
嫌というほど聴かせてくれ。そうすれば飽きがきて
食欲は衰え、やがて死に絶えるだろう。
今の曲をもう一度。絶え入るような調べだった。
ああ、この耳に甘く響く。
スミレ咲く丘に息づく風が
香りを盗み運んでくるようだ。もういい、やめろ。
もうさつきほど甘くは響かない。
ああ、恋の精、お前は何と元気旺盛なのだ。
海のようにすべてを呑み込む力がある。

だが一旦その腹に入ると、
どんなに価値ある気高いものも
一瞬のうちに、価値のない卑しいものに
変わってしまう。恋は変わり身が早い。
気まぐれで変幻自在だ。

81
高貴な魂が未来をその揺りかごから呼び出したり　過去をその墓から呼び出したり　現在を思考と歓喜のなかで永続させたりするのに用いる楽器をそこへ送りました。

82
さて、この点において、あらゆる学問のうちで（私はあくまでも人間について、人間の叡智に従って述べている）、詩人こそ王者である。詩人は進むべき道を示すだけでなく、誰でもが魅惑されて足を踏み入れたくなるような悦ばしい光景をその道の行く手に見せてくれるからである。いや、詩人は、あなたの旅路が美しい葡萄畑を突っ切っているかのように、当の初めに葡萄の一房を与え、その味わいに腹膨れて、もっと先へと踏み込んでみたいと憧れさせる。詩人は曖昧模糊とした定義を並べて書物の余白を諸々の解釈で汚したり、記憶に疑念を積み込まねばならないようなことはしない。詩人は、音楽という蠱惑的技芸と同行するか、あるいは、同行の身支度をして、心地よい均整を保って書かれた言葉を伴って近づいてくる。実のところ、詩人は物語を携えて近づく。子供たちの遊ぶ手をやめさせ、老人たちを炉辺から離れさせるような物語を抱えて。

83
詩人が書く場合の制約はただ一つ、弁護士でも医者でも船員でも天文学者でも物理学者でもない、ただ人間として具えるべき知識を持っている人間に、じかの喜びを与える必要がある、ということだけだ。

そしてまた、この、じかの喜びを生み出す必要を、詩人の芸の堕落だと考えてはならない。全く違うのである。それは宇宙の美の存在を承認することであって、正面からでなく間接的であるために、いっそう誠実な承認なのである。それは愛の精神で世界を眺める人間には、気がるで容易な仕事だ。さらには、それは人間本来のありのままの尊厳に対して、また人間が物を知り、感じ、生きて動く基盤である喜びという壮大な基本的原理に対してなわれる敬意でもある。

詩こそはあらゆる知識の息吹きであり生気である。それはすべての科学の顔面に見られる情熱的な表情と同じなのだ。

土壌や風土、言葉や風俗、法律や習慣の違いがあっても、さらに、いつのまにか心から消え去ったり、乱暴

に破壊されたものに抵抗して、詩人は強い感情と知識によって、あらゆる時代にわたってこの全地球上に広がっている広大な人間社会を結びつけるのだ。

詩はすべての知識の初めであり終りでもある――人間の心と同じく不滅のものだ。

84
だから詩は、寛大、通徳性、およびよろこびに役だち、また貢献するように思われる。だから、何か神性をそなえているところがあると、つねに考えられた。心をもちあげ、高め、事物を心の望むように見せかけてやるからである。ところが理性は、心を曲げ、矯めて、事象の本性に従うようにさせるのである。

85
詩、詩が書き記される時
心の琴線がかき鳴らされ
魂の中から、音楽が湧き起こる

86
（詩は、）精神を、まだ理解されぬ数多くの思想の組合せの受け皿たらしめることによって、精神そのものを覚醒させ拡大させるのである。

道徳の大いなる秘密は愛である。すなわち、自分自身の本性から抜け出して、自身のものでない思想、行為、人格のうちに存在する美しいものと、自身を一体化することである。人は、大いに善であるためには、強烈にかつ広汎に想像力をはたらかさねばならない。相手の、または他の多くの人びとの立場に、わが身を置かねばならない。同胞の苦痛もよろこびも、自分のものとしなければならぬ。道徳的善の大いなる手段は想像力である。

詩は、つねに新しいよろこびにみちた想念を想像力に補うことによって、想像力の円周をひろげる。

詩は、たとえば運動が手足を鍛えるのと同じように、人間の道徳的本性の器官である想像力を強化する。

87
端正な愛しいユリの花
春に緑の葉を広げ
白い花を開く
親愛なる喜びの花
私の心に春を呼び起こす

人々の心に咲く花！

88
開かれる事のない瞳に美しく映し出される
大地の上を進む、道があろうと無かろうと
爽やかな草原に旅人が横たわる
彼がこっそり覗き込んだ
喜ばしく、柔らかなその光景
空想の仕事、幸せな響き
瞑想の時
美が現れ、美が去るまでのひと時の事

89
わたしは、詩人の唇の上で眠っていた。
恋の道に通じたもののように、夢見つつ
詩人の寝息を聞きながら、――
詩人は、人の悦びを探しも求めもせず、
食するはただ霊なる口づけ、
思想の広野に出没する幻影の口づけ。
詩人は朝から黄昏までじっと見つめる、
湖に映っている太陽が
蔦の花中の黄蜂を明るく照らしているのを。
だが、それを気に止めるでもなく、見てもいない――
だが、こういうものから詩人は創造する、
生きている人間よりも真実なる姿のものを、
永遠なるものの育てし子らを。
その一つがわたしを呼び起こした。
そして、あなたを救うために急ぎ来たのだ。

90
あなたは光のように自由に
生きる事を喜ぶ
その輝かしさはどこに…

天使と共にあり

恐れる事もない
その燃える信念はどこから…

天使と共にあり
それだけで充分
小さな動物の住みかであっても…

あなたの心は何よりも麗しい
命を完成させるもの
あなたはあらゆる所に座っている

91
夏の一日に　君をたとえてみよう
君はもっと優しく穏やかだが
五月の愛らしい蕾を　荒々しい風が揺さ振り
夏という貸借期間は　あまりにも短い
天の眼も　ときにはひどく熱く輝き
黄金の顔はしばし雲に隠れる
そして美しいものは　すべていつの日にか
偶然にか　自然の移り変わりによって剥がされ衰えて行く
だが君の永遠の夏は　決して色褪せることはなく
君のその美しさを失うこともない
また君が死の影の下を彷徨っていると　死神が自惚れることもない
君が永遠の詩の中で　時とひとつになる限りは
人々が生きる限り　眼が見つめる限り
この詩は生きて　君に生命を与えるのだ

92
王侯たちの大理石の墓や　金箔の記念碑といえども
この力強い詩より　生き延びることはないだろう
自堕落な「時」に穢され　埃にまみれた石よりも
遥かに君は眩しく　この詩の中で光り輝く
たとえ荒廃をもたらす戦いが　彫像を覆し
数々の争いが　石造りの建物をその土台から崩そうとも
軍神マルスの剣も　駆け抜ける戦火も

君を呼び起こす生きた記録を　焼き尽すことなどないのだから
死と　そしてあらゆる忘却の敵に立ち向かい
君は歩を進める　君への讃美は
この世が滅びる最後のときまでも
後の世の人たちの眼に焼き付いて　離れはしない
だから君は　最後の審判で甦るまで
この詩の中に生き続け　愛する者たちの眼の中に留まるのだ

93
曲線を描く半島と、青く浮かぶ島
雲にも届こうとする山々と砕ける波
ギリシアは太陽に照らされて輝き
天は喜び、寛大な笑顔を見せる
魔法の洞穴から預言のような音楽がかすかに聞こえる
海の底に咲いた花のように
幼子の脳裏に浮かんだぼんやりした観念のように
可能性を包み込んでいる見知らぬもの
不死を夢見るが、幾重にも包まれて届かない
パリアンの石、黙ったままの子供
詩を呟く、哲学は自由を見つめる、
彼女の瞳を痛める、エーゲ海の上で

アテネは広がる、未来のある都市
紫の岩と銀の塔で作り上げられた
都市を守る雲、そびえる石垣が辺りを見下ろす
海の上へと道が伸びているかのよう
夜には星空が天を覆う
神聖なるアテネ
神殿の柱の美しさ
人間の意志、ダイヤモンドの山の頂のように
なぜならあなたの創造の力が
死の永遠性を乗り越え
美しい不死性を得る
最も古くからある王座と、最も新しい預言

瞬く間に流れ去っていく時の川面に
ゆらゆらと写る景色
動かずとも静かではなく
揺れ続ける、でも決して滅びる事はない

94
夢見たのは、決して壊される事のない場所
彼らが作った場所、たとえ恐怖のときであっても
虐げられた思想、助けを求める者
ウエストミンスターの回廊を歩く
愚か者がはかなく踊るさま
敷居を越えれば消えてしまうもの

95
峨々たる城よ、われかつて汝のほとりに住い、
夏の四週間、汝の目前に暮したることありき。
日ごと、われ汝を眺めしが、
汝は常に鏡のごとき海面にその姿を宿したり。

大空は清浄に、空気は静寂に、
毎の日も変ることなかりき。
わが眺めし時は常に汝の影は映り、
姿はふるえることありても、消え去ることなかりき。

ああ、われそのとき眺めしさまを描き、
海にも地にもなき光と詩人の夢と
詩人を浄化する力とを添える
画家の手をもちたりしならば

96
おまえは　いまも穢れのない静寂の花嫁、
沈黙と　緩やかな「時」の歩みに育てられた子供、
われらの詩よりも　さらに美わしい花の物語を、
このように語り伝える　森の物語師。
テンペの楽土や　アルカディアの谷間に住む

神々や人間の、あるいは神人の　草の葉に縁どられた
どんな物語が　おまえの甕に描かれているだろう。
これは　どんな人と神であろう。また　どんな羞じらい多い少女たちであろう。
どんな狂おしい求愛が、また　その愛を拒む　どんな抗いがあろう。
どんな笛や　どんな鼓が、また　どんな烈しい法悦があろう。

耳にひびく音楽は美しい、だが　耳にひびかぬ音楽は
ことさらに美しい。さあ、その静かな笛を　吹いておくれ。
人の耳にではなく、もっとしんみりと
霊魂に、音のない歌を　吹きならしておくれ。
美しい若者よ、おまえは　この木々のしたに、おまえの歌を
やめることができぬ。木々はまた　永遠にその葉を落とすこともない。
大胆な恋人よ、おまえは　とてもとても接吻はできぬ、
もう一息のところだけれど――嘆いてはならぬ。
おまえの幸せがとどかなくとも、彼女は萎れはしない。
おまえが永遠に愛しておれば　彼女もまた　永遠に美しい！

冷ややかな牧歌よ！
年古りて　この時代の人々を滅ぼす時にも、おまえは
われわれと異なった悲しみのなかに　人間の友としてとどまって、
言うのだ、《美は　真であり
真は　美である》と。―― これこそは　きみたちが
この地上で知り、また知るべきすべてのものなのだ。

97
黄金の国々を　かずかず旅して、
多くの偉大な国や　豊かな王国を見てきた。
詩人たちが　アポロ神に忠誠を立てた
かず多くの西方の島々をも　旅してまわった。

聡明なホーマーが　自分の領上のように
支配した　広大な詩園について　よく耳にはしていたが、
チャップマンが　声高に　大胆に語るのを聞くまで
そのような晴朗な空気を　呼吸したことがなかった。

そのとき　わたしは感じた、新しい星が
視界を横切るときの　夜空の観察者のように、

あるいは　鷲の目をもって　ダリアンの岬に立ち、
言葉もなく　太平洋を睨んだときの――

部下たちは皆　途方もなく憶測をめぐらし
互いに顔を見合わせた―― 勇敢なコルテスのように。

98
ヘロドトスのように文章を書けたなら、どんなに素晴らしいだろう。彼の文章は筆舌に尽くしがたい。何よりもその志が高い。緻密な文体の美しさ、読者を引きつける力、ギリシア調の奥ゆかしさ、こういった点以外にも、何千という長所がある。ヘロドトスを真似ようとしても失意に筆を落とすのみである。

99
芸術や人生に関しての優れた格言の中には、説得力、人徳の源、道徳を裏付けるものが含まれている。

100
ぼくは心の愛情の神聖さと想像力の真実さの他には何も確信がもてないのだ――想像力が美として把握したものこそ真実であるにちがいない

想像力はアダムの夢に譬えることができるだろう―― アダムは目を覚ましてその夢が真実であることがわかった。

101
正直トマス、ハントリ川の土手でまどろみ、
仰天するような美人を見た、
照り輝やく貴女、馬に乗って
エルドンの木の方から来るを。

貴女の裳は若草色の絹、
上衣は美しいビロウド。
白馬のたてがみの房毛には
銀の鈴が五十とここのつ。

正直トマス帽子をぬぎ、
脆まずいておじきをし、
「おいでなさいませ、マリアさま、天のお后、
下界には並びなきお方さま。」

「いやいやトマス」と彼女はいう、
「その名は私のものではない、
私は美しい仙人国の女王、
ここへお前を訪ねて来たのだ。

立琴をかなでながらうたいなさい、トマス、
立琴をかなでながらいっしょに来なさい。
そして私の唇にキスするならば
お前の身がらは私がひきうけます。」

「吉か凶かどんなことが起ろうと
そのさだめを恐れはしませぬ。」
といって彼はバラいろの唇に
キッスした、エルドンの木蔭で。

「さあついておいで」と彼女はいう、
「正直トマスよついておいで、
そして七年の間私に仕えねばならぬ、
どんな吉か凶かが起ろうとも。」

彼女はクリーム色の駿馬に乗り、
トマスを背のうしろに引きあげ、
そしてくつわの鳴るごとに、
駿馬は風よりも早くかけた。

彼らは乗りつづける、先へ先へ、
駿馬は風よりはやくかけり、
ついに達した、広い荒野に、
人々のすむ国をあとにして。

「馬から降りなさい、トマスよ、馬を降り、
頭を私の膝にのせ、
しばらくじっとしていると
三つの不思議を見せてあげよう。

「向うの方に狭い道が見えるでしょう、
トゲやイバラの茂みにかこまれた、
あれは正しい人の行く道よ、
その道をたどり行く人はわずかだが。

「あちらに広い広い道が見えるだろう、
ゆりの花咲く草原を横ぎって。
あれは邪悪者のとおる道、
ある人は天国への道だと云うけれど。

「また向うにけしきのよい道が見えるだろう、
シダの山腹を折れ廻って、
それは美しい仙界への道、
今夜お前と私が行くところだよ。

「しかしトマス何を聞いても、また見ても、
お前はだまっていなければならぬ、
仙界で一言でもいうならば、
お前はふるさとへ帰れませぬぞ。」

ふたりはまた馬を走らせて、
膝よりも深く水につかり川を渡った。
彼らは日も月も見ることなく、
ただ海の轟く音を聞いた。

暗い暗い夜、星あかりもなく、
赤い血汐に膝までつかり彼らは歩いた。
地の上で流された血汐は
地の下の国の泉から流れ出るのだ。

彼らが緑の園に出て来たとき、
彼女は木から林檎を一つちぎり、
「これはごほうぴよ、トマス、
これを食べたらうそが云えなくなるよ。」

「私の舌は私の勝手です」と正直トマス、
「結構なものを下さりますのね、
それではお祭りや市揚へ行っても
ものの売り買いができませんよ。

「また王様や殿様方とお話もできず、
美しい姫様のお気にいることもできません。」
「おだまり、トマス」と彼女はいった、
「私が言うとおり、そのとおりにせねばなりませぬ。」

トマスは柔かな絹の上衣をもらい、
緑色のビロード靴をはいて、
七年の年月がたってしまうまで
人間の世界では見られなかった。

102
おいで、黄色の砂浜に
手に手を取って
お辞儀して、口づけ交わせば
荒波も静まり返る。
踊れ、かろやかに、そこここで。
歌え、妖精、賑やかに
お聞き、お聞き。
ワンワンワン。
番犬たちが吠えている。
ワンワンワン。
お聞き、お聞き！ほら、
雄鶏の声、威張りくさって歩いてる。

コケコッコー。

103
ドロマヘアの人ごみの中に彼は立った
絹のドレスの上にひっかかった彼の心
彼はついに，いくばくかの愛を知っただろうに
大地がその石のような手で彼を包み込む前に
しかし，釣った魚をつみあげるとき
魚たちはそのちいさな，銀の頭を持ち上げ
歌うようだった
「金色の朝や夜がこぼしたものは
織られた浮き世忘れの島の上
ほぐれた海辺で人々が愛し合うところで
時は恋人たちの誓いを決して傷つけ得ない
織られたとこしえの大枝の屋根の下では」と
その歌によって，彼は新しい安らぎから揺り戻された

彼はリサデルの砂のそばをさまよった
彼の心は金の心配や恐れの上を飛び回り
そして彼はついに，いくばくかの慎重な日々を知っただろうに
人々が，彼の墓を丘の下に積み上げる前に
しかし，彼が水たまりだらけのところを通っていると
ゴカイがその，灰色の泥だらけの口で歌った
「北か，西か，南のどこか，
そこに陽気で元気で優しい人々が住んでいて
金色か銀色の空のもとで
踊る人たちがその飢えた足を休めたら
太陽と月は実を結ぶようだった」と
その歌声のもとでは，彼はもはや賢くはなかった

彼はスカナヴィンの井戸のそばで物思いにふけった
彼は彼をあざける奴らについて考えた
彼の突然の敵討ちはその土地のうわさ話
大地の夜が彼の体を飲み込んだ時には
ところが池のそばで育つちいさなニワヤナギが

必要以上にひどい声で歌った
「いにしえの静寂が，選ばれた民に楽しめと命じる
ほぐれた水がのぼろうが，下ろうが
荒れ狂う銀が金色の太陽をじらそうが
そしてそこでは真夜中がすべてを羊毛のように織り込み
恋人はその恋人のそばで安らぐ」と
その物語は彼の高雅な怒りをかき消した

彼はラグナガルの丘の下で眠った
そしてついに，さいなまれることのない眠りを知るかもしれない
寒い，蒸気のターバンを巻いた坂の下で
今や地面は男やすべてを巻き込んだ
彼の骨のまわりを這う虫たちが
元気な，甲高い叫び声で宣言しなかったなら
「神はその指を空に掲げ
その指からはギラギラした夏が走り出る
夢も見ないほどの波のそばの舞姫の上に
恋人を失うことのない恋人たちがどうして夢を見なければ？
神がキスで自然を焼き尽くすまで」と
男は墓の下では安らぎを得られない

104
蜜蜂が吸う蜜を吸い
釣り鐘草のなかで寝る。
フクロウの声が子守唄
コウモリの背に乗って飛び
楽しく夏のあとを追う。
楽しく、楽しく暮らそう
花咲く枝のその下で。

105
これらは姫の大人しくて静かな楽しみ事であった。彼女は
屢々浮雲の築く最も険しい雲梯を、崇高な雲の
最先端にまで登って行った。そして、海豚の背に
乗ったアリオンのように、

岸辺なき大気の中を歌いながら進んだ。
――時には、蛇の如く走る電光の屈曲する足跡を追って、
風の歩廊を駆け抜けては、
稲妻が後ろで轟くの聴いて笑った。

106
そして、そこでは、川の水面に、
幾つものどっしりと構えた神殿の影が映り、
決して掻き消されることがなく、
だが、雲が現れるとたちまち消え去る運命にあるものの如くに、
絶えず震えている。蓮の花々を敷き詰めた運河を通り、
人の築いた墓や塔や神殿が
最も静寂なみ空を突き通している処は何処へでも
夜の陰翳の中をさまようのが、彼女の歓びだった。

107
その日静かに風そよぎ
西風甘く吹きわたり
暑くきらめく太陽の
光やさしくやわぐとき、
われ鬱々と
永い宮廷の滞在も
実りなくあだな望みの
飛びさるさまは陽炎か
あてもないまま苦に耐えず
そぞろ歩むは
流れも清きテムズ川
川を縁どるその土手に
色とりどりに咲く花も
野面の花もふさわしい
部屋の飾りに
恋人の冠に
婚礼の日がやってくる、
テムズ静かに歌のすむまで。

ついに着いたよロンドンに
メリーロンドンわが乳母よ
いのちの源よわが町よ、
名は別の地の由緒ある
家から来たが。
着いた所は煉瓦塔
テムズの広い背に乗って
いま法学ぶ者が住む
テンプル騎士がもとは住み
誇り滅んだ、
それに隣す大邸宅
われよく恵み受けた家
そこに住まれし大殿の
おわさぬことに胸痛む、
いま懐旧の
時にはあらず
婚礼の日がやってくる、
テムズ静かに歌のすむまで。

108
きれいだなあ、この堤で眠る月の光！
僕らもここに坐って、忍び寄る楽の音に
耳を澄ませよう。柔らかく夜をつつむ静けさは
甘く快い調べに打ってつけだ。
お坐り、ジェシカ――見ろよ、あの大空、
まるで床一面に金の小皿をちりばめたみたいだ。
君の目に映るいちばん小さな星屑も
空をめぐりながら天使のように歌っている、
あどけない瞳の天の童たちと声を合わせて。
不滅の魂のなかにはそういうハーモニーがある。
だが、やがて朽ちて土に還る肉体に
包まれているあいだは、人間には聞こえないのだ。

109
彼の真実を責めたりはしない

星と天使の至上の力！
単に人々の誇りであるばかりでなく
人々の生活と共にあり、神秘で世界を満たす
傷つけられた心と同じように
現実の自然、私たちが生活する世界は
実に狭い所だ
寓話にあるように、愛の世界、家庭、故郷は
人を守ってくれる住みかである
その神聖さを、精神は喜んで信ずる
彼自身も神聖であるのだ
いにしえの詩人のように平易な語り
いにしえの宗教のように寛大な教え
その力は美しさと偉大さから来る
松の木の山々、谷間に訪れる
あるいは、森の小川のせせらぎや、綺麗な小石の泉に
あるいは深い割れ目の水の底に、そして全て消えてしまう
合理的な世界には生きられない
でもその心は言葉を必要として
大昔の虫たちにも古い名前を授けた
あなたの星座の世界は今はもうどこかに失われた
昔は、精霊も神もこの地上にて
人間と共に暮らしていたのに

110
私は子供のように、今も後からついて行く
私に与えられた道は荒野の中では見失ってしまいそう
雑然としたこの世界では、かすかな手がかりを頼りに進むしかない
それは虹の露のように輝く
小さな虫たちが紡ぎ出したもの
かすかな手がかりに手をかけて登って行くのだ

111
悲しみを友とする男がいた
悲しみを良き友として夢見た
輝く道をゆっくりと歩いていった

砂が音を立てる、風の作る波がゆっくりと進む
彼は大声で星に叫ぶ
青白い王座から降りてきて慰めてくれと
でも星は遠い空の上で笑っているだけ
悲しみを友とする男は海に向かって叫ぶ
暗い海よ、私のみじめな話を聞いてくれと
海は見渡して、古い悲しみの涙を流した
丘から丘へと夢の中を転がっていく
弾圧された海の栄光の上を飛んでいく
ずっと遠く、静かな谷間
葉の上に光る露のしずくに話を聞かせようとした
でも、いつも聞き手ばかりの露のしずくは耳を貸さず
葉の上を転がる音が聞えるばかり
悲しみを友とする男は聞き手を探し
海辺にじっとしている巻貝を見つけた
私のこの辛い話も
巻貝にこだまするならば
悲しみが真珠色の巻貝を通り抜け
歌に変わって私へと戻り
私自身のささやきに慰められるなら
大昔からのこの荷物から解き放たれるだろう
そして巻貝の傍で優しく歌いかけたのだが
海辺に住む悲しきこの住人は
その巻貝の渦巻きの奥から
こもった響きを返すだけだった

112
アッシャーズ・ウェルという所に
金持ちのおかみさんが住んでいた。
３人の丈夫な息子を
海外へ出した。

船出してほんの
１週間しか経たないうちに
３人の息子が消息を絶ったという知らせが、

年老いたおかみさんのもとへ届いた。

船出してほんの
３週間しか経たないうちに
３人の息子にもうこの世で会えないという
知らせがあった。

「ああ、息子たちが血も肉もある生き身で
　帰ってこないのなら、
　風が永久に吹きつづけ、
　海がいつまでも荒れるがよい」

夜が長く暗くなる
聖マルティヌス祭のころ、
おかみさんの３人の息子は帰ってきたが、
帽子はカパの枝で飾られていた。

そのカパは、そこらへんの小川や溝に、
あるいは堀割りにあるような種類でなく、
天国の入り口に
みごとに生い繁るものだった。

「下女たちよ、火を起こせ！
　井戸から水を汲んできて！
　今夜は家中で宴会よ。
　息子たちが無事帰ってきたんだから。」

おかみは息子たちに
大きく広いベッドを用意した。
自分の身体をマントにくるみ
しばらくベッドの側に坐って見守っていた。

そのとき赤いおんどりが起きてときをつくった。
灰色のおんどりも起きてときをつくった。
いちばん上の兄がいちばん下の弟にいった。

「もう立ち去るときだよ。」

おんどりは一度しかときをつくらず、
まだ羽ばたきもしないのに
弟は兄にいった、
「兄さん、行かなくちゃ。」

おんどりが鳴き、もう夜明けですよ。
うるさいうじ虫どもが文句をいいますよ。
もしぼくらが居場所を離れていることが分かったら、
痛い目にあわなければなりません。

「母上よ、さらば！
　馬小屋と牛小屋よ、さらば！
　母のため火をおこしてくれる
　美しい娘よ、さらば！」

113
ヘレンの横たわる場所に一緒にいられたら
昼も夜も彼女の泣き声が聞える
ヘレンと一緒にいられたら
キルコーネルの丘で

その事を考えた心をののしる
引き金を引いた手をののしる
ヘレンは私の腕に倒れこんだ
そして私のために死んだ

あなたではなく私の心が痛む
私の恋人は崩れ落ち二度と話す事はない
助けようとしたが目を閉じてしまった
キルコーネルの丘で

川べりへ降りていくと
私の敵がいるだけ

私の敵がいるだけだった
キルコーネルの丘で

私は身をかがめ、剣を抜いた
そして敵をズタズタに切り裂いた
敵をズタズタに切り裂いた
私のために死んだヘレンを思って

美しいヘレン、かけがえのないもの
あなたの巻き毛で首飾りを作り
私はそれをずっと付けている事にしよう
私が死ぬときまで

ヘレンの横たわる場所にいられたら
夜も昼も彼女の泣き声が聞える
ベッドの中の私に呼びかける
急いで私のところへ来て

美しいヘレン、貞淑な女性
あなたといる事が、この上ない幸福
あなたは横たわり、永遠の眠りについた
キルコーネルの丘で

私の墓は緑に覆われる
私の目は白布で覆われる
そして私は、ヘレンに抱かれて眠る
キルコーネルの丘で

ヘレンの横たわる場所にいられたら
夜も昼も彼女の泣き声が聞える
私は疲れ果てて空を見上げる
私のために死んだヘレンを思って

114
ああ、野の人里離れた小川よ、

お前は陰気で暗いのだ。群がっているモミの木は
お前の岸辺からそびえ立ち、お前の川床を横切って、
洞穴の井戸のように、お前を悲しくさせながら伸びている。
はにかみのカワセミがお前の険しい土手に巣を作るとき以外は、
お前は愛を持っていないのだ、野の小川よ。

115
カシスの川は何にも知らずに流れる
　異様な谷間を、
百羽の鳥が声もて伴れ添ふ……
　ほんによい天使の川波、
樅の林の大きい所作に、
　沢山の風がくぐもる時。

すべては流れる、昔の田舎や
　訪はれた牙塔や威儀張つた公園の
抗ふ神秘とともに流れる。
　彷徨へる騎士の今は亡き情熱も、
此の附近にして人は解する。
　それにしてもだ、風の爽かなこと！

飛脚は矢来に何を見るとも
　なほも往くだらう元気に元気に。
領主が遣はした森の士卒か、
　烏、おまへのやさしい心根！
古い木片で乾杯をする
　狡獪な農夫は此処より立去れ。

116
それで、この男は、黄昏時に、高い木々を
切る手を止めて、斧と鋸を携えて戻って行った、
切り倒された木々といえどもそこに宿る魂は〈自然〉の優しき掟によって

夫々が森の妖精であり、この自然のままの森の床と
屋根とを常に保っていたのだ、ぎざぎざの葉で

穏やかな青空の陽光をまだらに変化させて。

―― そして、梢からは唄を歌い
風を寝かせつけ――又、屡々泣いては
空霊なる雨滴の迅速なる俄か雨を、

塩辛くない〈自然〉の純粋な涙を、
彼らの美しく優しい母なる大地の胸に注いだのだった。――
高くにある小鳥たちの揺かごの周りには、

妖精たちは、扇のように美しい葉へと自らを
広げ、色艶なき花々の上には湿った雲のように
かかる。――又、高き枝々が接吻する処では、

円柱や塔に取り囲まれて枝さながらに広がった
トレーサリーの細工を施した
都市の巨大なる寺院のように、

静かな木陰の中に緑の空域を作るのだ、
そこには宗教が宿る――そして、未だ奏でられぬ旋律、
芳香と閃光とさざめきの黙せる影響力が支配するのだ、

この世は〈樵〉ばかり、その棲み家から
追い出されるのは〈愛〉の優しき木の妖精たち、
悩まされるのは夜鶯、全ての谷間にて。

117
ユリの花
庭の木陰に一人、夢見心地で
物思いも休息も、もういい
ユリの花
庭の木陰で

大いなるバラ
今、目覚め、赤く高貴な花をしつらえる

今、静かな一日が過ぎ、デイジーが花を閉じる
ユリの花
庭の木陰で

118
いとも風変わりな姿達よ、汝らはいずこへ消え去ったのか？それとも、もし汝らに似た者が存在するとすれば、何故に私のためにはもう存在しないのか？

あの頃、私は神々が「外套を被った老人達」として地上を歩くのを見た。古の偶像崇拝の夢は滅びるとも――お伽話の妖精と妖精にまつわる由無し事は死に絶えるとも――幼い子供の心の中には永久に、無邪気な、あるいは健全な迷信の泉が湧き出るであろう――"誇張"の種がそこに忙しく活動し―――日々ありふれた物の姿から、未知の非凡なる物を引き出して行くだろう。大人の世界が分別と物質の暗闇にもがく時、あの小さなゴセンの地には光があろう。子供時代と子供時代を呼び戻す夢が残っている限り、想像力が聖なる翼を広げて、地上からまったく飛び去ってしまうことはなかろう。

119
われは、この美しい森の
守護神であって、樫の木蔭に住居しているからである。
亭亭たる若木を育て、この木立ちを、きれいな葉叢の
巻毛で飾り、とり合わせたとりとめなき曲り径で装う。
そこでわれは、あらゆる樹木を、有害な夜風や、
しおらせ枯らす、冷たい夜霧の傷害からすくい、
枝枝からは、有毒な露をはらい落とし、
ジグザクに突っぱしる、稲妻の災害や、
魔の妖気を降らす、不吉な面つきの土星の祟りや、
猛毒の害虫、尺取虫が噛んだあとの病害をいやす。
灰色の夕暮れになると、いつもの巡回をする、
あの丘の上と、屋敷うちをくまなく。そして、
朝の芳しい息吹きが、眠れる葉叢をめざますよりも、
房かざりの狩の角笛が、丘の叢林をゆさぶるよりも、
もっと早い時刻に、ぐるり一帯をいそぎ足でまわり、
隊列なす草木の員数を数え、効能あらたかな言葉や、
祝福する呪文をとなえて、若木のすべてを見まわる。
だがそんな勤めのない、別な時だと、人間の知覚を、
ねむ気が封じこめる、深夜では、天上の歌姫、

サイレンたちの和声に聞きいる。歌姫たちは、
九重に囲まれた球層のそれぞれに坐して歌い、
そして、命を絶つ鋏をもって、神神や人人の
運命をまきつける、あの金剛不壊の紡錘を、
ぐるぐるとまわすものどもにも、聞かせる。

120
ザナデューにクーブラ・カーンは
壮大な歓楽宮を建てよと命じた。
そこは聖なる河アルフが、
人間には測り知れない洞窟を通って
日の差さない海に流れていた。
そこで五マイルの二倍の肥沃な土地には、
城壁や塔が帯のようにめぐらされ、
あちらには曲がりくねつた小川のある明るい庭があり、
かぐわしい果物のなる木が、多くの花を咲かせ、
こちらには丘と同じように古い太古の森があつて、
月のあたる緑地を包んでいた。

だが、ああ、あの深い摩詞不思議な割れ目は、杉の森を横切って、
緑の丘を下へと斜めに落ち込んでいた。
凄まじい場所だった。かつて欠けゆく三日月のもと、
魔性の恋人に焦がれて泣く女が
現れたほどに神聖で魔力のある場所だつた。
そしてこの割れ目から、絶え間なくこぼこぼと煮えたぎつて、
まるでこの大地が速い絶え間ないあえぎで、息づくかのように、
力強い噴水が刻々に押し出されていた。
その速やかに断続する泉のほとばしりのなかに、
岩の巨大なかけらが、はねかえるヒョウのように
あるいは、脱穀する者の打つ殻竿の下のモミのようにはじけた。
これら踊る岩くずのなかに、同時にまた絶えず
割れ目は刻々にあの聖なる河を噴き出していた。
迷路のような動きを伴って五マイルくねくねとうねって、
森を通り谷を通って聖なる河は流れ、
やがて人間には測り知れない洞窟に至り、

ついに生き物の住まぬ海に騒音を立てながら沈んだ。
そしてこの騒音の中でクーブラは聞いた、
遠くから戦争を予言している先祖たちの声を。
歓楽の宮殿の影が
波の上に中ほどに浮かんでいた。
そこからあの泉と洞窟からの
混じり合う調べが聞こえた。
それは珍しい仕掛けの奇蹟だった。
氷の洞窟をもつ日のあたる歓楽宮だった。

ダルシマを持つ娘を
かって私は幻に見た。
それはアビシニアの娘で、
彼女はダルシマを奏でながら、
アボラ山の歌を歌つていた。
もし私がもう一度心の中に
あの乙女の歌と調べを甦らすことができたら、
どんなにか深い喜びにとらわれ、
高らかな長い音楽でもつて、
空中にあの殿堂を建てるであろうに。
あの日の光輝く殿堂を、あの氷の洞窟を。
音楽を聞いた人々はみなそれを見て、
みんな叫ぶであろう、「気をつけよ、気をつけよ、
彼のきらめく眼、彼のなびきただよう髪、
彼の周りに三たび輪をつくり、かしこみ恐れて眼を閉じよ、
なぜなら、彼は甘露を食べ、
楽園の乳を飲んで育つたのだから。」と。

121
怒りに似た原始的な感情がいつも
私の中に蘇ってくる
忙しい日常の事柄から引き離され
叶う事のない夢の世界へと

私は本能のままに進んでいく

もっと違う道に従うべきかと迷いながら
シダの茂る峡谷で動物の群れが草を食む
荒々しい風が山裾を吹き抜けていく

122
私は夢を見た、山道を歩いていると
凍てつく冬の寒さの中へ、突然春が訪れた
穏やかな春の香りに、私は歩みを止めてしまう
小川を水が流れる音も聞こえる
川に沿う芝の上には
小さな木立が続いて
その緑の枝を流れの上に伸ばそうとしている
そこへ、口づけしようとしたとたん、消え去ってしまった、夢だったかのように

そこにはアネモネ、スミレが入り乱れて咲いている
デイジー、地上の牛飼い座
花の星空のように、それは日々、形を変える
かすかな色合いのサクラソウ、優しげなブルーベル
伸び始めた短い芝に、背の高い花々
まるで子供のように、優しさと喜びの中に
母の表情には、天からの喜びの涙
緩やかな風に、仲間と遊び戯れる声

日向の生垣には、鮮やかなバラ
緑のブリオニア、月光のようなサンザシ
サクラの花の白い器の中に
ワインのように輝く露がずっと満たされている
絡まりあう野生のばら
濃いつぼみと葉をあちらこちらに伸ばす
青と黒の花々に金色のすじ
目覚めた瞳にはどれも美しい

川の流れに近づいて見ると
紫色のフラッグフラワー、所々に白い花
スゲの中でふくらんだつぼみが、星の川のよう

水面には睡蓮があちこちに花を広げ
川の上まで枝を広げたナラの木に色を添える
水のきらめきが月光のよう
パピルスやアシが濃く茂り
花々の美しさを眩しく感じる瞳を休ませてくれる

辺りに広がる花々を見て
花束を作ろうと思い立った
同じ色合いの花を集めて木陰に入り
混ぜ合わせたり並べたり
時の子供たちを私の手に捕まえて
うれしそうに華やかに
元来た道を急いで戻る
美しい花束をプレゼントするために。ところで誰に？

123
もしわれに　こがねまた
しろがねのひかりもて織りなせる
あまつみくにの錦繍ごろも
よる　まひる　たそがれの
あおき微昏けき鳥羽だまの
無縫衣あらば　そをきみが
御足のもとにひろげなむ。――
貧しくして　もつはただ夢なれば、
ひろげたり　わが夢を御足のもとに。
しずやかにあゆみてよ　夢の上なれば。

124
聞かせよう。バビロンがまだ塵とならぬ頃、
わたしの死せる子、僧ゾロアスターは、
庭を歩く己が幻に出遭った。
かかる幻影を見たものは、人のうちでは彼のみ。
そは、生と死なる二つの世界があるということなのだ、――
一つは、あなたが見ているもの、――もう一つは
墓の下にあり、そこに住むものは

ものを思い、生命あり、形ある、すべてのものの影、
死が結んで一つとし、もはや離れぬものたち、――
さまざまな夢、人々のはかない想い、
また、信念が作り、愛が欲するすべてのもの、
恐ろしく、妖しく、崇高で、美しい形あるものなど。

125
赤や黄色に葉の色を変えた木々を愛しますか
もう少しすると
もっと違った景色に変わります

荒野の王の軍隊は
その力を売り払い
金貨ほどの価値も
すっかりくたびれた

ユリの白い花を愛しますか
まだ誰も踏み入れた事の無い陽だまり
太陽の匂いがする所？

女王たちの回廊へようこそ
何千もの
聖なる乙女たちの歌声
温かく守られた場所

生きる強さを持っている？
気取らない美しさは？
世俗の煩わしさを離れて？

あなたの力が
彼らの栄光に降伏する時
柔らかな布に、静かに覆われ
夕暮れの時となる

この世界に喜びというものが無くなったら

何かもっと美しいものを
私は探します

126
名も無き香木
アラビアに燃える
赤い香りが辺りを満たす
地上が楽園となるまで

燃え上がる体を、半ばまで埋められる
燃えるこの木に巣を持ち
太陽のような不死鳥が
炎の中で焼け落ちていく

豪奢な死の床で
芳しき香りと共に焼けていく
焼け残った灰は人の手の届かぬところへ
そこで不死鳥は甦る

遠くまで広がる緑の荒野
不死鳥の声は聞こえなくなった
不死鳥の焼けた後には
褐色の涙と、芳しきため息が残った

127
いったい　このような喜びに　別れを告げることができようか。
そうだ、わたしは　このような喜びを　人間の苦悶や
心の争いがそこにある　もっと高貴な人生に
高めねばならぬ。見よ！　逢かに遠く
馬車と　乳白色のたてがみの駿馬とが
青く峨々たる山をおおう雲のうえを　駆けってゆくのが見える――
御者は　重々しい恐怖にふるえ　風を見つめている。
そしていま　無数の足音が　巨大な雲の峰に軽く震え、
また　車輪の音もかろやかに　馬車と駿馬は
輝く太易に　そのまわりを銀いろに縁どられ、

爽やかな大空を　舞いおりてくる。
かれらは　大きく旋回しながら　下界へおりてくる。
そしていま　緑の丘の斜面におり立って、風にゆらめく樹木の
幹のあいだで　そよ風にふかれて休んでいるのが見える。
御者は　不思議な身振りで　木々や山々に
話しかけた。するとやがて　喜びと　神秘と　恐怖の姿が
現われ出で　大きな樫の本の木蔭を
通りすぎてゆく。その姿は　急ごうとすると
消え去るような音楽を　ひびかせる。
見よ！　いかに囁き、高らかに笑い、微笑み、そして泣いているかを。
あるものは　手をあげ　口調も厳しくわめき、
またあるものは　両手で　顔を耳までかくして
泣いている。青春の盛りの　あるものは
喜び勇んで　暗闇のなかを通り抜けてゆく。
あるものは　後ろを振りむき、またあるものは　天を見上げている。

この馬車の御者は　ほとんどこわごわと
身を乗り出して、耳を傾けているようだった。
ああ　わたしは　熱情に顔をあからめて
御者が書くものを　すべて読み取りたいと思う。

まぼろしは　みな消えてしまつた――
あの車も天の光に消え去り、それにかわって
現実に対する意識が　烈しい勢いでやってきた。
それは　あたかも泥流のように　わたしの魂を
押し流して　無に到らしめるであろう。しかし
わたしは　あらゆる疑惑に闘いをいどみ、あの同じ車と
あの車のたどった　不思議な旅の思いを
つないでいたい。

128
多少とも価値のある人間の生活というものは連続した寓意なのだ。――そしてそういう人間の生活の秘密を理解できる人間は大変少い――

129

決して定まる事の無い事柄を、あらかじめ知りたいと言う人がいるだろうか。
自分の人生を受け入れるべきだったとという後悔を、受け入れない人がいるだろうか。

130

それでも私は、古の詩女神たちの訪れる清き泉や、
樹影濃き森や、燦々と陽光ふりそそぐ山のあたりを、
神々しい歌声に惹かれて彷徨うことを、今なおやめてはいない。
しかし、とりわけ、おお汝シオンよ、私は、汝と、汝の
聖らかな麓を洗いつつ細流の音をたてて流れる、あの花咲き匂う
小川のほとりを、夜毎に訪れているのだ。私はまた、己と
等しき運命に苦しんだ他の二人の者を（願わくば、名声に
おいても彼らと等しからんことを！）、すなわち
盲目のタミュリスと盲目のマイオニデスとを、また、古の
予言者たるテイレシアスとピネウスとを、けっして
忘れることはできない。こういったとき、私はもの思いに
ふけるが、想いは自と躍動し、美しい詩を生み出してゆく。
それは、寝もやらぬ夜鳴鶯が暗がりで鳴き、あやめもわかぬ
木蔭に隠れて夜の調べを奏でるのに、似ていよう。
かくして年々歳々四季こそめぐり来るものの、白日も、
朝と夕べの爽やかな訪れも、爛漫と花咲く春の顔も、
夏の日の薔薇も、羊の群れも、牛の群れも、ゆかしい人の面影も、
ついに私には戻ってはこないのだ。私の前にあるものは、
黒雲と果てしなき昏冥にすぎない。私は人の世の楽しみから
断ち切られ、美しい知識の書が与えられるかわりに、
私にはもはや抹殺され消去された自然の物象についての、
空漠たる空白の世界が与えられ、知恵が、入口の一方において
完全に開め出されてしまっているのだ。さればこそ、
汝、天来の光よ、私は切に汝にこい願う、願わくば、
わが内なる世界において輝き、わが心を照らし、
そのすべての力を強め、そこに物を見る眼をもたらし、
そこよりすべての霧を追い払い、排除し、もし
能うべくんば、私をして、人闘の眼には見えぬ
事象の数々を見、かつ語ることを、えさしめ給え、と。

131

永遠の翼に乗せて、私を連れて行って
ヒバリよりも軽やかに
白く透き通るツノの杯に注がれた
朝の露で喉を潤す
甘く芳しく喉に流れていく

132
すなわち、われわれが話したように、人間の魂は、どの魂でも、生まれながらにして、真実在を観てきている。もし観たことがなければ、この人間という生物の中には、やって来なかったであろう。しかしながら、この世のものを手がかりとして、かの世界なる真実在を想起するということは、かならずしも、すべての魂にとって容易なわけではない。ある魂たちは、かの世界の存在を見たときに、それをわずかの間しか目にしなかったし、またある魂たちは、この世に墜ちてから、悪しき運命にめぐり合せたために、ある種の交わりによって、道をふみ外して正しからざることへむかい、むかし見たもろもろの聖なるものを忘れてしまうからである。そういうわけで、結局、その記憶をじゅうぶんにもっている魂はといえば、ほんの少数しか残らない。これらの魂たちは、何かかの世界にあったものと似ているものを目にするとき、おどろきに我を忘れ、もはや冷静に自分を保っていられなくなる。だが彼らは、それをじゅうぶんに認知することができないために、何がわが身に起こったのかわからない

133
かつては牧場も森も小川も
大地も、目に映るありとあらゆる光景が
わたしにとって
天上の光に包まれて見えた、
夢の中の栄光の瑞々しさに包まれて見えた。
だが今はかつてとは異なる。
どちらを向いても
夜であれ昼であれ
もはや今、かつて見えたものを見ることはできない。

あの幻の輝きはいまいずこに、
あの栄光と夢はいまいずこに。

人の誕生はただの眠りと忘却。
生まれ出る魂は生命の星、
一度は没した星、

遥かかなたから渡りきた星。
忘れ去りもせず、
露な裸身でもなく、
栄光の雲を棚引かせて生まれ出るわれわれの
ふるさとは神、
幼子を包み込む天上。
牢獄の影が垂れ込めるのは
育ち行く少年、
それでも少年は
栄光の光とそれがいずこから射すかを知り
喜々として光を見る。
若者となると、日々、東から遠ざる
旅を強いられるが、いまだ自然の司祭であり、
光り輝く光景に
道すがら伴われている。
ついに大人ともなれば、栄光の光は失せ
日々の光の中に融け入る。

歓ぶがよい、燃えさしのなかで
火が死に絶えることなく、
人の本性は忘れることなく
過ぎ去るものの残ることを。
過去の歳月への思いがわたしの心のなかに育み
消えることのない祝福。わたしが感謝し賞賛するのは
最も祝福に値すると思われるものではない、
喜びと自由な心、子どもの素朴な信仰のことではない――
子どもは立ち働いていても休んでいても
羽毛も初々しい希望が胸のうちで羽ばたくものだが。
それとは別に、わたしは
感謝と賞賛の歌を捧げよう、
子ども時代のあの執拗な問いに対して、
感覚と目に見える物、抜け落ち、消え去るもの
に対する問いに対して。
子ども特有の漠たる不安、
いまだ実在化されぬ世界のなかで動く子ども特有のもの

それは高貴な本能、それを見て世俗にまみれた大人の性は
不意を襲われて悪事の露見した者のように身を震わせた。
感謝し賞賛しよう、あの原初の感情、
影のように捉えがたい記憶、
たとえそれが何であろうが、
この世の光の源泉となる光、
この世の目に見えるものすべてを統べる光。
われわれを支え、育み、その力で
この世の喧しき歳月をほんの瞬時と化してもらいたい、
永遠の静寂のなかの瞬時に。かくあれかし、目覚めた真理よ、
死滅することのない真理よ。
無気力も、もの狂おしい苦闘も、
大人も少年も、
さらに歓びの敵すべても、
棄却し破壊し去ることのできない真理よ。
それだから凪の季節には
海辺からはるか遠くにあってなお、
われわれの魂はあの永遠の海を見、
われわれの出自たる海を見、
刹那にそこへ還ることが許され、
子どもたちが岸辺で戯れる姿と、
永久に高鳴る潮騒の音を聞く。

134
話しておくれ、話しておくれ、微笑んでいる子よ、
あなたにとって過去はどんなふうだったの。
「悲しい溜め息をつく風をともなう
　物静かで穏やかな秋の夕暮れ。」

話しておくれ、今の時間はどうなの。
「緑の花咲く小枝、
　雛鳥はしばらくその枝に止まって、
　これから飛び立とうと力を貯えている。」

それで、未来はどうなの、幸せな子よ。

「雲一つない太陽の下で輝く海、
　無限に広がる、
　広大な、光り輝く、眩い海。」

心打つ音楽のぞくぞくする音色、
祝日の大盛況、
辺りに盛り上がるきらめく豪華さが
大地のすべての喜びと同様に消えてなくなった。

あの美しい婦人に見捨てられて、
その女児は、こらえてもなお震えて落ちる
涙を隠そうと、額を手でおおい隠しながら、
楽しげな音に耳をかさずにそっとそれらの間を通り過ぎてゆく。

その女児は外のホールを急いで抜け、
夜風の寂しい夜の祈りを、
そよ風の呼ぶ声に向かってつぶやきかえす
薄暗い廊下を抜けて階段を上がる。

135
静かに爽やかなる美しき夕べなり。
聖らなるこの時は静かに、
祈りに息を凝らす尼のごと。
大いなる落日は平穏の内に沈み行く。
天の穏やかさは海の面を蔽えり。
聞けよ、偉大なる霊は今や眼ざめ、
そのとこしえの活動をもって、
雷のごとき響きを無窮にたつる。
今われとともにここに歩むなつかしの少女よ、
よし汝はおごそかなる思いに動かさるることなくとも、
汝が天性はいささかも神聖さを失うことなし。
汝は常にアブラハムの懐にありて、
神殿の奥なる厨子にて礼拝す。
われら知らざるに神は常に汝とともにいますなり。

136

何も見えない私の子
朝、父親が挨拶する
さあ来て、神が与えたこの世界を見なさい
価値あるこの素晴らしい世界
フランスがもたらす平和
私たちとあなたの王であるフランソワ
みなから慕われ、フランスを守る
来て、善良なるものに満ちたこの世界を見なさい

ジャン、幼いジャン、来て、この美しい世界を見なさい
青い空、輝く星
黄金の太陽、大きな丸い地球
広大な海としぶきを上げる河
美しい風と波、あらわな流れ
喜びを歌う鳥たち
元気に泳ぐ魚、平和そうな獣たち
来て、神の祝福と神の意志を見なさい

幼い子、来られるかな
この地上へは、何も持たずに生まれてきた
でも、裸の虫たちと同じだろうか
自分の体を覆う服がある訳ではないし
金や銀を持っているわけでもない
父と母には、痛みと心配をもたらし
でもそれがあなたの善良さ
幼い子、何も持たずに来なさい

倹約する事が名誉なのではない
幼きあなたは、善良である事を大いに楽しむ
大きく豊かなこの世界へやって来た
まるで王様のように華やかに
あなたの財産はこの大きな空
あなたのしもべは善良な天使たち
あなたの金庫番は全能なる神

神の恵みは、あなたの母の優しさ

137

わたしは何だったのか、表わしようもない。轟々たる滝の音
は情念となってわたしにとりついた。
聳え立つ岩、山、奥深く小暗き森、
それらの色と形はあの頃のわたしにとって
欲望であり、感情であり、愛であり、
思考を媒介としたよそよそしい魅力は必要とせず、
それらが興味深いのも視覚ゆえ。
あの時代は去ってしまった、
あの頃の疼くような喜びはもはやなく、
目眩く歓喜ももはやない。そのことで
消沈せず、悲しまず、かこつこともない。天からの
別の賜物が授けられたのだから。喪失に対しては
充分な償いがあると信じよう。なぜならわたしは自然を
無分別な若者の頃とは違う眼で見ることを学んだ。
しばしばわたしが聞いたのは
人の奏でるあの静かで物悲しい音楽、
それは耳障りでも不協和でもなく、
心を鎮め和らげてくれる力に満ちていた。
目には見えない力があり、高められた思いが
喜びとなってわたしの心をかき乱した。それは
はるかに深く浸透した何ものかに対する崇高な感覚で、
それが存在するのは落日の光の中であり、
円い大洋であり、新鮮な大気であり、
青空であり、人の心の中であった。
それは湧き起こる衝動であり、精神であり、
思考する主体と、思考の対象すべてを促し、
万物のなかを駆けめぐる。

138

私の日常生活がもたらす真の収穫は、朝と夕べの色あいとおなじように、触れることも言葉であらわすこともできない。いわば捕らえられた小さな星屑、つかみ取った虹のひとかけらである。

139

私は違うのだ　あのような詩人とは
虚飾の美に唆されて詩を書くような
あの詩人は　天を装飾にして
美の　ひとつひとつを
高尚に見える比喩の組合せで並べ立てる
太陽と月　陸と海の宝石
四月に生れたばかりの花　この巨大な
宇宙空間が取り囲む　貴重なものすべてなどを
ああ　愛に忠実な私には真実だけを書かせてくれ
そして私の詩を信じてくれ　私の愛する心は
天空に据えられた　あの黄金の蝋燭ほどには輝かなくとも
誰にも劣らず美しいものなのだから
評判を狙う詩人たちには　喋らせておくがよい
私の讃美は　君を売りものにするためではないのだから

140

親愛なる友人よ、あなたは見えていない
ここに私たちが見ているのは
私たちの目からは隠された
美の影のようなもの

友よ、あなたには聞えていない
様々な生活の雑事の中で、
天国の栄光のハーモニーからは
調子の外れた響き

友よ、あなたは知らない
世界でただ一つの真実を
一つの心からもう一つの心への
くちにすることのない愛の言葉

141

君の胸は貴く　そこには　いまはもう失い
亡くしたと思っていた心が　そっくり隠されている

そして愛が君臨し　数々の人に捧げられた愛の喜憂
かつて埋葬されたはずの友人たちも　みな揃っているのだ
どれほど私のこの眼から　聖なる哀悼の涙が
敬虔な追慕の思いで　盗み取られたことだろう
それは死者たちへの当然の手向けであったのに
いまはその者たちも君の中に居を移し　隠れ住んでいる
君は埋葬された愛が生きる墓
そこには　亡き者たちを思い出させる勝利の品々が飾られている
私の分身たちは　みな君のもの
多くの人たちに分け与えたものも　いまは君ひとりのもの
私が愛した人たちの姿を　いま君の中に見る
君こそ（あの人たちのすべて）そして私のすべては君のもの

142
過ぎ去った昔の年代記の中に
こよなく麗しい人々が描かれているのを見て
いまは亡き貴婦人や美しい騎士たちを称える　古い優雅な歌が
その美しい人々のおかげだと知るとき
彼らの手足　唇　眼　眉など
美しい人々の至上の美を描きながら
いにしえ人の筆が描こうとしたものは
いま君がまとっているような美だと　私は知る
だから　彼らの称讃はすべて
私たちの時代の予言にすぎず　すべてが君を予見するもの
だが　彼らは想像の眼でしか未来を読めず
君の真の価値を歌うだけの技量には欠けていたのだ
いま　この時代を見つめる私たちでさえ
眼の前にして感嘆こそすれ　称讃する舌を持たないのだから

143
優しいあなたの声を聞き私は目覚める
時という完全な場所に思考は従う
灰色の茂みから飛び立っていく鳩のように
緑の木々に止まり、天の仲間たちと共に歌っている
美しい木立から私は見ている

時間と時間が編み合わさっていく
部分は全体の中に巧みに組み込まれていく
それぞれは部分でもなければ全てでもないが、全体は調和する
その中に、コンマによって区切られたこの時代
年代を経て編纂された書物の膨大なページの中
私の静かな心は、それを拒絶したりはしない
時が記した難解な書物の意味が判っていく
でもまだ私はあなたの傍らで学び続ける
すべての時を知り、永遠を知るまで

144
あなたと話し合っていると、
すべてが楽しく、すべての時間も、　一日のすべての時刻も、
その移り変りも、忘れてしまいます。ああ、朝のそよ風のなんと
快いこと！　早くから鳴きだす鳥の歌声につれて明けそめる
朝のなんと快いこと！　いいえ、太陽がこの爽やかな大地に、
朝露にきらめく草や木や果物や花に、その輝く曙光をなげかける時の
あの楽しさ！　雨が静かに肥沃な大地を潤した時、そこから発する
香りのなんと馨しいこと！　穏やかで心持よい夕べが訪れ、ついで
静かな夜が、今も厳かに鳴いているこの夜啼鶯やこの美しい月や
これらの天上の宝石ともいえる煌めく星屑を伴なって訪れるのは、
なんと快いことでしょう！　でも、早くから鳴きだす鳥の歌声につれ
明けそめてゆく朝のそよ風も、爽やかな大地に光を投げかけ
ながら昇ってゆく太陽も、朝露にきらめく草や果物や花も、
雨のあとの馨しい香りも、穏やかで心持よい夕べも、この
厳かに鳴いている夜鳴鶯を伴なって訪れる静かな夜も、
また、月の光の下で、あるいは煌めく星の光の下での
そぞろ歩きも、あなたと一緒でなければ少しも楽しくは
ありません。それにしても、このような月や星はなぜ一晩中
輝いているのでしょう？眠りがすべての眼をとざしている時に、
誰のためにこの栄光に充ちた光景は示されているのでしょう？」

145
あなたは遠くへ行ってしまった
ポプラの木をこえて、夕日の沈む地平線へ

空高く流れる紫色の雲の向こうへ
大空の優しい場所へ

戻ってきて欲しい
河の流れを超えて、声を聴かせて欲しい
雨の降り続く遠い森から
軽やかな風がそれを止めてくれる
戻ってきて、銀色の花々の間から
大きく広がった雲に、さっと雲間ができ、
美しく天に輝く月が顔を出す
その光こそ、月の足音
その光の波が幾度となく降り注ぐ
緑白色の月に、
あなたの顔が重なる
色彩が消え、輝きが増す
そしてすっかり日が沈んでしまう
天から地上へと降りてくる
私のところへ戻って欲しい

146
君と離れて過ごした春は
彩りも華やかな四月が（装いを凝らし）
万物に生命の息吹を吹き込んだから
陰鬱なサトゥルヌスも笑い声を上げ　共に飛び回ったものだ
だが鳥の囀りや　とりどりの色香を放つ
甘い花の匂いにさえ
私は　楽しい夏の話をする気にはなれず
見事に咲きそろう花床から　花を摘む気にもなれなかった
百合の白さを褒め
薔薇の深紅に眼を凝らすこともなかった
これらはただのかぐわしい香り　喜びの絵姿にすぎず
すべての手本である君を元に描かれただけ
いまでも私には冬のようだ　君がいないのだから
私は君の影と戯れるように　花たちと戯れるほかはない

147

ヒロイズム、恍惚感、祈り、愛、情熱、そういったものが額から発せられ、光輪を作る。なぜなら、魂が解き放たれ、額を通り抜け、その周りに放射されるからだ。「美は、物質の精神的現象である」ちょうど、強力な電流のように、金属を光らせる。炎の色によって、燃素を発散し、生命や喜びをいっそう強くする。そして、凡庸な人間を眩しがらせる。

148

「昼」の光り輝く妹よ、
めざめよ！起きよ！　さあ行こう！
自然の森へ　野へ、
冬の雨が天をおおう葉かげを
うつしている池へ、
松がしおれたみどり葉と　太陽に
くちづけしたことのない幹にからまる
黒ずんだ蔦かずらを花輪に織りなすところへ、
芝生と牧草のあるところへ、
そして海べの砂丘へ――
融けゆく白い霜が
実をむすばぬ星形の雛菊や
まだ色にかおりを添えぬ
青白い弱々しい新しい年をかざる
アネモネや　スミレを濡らすところへ、
はるか東に　暗くぼんやりと
夜がのこされ、
青い白昼が天にひろがり、
大地と大洋の出会うあたり、
数知れぬ大波がわたしらの足もとにささやき、
あらゆるものが大いなる太陽のひかりのなかに
ただひとつに見える。

149

移ろい行く歳月に　喜びをもたらす者よ
君と別れていた間は　何と冬のようであったことか
どんなにか凍える思いをし　暗い日々だったことか
あたりは一面　老いた十二月の枯野のよう

だが君と別れていたこの期間は　実は夏の盛りだった
豊穣な秋は　豊かな実りを結び
浮気者の春の児を孕ませていた
まるで　夫を亡くした未亡人のように
しかし私には　この豊かな子孫も
孤児の定め　私生児となるしかないと思われた
夏とその快楽は　君に付き従うのだから
君がいなければ　鳥さえも黙り込んでしまうのだ
たとえ鳥が歌っても　沈んだ気分なら
木の葉は冬の訪れかと怯え　色褪せてしまうもの

150
一人の人間として存在していると感じる事は、どのような状況においても、私の唯一の心の支えである。この事が人間的なのか宗教的な事なのかは、あまり重要ではない。私たちは、最初はこのように、自分自身の存在をそれぞれの形や特性に応じて感じる。私たちはこの現実世界において、地上に存在する日常の物事を離れて、それらへの愛が減っていくのではなく、逆に、物事の中で強く生きることで、物事への愛をより強くするのである。世界は文字通り、私たちの全てである。私たちはこのような世界を作りたいと願い、今という時を生きる事を願う。なぜならそれが永遠だからである。

151
幸運の女神にも　世間の人々にも見放され
ただひとり私は　寄辺のない身を嘆き
徒に叫んでは　耳を貸さぬと天を悩ませ
おのれの身の上を振り返っては　運命を呪い
あの人のようにもっと豊かな将来があるなら
あの人のような顔立ちなら　そして友も多ければ
また　この人のような学識　あの人のような才能があればと
自らが最も誇れるものにさえ　満足ができない
だが　このような思いで我が身を蔑みはしても
君を思うと　私の心は
（夜明けと共に陰鬱な大地から飛び立つ
雲雀のように）天国の入口で讃歌を歌う
それは君の心優しい愛を思い出し　幸福になるから
たとえ王の身分とも　この身を替えたくはない

152
愛、彼らは誤解して
あなたの甘さを苦いと言う
瑞々しい果物よりも
このように甘いものなど、考えられないのに
喜びと幸せに満ち溢れた場所
本当の楽しみのある場所
私が求めているもの
私はあなたを知り
心をこめて
あなたを敬愛します

153
愛の苦しみそのものが甘美です。でも愛の報いは神々しい世界でしか得られません。もしその世界がこの世にないならば　愛は墓の彼方にそれを作り出すでしょう。

154
すべてが、あじきなく　うち壊れ、すべてが、疲れ果て　老いすがれた。
路ばたの子どもたちのさけび、鈍重にうごきゆく車の軋み、
冬の土くれを跳ねかえしてゆく農夫たちのおもい足どり、
わが胸の奥に　薔薇を華さかす　汝の幻像を毀つ。

形醜きものどもは、おぞましく　語るに堪えぬ禍ごとだ。
願わくは　それらを新たに造りなし　緑の丘に坐りたいもの、――
わが胸の深奥のうちに　薔薇を華さかす汝の幻像の夢を秘めた
黄金の玉手函の如くに　地と水と空を作り変えて。

155
あの甘美で静かなる思いの法廷へ
過ぎ去った数々の思い出を召喚してみれば
何ひとつ求めても得られなかったことに　溜め息がもれ
かつての悲哀と共に　私の貴重なときが浪費されたことを新たに嘆く
そして　死の果てしない夜の中に姿を消した大切な友を思い
（いつもは流すこともない）涙で瞳をぬらし
とうの昔に帳消しになった愛の悲しみを思い出しては新たな涙を流し

いまは亡き多くの友人たちの損失を嘆く
また　過ぎ去ったはずの痛恨を嘆き
重い心で　苦しみのひとつひとつを数え上げ
すでに嘆いた悲しみの勘定書の清算をして
まるで未払いとでもいうように　新たに負債を払う
しかし（愛する友よ）君を思えば
すべての損失は償われ　悲しみは終わるのだ

156
音楽は柔かな声々が消えたあとにも、
追憶の中に響きふるえる、
芳香は優しい菫が凋んだのちも、
掻きたてた感覚の中に生命を保つ。

薔薇の花は、薔薇の木が朽ち倒れても、
地につもっては愛するものに臥床を作る、
そのように君はよし立ち去られても、君の想いに、
愛自らは甘い眠りを見出そうもの。

157
私たち一人一人の、その上に存在するもの
力強い魂、私たちの主
全ての人間たちの声が聴こえる
何千もの歌声が聴こえる
一つの魂は一つの命に、一つの命は一つの魂に
それら魂の年令は、一人一人さまざま
一人一人は死んだとしても、聖なる魂の全体は
永遠に生き続ける
長い年月を経る中で
人間性は時をも死をも越えていく
人間は、宇宙全体へと広がる
生命の始まりは、一人一人が生まれた時ではない
人間全体の栄光は今も広がり続けている
死の砂粒のようなものが、その杯を満たしてしまわぬ限り

158

暗い夢が外の世界から飛び込んでくる
私たちには誰も判らない言葉を話す世界から
ぐっすり眠っている私たちの傍らを
私たちの休息を台無しにはしないけれど
黙って通り抜けていく
静かな夜に飛ぶ夜鷹のように
見晴らしのよい松林を抜けて
闇の中を行きかう
青い風音だけを残して

昨晩の夢が頭を離れない
幾度となく、突然に、静かに
眠る私の上を影が飛んで過ぎて行った
でも影は素早く、私は見る事が出来なかった
私に関わる事ではないのに
幾度となく、私の上を通り過ぎ
謎から謎へと
私はその謎の合間に眠る
以前にも、昨晩にも

だから私は二回、静かな影が飛ぶのを見た
二度、私の眠りが通り道となり
暗い言葉が伝えられていった
ある人からある人へ、隠された権力
暗闇の中に横たわっている
そして人間の心の中までにも
私の眠りだけがその渡り橋となる
現実の世界と暗闇の世界をつなぐ

もし三度目があるのなら
見知らぬものが、非礼な態度で、始まりの場所から
運命の場所へと
私にそれを、容易な事のように
時の山裾を通り抜け、暗闇の世界へと

私たちの現実の世界の両方へ
私の魂はそれを追いかけようとし、
魂は眠りの世界から抜け出した
でもその仕事が終わってしまうと
私は蛾の羽ばたくスピードで
そしてまた、白いフクロウや褐色の夜鷹よりも
静かに飛ぶように
つばさの端にそっと降り立ち
雪が積もったその上に
吹き抜ける風が音を立てる
私はその影を見て
私が求めた以上の目印となる
人々の感嘆のため息に気づく

159
ひとつぶの砂にも世界を
いちりんの野の花にも天国を見
きみのたなごころに無限を
そしてひとときのうちに永遠をとらえる

160
私はやがて死すべき、つかの間の存在である
しかし夜に天に輝く星々を見上げると
私は地上に立っている事を忘れ、創造主に触れ
私の精神が不死で満たされるのを感じる

161
大きさということについては、たとえば、アレクサンドロス大王が、大軍とアジアの広大な地域の大征服に馴れたあと、ギリシアから、いろいろ手紙を受け取ったことがあった。それは、その方面のいくつかの交戦や戦闘に関するものであって、ふつうは渡河とか要塞とか、せいぜい域壁をめぐらした都市などを相手とするものであった。そこで彼は、「昔話にいってあるような、蛙だの二十日鼠だのの戦争のことを報されるみたいだ」と いった。だから、たしかに、人が自然の普遍的な機構を、よく考えてみるなら、人間の住んでいる地球は〔魂の神性は別として〕、蟻塚くらいのものにしか見えないことであるだろう。そこでは、小麦を運ぶ蟻もある。子どもをつれているのもある。手ぶらで歩いているものもある。みんな、塵の小さな山のところを、行ったり来たりしているようなものである。

162
でも、後ろから聞えてくるのはいつも
凄い勢いで進む、時の翼を持つ馬車
私たちの目前に広がるのは
広大な、永遠という名の砂漠

163
この無限の空間の永遠の沈黙は私を恐怖させる。

164
科学が私たちを導き、仮説の世界へと連れて行く。そこは人間の精神の住めるような街ではない。

165
なお、もし誰かが自然にその制作の目的を問い、自然が問い手に耳を傾けて答える気になったとしたら、おそらく次のように言うだろう。
「私にそんなことを尋ねるべきではありませんでした。私が目を開ざしていつも黙っているように、あなた自身も黙って理解しなければならなかったのです。では、何を理解すればよかったのでしょうか。それは、次のことなのです。すなわち（この自然界に）生じているものはすべて私が黙って観たものであり、私の本性にしたがって生じた観照の対象であるということや、この種の観照から生まれた私が観照好きであることを本性としているということなどが、それなのです。そして、ちょうど幾何学者たちが（知性界の形を）観ながら図形を描くように、私の観る働きは観照の対象を作るのです。しかし、私は図形を描くのではありません。私が観照している時に、私の観照の働きからいわばこぼれ落ちるようにして、物体の線（や形）が生まれてくるのです。なお、私の母や私を生んだ者たちの身に起こったことが、私にも起こっているのです。つまり、私の母や私を生んだ者たちも（彼らより上位のもの）観照から生まれたのですし、私の誕生も（同じように、自分より上位のものとしての）彼らに負うているのでして、彼らが何らかの行為をしたからではなく、（私より）大いなるロゴスである彼らが自分自身を観照している時に、わたしが生まれたのです」と。
では、これらのことばは、われわれに何を語ろうとしているのだろうか。それは、次のことである。すなわち、「自然と呼ばれているものは実は魂であって、自分より上位の強い生命力をもった魂から生まれたものなのである。そして、自然は自己自身のなかで静かに観照を行なうのであって、その観照は上位のものに向けられるのでもなければ、また逆に下位のものに向けられるのでもない。すなわち、自然は自らのある（べき）ところにとどまり、自己を静かな状態に保って、いわば自己自身を知覚しているのであって、この意識つまり自己知覚によって自分につづくものを自分に可能な範囲内で知り、もはや他のものを求めないで、美しく輝きに満ちた観ものを産出した」ということなのである。

なお、もし人が自然に或る種の理解もしくは知覚を認めようとしても、それは、われわれが他の生きもののばあいに知覚もしくは理解と呼んでいるものと同じではないのであって、むしろぐっすり眠りこんでいる人の感覚もしくは理解を、目ざめている人のそれに比べたばあいのようなものであろう。なぜなら、自然は自分のなかに現われてきた自分の観もの、（としての自己自身）を観照しながら、（眠っているように）静かにとどまっているからである。

166

たとえあなたが私たちを軽蔑していないとしても、あなたはじっとしたまま
私たちの声にあなたは沈黙を保っている
少なくともある部分で、私たちが求めるものをあなたは与えた
この罪に満ちた世界で、あなたは私たちを引きつける
あなたは墓石となって、高貴な目的を指し示す
私たちに誤りを教え
私たちに永遠に変わらないものを一目だけ見せてくれる
夏の夜に現れた一筋の光
太陽の下にあっては、全てのものは、光と影からなる
その中に私たちはあなたを呼び起こす
あなたはそこに寺院を築き、教義を示す
私たちの信仰のために

167

神は自然の中に存在するが、自然が神そのものではない。自然は神の中に存在するが、やはり、自然は神そのものではない。

168

確かに自然は不公平で、謙虚さも誠実さも信念もない。自然は、無償の好意と野蛮な悪意を知るのみである。不公平を不公平で補うのみである。ほんのわずかな幸福が、膨大な数の不幸の中に、飲み込まれてしまう。
このような盲目的な自然の力に対して、詮索してみたところで仕方が無い。私たちに必要なのは、宇宙の存在ではなくて、公正である事である。無神論はこの点において、人間の意識が必ず存在する事を説明している。自然は公正ではない。私たち人間は、自然の産物だ。それならば私たちは、自分の存在を、今後も公正な存在であると言えるだろうか。結果が原因を補正するという事があるだろうか。現象は一つなのだ。
この要求は、人間の子供じみた盲目性から来る物であろうか？いや、これは私たち人間という存在が、根本的に持っている嘆きである。
人類の教義はこのようになる。自然はいつの日か、精神によって克服されるだろう。永遠はいつの日か、時

間によって説明されるだろう。

169

か弱い精神、大した力もなく、多くの困難に直面し、内に秘めた情熱は現実にそぐわず、矛盾を孕み卑俗なものに囲まれ、卑俗な場所へと落ち込み、互いの無事を祈る事しか出来ない。それも一つの運命であるとか、単に卑俗なだけであるなどと言う事ができるだろうか。彼らをじっと観察すると、低俗さの影に、別の何かが見えてくる。短い人生の中で、善と悪を議論し合い、神に仕えようとする。神の心の深淵に触れ、そこに使命感を見出す。隣人に対して、神に対して、自負心を持つ。いざという時には誠実さを発揮し、恥ずかしくない行動を選び、主張を曲げようとしない。置かれた状況によらず、身分によらず、無知の度合いによらず、誤った道徳を背負い込んでいる。アシニボイン河の畔でキャンプの炎を囲む。その肩に雪が降り積もり始める。肩掛けは風に飛ばされそうになる。座って儀礼のパイプを回して行き、ローマの上院議員のような憂いを述べる。航海の船の上で、船員は、毎日の困難や退屈な楽しみに慣れていく。街の雑踏を、無関心な工場の労働者が足早に通り過ぎていく。無学な者も、泥棒も、その仲間も、ここでは小さな地位を築き、他人への情を示す。社会からの軽蔑に対しても、奉仕を持って報いる。確かな倫理観に基づいて行動する富裕層を、認めようとしない。あらゆる場所で、徳、思想の誠実さ、内に秘めた善良さが尊重される。ああ、この事をあなた方に伝えられたら！世界中で、このような人々が、あらゆる歴史のページの中で、全ての過ち、全ての失敗の中で、希望も助力もなく、感謝される事も無い状況の中で、道徳を失うまいとする戦いの中で、売春宿で、工事の現場で、ぼろ布のような名誉や、安物の宝石のような魂を守ろうとし、逃げ出そうにも逃げ出す事が出来ない。権利や名誉のためではない。そういう運命なのである。善良であり続けるしかないのだ。生きている限り、善を求め続け、決して屈しようとしない狩人たちなのだ。

170

わたしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。
神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。
わたしは知っている。人にはその生きながらえている間、楽しく愉快に過ごすよりほかに良い事はない。
またすべての人が食い飲みし、そのすべての労苦によって楽しみを得ることは神の賜物である。
わたしは知っている。すべて神がなさる事は永遠に変ることがなく、これに加えることも、これから取ることもできない。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れをもつようになるためである。

171

毎夜、毎朝
悲しい運命を背負って生まれてくる者がいる
毎朝、毎夜
美しい喜びの中へ生まれてくる者がいる

美しい喜びの中へ生まれてくる者がいる
終わりのない夜へ生まれてくる者がいる
喜びと悲しみは、美しい布に織り込まれている
神聖な精神のための衣となる
悲しみ、困窮の元で
喜びの絹を持って走る
そうしなければならない
人は喜びと悲しみを持って生きるのだから
この事を心に刻んでおくならば
この世界で生きていく事ができるだろう

172
私たちは、生きることの困難さに対しての償いを、自分自身や人類全体、存在する何かに求めるのではなく、それを神に求めるべきである。なぜならば、悪の原因は私たちにあるのではなく、根源においては、神の啓示、審判、栄光にこそ原因があるからだ。私たちは、そこに原因を求め、自らは許されても良いはずだ。そう考えれば、すべての出来事は、偶然の結果でもなく、自然の原理でもなく、人類に従属する何かではない、必要で、不可避で、正しくて、神聖なものだと言える。神ではなく、私たちに原因があるというのは逆で、私たちではなく、神に原因がある。神意、啓示に存する真の源であり、それなくしては何も起こらない。ただ神のみに拠り、その指示に従う。私たちは神の行いを静かに尊重する。神の啓示を喜び、神意に賛同する。神と共にあり、受容され、神のために生きることを望む。神が私たちの中に、私たちに対して、永遠に求め続けるものを、私たちは望む。

173
宇宙よ、おまえによく調和したものはすべて、私によく調和する。すべておまえにとって好機たるものは、私に早すぎもせず、遅すぎもしない。自然よ、おまえの季がもたらすものは例外なく、私にとって実りである。すべては、おまえより出で、おまえのうちに在り、おまえのなかに帰す。かの人曰く、「愛するケクロプスの都よ」と。しかし、きみよ、きみは、「愛するゼウスの都よ」とこそいわないのか。

174
ばらばらだった存在が調和に至る。それは、秩序を持ち、神聖でかつ明晰な考えが、花や太陽のような形で顕在化したものである。その調和は、外部の何かを求める事なく、自分自身の内に完結している。その調和は、秩序、法則、真理が表現されたものである。時間の上位の概念であり、永遠性を表す。美、量、善において、実行した事、実行可能な全ての事について、人間は、何かもっと上位の存在に対しての、下部組織、あるいは道具のようなものでしかないと、強く感じる。宗教とは、このような考え方の事である。それは例えば、人間が生来の区別を超えて互いに認め合うとか、一人の作者の戯曲が、劇場で上演されるとか、その

ような時において、宗教心のある人間は、神聖な喜びでの感動に賛同する。

175
世界は真理で形作られた街
その道路は迷路のように入り組んでいて
人々の好奇心を捕らえてしまう

176
そして夜も昼も　高い塔や　テラスから見た
大地と海は　抱き合って眠り　波と花　雲と森と岩を　そして　われわれが
彼らの微笑に表われていると考える真実すべてを　夢見ているように思われました。

177
長いあいだ　都会に閉じ込められた者にとって、
天の晴れやかな顔を見つめ、――その青空の微笑を
いっぱいに受けて　祈りのことばを
あげることは　こよなく楽しい。

疲れても　心は満ち足り、
波打つ青草の　楽しい寝床に身を沈め、
恋とその悩みの　愉しくも優雅な物語を読むときほど
幸せなことがあろうか。

夕べには　小夜啼鳥のうた声を耳にし、――
流れゆく　ちいさな輝く雲のあとを

目で追いながら　家路をたどりつつ、
その日が　あまりにも早く過ぎ去ったのを嘆き、

悲しく思うのだ。澄明な空気のなかに静かに落ちる
天使の涙のように　その日が早く落ちてしまったのを。

178
菩提樹の明るい枝に
病弱な鹿笛の音は息絶える。

しかし意力のある歌は
すぐりの中を舞ひめぐる。
血が血管で微笑めば、
葡萄の木と木は絡まり合ふ。
空は天使と美しく、
空と波とは聖体拝受。
外出だ！光線が辛いくらゐなら、
苔の上にてへたばらう。

やれ忍耐だの退届だのと、
芸もない話ぢやないか！…チェツ、苦労とよ。
ドラマチックな夏こそは
『運』の車にこの俺を、縛つてくれるでこそよろし、
自然よ、おまへの手にかゝり、
――ちつとはましに賑やかに、死にたいものだ！
ところで羊飼さへが、大方は
浮世の苦労で死ぬるとは、可笑しなこつた。

季節々々がこの俺を使ひ減らしてくれゝばいい。
自然よ、此の身はおまへに返す、
これな渇きも空腹も。
お気に召したら、食はせろよ、飲ませろよ。
俺は何にも惑ひはしない。
御先祖様や日輪様にはお笑草でもあらうけど、
俺は何にも笑ひたかない
たゞこの不運に屈托だけはないやうに！

179
羊飼いのうらやましい身の上の　なんという楽しさ！
朝から日暮れまで　気の向くままに歩きまわる
日がな一日　羊のあとを追い
口から出るのは　いつもいつも神への讃美

羊飼いが聞くのは　母呼ぶ仔羊のあどけない声
それに答える母羊の　柔らかなやさしい声

羊たちが平和でいられるのも　羊飼いが見張っているから
羊たちは　近くに羊飼いがいるのをちゃんと知っている

180
あなたは貧しくてもぐっすり眠っているのか？
素晴らしい充足
あなたは裕福であるのに、心は困惑しているのか？
それは自業自得
愚か者がイライラしているのをみて笑う
金の数字に金の数字を加える
素晴らしい充足
一生懸命働き続ける
誠実な働き者の表情は笑顔
それそれ、そのことだ

干上がりそうな泉で喉を潤す
素晴らしい充足
財産の海で泳ごうとして、涙の中で溺れる
それは自業自得
文句も言わず、重荷を背負おうとする
その時、荷物運び人は王様のよう
素晴らしい充足
一生懸命働き続ける
誠実な働き者の表情は笑顔
それそれ、そのことだ

181
　内面を掘り下げよ。泉は心内にある。―― おまえがたえず掘り下げるなら、つねに迸り出る力をもち、かつ善の源をなす泉が……。

182
入らないで、その花園には入らないで
友よ、そちらには行かないで
花園はあなたの体の中にある
見渡す限り咲いた睡蓮の花弁に腰を下ろして

永遠の美に見とれていましょう

183
小鳥が木という木にさえずつている
夏の朝　起きるのが　ぼくは大好き
遠くにいる狩りうどは　角笛鳴らし
ひばりは　ぼくと一緒に　歌をうたう
おお！　なんと楽しい仲間

184
さては、雲雀が飛びたって、中空の、
その望楼からさえずるのを聞くためだ。
消えなずむ夜が、その声にびっくりして、
やがて、雲まだらな暁がたちのぼる。
そのとき、悲しみをないがしろに、
起きいでて、窓辺でお早うをいい、
野ばらや、蔦や、からみもつれる
すいかずらのなかを、通って行く。
その間に雄鶏が、陽気にとどろく音響で、
うすら闇の最後部隊を、追いちらし、
麦束塚か、あるいは納屋の戸の方へ、
昂然と、雌鶏の前をそりかえって歩く。
さてはしばしば、猟犬や角笛が景気よく、
寝しずまった朝をめざますのが、聞こえる。
白っぽいどこかの丘の斜面から、そこの
高みの森をわたって、甲だかく木魂する。
ときには、人目につかぬ微行でなくて、
生垣の楡にそって、緑の小丘を歩き、
東天の門へまっすぐに向って行くと、
そこでは、巨大な太陽が燃える火炎と、
琉珀の光をまとって、堂堂と乗りだし、
むら雲に、多彩な衣を、着かざらせる。
と同時に、そばちかくの農夫が、
耕やした畑ごしに、口笛をふき、
乳しぼり女は、ほがらかに歌い、

草刈夫は、草刈り鎌をとぎ、
谷間の、さんざしの木蔭では、
羊飼らがみな、恋の身の上ばなし。

185
この愛は単純な愛情以上のもの
草地となった廃墟を通り抜け
怒りの震えを翼の羽ばたきに変え
枝から枝へと飛び移り
ごろつきたちに怒りを示す
野いちごやとげのある枝に巣をかける者もいる
メラムプースは自然を愛した
学者が本を読むように、野山を愛でて歩いた

彼にとって野山は自宅のようなもの
草木や花が彼の財産
誰よりも自然の秘密を知っている
大地と命とのつながりを探し求めている
私たちと、私たちとは異なるものとの繋がり
繋がったそれぞれの間を流れる血液
彼らの中に、私たちの中に、人間には手の届かない源から
秘密の森の中に見出した生命のしるしを守る

186
寒く退屈な
冬の日々が過ぎ
喜ばしい季節がやって来た
甘美な春

大地には草木の香り
花をつけた草木
木々は再び緑の葉を出し
森の中は涼しい木陰になる

美しい朝が来て

乙女が暖かな日の中へ
咲いたばかりのバラ
その芳しい花を摘む

何よりも美しい
胸元を飾り
友人のため
その手を差し出す

その手が差し出したのは
愛の思い出
見失ってはいけない
一日に千回もの口づけ

海は穏やかに凪いでいる
空は清らかに晴れている
インドまでも続く教会の回廊のよう
良い風が吹き渡っていく

巣の世話をする蜜蜂
あちらこちらの瑞々しい果物
花の周りを飛び回る
甘い蜜を作るために

巣箱に蜜が蓄えられる
甘い花の蜜
蜜蜂たちが働くのは
この甘い蜜のため

澄んだ歌声が聞える
あらゆる鳥たちの声
ヒバリの歌から
湖上の白鳥まで

ツバメの作った巣

森の中のナイティンゲール
初々しくも元気な歌を
その美しい声で聞かせてくれる

歌を歌うのに
理由は必要ない
全てが生まれ変わる
美しい季節ではないか

187
無数の雨のしずく、空を満たす霧が
地上の緑と青い空を覆っている
しかし、春の息吹が近づいて来ている事を感じる
情熱的なフィロメラの美しいフルートの音色が聞こえる

188
春、美しい春、喜ばしい季節の王様
すべての物が花開き、輪になって踊る
冷たいものも痛くはない、可愛い小鳥のさえずり
カッコー、チュンチュン、ピーピー、ホーホー

手に摘んだ花々が、田舎の家を明るくする
羊たちは、遊んで走り回る、羊飼いは、一日中音楽を奏でている
鳥たちが楽しそうに歌っているのが聞える
カッコー、チュンチュン、ピーピー、ホーホー

野に広がる芳しい空気、歩くとデイジーが足にキスをする
若い恋人たちの逢引、おばあさんは日向ぼっこ
全ての美しいメロディーに耳を傾ける
カッコー、チュンチュン、ピーピー、ホーホー
春、美しい春！

189
耳を澄ましてお聞きなさい、東の空のヒバリの歌
日の神フィーバスが昇って来る、

二輪戦車を引く馬たちは
花の杯から朝露を飲む。
マリゴールドも金色の目をあける、
きれいなものは何もかも起きる、お姫様も起きなさい！

190
時がマントを脱がせる
風と寒さと雨をしのぐマントを取ると
刺繍の入った服を着ている
明るく美しく、輝く太陽の下で

動物たち、鳥たちはいなかった
何と言って歌い、鳴いているのか
時がマントを脱がせる

河も泉も小川も
生き生きとした喜びで
銀の飾りを取り外し
新しい服に着替える
時がマントを脱がせるのだ

191
惚れた二人が手をつなぎ
それ、ヘイ、ホー、ヘイ、ノニノー
歩いて行くよ、麦畑
春たけなわ、ものみな番う時
小鳥も歌う、ヘイ、ディンガディンディン
恋人たちは春が好き

ライ麦畑のあぜ道に
それ、ヘイ、ホー、ヘイ、ノニノー
寝転んだかわいい二人
春たけなわ、ものみな番う時
小鳥も歌う、ヘイ、ディンガディンディン
恋人たちは春が好き

そこで二人は歌いだす
それ、ヘイ、ホー、ヘイ、ノニノー
花の命のはかなさを
春たけなわ、ものみな番う時
小鳥も歌う、ヘイ、ディンガディンディン
恋人たちは春が好き

いまこの時を大切に
それ、ヘイ、ホー、ヘイ、ノニノー
恋の花咲くこの季節
春たけなわ、ものみな番う時
小鳥も歌う、ヘイ、ディンガディンディン
恋人たちは春が好き

192
水辺の木々の間を急ぐ
男は慎重な足取りで、女はため息をつく
水面に写った二人の姿は
誰でもない愛し合う二人

銀の靴音が聞えるか
空から降りた青白い高貴な女王
太陽の金の覆いの下から少し覗く
誰でもない愛し合う二人

朽ち果てた森の中を急ぐ
恋人たちみなに呼びかける
私に与えられた金の髪
互いに初めて愛し合う二人

193
初々しい若者たち
新しい季節に
どこへ行くのではないけれど

弾むように一緒に歩いていく

差し出した宝石は
燃える石炭のよう
初々しい若者たち
新しい季節

彼らの仕事かどうか
働き者かどうか知らないが
彼らの馬に
拍車をかける
初々しい若き恋人たち

194
おお聖きをとめ、白妙の浄衣をまとひ、
大空の金門あけて、つと出でよ。
さませかし、みそらに睡るあけぼのを。ひんがしの
空より光のぼらしめ、あかときの
うまき蜜露をいざここへ。
おお光まばゆき朝よ、狩猟に行く
さつをの如くきほひたる日を迎へ、具足にかためし
足ふみしめ、われらが丘の上に現はれよ。

195
四月がそのやさしきにわか雨を
三月の旱魃の根にまで滲みとおらせ、
樹液の管ひとつひとつをしつとりと
ひたし潤し花も綻びはじめるころ、
西風もまたその香しきそよ風にて
雑木林や木立の柔らかき新芽に息吹をそそぎ、
若き太陽が白羊宮の中へその行路の半ばを急ぎ行き、
小鳥たちは美わしき調べをかなで
夜を通して眼をあけたるままに眠るころ、
―― かくも自然は小鳥たちの心をゆさぶる――
ちょうどそのころ、人々は巡礼に出かけんと願い、

196
ああ、どこをさまよう、恋人よ？
ああ、歩みを止めて聞いてくれ
一途な心の恋の歌。
行かないで、振り向いて、
旅の終わりはこの腕の中
いま再度の巡り合い。

恋に明日があるものか。
今日こそ歓び、今日こそ笑い、
先のことなど分からない。
明日を待っても甲斐はない。
恋人よ、今すぐ甘い口づけを
若さははかなく消えるもの。

197
緑なす森の木陰
共に身を横たえ
小鳥の歌に声を合わせ
楽しいときを愛する者よ

来たれ、来たれ、ここへ
集え、友よ
敵はただ
冬空の木枯らし。

高みを目指す欲を捨て
求めるものは日々の糧
得たものに歓びを知る
のどかな暮らしを愛する者よ

来たれ、来たれ、ここへ
集え、友よ
敵はただ

冬空の木枯らし。

198

吹けよ、吹け、冬の風
お前の心はあたたかい
恩を知らない人よりも。
目には見えない冬の風
お前の牙は痛くない
吐く息は厳しいけれど。
ヘイホー、歌え、ヘイホー
緑のヒイラギを称えよう、
友情は見かけ倒し
恋は愚かな気の迷い。
ヘイホー、歌え、ヒイラギに、
森の暮らしの楽しさよ

凍れよ、凍れ、冬の空
お前は心を噛みはしない
恵みを忘れる人よりも。
川の面はこごえても
お前の棘は痛くない
仲間を忘れる友よりも。
ヘイホー、歌え、ヘイホー
緑のヒイラギを称えよう、
友情は見かけ倒し
恋は愚かな気の迷い。
ヘイホー、歌え、ヒイラギに、
森の暮らしの楽しさよ。

199

ひねくれた年寄りと若者は
一緒には暮らせない
若者は楽しい事ばかり
年寄りは世話の焼ける事ばかり
若者は爽やかな朝

年寄りは凍てつく冬の空
若者は夏の華やかさ
年寄りは冬のみすぼらしさ
若者は生き生きとしている
年寄りは息が切れている
若者は自由、年寄りは不自由
若者は熱く大胆
年寄りは弱く冷淡
若者は気力があるが、年寄りは無気力
ご年配、どうぞお達者で
若者よ、がんばりたまえ
その若さが愛おしい
年寄りなんて放っておけ
美しい羊飼いよ急ぎなさい
少しのんびりしすぎた

200
浪費家に気に入られるのは都合の悪いこと
年金生活者が私たちの取り分を見ている
人間よ、若き日々は輝いている
若いときには気がつかないが、年齢はそれを奪っていく

201
四季は一年の目盛を満たす。
人の心にも　四季はある、
晴れやかな空想が　安易にすべての美を
受け容れるとき、人には　心たのしい春がある。

人が　若き春の日の　甘美な追憶を
しみじみと味わうことを好み、
そんなすばらしい夢によって　天国に最も近づくとき、
人には　夏がある。人が　心の羽根を

すっかりたたみ、怠惰のなかで
霧を眺め―― また　家のわきを流れる小川のように

美わしいものを　こっそりと通り過ぎさせることに
甘んじるとき、その心には　静かな入江の秋がある。

人には　蒼ざめ歪んだ相の　冬もある、
さもないと　人は　その生来の性を捨てようとするだろう。

202
泉よ、牧場よ、丘よ、森よ、
自然との愛が裂かれるなど不吉な予感は捨てよう。
わたしは心の奥底で自然の力を感ずる。
わたしは一つの歓びを失ったが
より恒常的な自然の支配のもとで生きる。
わたしは幾筋ものせわしく流れ下る小川を愛す、
小川のように足どりも軽やかだった昔にもまして。
新たな朝の日の無垢な輝きは
端々しい。
落日のまわりに群がる雲に
落ち着いた色合いを読み取る眼は
人の死を見つめた眼。
人生の大人の歩みを経て新たな報償が得られる。
生きるよすがとなる人の心のお蔭により、
人の心の優しさや、歓びや、恐怖のお蔭により、
わたしにはつつましく開く花でさえしばしば
涙よりも深く底知れぬ感動をもたらす。

203
隣り合う街に住む二人の少年
草原でじゃれ合って遊んでいる
二人の旅人、フェスティバルの夜に会う
二人の恋人、果樹園の囲いに隠れてささやき合う
二つの命が結ばれ、黄金の安らぎを得る
二つの墓石が教会の緑の庭に並んでいる
降り続く雨が墓石と周りの花を濡らす
二人の赤子がこの小さな村に生まれた
時から時へと命というものは繋がって行く

204

若者たちよ
愛は若さの中に育まれ
虚栄心を捨てて戻ってくる
心のときめきが表情を明るくする
神の心も同じように
人々を晴れやかにする
この世界に花の盛りが訪れる
愛しき人を愛す
十字架の上で人々の魂を清め
死から復活し、天に座る
人々を欺く事など決してない
彼の心は世界に広がる
この穏やかな人こそ愛すべき人
他を愛する振りなど必要だろうか？

205

お前は萌えでた草の緑で若々しかつた。
お前はいろんな花であふれてゐた。
乙女たちがうら若い日の数刻を
遊び暮らした散歩みちの牧の野よ。

みごとな黄花の九輪草に脣をふれ
それらを摘んで家づとにしようと、
乙女たちは花がたみを手に持つて
お前の所までいそいそとやつて来た。

彼女らはお前にむかつて美しい声で歌ひ、
お前のひろい膝のうへで輪踊りを踊つた。
すひかづらの冠をかしらにいただいて
乙女の一人一人が春の女神のやうに見えた。

しかし今では乙女たちの姿は見当らない。
まばゆいほどに白いその足が草を踏み、

そよ風になびかせた彼女らの髪の毛は
なめらかな若ぐさの野を飾つてゐたものを。

お前は今、自分の貯へを使ひはたして
手もと不如意の濫費家さんと同じこと、
さびしく此処にとりのこされて
草茫々のわが身の果てを嘆いてゐる。

206
わが絹ごろも、晴衣、
わがほほゑみも、ものうさも
恋にやらはれ、あともなし。
なげきやつれし絶望は
墓に水松を植ゑよとか。
まことの恋もはかなしや。

木の芽も春の大空に、
似てうるはしきかんばせを、
なにゆゑ君は持ちたまふ、
こころは冬とつめたきに。
君が胸こそ恋の墓、
恋の道者のはての宿。

われにもてこよ、鶴嘴と、
経唯子の白き布。
われわが墓を掘らむとき、
風よ、嵐よ、吹きまくれ。
冷上のごとくわれ在らむ。
まことの恋も消えてあとなし。

207
ぼくは人生というものを多くの部屋をもつ大邸宅に譬える。それらの部屋のうちぼくにはまだ二つしか説明することができない、残りの部屋のドアはまだぼくには閉ざされているのだ――最初入っていく部屋は幼児の部屋または無思想の部屋と呼ぶことにしよう。考えるということをしないかぎりはこの部屋にとどまるのだ―― この部屋にとどまる期間は長く、しかも二番めの部屋のドアが開け放しにされていて中の眩ゆい様

子が見えるのに、我々は急いで入って行こうとはしない。しかし結局は我々の内部に考えるという人間としての本然の性能が目覚めることによって、自分でも気づかぬうちに入らざるをえないのだが――第二の部屋に入るやいなやその光と雰囲気に陶然としてしまって、快い驚異しか目に留めず、永久にこの楽しさのうちに居残ることを考える。この部屋を処女思想の部屋と呼ぶことにしよう。だが、この部屋での生活から生じるいくつかの効果の一つとして、人間の心と本性に対する洞察力を鋭くすると、いう恐しい効果があるのだ―― この世の中というものが悲惨さ、傷心、苦痛、病気それに圧迫に充ち満ちているものだということを人の神経に確信させる効果だ―― これで処女思想の部屋は徐々に暗くなり、同時に部屋の四方の多くのドアが開かれる――が、それはすべて暗い―すべてのドアは暗い通路に通じている――善と悪の比較も定かではない。五里霧中の状態で――ぼくたちは現在その状態にいるのだ――「神秘の重荷」を感じているわけだ。

208

どこで生まれる、気まぐれな恋、
心の中か、頭の中か？
どうして生まれ、育つのか？
答えておくれ、答えておくれ。

気まぐれな恋、目に生まれ、
見つめて育ち、幼いままに　揺り籠の中で死んで行く。
気まぐれな恋、弔うために
鐘を鳴らそう、ディンドン、ベル。
ディンドン、ベル。

209

とどまって　考えよ。人生は　たつた一日。
木の梢から　危なげに落ちかかつている
砕けやすい露の玉だ。あるいは　モントモレンシの
絶壁の滝つぼに突進する　小舟のなかの哀れなインディアンの
仮の眠りだ。なぜそんなに　悲しく嘆くのか。
人生は　まだ咲かない　薔薇の花の希望である。
また　常に変化する物語を読むことだ。
少女のヴエールを　軽やかにめくり上げることだ。
清らかな夏の空を　飛びまわる白鳩だ。
悲しみや不安もなく、楡のよくしなる枝に
またがって　笑いさざめく学童だ。

210
手ずからに　花束編みて
わがおくる　いまこの花は
盛りなり。今宵摘まずば
散りしかん、あすははかなく。

忘れたまうな、身にしめて、
花の盛りのきみが美も、
しばしを待たで　色槌せて、
たちまち失せん、花のごと。

時はゆく、時はゆく、ああ！
いな、過ぎゆくはわれらかな、
とく埋もれん、墓の下。

ときめく恋も　亡きあとは、
語らうひとのなきものを、
愛したまえよ、花のきみ。

211
柳の木の葉の色が
黄色に変わっていく
川の流れの上に枝を垂らす
枝葉の衣が
赤く色を変える
青緑の輝きがくすんで行く

アザミの花が並んで咲いている
その葉や茎がくすんで行く
花びらを落として、白髪のようになり
茎だけが残った
リネットの歌は聞こえなくなった
その代わりに、コマドリが歌っている

212

時を告げる時計の音を指折り数えて
輝かしい昼が　忌わしい夜の闇の中に沈むのを見るとき
菫の花がその盛りを過ぎ
黒髪が白銀に変わるのを見るとき
かつては家畜の群れを暑さから守り
聳えていた木々の天蓋が　すっかり葉を落とすのを見るとき
束ねられた夏の緑が
白く逆立つ髭をつけ　棺桶に運ばれて行くのを見るとき
そのときこそ　私は君の美に思いを馳せる
君もまた　時の荒廃の中を生きて行くのか
麗しいものも　やがては衰え
ほかのものが成長するその同じ早さで　死んで逝くのか
「時」が君を連れ去るとき
大鎌に立ち向かうのは　子孫だけなのかと

213

十二月が終わろうとする夜、精霊が現れる
黄色に枯れた木々の下で
自らに話しかける
夕暮れ、耳を傾ける
すすり泣き、ため息をつくのが聞えるだろう
地へと首をたれ
歩いて行く
枯れていく花々を見つめる
大きなヒマワリも首をたれ
冷たい土の上の墓石を見つめている
葵の花も
ユリの花も

214

古代の国からやって来た旅人に会った　その語ることには
砂漠に　巨大な胴のない　石の脚が二本
立っている……その近くに　こわれた顔が
半ば砂に埋もれている　そのしかめっ面　への字にゆがんだ唇

冷酷な権力者の嘲笑は　これを彫った人が　これらの
性情を　よく知っていたことを語っている
それらはいのちのない石に刻まれて　それらを模した手や
それらを育てた心よりも　いまなお長く残っている
そして台座に　こんな言葉がみられる――
「わが名は　王の王なる　オジマンディアス
なんじら強大な者たちよ　わが行ないし業をみて　絶望せよ！」
このほか何ひとつ残っていない　巨大な　その廃墟の
崩壊したまわりを　茫々とと　さえぎるものもなく
さびしい　平らな砂漠が　果てしなくはるかにひろがっている

215
灰色の石が楽しそうに音を立てる。立派な形の輪を作っている。
偉大な王はここで真っ赤なワインと詩を楽しんだ。
月日は流れ残されたのはこの遺跡だけ。
目の無い石像が川面も見つめている。
あなたはここに誰が来て、誰が住み、そして消えていったかご存知か？
日当たりの良いイタリアからやって来たツバメたちに聞いてみる。

216
夕暮の鐘の音が落ちてゆく日を弔い
鳴きつれて牛の群は、ゆるやかに野を渡る
野の人は疲れはてて、とぼとぼと家路につけば
この世界には、夕暮と自分とのみが残っている。

ほの光る風景も、わが前に消えてゆき
おごそかな静寂がまわりの大気を包む
わずかに、かぶと虫が羽音も重く飛びまわり
遠くの羊の宿からは眠い鈴の音が聞えてくる。

また、向うの蔦の葉のまつわる古塔から
うらぶれて、ふくろうが月に訴え
その秘密の巣のあたりをうろついて
昔からの孤独の領域を冒す人を恨む。

年を経たニレの木の下、イチイの木陰、
芝上のくちくずれて、高まるところ、
めいめいの狭い室に永久に横たわって、
この村の素朴な先祖たちが眠っている。

かぐわしい匂のする朝の微風、
藁屋根の小屋に来るつばめの囀り、
鶏のするどい叫び、こだまする角笛も、
賤が屋の床にねる人々の目をもう醒ましはしない。

いさましい囲炉裏の火も、もう燃えない。
忙がしい主婦の夕食の仕度もない。
子供らが父の帰りを告げて走り、
膝に匍い上って口づけを競うこともないのだ。

その鎌で、とり入れをいく度か果して来た。
畝つくりに固い土をいく度か砕いたものだ。
喜ばしく、牛を追うて野を耕したことときある。
その力ある斧の下に、森も頭を垂れたものだ。

「野心」よ、彼らの有益な労働や飾りのない喜び、
彼らの、光のない運命をあなどるな。
「栄華」よ、貧しい人達の短くて単調な履歴を、
高ぶった微笑をもって聞くな。

紋章の誇り、権勢の栄、
美の、また富の、与えたものすべてを、
避けがたい「時」が待っている。
栄誉の道はみな墓場につづいているのだ。

なんじ、誇れる者よ、この人達を咎めるな。
「記憶」が彼らの基に記念の牌を飾らず、
長い御堂の中、格天井の飾られた下に
鳴りわたる讃美歌が聞えぬとしても。

碑文を書いた壷、生けるが如き像が、果して
そのやかたに、飛び去る息を呼び返したか。
「名誉」の声が、もの言わぬ灰を生かしたか。
「へつらい」が死神の鈍い冷い耳を宥めたか。

思うに、この忘れられた場所に眠っているのは、
かつては天上の火をいだいていた胸だ。
帝国を指図する笏を持ち得た、または
姫琴をかきならし神韻を与え得た手だ。

だが、「博識」は「時」の獲物に満ちた
その豊かな巻物を披げて見せなかった。
「冷貧」は気高い感激を抑えて、
魂の快い流れを冰らせてしまった。

清らかに照る和光の珠は数知れず、
暗い大海の量りきれぬ底にひそみ、
恥らって人目にふれず咲く花は数知れず、
色香をば、むなしくも荒野に散らす。

村人のハムプデンは、剛毅な胸で、
わが里の小暴君に抗って立ったろう。
物言わず名の無いミルトンもここに横たわり、
国人の血を流さぬクロムウェルもいるであろう。

耳を澄ます政客たちの喝采を博し、
苦痛破滅のおどかしをも目にかけず、
微笑む国土にゆたかな財を散じ、
国民の目にわが歴史を読むことは、

彼らの運命が禁じたのだ。ただに
生い繁る徳をばかりか、罪をさえ限ったのだ。
流血の河を渡って、王位をねらい
慈悲の円を人類に閉じるさえ禁じたのだ。

良心の咎に悩む悶えをかくし
正直な恥らいの色を顔に消すことも、
「奢侈」と「誇」の祠に詣でて香を供え
詩神の火に焚くことをさえ禁じたのだ。

あさましく争い狂う群を離れて、
彼らの願いはただ一筋につつましく、
冷たい、奥まった人生の谷に沿うて
静かな自らの道を歩くにあったのだ。

しかし、その骨には侮りを受けぬよう、
粗末な墓標が傍らに立ててあって、
おろかな詩句や、形をなさぬ彫刻で飾られ、
過ぎゆく人の、ため息の手向を待っている。

その名や年は、無学な詩人の手に誌され、
名聞と挽歌の代りになっている。
書き散らされた聖書の文句は、
田園の善人に死の道を教えるものだ。

誰か唖の「忘却」の餌食に甘んじて、
この楽しい心配な人生をあきらめ、
愉快な日々の暖い日だまりを去るものか。
見返る目になつかしくその名残を惜しむものだ。

去ってゆく魂は誰か愛するものの胸に倚り、
閉じてゆく目は誰かの情けの泪を求める。
墓の中からさえ、「自然」の声は叫ぶ。
灰の中にさえ、人間の心の火は燃えている。

こうして、死んだ名もない人達のことを思い、
このようにその飾りのない生を語るもの、お前。
ここに、誰か親切な人があって、わびしい思いに、
おまえの運命を聞くこともあろう。

すると、たまたま白髪の田舎人が答える。
「たびたびお目にかかりました。朝のひきあけ
急ぎ足に露の玉を散らしながら
丘の上の芝地で太陽を迎えられる、

それから、あそこの枝を垂らしたブナの木の
奇怪な古根が地上にわだかまったあたりで、
真昼には、ものうく、ながながと身を伸し、
ささやいて流れる小川を眺めていられる、

あちらの森の中では、嘲りを微笑に上せ、
わけもない仇言をつぶやきながらさまよい、
淋しい心の人らしく、うなだれて悲しく青ざめ、
煩悶に狂うとか、失恋に悩まれるさま。

ある朝、いつもの丘の上に姿はなく、
荒れ地にも、あの人の好きな木かげにも、
そのまたあした、小川のほとりにも、
芝地にも森にも姿は見えませんでした。

その次の日、しずしずと歌もかなしく、
教会への道を辿る葬列を見ました。
あの碑文を読んで下さい（あなたは字が読めましょう）
あそこのサンザシの老木の下の石に刻んである。」

墓銘
このところ地の膝に枕して憩えるは
「幸運」も「名声」も知らざりし若者ぞ。
その生れ卑しきも「学芸」は眉寄せず
「憂欝」はしるししして、わがものとなしにけり。

恵みしは大なりき、魂に誠みち、
天もまた等しなみ大いなる報いしぬ。
「悲惨」には泪しき、与え得しすべてなり。
天よりは友を得て、その願かないたり。

いさおしを尚更に引き出だすことなかれ。
欠けしをばな発きそ。畏れあるところにて
相ともに打ち震え、望もち安らえり、
父にしてみ神なるふところの中にこそ。

217
この窓は婦人たち紳士たちを見てきた
碧玉や金、炎や真珠のよう
創造主の改変の前にあって頭を下げ
至上の自負心、八月の権力への覆い

角笛、クラリオンの音がどこまでもはっきりと聞える
剣を手に持つ隼たち
平原であろうと、森であろうと、ビザンチウムであっても、エーカーであっても
取り戻すため、白鳥たちの戦い

今では権力者たちは、女王にへつらい
とがった靴を履いて、腰を低くし
まだら模様の床に、伸びて広がる

みな、このように、話す事も聞く事もできず
めしいた石のような目を開いている
窓辺には赤いバラがいつまでも咲いている

218
私たちの血に支えられた栄光
影、はかなきもの
運命から逃れるすべはない
死が冷たい手を差し伸べる
王位の杓と王冠
それもいつか頭上から転げ落ちる
悪魔の持つ、薄汚れた
鎌、鋤と同じ事

勇敢な兵士は剣を手に立ち上がる
死に行く場所で月桂樹の香りがする
気を緩める事はできない
互いに殺しあう場所なのだから
遅かれ早かれ
運命に屈服するのだ
やがて息は止まり
色白な捕虜は死の世界へと飲み込まれる

その額に飾られた花
その力をひけらかす事も止み
死の聖壇に上り
撃つものも撃たれるものも血を流す
あなたの手を
冷たい墓石に載せる
残されたのは
芳しき香り、汚れた花々

219
燃えるような心を持ち
息つく暇もなく
真実の船を作り
これに乗り込み船出する
死の海を越える
美しき人、勇気ある人、若き人
すべての真実に生きた
亡き人々を弔う

220
老いはてて、ゆうべ、ともしびのかげ、
炉辺にすわりて、繰りつ、紡ぎつ、
わが詩をうたい、愕然と汝はも言わん、
「過ぎし日の　美しき吾を讃えしは　ロンサール。」

かかるとき、はや疲れたる　重き瞼の、

うつらうつらに聞きとめて、　ロンサールの名の
ひびきを耳にまなこさめ、汝の名の
朽ちぬほまれを讃えざるはしためありや。

われすでにみまかりて、骨もなき亡霊となり、
天人花のかげに、土深くやすらわん
汝は炉辺にて　くぐまる老婆、

わが愛と　汝が驕慢を　くやみつつ。
生きよ、われを信じたまわば、あすをたのむな、
今日よりぞ摘め、いのちのばらを。

221
凍った枝に氷柱が伸びている
木々の葉は消え、代わりに冬の棘が生えたよう
朝、ゆっくりと広がっていく
天は雲に隠れ
緑を失った大地で、木々は眠ったまま
その木々の影が寂しく地面に伸びている

222
私が死んでも君よ　いつまでも嘆かないでくれ
この穢れた世界から逃れた私が
もっと穢れた岨虫の仲間になったと　世に告げる
あの陰鬱な弔いの鐘が　鳴り止んだら
いや　たとえ君はこの詩を読んでも
これを書いた手など　思い出してくれるな
私を思って君が悲しむくらいなら　君の優しい胸の中で
忘れられたいと思うほどに　君を愛しているのだから
ああ（恐らく）私が土にまみれるとき
（いいかい）たとえこの詩が君の眼に触れても
哀れな私の名を　口にするのは止めてくれ
君の愛が　私の生命と共に朽ちるに任せてほしい
賢しらな世間が　君の悲しみを覗き込み
私の死んだのちに　私のせいで君が嘲りを受けないためにも

223

水底深く父は眠る。

その骨は今は珊瑚

両の目は今は真珠。

その身はどこも消え果てず

海の力に変えられて

今は貴い宝もの。

海の妖精鳴らすのは、ひと時ごとの弔いの鐘。

お聞き！　ほら、聞こえる―― ディン・ドン、鐘の昔が。

224

戦のよろいが、今は蜂たちの住みか

恋人たちの詩は聖なる賛美歌

軍人たちも休息のひととき

神に恵みを乞う

戦場から家へと場所は変わっても

聖者は彼を見失う事なく見守っている

225

一年のあの季節を　君は私の内に見るだろう

黄色くなった葉が　有るか無しかに垂れ下がるあの季節を

つい先ごろまでは　小鳥が美しい声で囀る聖歌隊席だった枝が

いまでは剥き出しの枯れ果てた姿を　寒さに震わせている

君はまた私の内に　一日の黄昏を見るだろう

日没の　暮れかかる西の空に

すべてを安らぎの内に閉ざす　死の分身の

あの暗黒の間が　刻一刻と奪い取るあの黄昏のときを

私の内に　君はあの残り火の輝きを見るだろう

それは　自らの青春の遺灰に横たわり

いずれは息絶える　死の床のように

自身を養いながらも　燃え尽きる炎のあの輝き

これを見れば　君の愛はさらに強まり

やがては君が別れねばならぬものを　深く愛するのだ

226

枯れ葉よ、落ちろ、落ちろ。花よ、枯れ果てよ。
夜を長くし、昼を縮めよ。
秋の木から木の葉がひらひらと舞いながら、
こぞって私に至福を語ってくれる。
バラの咲くところに
雪の花輪が開く時、私は微笑む。
夜の衰えがさらに寂しい昼の一日を
もたらす時、私は歌う。

227

語れ　いま何處　いかなる國に在りや、
羅馬の遊女　美しきフロラ、
アルキピアダ、また　タイス
同じ血の通ひたるその從姉妹、
河の面　池の邊に
呼ばへば應ふる　木魂エコオ、
その美しさ　人の世の常にはあらず。
さはれさはれ　去年の雪　いまは何處。

いま何處、才拔羣のエロイース、
この人ゆゑに宮せられて　エバイヤアルは
聖ドニの僧房　深く籠りたり、
かかる苦悩も　維　戀愛の因果也。
同じく、いま何處に在りや、ビュリダンを
囊に封じ　セエヌ河に
投ぜよと　命じたまひし　女王。
さはれさはれ　去年の雪　いまは何處。

人魚の声、玲瓏と歌ひたる
百合のごと　真白き太后ブランシェ、
大いなる御足のベルト姫、また　ビエトリス、アリス、
メエヌの州を領じたるアランビュルジス、
ルウアンに英吉利人が火焙の刑に処したる
ロオレエヌの健き乙女のジャンヌ。

この君たちは　いま何處、聖母マリアよ。
さはれさはれ　去年の雪　いまは何處。

228
偽りの恋まことの恋
その人見分ける目印は？
帽子に貝殻、手には杖
足に履いた巡礼の靴。

あの人はもういない
あの人はもういない
頭を覆う青い草
足もとに立つ墓の石。

経唯子は雪の白
飾った花はかぐわしく
墓までついて行きはせぬ
恋の涙に泣きぬれて。

229
なぜあなたは死に行くのか
黄色く枯れていく木々
秋の優しい空気の中で
緑だったナラの木々

風が吹くたびため息をつき
葉はあなたから離れていく
はだかの枝が伸びているだけ
周りに積もった落ち葉の上で

230
ポプラの下で休む旅人よ
疲れたらこの泉で水を飲んで休むといい
遠くに行っても覚えていておくれ
この泉は、シムスが死んだ息子のギラスの横にしつらえたものだ

231
死んでしまった、死者は戻らない、悲しみ
墓の横に座り、何度も名を呼ぶ
髪も白くなり、目も落ち窪んだ若者
親類、友人、あるいは恋人だろうか
弱々しい声で名を呼ぶ、去ってしまった者の名を
可愛そうに、みな死んでしまった、残されたのはその名前だけ
このような親愛さを見て、心が痛む
最後に残るのは、ただその墓標のみ

悲しみ、美しき友よ、もう泣くのはよそう
何の慰めにもならないのだから
私はドアを開け、あなたの事を見ていた
それは静かな夕暮れだった
まだ明るいが静かな、日の沈むまでのひと時
あなたは希望を失い、髪もすっかり白くなった
このような親愛さを見て、心が痛む
最後に残るのは、ただその墓標のみとは

232
砂漠に倒れている灰色の墓石
赤茶けた草原に孤立する岩
羊の群れのいる丘、人はどこにもいない
穏やかで純粋な風
亡くなったあなたに再びめぐりあう
丘の上の家で！その声が聞こえる
墓石の下の殉教者の小さな泣き声に耳を傾けたが
もう何も聞えなかった

233
月神フィビイも　月を遠く離れて放浪していた。
このほかの大ぜいの者は　方々を歩きまわることは自由だったが、
たいていは　この荒涼たる場所を　隠れがとしていた。
ほとんど生命ある姿とは見えず、ここにひとり、

かしこにひとりと、渺茫として身を横たえていた。
それは　暗い霜月の夕暮れに　冷たい雨が降りはじめ、
かれらの内陣の　円屋根である天が
夜どおし　真っ暗に覆われてしまうときに、寂しい荒野に立ちならぶ
ドルイドの荒涼とした石の環のようだった。

234

ソールズベリー

失礼ながら、あなた様をお連れせずに
両陛下のもとへ行くことは、私には許されていないのです。

コンスタンス

許します、行きなさい、私は行きません。
私は私の悲しみに、傲慢になるよう教えてやります、
その持ち主が身を伏せれば悲しみは傲慢になれるでしょう。
さあ、私と私の悲しみの偉大な王座の前に、二人の王を
こさせなきい。私の悲しみはあまりにも偉大なので、
それをささえるものは巨大で堅固の大地のほかにはない。
ここに、私と悲しみはすわります。二人の王に
伝えなさい、この王座の前にきてお辞儀をするように。
（大地に身を投げ出す。）

枢機卿、いつだったかおっしゃいましたね、
私たちは天国で親しいものに会えばそれとわかると。
それがほんとうなら、私はまた息子に会えるでしょう、
この世に生まれた最初の男の子カイン以来、
つい昨日産声をあげた子供にいたるまで、
あの子のように清らかなものはいなかったのだから。
でもいまにあの私のつぼみは、悲しみの虫にむしばまれ、
生まれながらの美しさはその頬から追われ、
幽霊のようにやせこけ、瘧の発作に襲われたもののように
色青ざめ、見すぼらしい姿となって、死ぬでしょう。
そのように変わりはてて天国にのぼって行くとすれば、
せっかくあの世の宮廷でめぐり会えたとしても、
私にはあの子とわからないでしょう。だからもう二度と、

二度とあのかわいいアーサーを見ることはないのです。

パングルフ

あなたのように悲しみすぎるのはよろしくない。

コンスタンス

それは子供をもったことのない人が言うことばです。

フランス王

あなたは悲しみをわが子のように愛しておられるのだ。

コンスタンス

悲しみがいまはいないわが子のかわりとなり、
あの子のベッドに入り、私にどこまでもついて歩き、
あの子のかわいい顔立ちをし、あの子のことばをくり返し、
あの子の清らかな性質を一つ一つ思い出させ、
あの子の残して行った服にあの子の形をとらせるのです、
それなのにどうして悲しみを愛さずにいられましょう？
ではお別れします。あなたが私と同じ悲しいめに会えば、
私はあなたよりもっとよく慰めてさしあげるでしょう。
私の髪をこんなにきちんとしておくことはない、
頭のなかがこんなに乱れているというのに。
ああ、神様！　私の息子、私のアーサー、私のいとし子！
私のいのち、私の喜び、私の糧、私の全世界！
夫を亡くした私の慰め、私の悲しみを癒すもの！

フランス王

自暴自棄のふるまいに出ねばいいが。あとを追ってみよう。

皇太子

この世のなかになに一つ、私を楽しませてくれるものはない、
人生は味気ないものになってしまった、居眠りするものの
鈍い耳を悩ませる語り古された物語のように。
にがい恥辱が人生の甘い喜びをうちこわした以上、
あとに残るのは恥辱とにがい苦しみだけだ。

235

というのは、ほんの少しの喜びでも私の心は動かされはしないが、
はっと目覚めた盲目のアラブ人のように、寂しいテントの中で、

おどおどしながらも喜び始めて、
私はあなたの声を期待して聞き耳を立てるのだ。
愛しい人よ、それはあなたの声ではない。あなたはそこにはいないのだ。
同時に実体のないその泡は溶けてただの空気となる。
私は希望を持たずに祈りながらも、不安になり絶望するのだ。

236
眠っているときも、目覚めているときも、「彼」は何度と無く私の心に訪れ、姿を見せる。明るい昼も、夜警の時にも、私は「彼」に美しさ、力強さを見出した。「彼」は私に語りかけようとし、私はその声に耳を傾けたが、そのとたん私は眠りから目覚めた。周りには誰もいなくて、ただ夜の嵐が、私の寂しい屋敷を取り囲む松の枝を鳴らしているのだった。「あなたの屋敷を支えている松の木の苦しみに耳を傾けなさい」
フィンランドの荒野で英知を持って話す声が聞こえた。私はそれを聞き、生と死について考えたのだった。

237
ああ、彼は去りはしたが、まだ死んではいないだろう。
まだ私と共にいるのだが、私は彼から追放されたのだ。
なぜなら、いまだに私の心の奥底では
不思議な子供の不思議なイメージが生きているからだ。
そのイメージは、あの水晶の球体におけるように、
そこで彼が強い技によって成長させたものだった。博学のマーリンの技だ。
不思議な「ガラスの世界」、思い焦がれる物がすべて隔離されて、
その存在が再び起こったのだ。
そこで彼は「ガラスの世界」に、空気の精のように、魅せられて、
生きて、焦がれて、不完全なままで衰えるように、そこに置いて行ったのだった。

238
やもめの小鳥、失った愛への悲しいさえずり
枯れた冬の枝にとまり
凍てつく風が吹き抜ける
小川の流れも凍って止まったまま

葉の落ちた冬の森
花をつけている草花はなく
風が吹くと
水車小屋の軋む音が響くばかり

239

あなたは墓地へと急ぐ、何を探しに？
思いは定まらず、そわそわした心持ちで
頭の中は真っ白に、みな、同じ服装で
心は急ぐ、息を切らし
青白い様子で、元気を装いながら
知りえない真実を知りたいと思う
どこから来て、どこへ行くべきなのか
未だ知らぬ全ての事を知るにはどうすればよいのか
あせる気持ちに足を速める
緑と喜びに囲まれた人生という小道を急ぐ
探している、幸福と悲しみから、
灰色の死の洞穴に逃げ込んだ？
心の思い、脳裏の考え
墓地に急ぐあなたが求めているのは何？

240

小石の岸辺に　打ち寄せる波のように
私たちは刻一刻と　終末へ向かって急いでいる
前を行くものと　つぎつぎに入れ替わり
絶えずあくせくしながら　先を争い進んで行く
この光の海に　ひとたび生れ出た幼子は
這うようにして成熟へと歩を進める　しかし若さの王冠を戴けば
邪な日蝕は　その栄光に挑みかかり
かつては生誕の輝きを与えた「時」も　その授け物を滅ぼす
「時」は　青春の装飾を突き刺し
美の額に　幾すじもの皺を刻み
自然の創り出した　類まれな真実を貪り食らう
「時」の大鎌の刃を逃れ　なぎ倒されずに存在するものなど何もない
だが私の詩は　来るべき希望のときまで
君を称え　残忍な「時」の手に立ち向かい生き永らえるのだ

241

「自然」の領域の中で探し回るものはすべて、

方向を変えるか、消えるのに、
ああ、頭の中にのみ住む思慕の「思い」よ、
なぜあなたは変化の世界にあって唯一不変のままでいるのか、
遠くで遊ぶ「時たち」、未来の日の妖精たちに呼び掛けよ。
いや愚かな考えだ。嵐を避けて雨宿りする見知らぬ者同士のように、
「希望」と「絶望」とが「死」の玄関で会うときまでは、
あの輝く群の誰一人として
魂をかき立てるような息を
あなたに吹きかけはしないのだから。

それなのに、あなたは無なのか。冬の夜明けに、羊の通る道で、
眼には見えない雪霧が、きらめくもやを織りなす谷間を、
西方に曲がりくねりながら歩いている樵が、
頭の回りに光輪を持つ人影が、
歩くというより滑るように動くのを見るとき、心を奪われた
この田舎者は自分がその影を作っているのだとは知らずに、
その美しい色合いを崇め、求めるが、
あなたはそのようなものなのか。

242
お前は鈍いぞよ、わしの息子よ。
暗黒界の〈暴君〉たちは、お前のために
玉座を守っていてくれる、その玉座の周囲には
お前の帝国が黙して限りなく広がっているのだ。
そして、お前も、わしらのように、
暗殺された者の亡霊共を、今、お前を
支配している霊力共の幻影を――
叛乱せる激情を、争い合う恐怖を、そして、
塵の上に坐したまま絶える希望を、家臣として支配せよ！――

243
死んだ者たちの魂が、闇夜にここを訪れる
死者の体が横たわる場所へ
寂しげな墓石に悲しい気持ちが呼び起こされる
ずっと昔に、愛するものが埋葬された場所

244
見たと思ったのは、さきごろ娶って、今は在天の妻か。
墓場から戻されて来たのだ。ジョープの大力の子が、
力ずくで死魔から救い、蒼ざめてやつれていたが、
喜ぶ夫につれもどされた、アルセスティスの如く。

わが妻は、産褥のけがれのしみを洗われて、
古い法規の斎戒に救われたもののように、
天国では今ひとたび、無礙にはばからず、
くまなく見ようと期していた姿となって、

その心のごとく、清らかに、身を自衣につつんで来た。
顔はヴエールに被われていたが、わが想像の目には、
愛と愛嬌と優しさが、その容姿にかがやいて見えた。

それがあれほど、快くさやかに耀う顔は、ほかにない。
しかしああ、われを抱こうと、妻がうつむくと、
目がさめて、妻は去り、昼はまたわが夜をもたらした。

245
悲しみのための悲しみがあなたの心を動かし、
嘆きに対しては嘆きで答え、
何らかの哀れみがあなたの気持ちを和らげうるのならば、
今、私のところにおいで！

私は現在以上に孤独では有り得ない、
現在以上にわびしい思いをすることもありえない！
疲れ果てた私の心は激しく脈打ち、
あなたのために張り裂けるだろう。

そして、この世が私の祈りを軽蔑する時、
天がはねつける時、
天使は私を慰めてくれないのだろうか、
偶像は聞き届けてくれないのだろうか。

いや、慰めも聞き届けもしてくれる、私があなたの為に流してきた涙によって、
私が味わった苦痛のあらゆる時間によって、
ああ、最愛の人よ、あなたを再び私は
きっと勝ち取るであろう！

246
去れ！月に照らされる暗い荒地
強い風に流される雲、真夜中の青白い光を遮る
去れ！風が集まって暗黒を呼ぼうとする
真夜中の静寂を包み込む白布のような天からの清らかな光
とどまる事なく流れ続ける時間！叫び声が聞える、去れ！
最後の一粒の涙を誘う事もない、あなたの友人の冷たい態度
あなたの愛する人の瞳、冷たく光り、あなたがいる事を求めない
義務と怠慢があなたを孤独へと導く

去れ、去れ！あなたの悲しく静かな場所へ
寂しい場所、苦々しい涙を注ぐ
幽霊のようなぼんやりした影が行ったり来たりする
複雑に絡み合った悲しげな笑い声
秋に枯れた木々の葉が、あなたの頭上に舞う
瑞々しい春の訪れが、あなたの足元にうっすら光る
しかしあなたの魂とこの世界は、死を運命付けられた森の中へ消えていく
真夜中の苦しみの表情と朝の笑顔の前に、あなたと平和が出会う前に

夜空の雲が落とす影が眠っている
弱々しい風が静かに通り過ぎる、月は夜空に深く沈む
嵐に荒れる海は、つかの間の休息を取る
海に浮かぶもの、苦しみ、悲しみ、みな合わせて眠るのだ
あなたも墓の中で眠りなさい、幽霊たちが去るまで
家と荒地と庭園が、ひと時のあなたの場所となり
あなたの記憶と後悔と、深い思いは自由を奪われる
二人の声の歌と、一人の美しい微笑みの光から

247

若者たちは
神が古くからある事を知らず
年月を重ねる事の価値を知らず
一年中が五月であるかのように思う

愛の小さな花
私たちの心の中に、根を下ろす事は無く
実を結ぶ事もない
ただ、芳しい香りがあるだけ

その上には希望がある
その下には休息がある
しかし、私たちには、死が
死がすぐそこにある。愛と共に

248
おお世界よ！　おお人生よ！　おお時よ！
その最後の段階を　わたしはのぼっている
かって立っていたところで　ふるえながら。
春の栄光は　いつもどってくるのか？
いやいや―― おお　もう二度とは！

ひるからも　夜からも
よろこびは　飛び去った
さわやかな春　夏　霜の冬は
わたしの力ない心を　歓びではない　悲しみでみたす
いやいや――おお　もう二度とは！

249
悲しむ魂を、誰が元気づけてくれるだろうか。元気とは、運動量やエネルギーの事であり、いつも内面にある良心の事である、純粋に、心理的、感情的な事柄であり、良い行いの事を指す。
人間の雅量というものは、悲しみを知る事で大きくなる。植物は悲しみというものを知らない。自分が悲しむのは、悲しみさえ知っていれば出来る事であるが、人間として成長するには、人々の悲しみを知る必要がある。このような全ての悲しみが、人間の大きさを示す。偉大な王の悲しみ、王位を追われた者の悲しみは、このようなものである。

250
めったに　めったに　おまえは来ない
よろこびの精よ！
どうして　おまえは　いく日もいく夜も
わたしを残していったのか
おまえが　逃げていってから
悲しい夜とひるがつづく

どうしたら　わたしのようなものに
おまえを連れもどせるだろう
陽気で　くったくのない人たちと
おまえは　苦しみをあざけるのか
不実な精よ！　おまえが忘れぬものは
おまえを要らぬという人たちばかり

ふるえる葉かげに
おびえるトカゲのように
おまえは　悲しみにおびえている
悲哀のためいきさえ
おまえがそばにいないといって叱る
叱責をおまえはきいてくれない

251
憂愁は　美とともにある――死なねばならぬ　美とともに。
また　いつもその手を唇にあて　別れをつげる喜びと
ともに、そのそばで　蜜蜂がその蜜を吸おうとしている間に
毒汁に変わる快楽とともにある。
そうだ、その歓楽の宮殿のなかに　とばりを垂れた憂愁は
聖壇をもつている。それは　精気にみちた舌が
喜びの葡萄を　その核にまで　破り裂くことの
できる者にしか　見ることができないのだ。
この者の魂は　憂愁の力のなかの悲しみを味わい、
天高く　その記念碑に祀られるのだ。

252
ただひとり畑中に、
ただひとり刈りつつ唄う、
かの寂しきハイランドの乙女を見よ、
足を止めよ、さもなくば静かに行き過ぎよ。
ただひとり刈りては束ね、
かくしては悲しき歌うたう。
おゝ聴けよ、深き谷間は、
その声に充ち溢れたり。

アラビアの砂漠の間の、
蔭深きオアシスの中の
疲れたる旅客のため歌う
うぐいすの歌もかくはあらじ。
逢かなるヘプリディーズの
島の海のしじまを破る
春の郭公の歌声も、
かくほどには心をうつまじ。

さても乙女の唄うは何ぞ、
かなしき歌に唄わるるものは、
古えの哀れなる珍らしき物語か、
遠き昔のたたかいか、
またはもっと鄙びたる歌か、
今日このごろの親しき話か、
現し世の常とも云うべき、
悲哀、死別、苦しみか。

253
たぶん　この同じ歌ごえは　ふるさとを思い、
異郷の麦の畑で　涙を流したルツの、
悲しい心にも　触れたのだ。
おなじおまえの歌ごえは、しばしば
あの寂しい　仙境の荒れ狂う海や、水泡のうえに
開かれた　あやしい窓辺を魅了したのだ。

254
銀の砂
見渡す限り柔らかく輝く
それは海へと続いていく
ずっと遠くには嵐の雲が白く見える
恐ろしい腕を振り回している
波が唸りをあげて押し寄せてくる
空から海へと降りてくるように

255
あれは穏やかな長い稜線、あるときは
空に溶けこみ、あるときは大地に溶ける。
あれを見つめてもぼくの孤独の心にかつての平和は
やってこない、以前は大きな平和が得られたのだが。

このように谷間の魅力は去っていくだろう。
このようにぼくの心の魅力は去っていくだろう。
何をなつかしめばいいのか？　たぶん苦しみだろう、
たぶん去っていった苦しみだろう。

樵夫が斧をふるう音が丘でにぶい。
榛の雄花が咲く。もうすぐ春だ。
でも、今度は、神さま、夢も溜息も
水溜りの上を吹く風にのってやってこないのです。

256
私の愛は海の泡のよう
愛しい人は海に消えてしまった
水の底が彼女の家
彼女の部屋は砂の下

海鳥が言葉を書いた石をひっくり返す
潮を追って飛んでいく
亡き人の骨が沈む場所へ

大きな船が錨を降ろす

ツバメが卵を温める平和な場所
教会の鐘塔の中
大嵐もここにいれば安心
雨のしぶきも届かない

私の鳩は孤独だが力強い
私は瞳に涙を浮かべる
この世界には何も残っていない
後悔の念以外には

眠っているときも一つだけ忘れられない事がある
海からの波の音を聞く時
ただ孤独な時間が流れていく
私があなたの傍に眠るときまで

257
ここに来て、幸福となるように、私の傍に座りなさい
影をまとった悲しみ
私たちの目前に大きく広がる世界
沢山の操り人形たちが
登場する劇の一場面のように
人形たちのあざ笑いが意味するもの
私はどこに、あなたは一体どこに？

258
わたしは苦しみからのがれたいとは思いません。それは聖徒の報いであるからです。むしろ、あなたの御霊の慰めのない自然の苦しみのうちに見捨てられないことを望みます。
わたしはなんの苦しみもない十全な慰めを得たいとは思いません。それは栄光の生涯であるからです。わたしはまたなんの慰めもない完全な害悪のうちにありたいとも思いません。
しかし、主よ、わたしの罪のための自然の苦しみとあなたの恩恵による御霊の慰めとを同時に経験することを、わたしは望みます。
わたしが慰めのない苦しみを感じないで、むしろ、ついにはなんの苦しみもないあなたの慰めを感じるために、今は苦しみと慰めとを同時に感じることができますように。

259
日は　西に落ち
明星　きらめく
鳥は　巣にひそまり
わたしも　ねぐらを探さねばならない
たかぞらの　あずまやに咲く
花のよう　月は
しじまの喜び　身に占めて
坐り　夜にえがおを向ける

さよなら　今しがたまで羊のむれが欣び戯れていた
緑の野辺よ　楽しい森よ
そこでは　仔羊が草をかじっており　かがやく
天使の足が　音もなく動く
そっと　目に見えず　天使はそそぐ
たえまなく　めぐみとよろこびを
つぼみと花の　一つ一つに
眠れる胸の　一つ一つに

そこ　新しい世界では　獅子の炎の目も
黄金の涙をながす
獅子は　かよわい羊の鳴き声をあわれみ
欄のまわりを　歩き続け
告げて言う　「怒りは　神の柔和により
また疾は　神の健康により
逐いやられる
われらの不滅の代から

260
私は　愚痴をこぼしましょうとも　讃えます
嘆きますとも　認めます
こうして　苦しく楽しいわが全生涯を
私は嘆き　愛します

261
古今の書物には
忍耐こそまさしく真の勇気なり、
と称える賢者の言葉が多く記されている
一切の災い、すなわち儚い人間の世に起こる
一切の不幸によく耐える者にとって、
慰めの言葉が記されている。
それは、論旨がよく練られ、説得力をもち、
悲しみや不安を和らげてくれる。
しかし苦しみに悶える者にとっては、その言葉の響きも
ほとんど役に立たぬどころか、むしろ耳障りな調子に、
そして彼の嘆きに協和せぬ調子に聞こえる。
なにか天からの慰めの源、
彼の力を回復して
くずおれる心を支える密かな活力を
心の内で感じることがないならば。
われらが父祖の神よ、人間とは何者か！
汝はその御手を人間に対してかくも様々に使い――
それとも逆手に、と言おうか？――
人間の短い生涯を通じて汝の摂理を調節される際、
一様の扱いでないとは。

262
順境の美徳は節度である。逆境の美徳は忍耐である。これは道徳の中では、いつそう英雄的な美徳になる。

順境には多くの恐れと不愉快がなくはない。そして逆境によろこびと希望がなくはない。縫いものや刺繍に見ることだが、沈んだじみな地に、はでな細工のある方が、明るい地に暗く陰鬱な細工のあるよりは楽しい。だから心のよろこびを目のよろこびで判断することである。たしかに、美徳は高貴な匂いのようなものである。燃やしたり押しつぶしたりしたときが、いちばん香りが高い。というのは、順境は悪徳をいちばんよくあらわすが、逆境は美徳をいちばんよくあらわすものなのである。

263
朝の清々しい大気も　はるかに届かず、
火と燃える太陽と、夕べの一つ星からも　はるかに遠い
谷間の蔭ぶかい悲しみに　深く沈んで、

白髪の主神サターンは、石のように動かず、
かれの寝床を取りまく静寂のように　身動きもしなかった。
森また森が　重なる雲のように　頭上を
蔽っていた。風は　そよとも動かなかった、
夏の日に　たんぽぽの綿毛ひとつ
掠めるほどの生気もなく、ただ枯れ葉が落ち
枯れ葉が積み重なっているだけだった。
谷川は　音もなく流れ、そこに蔭を落とす
主神の没落した神威のため、流れの音は
いっそう弱まった。芦ぐさのなかの　水の精ナイアッドは
冷えた指で　唇をおさえていた。

どんな力も　この場からかれを揺り動かすことは　できないように
思えた。だが　そこへある神が現われ、敬虔に腰をかがめ、
血のつながる手を　かれの幅広い肩のうえにおいた、
だがそれにも　主神は気がつかなかった。
その神は　大古の世界の女神だったのだ。
彼女の身丈にくらべれば　あの大女アマゾンすら
小びとも同然だった。アキリーズの
髪の毛をひっ捉え　その首を捻じ曲げ、
指先だけで　イクシオンの火車を止めるほどだった。
その顔は　賢者たちがエジプトに教えを乞うて来たときに、
宮殿の庭に　たぶん据えつけてあった、
メンフィスの怪物の顔のように　巨大だった。
しかし　おお！　なんともその顔は　大理石とは大違いだった。
たとい悲しみが　美そのものよりも
美しくなかったとしても、その顔は　稀なる美しさ、
ちょうど禍が　いま降りかかってきたかのように、
その目差しには　不安な気配が見える。
あるいはまた　不吉な日の前ぶれの雲が、
その悪の力を使いはたし、そのあとから　陰気なしんがりの雲が
雷鳴をともなって　押し寄せているようだった。

264
あなたの寺院の前でひざまづく見知らぬ信者たち

耳慣れない賛美歌を歌い、悲しげな祈りを捧げる
香の煙が立ち上る、祈りの声と共に

人々の涙とかすかなため息が、神を求めている
神を求めて進むうちに、疲れきってしまうとは
この世の虚栄心に、空っぽの心が疲れてしまう

道を求めるものには、この冷たく深い静寂が心地よい
空を流れていく風の音も、もはや聞こえない
海の水の苦さに比べたら、なんと甘い事

杯に注がれたレーテの白いワイン
私も道を求め、疲れ果ててここまで来た
寺院の荘厳さ、遠くから嘆きの声が聞こえる

邪悪なささやき声が音を増していく
私は信者の一人、恐ろしい翼の羽音が
暗闇の中に香るかすかな希望をかき乱す

不可思議な静けさの中
その一つの面には秋のユリより優しい唇
薄絹の悲しみのような清らかな言葉が聞こえる

リュート弾きの灰色の眼差しからの柔らかな嘆きの声

265
悲しみに
さよならを言って
悲しみを　遠くへ追いやりたい。
けれど　元気をお出し、元気を、
悲しみはわたしを　深く愛し、
悲しみはいつも寄り添い　優しく親切だ。
わたしは　悲しみを欺いて
そのままにしておきたい。
だが　ああ！　悲しみはいつも寄り添い　優しく親切だ。

椰子の樹下蔭、川のほとり、
わたしは坐って泣いていた。この広い世界に
わたしがなぜ泣いているのと　訊ねてくれる人は　ひとりもいない、
そこで　わたしは
水蓮の花盃を　恐怖のように冷たい涙で
満たしていた。

ならば　おいで、悲しみよ！
いと甘き悲しみよ！
わがいとし子のように　胸のなかにおまえな抱こう。
おまえを離れ、
始まえを欺こうと考えた、
だが今は　この世のものの中で　わたしはおまえが最も好きだ。

だれひとりいない、
だれひとりだにいない
哀れにも孤独な娘を　慰めてくれる人は　おまえのほかに。
おまえはその母、
また　その兄弟、
遊び相手、影のなかの求婚者。

266
未知なるものに対する恐怖で心が落ち込んでしまう。理性のランプの炎が明るく照らしていたとしても、恐怖を抑える事は難しい！病気の症状の一つでは？と医者は言うが、悲しみというものは、そもそもこういう物で、人間には悲しみの源泉とでも言うべき場所があり、生まれる前からこの影響を受けている。人間は悲しみと共に、暗く、恐ろしく、非合理的なものとして、父親も無く、この世界へ生まれてくる。そのため、「生を受ける事が、それだけでも意味がある」と主張する事が、単純に正しいとは言い切れない。もし、この世に生まれなかったとしても、神の意思に従う事が必要であるし、この暗い原理が私たちの犯す過ちの原因ではないと、どうして判るだろうか。あなたが知っているように、この事は、英知や努力を生み出す母でもある。夜、得体の知れない恐ろしさが、巡礼者の足取りを速めるのと同じ事である。こうした恐ろしさを感じたとき、思い出すべき言葉は「前へ進め」。これがあなたの背中を押してくれる。神の意志にも叶う事なのだ。知性的でない多くの人々は、この事を知らないのである。あなたは幸福だろうか？そう感じるのなら、愚かな人間になってしまうだろう。かつて、幸福な生活の中から、偉大な業績が生み出された事があっただろうか。賢明なもの、偉大なもの、地上を征服するのは誰だろうか。幸福なものだろうか？私はそうは

思わない。

267
季節が流れる、城奏が見える、
無疵な魂なぞ何処にあらう？

季節が流れる、城奏が見える、

私の手がけた幸福の
秘法を誰が脱れ得よう。

ゴオルの鶏が鳴くたびに、
「幸福」こそは万歳だ。

もはや何にも希ふまい、
私はそいつで一杯だ。

身も魂も悦惚けては、
努力もへちまもあるものか。

私が何を言つてるのかつて？
言葉なんぞはふつ飛んぢまへだ！

季節が流れる、城泰が見える！

268
夢の宮殿から私たちを追い出してしまうもの、それは痛み、心の痛みである。それは義務の感覚と言っても良い。二つを合わせると、罪の痛み、ということになる。そして、愛もそうである。一言で言うならば、道徳が夢から目覚めさせる。マイアの魔力に対して、私たちを押しとどめるもの、それは良心である。良心によって、麻薬の香り、アヘンの幻覚、瞑想の静けさがすっかり醒めてしまう。良心は、苦しみと責任の恐ろしいスパイラルの中へ、私たち人間を引きずりこむ。目覚ましが鳴り、雄鶏が精霊を追い出すと、剣を持った大天使が人間が作った楽園に降りて来て、人間達を追い回す。ああ、なんということ！

269
ぼくがあるところを通りかかると　ろうそくが明るく燃えている

ぼくはじっとみつめる　そのろうそくがしっとりとした黄色い焔でおだやかな春の夜の
さだめもつかぬ闇を楽しげに払いのけているさまを
その絹糸のような光の筋が　またたきのまにまにちらちらと揺れ動くさまを

その窓辺では　どんな人がどんな仕事に精を出しているのだろうと思いつつ
ぼくは物思いに沈みながら歩くのだ　ジェッシーであれジャックであれ
そこで神の御名を高め　神を讃えてくれるようなことをしていたらと思うのだ
答を聞くことができないのでなおのことそう思うのだ――

さあお前も中にはいるのだ　自分の家に帰るのだ　そしてまず　お前の消えかかった
心の炎をかき立て　閉ざされた心の地下室にいのちのろうそくをともすのだ
お前はお前の心の主人　そこでは自分の思いのままにふるまってよいのだ

何の妨げがあるというのだ？　お前には自分の目の梁が見えないのか
それでいて他人の小さなあやまちを器用に扱うことができるのか？　お前はあのうそつきなのか
良心に見捨てられ　味の抜けてしまった塩なのか？

270
大地、悲しみの大地
昼も夜も変わる事なく
夜の闇の中に疲れて横たわる
昼の光の中に疲れて横たわる

雲が空から審判を下す
雲は涙を流す
山々の上から
海の上から

でも悲しみの大地は知っている
私が大地を愛していると
だから大地は
雲が流す涙に、じっと濡れている

271
夜明けの太陽が天に触れようとする

軽やかな風が吹き抜ける
朝露に濡れるクローバーの上を
銀色にきらめく様に
私は心の中で何度も叫ぶ
「世界の朝が来た
　休息のときは終わり
　私の心は神と共に」私の叫びが虚ろに響く

巻貝の螺旋の
中心で彼女は横たわっている
カタツムリが身を引っ込めて
敵から身を守るように
私は巻貝の中の彼女に叫ぶ
「随分長い時間が過ぎました
　もう出てきてはどうですか
　悪魔も降りてきませんよ」私の叫びが虚ろに響く

272
わが友よ、神に楽しさを乞うがよい。幼な子のように、空の小鳥のように、心を明るく持つことだ。そうすれば、仕事にはげむ心を他人の罪が乱すこともあるまい。他人の罪が仕事を邪魔し、その完成を妨げるなどと案ずることはない。「罪の力は強い、不信心は強力だ、猥雑な環境の力はは恐ろしい。それなのにわれわれは一人ぼっちで無力なので、猥雑な環境がわれわれの邪魔をし、善行をまっとうさせてくれない」などと言ってはならない。子らよ、こんな憂鬱は避けるがよい！

ところが、自己の怠惰と無力を他人に転嫁すれば、結局はサタンの傲慢さに加担して、神に不平を言うことになるのだ。サタンの傲慢さに関してわたしはこう思う。この地上でサタンの傲慢さを理解するのはきわめてむずかしく、そのためいとも容易に誤解して、それに加担し、そのうえさらに何か偉大な立派なことをしているように考えたりしがちである。それに、人間の本性のもっとも強烈な感情や行動のうちの多くは、われわれがこの地上にいる間は理解しえぬものであるから、それに心をまどわされたり、それが自分の過ちの弁解になると考えたりしてはならない。

この地上にいるわれわれは、実際のところ、迷いつづけているにひとしいのだから、もし尊いキリストの姿が眼前になかったなら、われわれはちょうど大洪水の前の人類のように、すっかり迷って、滅びてしまったことであろう。この地上では多くのものがわれわれから秘め隠されているが、その代りわれわれには、他の世界、天上の至高の世界と生きたつながりを有しているという、神秘的な貴い感情が与えられているし、

またわれわれの思考と感情の根はこの世ではなく、他の世界に存するのである。事物の本質はこの地上では理解できないと哲学者が言うのは、このためにほかならない。

273

その頃、球形をなしているこの宇宙の
（その最も外側に原動天があり、これが「混沌」と
年老いた「暗黒」の侵入を防ぐ一方、内側にある
いくつかの輝く球層を守る障壁の役目を果たしていたが）――
この宇宙の固く薄暗い球面の上に、サタンが舞い降り、
歩いていた。そこは遠くからは確かに球面のように見えたが、
いざ近づいてみると、果てしなく拡がる大睦のようであった。
暗く、荒れはて、星一つ瞬かぬ夜の渋面や、凄惨な
蒼穹然としてあたり一帯に縦横無尽に吹きすさぶ
混沌の嵐の脅威に、さらされていた。ただ、ある部分、
つまり、遠く離れていたがいくらか飄風も穏やかな、
天国の城壁附近の微光漂う大気から、幽かな反射光を受けて
いる側だけは違っていた。そのあたりの空豁な平原を、
悪魔は悠々と歩きまわっていた。その姿は禿鷹に、――そうだ、
遊牧の韃靼人の前に立ちはだかるイマウスの白雪皚々たる
山中で巣だった禿鷹が、飼われた羊や山羊の群れている
丘の上で、生まれたての小羊や小山羊を腹ふくるるまで
貪り食らおうと、餌食に乏しい場所を引き払って
遥か彼方のインドを流れるガンジス河とハイダスピーズ河の
源をめざして飛びたち、その途中、中国人が帆と風を利用して
竹製の軽い荷車を駆っているあのセリカナの荒れ果てた
平原に舞い降りている姿に、そっくりであった。まさしく
そのような姿で、悪魔は風の吹きすさぶこの茫洋たる陸地を、
ただ独り餌食を求めてここかしこと歩きまわっていた。
確かに独りであった。ここには、彼以外の被造物としては
生命あるものも生命なきものも、姿一つ見えなかったからだ。
少なくともこの時にはまだ何も見えなかった。だが、やがて
罪が人間たちの様々な営みを虚栄で充たすにいたったとき、
あらゆる空しく儚いものが、あたかも立ちのぼる湯気のように、
地上からここをめがけて翕然として飛び上がってきた。
いいかえれば、あらゆる空しい物が、また空しい物に

栄光や不朽の名声やこの世におけるそしてあの世における
幸福への愚かな希望を託したあらゆる人間が、やってきたのだ。
人々から賞讃されることだけしか求めず、ひたすら迷信を
信じ、盲目的な狂信に憂き身をやつして、その御利益を
この地上でえようとするあらゆる者も、結局ここへ来て
それ相応の報いを、―― その行為が空しかったと同じくらい
空しい報いを受けたのだ。その他、自然の手になるもので、
たとえば流産により、或は奇怪な姿で、或は異常な妊娠に
よって生まれた者はすべて、地上で消滅したのち、ここへ
やってきて、全宇宙が最後に消滅する時まで空しくここで
彷徨い歩くのだ

274
意志に従う限り、合理性と宗教性は共存する事ができない。
合理性と宗教性の影響下で、意志は、あたかも無関心であるかのようだ。知恵や愛がそうであるように。（これらは同じ力の２つの異なる呼び名、前者は理性に、後者は精神に関する）しかし、極度に抽象化され拒絶された結果、意志は、悪魔のような自負心、精神に対して反抗的な自己崇拝、そして、他者に対しての恐ろしい圧政となる。苦しみ、痛み、喜びに対する優位性から、希望を失うほどに、肉体的な衝動に支配されてしまう。端的に言い換えると、ただ一つ、意志のみが、行動の究極の動機であり、内的、外的な他のすべての動機は意志に従属しているという、恐ろしい結論なのである。
ミルトンは、このような特徴を、哲学的にかつ潜在的に、失楽園という魔の書物にまとめ上げた。ああ！現実の人生においても、とても多く見られる事であり、歴史の書物にも非常に多くの暗く野蛮な事件が記されてきた。そして、このような事が起こるたび、そこには同じ特性が見られる。喜びを内在しない希望、不動の揺るがぬ決意、外的で落ち着かぬ行動、陰険な暴力、悪賢い大胆さ、その結果としての、永遠かつ完全な無関心。そこには、悪意を司るものを特徴づける目印がある。狩りの名人ニムロドからナポレオンに至る、人間から自由を奪い、狩りの獲物とする全能の狩人達である。善意を持った人間ですら、しばしばこの熱情に取り付かれてしまう。国家という単位においても、憎悪の代わりの一時しのぎの賞賛に、騙されてしまう。敢えて、「邪悪なものよ、我々の善であれ」と言う、セム族の自然神モレクのように。すべては力によって動かされる。邪悪な世界の中に自己完結した組織的犯罪のように。悪意の中に悪意を持ち、犯罪に対して犯罪のバリケードを築く。邪悪な力の他には障壁となるものはないと考えて、この世界から障壁を取り除いてしまう。

275
虎よ！　虎よ！　あかあかと燃える
闇くろぐろの　夜の森に

どんな不死の手　または目が
おまえの怖ろしい均整を　つくり得たか？

どこの遠い海　または空に
おまえの目の　その火は燃えていたか？
どんな翼に乗って　神は天がけったか？
その火をあえて捕えた手は　どんな手か？

またどんな肩　どんな技が
おまえの心臓の筋を　ねじり得たか？
またおまえの心臓が　うち始めたとき
どんな恐ろしい手が　おまえの恐ろしい足を形作ったか？

槌はどんな槌？　鎖はどんな鎖？
どんな釜に　おまえの脳髄は入れられたか？
鉄床はどんな鉄床？　どんな恐ろしい手力が
その死を致す恐怖を　むずとつかんだか？

星々がその光の槍を投げおろし
涙で空をうるおしたとき
神は創造のおまえを見て　にっこりされたか？
仔羊を創った神が　おまえを創られたか？

虎よ！　虎よ！　あかあかと燃える
闇くろぐろの　夜の森に
どんな不死の手　または目が
おまえの怖ろしい均整を　あえてつくったか？

276
それを聞いた悪鬼は、怒り狂ってサタンに答えた。「お前が
あの叛逆天使だったのか！　未だかつて誰も破ったことのない
天国の平和と信義を破り、至高者に対して陰謀を企らみ、天の
子等の三分の一を微慢不遜な叛乱の徒に引きずり込み、そのために、
彼らともども自らも神から追放され、この地獄で、悲しみと
苦しみのうちに空しき日々を永遠におくる宿命に落されたと

いうのは、他ならぬお前だったのか？　それなのに、お前は、
おお、地獄に堕ちた者よ、お前は自分をまだ天の霊に伍する者
などとほざいているのか？　わたしが王として支配している――
それも、お前はいっそう熅り立つかもしれぬが、お前の王また
主君として支配しているこの地獄で、お前はまだ無礼な悪態を
つこうとするのか？　ああ、偽われる逃亡者よ、直ちに己の刑罰の
場に帰るがいい。翼の力の限り急いで帰るのだ。もし躊躇って
おれば、わたしは蠍の鞭を振るってお前を追っかけてやる。
それとも、この槍の一撃を受けてみるか？　異様な戦慄と
かつて感じたこともないような苦痛が、お前を襲うはずだ！」

277
罪を省みて悲しむ
開かれた門の前に立ち、憎しみを受ける苦痛
切り立つ崖の上へと
焼けるにおいの中を登っていくと
色のくすんだ恐ろしい顔が、
気味の悪い笑いを見せる

ああ、灼熱の砂漠の風が吹く
私を火薬のように干からびさせる
犠牲者の首に巻かれたスカーフが
生贄に飾られたリースなのだろうか？

278
わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。
わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。
もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる。
そこで、この事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。
わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。
なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。
すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。

もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。
そこで、善をしようと欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。
すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、
わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。
わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。
わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。

279
私の心の草原は、赤く枯れてしまった
私に若い緑の木々を与えてください

280
いついかなる時も、救済は苦痛である、休息は死である、融和はいけにえである。各人はそれぞれ自分の罪の中に、自分自身の死刑執行人、悪魔、地獄を持っている。罪は偶像となり、その偶像が、心の意志を捕らえ、不幸をもたらす。罪による死！これはキリスト教の素晴らしい言葉で、内的人生の高等な理論を成す。これだけが良心の平和であり、この平和が平和のために必要である。神に生き、成すべきことを成せ。それが宗教であり、救済であり、永遠の生命である。

281
主なる神に罰せられ
罪深き行いを悔いる
大切なときを無駄に過ごした事を思い
自責の思いに駆られる

これまでに私が犯した罪を思い
悲しくなり、絶望しそうになる
私の中にも、善悪を考える
良心があったはず

人生を振り返り
罪を悔い改める

心を洗い清め
優しさ、誠実さをもって暮らす

これからの私は
物事に対して、注意深く臨む
悔恨を残す事の無いように
心に刻んでおく

282
私が求めて得られなかったもの、また得ることができたもの――みな用はない。だが私がかつて退けたもの、見逃していたもの、それを私はまことに手に入れたいのだ。

283
恥ずべき荒野で魂を浪費すること
これこそが情欲の行為　そこに達するまでに情欲は
偽証　殺致　罪多き流血を繰り返し
野蛮で過激　粗野で残忍　そして当てにならぬもの
快楽を勝ち得たとたん蔑み
理不尽に求めれば　得られてもたちまちにして
理不尽に自己嫌悪　それは捕らえた者を狂わすために
仕掛けた餌を　呑み込むようなもの
追い求めているときが狂気なら　獲得してからも同じ有様
行為のあとも　最中も　いまからというときも　常軌を逸し
最中は至上の喜びでも　あとに残るのは悲嘆
予期した歓喜も　悪夢と終わる
これは誰でも知ることなのに　ただひとりとして
この地獄へ導く天国を　避ける術を知らない

284
「囚人よ、この頑丈な鎖をいったい誰がこしらえたのか。」
「私がこしらえた」と囚人は言った。「この鎖を念入りにこしらえた。誰にも負けない私の力で世界を奴隷にし、自分だけは勝手気儘でいられるつもりだった。そこで夜も昼もどんどん火をおこし、遠慮会釈なく鎖を鍛えた。ついに仕事が済んで鎖の環がぜんぶ頑丈に仕上ったとき、気がついて見ると縛られたのは私だった。」

285
ああ、炎が頬を赤く照らす
天も地も焼き尽くされ、逃げる場所はない
ああ、その目は怒りに燃える
恐ろしい夜になる

しかし、恐怖の王は私たちを滅ぼさなかった
私たちは隠れていたのだ
そして、あなたの鳩の翼に乗せられて
優しき愛の杓の先へと飛び立った

親しき人よ、覚えていておくれ
あなたが来た道を作ったのは誰か
あなたの羊はじっとしていた
あなたは道を失って、私を探している

すべての仕事、財産は愛のため
でもそれを失ってしまった
愛する魂の価値は、
全ての道のりと、その悲しみに及ばないとでも？

あなたは怒っていった
羊の群れを炎に投じよと
あなたは羊たちが、みな死んだ後
「来たれ、祝福されたる者よ」と私を呼んだ

286
私の初めにある罪を、あなたは許して下さるであろうか。
それは私の罪ではあるが、逢か以前に犯したものである。
これまで私が走るように犯し、また、後悔しつつ、今も、
走りながら犯す罪を、あなたは許して下さるであろうか。
そうして下さっても、断じて、そうはならない。
何放ならば、もっとあるのだから。

287

友人が少ないとか、悪い友人だ、などと言うのは、友人が死ぬようなものだ。
人生を悪用していると感じるのは、まさに自分が死ぬようなものだ。

288
わたしの告白の犠牲をわたしの舌の手からお受けください。あなたはわたしの舌を、あなたの御名に感謝するように形づくり励まされた。また、わたしのすべての骨をいやして、「主よ、だれかあなたに比べるものがあろうか」といわせてください。告白するものは、自分のうちに起こる事柄をあなたに告げるのではない。開ざされた心もあなたの目をふさぐこともなく、頑固な人間もあなたの御手を斥けることもなく、あなたはそのかたくなな心を、御意のままにあわれまれ、あるいはこらしめながら、和らげられて、あなたの温情をこうむらないものはいないからである。しかしわたしの魂に、あなたを愛するために、あなたを賛美させてください。また、あなたを賛美するために、あなたのあわれみに感謝させてください。あなたの創造の全体はあなたの賛美をやめることもなく、また隠すこともない。すべての霊は口をあなたに向けて、また生物や物体はそれらを考察するものの口によってあなたをほめたたえる。こうして、わたしたちの魂は、その疲労を脱してあなたに向かって立ち上り、それらのものをくしくも造られたあなたに近づこうとする。そこにこそ魂の蘇生と真の力が存する。

289
おまえ自身が、多くの過ちを犯し、彼らと選ぶことなき同類のひとりである、ということ。よしなんらかの過ちを慎むにしても、それを生み出す性情を、おまえは依然として持っているのである。

290
罪の材料を除けば、罪そのものが除かれるとする人々は、人間事象をよく考察する人ではありません。罪の材料は少なくしようとする元から増加し、巨大になるものです。部分的に除かれることはあるかもしれません。しかし書物・読書のように全般にわたるものは、一切を取り除くわけにはいきません。取り除かれても罪はそのままであります。貪欲な人から財宝すべてを取り上げても、一つのものは残ります。その人から貪欲を取り去ることはできないからです。色欲のあらゆる条件を追放し、若者すべてを世捨ての庵に閉じ込め、最も厳しい戒律で訓練しても、清純な心で来なかった人を清純な心にすることはできません。このような問題を正しく解決するには、実に大きな配慮と知恵が必要であります。先にあげたような手段で罪を追い払えると思うなら、それでもって追い払った罪と同じだけの徳をも追い払っていることを知らなければなりません。罪を除けばそれと一緒に徳をも除きます。罪と徳は等しく人間の条件であります。

このことは神の高い摂理の正しさを示しています。神は克己、正義、節制を命ずると同時に、われわれが欲しがりそうなものをふんだんに並べ、あらゆる制限と満足を超え、さまよう心をわれわれに与えました

291

私が良心的に自分に向かって懺悔するとき、私は、私のもっている最善の徳も、いくらか悪徳の色を常びていることに気づく。おそらく、プラトンが、彼の最高の徳にあるときでさえ（私は、この最高の徳についても、同様な特徴をもつもろもろの徳についても、他の何びとにも劣らぬほど、心からの忠実な讃美者である）、もし彼がじっとそれに耳を傾けたならば、事実、彼はじっとそれに耳を傾けたのであるが、彼はそこに、何か人間的なものの混ざった不純な音を、しかも彼にだけ聞こえるかすかな音を、感じとったことであろう。人間は、何ごとにおいても、いかなるところでも、つぎはぎだらけなもの、雑多な寄せ集めのものでしかない。

292

身だしなみが気になる人は、一人でいる方が良い。世間の事を何も知らないくせに、世間の事が気になる。一人でいる事はとてもいい事だが、一人でいられる事はめったにない。世界に重要なことは何もない事を知るためには、世界の事を多く知る必要があり、重要なことが何もない世界で生きるために、立派な人徳が必要だ。欲望と情熱に心が取り付かれてしまったら、森の中で禁欲生活をするよりも、街で気楽に暮らしたほうがいい。仲間と一緒にいる泥棒は、いつも嘘をつき、仲間の財布をちょろまかす。一人になると、強盗は私たちを縛り上げ、目隠しをして、殺してしまう。こうして、人間は徳を失って、悪魔の手に落ちていく。ローマ時代の親殺しの罪に対する拷問、サル、犬、蛇と一緒に、布袋に閉じ込められる刑罰のようだ。

293

おお　ばらよ　おまえは病む！
吼える嵐のなか
夜に飛ぶ
目に見えぬ虫が

深紅のよろこびの
おまえの寝床を見つけてしまった
その暗い　秘めた愛が
おまえのいのちを　ほろぼしつくす

294

哲学が一世紀にも渡って努力したにも関わらず、文明化している国でさえ、常に野蛮な状態に近い。
その表面が最も磨かれている所ですら、錆が目立つ状態だ。

295

私たち一人一人がつながり合って世界を形成している。人類の最初の一人が、何百万という子孫の行いに対して責任を負うのではない。集団の経験は蓄積して増大するが、個人の経験は、個人と共に消えてしまう。

結果として、組織はより多くの知識を蓄え、非属人の科学が発展する。しかし、例えば多少の知識のある若者は、みな同じように自惚れていて、昔から相変わらず愚かである。つまり、全体で見ると進化があるが、個々に見ると進化はない。
周辺は良くなるが、実質が成長しない。多くの事が良くなっただろうが、人間そのものは他の事のようには良くはなっていない。利益と損失は変わっても、収支の結果が良くなっていない。１０００の進歩があり、９９９の退化がある。進化とはこのようなものだ。自慢にはならないのだが、悲観しても仕方が無い。

296
随意的であるのは単に魂のもろもろの悪徳のみではなく、身体のそれもやはり、或るひとびとの場合にあっては随意的であり、われわれは、だから、そうした場合彼らを非難する。すなわち、生来の醜いひとびとならば何びともこれを非難しないが、体育の不足とか不注意とかに基づくところの醜いひとびとに対しては、われわれはこれを非難するのである。虚弱や不具についても同様であつて、本性的な或いは病気や負傷に基づく盲人ならばこれを非難するひとはなく、むしろこれを憐れむであろうが、大酒とかその他の放埒に基づく盲人に対しては誰もがこれを非難するに相違ない。かくして、身体に関するもろもろの悪しき「状態」のうち、われわれの責任に基づくものは非難され、そうでないものは非難されない。然りとすれば、魂の場合にあってもまた、そのいろいろの非難される悪徳はわれわれの責任に基づくものでなくてはならない。

だが、もしかして、ひとはいうかもしれない――「あらゆるひとびとは善に見えるところのものを追求するのであるが、しかしこの見えかたに対してはひとびとはどうするちからもないのであって、各人がそもそもいかなるふうの人間であるか、それに応じて目的もまた各人にとってそれぞれ異なって見えてくる。もし各人は自分自身の状態に対して何らかの責任があるとするならば、ものの見えかたに対してもまた彼自らに何らかの責任が生ずるでもあろう。だが、もし各人にこうした責任がないとすれば、何びとも悪を行なうことに対してみずから責任を有せず、ただ、目的を知らないため、これらの行為によつて最善のことがらがなされるであろうと考えつつこれらのことをなしているというにすぎない。目的の追求ということは自選的に行なわれるのではない。ひとは彼をしてうるわしく判断せしめ真の意味における善を選ばしめるであろうようないわば視力を具えて生れてくることを要するのであって、このものの生来うるわしくできているひとが生れのいいひとなのである。けだし、このものは最も大切な最もうるわしきものでありながら、他のひとから獲得することも習得することもできず、かえって生れついたそのままの状態を持続するほかはない。このものに関して、よく、かつうるわしく生れついているということが、究極的なまたほんとうの意味における生れのよさなのである。」――と。

297
世界
しかし、あなたは？

あなたが何か、私が見せよう
私の思考
血の流れとともに混ざり合う
静かな水面に生まれた波紋
私の思考は休息し、深く錨を降ろす
私の中に信仰の意志が芽生える
それが波もなく伝わり、私の行動は
静かな場所に大きな変化をもたらす
私の心の湖の水面
その静かな水面に
突然生まれた渦巻きが湖のうねりを作る
うねりは重なり合ってやがて海となり
その限りない水が潮のように満ちたり引いたりする
その水面がとても高いところまで上ったかと思うと
その平らな水面が波と共に崩れ落ちていく
その波頭は水しぶきで白くなる
その波が弱まり始めるとき、水しぶきは人間となる
波はその頂上から崩れ落ちていく
もはやそれは以前のような静かな波ではない
その中を光が透き通る事もない
水は荒れて動き、しぶきと共に光を追い出す
表面はギラギラし、揺れ動き、安定しない
私の行為はまさにこのようなもの
人間はしぶきを上げながら、うなだれた首の上で
水の塊が粉々になって
水滴たちが争いあうようなもの
自由と、あちらこちらからの光の動き
一つ一つの水滴は一人一人の人間
あなたの自由、あなたの自己認識、あなたの罪
人間よ、私が誰か知っているのか？まずあなた自身を知りなさい

298
はてしなき無眼の時のうち、どれだけの部分が各人に分かち与えられているというのか。みな速やかに永遠のなかに消えていくではないか。さらには、すべての質料のうちのどれだけが、また、すべての魂のうちのどれだけが、与えられているというのか。

299

理性的な魂の特質は、以下のごとくである。――理性はおのれを見、おのれを匡し、欲するがままにおのれをつくり、おのれの成果をみずから穫る〔植物の果実や、動物のそれに類したものは、別の者がそれを穫り取るが〕。その生涯の最後がいついたろうとも、おのれの固有な目的に到達するものであり…

300

創り主は我々にこんなにも大きな思考力を授けられ
過去と未来に目を向けるようにされた。
その能力と神のごとき理性を
持ち腐れにしていいはずがない。

301

徳に関しての一般論はかくして終った。すなわち、徳の属する領域――徳は中庸であり「状態」であること――が概略的に述べられ、また、徳は徳をつくり出すところの行為と同じ性質の行為を行なう動向を、それも即自的に有しているものなること、徳はわれわれの自由と責任に属していて随意的な性質のものであること、それはただしきことわりの命ずるところに従うものであることが述べられた。

善きひとになるのは、一部のひとびとの考えによれば本性に、他の一部のひとびとによれば習慣づけに、また他の一部のひとびとによれば教えによる。ところで、もし本性に属するのだとすれば、明らかにこれはわれわれのいかんともしがたいところなのであって、何らか神的な原因によつて真の意味における「好運な」ひとびとに与えられたものなのだとするほかはない――

けだし、いかなるひとにも「倫理的性状」のそれぞれが何らかの仕方で、生来、与えられていると考えられる。われわれは生れながらにして、たとえば正しくあるとか節制的であるとか勇敢であるとか等々の資質を具えている。だがそれにもかかわらず、われわれはこれとは或る別な、勝義における「善」を求めているわけなのであって、もろもろのこうしたものが生来的というのとはちがった仕方でわれわれのものになることを求めている。けだし、もろもろの生来的な徳ならば、それは子供にも獣類にも見出だされるのであるが、知性を欠いてはそれらはかえって明らかに有害であるように思われる。そこまではともかくとしても、少なくとも実際に見られるところとしていえることは、たとえば、視力を失った強壮な身体の持ちぬしが動きまわると、視力を持たないことのゆえに、その倒れかたも強いという結果になる、ちょうどそれと同様なことがいまの場合にもいえるようである。これが、しかし、知性（ヌース）というものを獲得するにいたれば、その行為するにおいても顕著な相違を示してくるのであるし、さきの状態も、以前はそれに似たものであったのが、ここにはじめて勝義における徳となるであろう。そういうわけで、ちょうど臆見の面で「怜悧」ならびに「知慮」という二者が存在しているように、倫理的性状の面でも、「生来的な徳」と「勝義の

徳」という二者が存在しているのであって、このうち勝義の徳というものは、知慮の欠けているかぎり生れないものなのである――。

ところで、幸福とは卓越性に即しての活動であるとするならば、当然それは、最高の卓越性に即しての活動たるべきであろう。最高の卓越性とは、しかるに、「われわれのうちなる最善なるもの」の卓越性でなくてはならない。それゆえ、これが知性（ヌース）であるにせよ、またはそれ以外の何ものかであるにせよ、いずれにしても、その本性上、支配指導する位置にあり、うるわしきもの・神的なるものについて想念を持つ（それ自身がやはり神的なものたることによってであれ、或いはわれわれのうちに存する最も神的なるものたることによってであれ、）と考えられるところのもの―― こうしたものの、その固有の卓越性に即しての活動が、究極的な幸福たるのでなくてはならぬ。それが観照的な活動にほかならないことは既に述べられた。

もとより、かような生活は人間の水準を超えた生活であるに相違ない。なぜなら、ひとがかかる生活を営みうるのは、彼が人間たるかぎりにおいてではなく、かえって神的な何ものかが彼のうちに存するかぎりにおいてなのであって、この神的なものが複合的な人間にまさっているまさしくそれだけ、この活動も他の卓越性に即しての活動にまさっている。したがって、知性は、人間を超えて神的なものであるとするならば、知性に即しての活動にもっぱらな生活もまた、「人間的な生活」を超えて「神的な生活」であるとしなくてはならない。ひとは、しかしながら、「人なれば人のことを、死すべきものなれば死すべきもののことを知慮するがよい」という勧告に従うべきでなく、できるだけ不死にあやかり、「自己のうちなる最高の部分」に即して生きるべくあらゆる努力を怠ってはならない。それは、嵩こそ小さいが、能力や尊貴性においては遥かにすべてに優越しているのであるから――

その他の卓越性（徳）に即しての生活が幸福な生活であるのは、第二義的なものとしてでしかない。けだし、ここでは卓越性（徳）に即してのもろもろの活動は、もっぱら人間的な性質のものなのだからである。なぜかというに、正しいことがらとか、勇敢なことがらとか、その他もろもろの徳に即したことがらをわれわれがお互いに対して行なうのは、契約とか、役務とか、その他さまざまの行為において、ならびにもろもろの情念において、われわれ各人に適当せるところを守ることによってであるが、行為とか情念なるものは、しかしながら、すべて人間的なことがらであると見られる。その或るものは、すなわち、われわれの肉体に起因すると考えられるのであるが、倫理的性状の卓越性（つまり倫理的徳）は情念に対して多分に近親的なつながりを持つと考えられる。だが、「知慮」もやはり、倫理的徳に対して、後者はまた「知慮」に対して密接な連関を有している。すなわち、知慮の端初は倫理的徳にあり、倫理的徳における「ただしさ」は知慮に基づく。しかるに、倫理的徳というものは情念と不可分の関係にあり、したがってそれは、複合者にかかわるところの徳であり卓越性なのである。このような複合者の卓越性が人間的な卓越性にほかならない。かくて、このようなもろもろの卓越性に即しての生活も人間的なそれであり、こうした幸福もまたやはりこれと同様である。

すなわち、徳は単にただしきことわりに則った（カタ）「状態」たるにとどまらず、ただしきことわりを具えた（メタ）「状態」なのである。

実践とか行為の領域（タ・プラクタ）にあつては、それぞれのことがらを単に観照的に考察して、それを単に知るということがではなく、むしろそれらを行なうということが究極目的なのだといえるのではなかろうか。徳に関しても、だから、単にそれを知っているだけでは充分ではなく、われわれは徳をみずから所有してそれをはたらかせることに努め、ないしはまた、もし何らか他にわれわれが善きひとになる途があるならば、そういったことにも努めるのでなくてはならぬ。もし、言説のみでもってひとびとをしてよきひとたらしめるに充分であつたならば、テオグニス流にいえば、それは「莫大な謝礼をもたらすであろうに」であり、また当然多大の謝礼を支払って然るべきでもあるだろう。実際は、しかし、言説は、若年者のうち、わずかに自由人にふさわしい資質をそなえた人間を慫慂刺戟するちからがあり、「倫理的性状において生れのいい人間、うるわしきものをほんとうに愛する人間」をして徳の完成に至りやすからしめることはできても、一般の若年者を慫慂して善美の域に到らしめることは不可能であると見られる。けだし、一般の若年者は廉恥にではなくして恐怖に支配されるように生れついており、あしきことがらをも、それが醜悪なるがゆえにではなく、懲罰の存するがゆえに慎しむように生れついているからである。彼らはすなわち、情念によって生きているから、彼らに固有なもろもろの快楽や、こうした快楽を生ずべき事物を追い、これらに対立するもろもろの苦痛を避けるのであって、うるわしさとか真の意味における快とかについては――その味を知らないがゆえに――想念をすら有していない。

しかし、実践的な領域に属することがらの真否の判断は、やはりことがらの「実際」とか、われわれの生活とかに基づかなくてはならない。なぜなら、これらのうちに真否に対する決定的なるものが存しているのだからである。上述したところも、だから、ことがらの「実際」とか、われわれの生活とかの上に適用して考察されることを要するのであって、もしそれが、ことがらの「実際」と調和するならば受け容れていいし、もし背馳するならば単なる「言論」に過ぎないと考えていいのである。

302
一行は黄ばんだ砂地に腰を下ろしたが、
岸辺には太陽と月が、西と東に懸かっていた。
祖国のことを夢みるのは何という楽しみか、
子どものこと、妻のこと、そして奴隷のことも。 しかし常に
一番うとましく思われたのは、海、そして櫂のこと、
味気なきあぶくの大海原をさまようのもうとましい。
おりしもある者が言った、「われらは帰国することはない」。
すると突然に一行は歌った。「われらが故郷の島は

はるか波の彼方にある。もうさまようのは止めにしよう」

合唱歌
咲きこぼれる薔薇の花びらが草の上に落ちるその音よりも
さらに優しく聞こえる調べがここにある、
また雲母の煌く山路、ほの暗い花崗岩の重なるなかを
音なき渓流に夜露の降りる音よりも優しく聞こえる調べが。
また疲れた瞼が疲れた眼に落ちかかるそのかそけさよりも
さらにかそけく魂に降りかかる調べが。そして
祝福満つる大空から甘き眠りを運ぶ調べが、ここにある。
ここなる苔は冷たく深く、
苔の上には蔦が広がる。
流れの中には葉の長い水草が揺らぎおり、
ごつごつした岩棚には芥子の花が眠るがごとく咲き静まる。

何ゆえにわれらは重荷で苦しむのか、
そして身を切るような悲痛ですっかり消耗してしまうのか、
他の万物が疲労から休息を得ているというのに?
万物には休息があるのに、何ゆえわれらのみ骨折るのか?
われらのみが骨折るのだ、万物の霊長であるというのに。
そしていつまでも、うめき苦しんでいる。
絶えず一つの悲哀からもうすつの悲哀へと投げ込まれ、
決して羽根をたたむこともなく、
さすらいの旅を止めることもないのだ。
またわれらの額を眠りの聖なる芳香の中に浸すこともなく、
内なる魂の奏でる歌声に耳を傾けることもないのだ。
「静穏の境涯なくして歓喜なし!」
何ゆえあくせくするのか、万物の霊長たるわれらのみが?

憎らしきはあの紺青の蒼穹よ、
紺青の大海に覆いかがさるではないか。
死こそ人生の終わりだ。ああ、何ゆえに
人生は苦労ばかりの連続なのか?
構わないでくれ。時はすばやく過ぎてゆく。
やがてわれらの唇も黙してしまう。

構わないでくれ。いったい何が続くというのか?
一切のものがわれらから奪われ、所詮われらは
恐るべき「過去」の一部分、一塊になるのだ。
構わないでくれ。邪悪と相争っても
何の楽しみがあるというのか? 山なす大波と
いつまでも闘って何の安らぎがあるというのか?
万物には休息がある。そして無言のうちに成熟し
墓場へと向かう。成熟し、落下し、そして命果てる。
与えてくれ、長き休息あるいは死を、暗黒の死を、あるいは夢みるごとき安楽を。

303
草原を越えていく光の軍隊
喜びの音楽を奏でる楽隊
バッカスの信者たちのように
乾いたタンバリンの音も聞こえる
コリュバスの馬車が来る前に
戦勝の祝いを盛り上げる

喜びの声を上げる
万能のバッカスをもてなす
遥か遠いインドへ
ギリシャの神々、牧羊神
日焼けした頬に見開かれた目
彼を連れ回すのは？
くびきを担いでヒンドスタンを越える
戦勝者の自負を持って
酒という優しい敵が忠告する
ディチュランボスのラッパを鳴らせと
川の流れは
行く先で道を沈める
多くの人が言うように
まだ見つからぬ戦死者たちを思って嘆く

304
感情を統御し抑制する上の人間の無能力を、私は隷属と呼ぶ。

民衆の一般の信念はこれと異なるように見える。なぜなら大抵の人々は快楽に耽りうる限りにおいて自由であると思い、神の法則の命令に従って生活するように拘束される限りにおいて自己の権利を放棄するものと信じているように見えるからである。そこで彼らは道義心と宗教心を、一般的に言えば精神の強さに帰せられるすべての事柄を、負担であると信じ、死後にはこの負担から逃れて、彼らの隷属―― つまり彼らの道義心と宗教心――に対して報酬を受けることを希望している。だがこの希望によるばかりでなく、特にまた死後に恐るべき責苦をもって罰せられるという恐怖によって、彼らは、その微力とその無能な精神との許す限り、神の法則の命令に従って生活するように導かれている。もしこの希望と恐怖とが人間にそなわらなかったら、そして反対に、精神は身体とともに消滅し、道義心の負担のもとに仆れた不幸な人々にとって未来の生活が存しないと信ぜられるのであったら、彼らはその本来の考え方に立ちもどつてすべてを官能欲によって律し、自分自身によりもむしろ運命に服従しようと欲するであろう。こうしたことは、人が良い食料によっても身体を永遠に保ちうるとは信じないがゆえに、むしろ毒や致命的な食物を飽食しようと欲したり、精神を永遠ないし不死でないと見るがゆえに、むしろ正気を失い理性なしに生活しようと欲したりする（これらのことはほとんど検討に価しないほど不条理なことである）のにも劣らない不条理なことであると私には思われる。

305

そこで、欲情や野心の満足にのみ汲々として、そのようなことのためにのみ労すること甚しい人にとって、その思いのすべてが、死すべき（地上的な）ものになってしまうこと、そしてまた〔その人自身も〕、およそ可能な限り、まったくの、死すべきものになり、その点で少しの不足も残さないことは、――何分にも、かれが、そのような性質のもの（死すべき部分）を増大させて来たのであってみれば、これは、どうにも避けられないことなのです。しかし、これに反して、学への愛と、真の知に真剣に励んで来た人、自分のうちの何ものにもまして、これらのものを鍛錬して来た人が、もしも真実なるものに触れるなら、その思考の対象が、不死なるもの、神的なるものになるということは、おそらくはまったくの必然事なのでしょう。さらにまた、こうした人が〔かれ自身も〕、およそ人間の分際に許される限りの、最大限の不死性にあずかることになり、その点で欠けるところは少しも残さないということも、そしてまた、そのような人は、何分にも、常に神的なるものの世話を欠かさず、自ら、自分の同居者なる神霊を、よく整えられた状態で宿しているのだから、かれが特別に幸福であるということも、おそらくは必然でしょう。

306

この世に生まれ、学ぶ事の喜び
何か他の者の意志に盲従するのではない
その鎧は、誠実な思想の現れ
明快な真実は、この上ない技術

その情熱は、教えられたものではない
その魂は、死に対しての心構えを持っている
この世界と一体になる
社会での名誉と、個人の生命において

307
いいなあ、そういう人間は、
情熱と理性が見事に調和しているから、
運命の女神の笛になって
いいなりの音を出すこともない。
激情の虜にならない男がいたら俺にくれ。
この心の中心に、心の奥底にしまっておこう。
君がその男だ。

308
われ自由を愛しながら、試煉に乏しく、
激情のままに身を委ねしにはあらねど、
自からの指導者となり、
あまりに盲目的に自信を持ち過ぎたり。

われ不規則なる自由に疲れ、
気まぐれなる欲望の重荷を感ずる。
わが希望はいまはた変ることなし、
われ常に変ることなき平静を求むる。

309
ああ、必ず愛さねばならないものを、意志の全き自由とやみがたい志しをもって、完全に、かつ自由に愛する人は、どんなにさいわいでありましょうか。

310
私の第三の格率は、つねに運命によりもむしろ自己にうちかつことにつとめ、世界の秩序よりはむしろ自分の欲望を変えようとつとめること、そして一般的にいって、われわれが完全に支配しうるものとしてはわれわれの思想しかなく、われわれの外なるものについては、最善の努力をつくしてなおなしとげえぬ事がらはすべて、われわれにとっては、絶対的に不可能である、と信ずる習慣をつけること、であった。そして、私をしてみずからが獲得しえぬものを未来に望まないようにさせ、したがって、私に満足を得させるには、う

えのことだけで十分である、と私には思われた。事実、われわれの意志はその本性上、なんらかのしかたで可能なものとして悟性が示すところのもののみを、欲するのであるから、もしわれわれが外なる善をすべて等しくみずからの支配しえぬものだとみなすならば、われわれの生まれつきに出来すると思われる善をわれわれがもたぬとしても、それをみずからの過失によって失ったのではない以上、あたかもわれわれがシナやメキシコの王国を所有せぬからとて残念がらぬと同じく、それを残念がることはないであろう。そしてまた、われわれが現在ダイヤモンドのように腐らぬ物質からできた身体をもちたいとか、鳥のように飛ぶため翼をもちたいとか望まぬのと同様に、われわれは諺にいうように「必然を徳に化する」ことによって、いま病気でありながら健康でありたいと思ったりせず、いま牢獄にいながら自由でありたいと思ったりしなくなるであろうことも確かである。しかしながら、あらゆる事物をこういう角度から見ることに慣れるためには、長い間の訓練と、たびたびくりかえされる思索とを、必要とすることは私も認める。そして私は、昔、運命の支配を脱して、苦痛や貧困にもかかわらず、神々とその幸福を競うことのできた哲学者たちの秘訣も、主としてここにあったのだと思う。というのは、彼らは自然によって彼らに課せられた多くの制限をたえず考察しつづけて、けっきょく、彼らの支配しうるものは彼らの思想しかない、ということを完全に確信するに至り、ただこのことによって、他の事物に対するあらゆる執着を脱しえたのだからである。しかし彼らはみずからの思想に対しては絶対的な支配権をもっていたのであって、この点では、たとえ生まれつきと社会的地位とにおいていかにめぐまれていても、この哲学をもたず、みずからの欲するところのすべてをけっしてそれほど自由に支配しえぬ人々のだれよりも、彼らがみずからを、より富んでおり、より有力であり、より自由であり、より幸福である、と考えたのは、もっともであつた。

311

私はあなたに感謝する、アンフィノースよ
あなたは父のように賢明で善良
老いたドゥリキオン島のニーソスのようだ
あなたは、三度、聞こうとしなかった
地上の全ての動くもの、息するものの中で
人間以上に不安定なものはいない
精神は元気でいる間は
病気など怖くないと言う
悪い事があると、
神が与えたものだと言って、苦しそうにため息をつく
私もずっと幸せでいられると思っていたが
節度を失った事で、
今ではご覧のとおりの様だ

312

健康のときには、もし病気になったらどういうふうにしてやっていけるのだろうと怪しむ。病気になったらなったで、喜んで薬を飲む。病気がそうさせるのだ。人はもう、健康が与えていたもろもろの情念や、気ばらしとか散歩とかの欲望を持たなくなる。そういうものは病気のときの必要とは両立しないものである。そのときには、自然が現状にふさわしい情念や欲望を与えてくれるのだ。われわれを悩ます心配というのは、自然ではなく、われわれが自分自身に与える心配だけなのである。なぜなら、その心配は、われわれの現に在る状態に、われわれの現にいない状態の情念を結合させるからである。

313
天気と私の気分とは、関係が少ない。私は私の内部に私の霧や晴天を持っている。私の仕事の成否でさえも、たいして影響しない。ときどき私は、運に抗して努力する。そしてそれを制御する光栄が私に喜んでそれを制御させる。それと反対に、私はときどき好運のなかで、いやがってみる。

314
私は、実現される希望が一つだけではないと知って、昔はそれ以上の事は望まなかった。私は、与えられた事のみを受け入れた。それはちょうど、私の部屋の窓に小鳥が訪れるように。私は小鳥に微笑みかけるが、小鳥には翼があり、またすぐどこかへ飛び去ってしまうのだと判っていた。叶わぬ願いを諦める事は、悲しくも甘美な事である。

315
喜びを従え
翼の生えた生命を壊す
しかし、彼は飛び去り行く喜びに口づけし
永遠の夜明けに生きる

316
われわれは、実に不幸で、一つのことを喜ぶにしても、それがまずくいった場合には、腹を立てるという条件つきでなければ喜べないのである。まずくいくことは、無数のことによってそうされうるし、常時そうされていることである。それと反対のまずいことで腹を立てることなしに、よいことを喜ぶ秘訣を見つけた人は、急所を見つけたのである。それは永久運動のようなものだ。

317
この地上に立ってさらに安らかに、人間らしい声で歌いたいのだ。
たとえ悪しき日々に沈淪していても、――たとえ悪しき日々と、
悪しき罵言雑言の中に沈淪し、暗黒の中にあって危険に囲まれ
孤独に苛まれていようとも、声だけは荒立てることなく、また

黙することなく歌いたいのだ！　孤独とはいえ、汝が夜毎に
私の眠りを訪れ、或は黎明が東の空を真紅に染める時、私は
独りではない。ああ、ウラニアよ、願わくは私の歌を常に
導き、たとえ僅かといえどもふさわしき聴衆を私に与え給え。
願わくは、バッコスとその狂宴の徒の、―― ロドペでトラキアの
詩人を八つ裂きにしたあの狂暴な一団の者の、野卑な雑音を
遠く退け給わらんことを。あの時、ロドペの森も石も彼の竪琴と
歌声に恍惚として魅せられていたにもかかわらず、荒々しい
喧騒のためにやがてそれも掻き消され、かの女神も己の
子であるこの詩人の命を守ることはできなかったのだ。
私は切に汝に希う、願わくは私の祈願を聞きいれ給え、と。汝は、
空しい虚構にすぎぬかの女神と違い、天来の方なのだ。

318

　至福は徳の報酬ではなくて徳それ自身である。

319

まことに、学問はきわめて有用で大いなる部分である。これを軽蔑する人々は、自分たちの愚かさを十分に立証している。けれども、私は、或る人々のようにそれほど極端に学問の価値を認めるわけではない。たとえば、哲学者ヘリロスは、学問のうちに最高善を認め、学問のうちにはわれわれを賢明にさせ満足させるものがあると考えているが、私はそうは思わない。また、他の人々は「学問はあらゆる徳の母であり、あらゆる悪徳は無知からから来る」と言っているが、私はそうは思わない。たといそれが真実であるにしても、それには長い解釈が要る。

私の家は、長いあいだ学者たちに対して開かれていたし、彼らからよく知られている。というのも、私の父は、五十年以上も家を治めてきたが、国王フランソワ一世が新たな熱意をもって文芸を愛好しこれを世に広めたのに刺激され、たいへんな心遣いと費用をかけて学識ある人々との交際を求め、あたかも神的な知恵から何か特別の霊感を受けた聖者のごとくに彼らを遇し、彼らの意見や所説を神託のように受けいれた。父は彼らを判断する力をもたなかっただけに、それだけ彼らを尊敬し、信仰した。事実、父は、その祖先たちと同様、文芸にかけては何の知識ももっていなかった。私は、なるほど彼らを愛好しはするが、彼らを崇拝しはしない。

320

哲学者は笑う、人々はこの幻想から醒めることはなく、馬鹿にされる恐れはないから。バイオリンの弦が取り除かれてしまったのに、まるで音楽が聞えるかのように、演奏とダンスを見ている物分りの良い観客と同

じことだ。舞踏病は内的感覚の異常だ、賢者は合理的世界に対する理性を持っている、経験に従い、喜んでこのような結論を述べる。このような狂気の劇場で、信念を保つためには、耳をふさぐだけでは不十分である。宗教的理念を失ってしまったものに対しては、この地上の宗教はどれも同じような働きしかできない。しかし、人間の法を忘れ、世界を理解したなどと主張するのは危険な事なのである。
笑う者が熱意を持つ事はあり得ない。なぜだろうか。熱意があれば、真剣である。真剣であれば、笑いは止むであろう。熱意を持つには、愛する必要がある。愛するためには、愛するものの存在を信ずる必要がある。知り、苦しみ、忘れ、与えることが必要だ。これは真剣な義務である。笑い続けることは、究極の孤立であり、完全なる利己主義の宣言である。人に益するためには、そのような態度を哀れみ、軽蔑せずに、誤りとして指摘すべきである。馬鹿なことだと！しかし、不幸なことだと！悲観的懐疑論、虚無主義は、反語的な無神論ほど冷淡ではない。暗いアハスヴェールスはこう言ったか。

慈悲心を失い
得体の知れぬ苦しみに震える
神聖であるかということではない
神が与えた人間性という名の復讐である

自分ひとりが救済されるより、苦しみ続けるほうが良い。

321
群れを離れて寂しい丘の上に腰を下ろし、崇高な思索に沈湎し、
摂理や予知や意志や運命について、――そうだ、定められた運命や
自由意志や絶対的予知について、高遠な理論を果てしなく模索し、
とどのつまり迷路に陥る者もいた。彼らは、なおその際、
善と悪について、幸福と窮極的な不幸について、激情と
冷静について、さらに、光栄と恥辱について、実に
きまざまな議論をつづけた。しかし、すべては、なんと
空しい知恵であり、似て非なる哲学であったことか！　それでも、
議論をしていると快い妖術にかかったようになり、暫くの間
苦痛や苦悩を忘れ、空しくともとにかく希望をいだき、
頑なな心をまるで三重の鋼鉄で覆うように強情な忍耐心で
鎧うこともできた。

322
禁欲主義とは、救いの無い状況に対しての急進的な考え方だ。混沌に対しては、周りを防護壁で守る必要がある。古くに築かれた城壁について、ゼノンは、見下ろすような情景の描写を残している。この壁はペルシ

アからの攻撃に備えたもので手に入る材料で急いで作られた。丸太を並べ、そしてそこに、普通の石を積み上げた。この壁は、今日もアテネの町の屋根を見下ろしている。ゼノン自身が寓話として語った内容である。

323
哲学が変化して悪くなった所は、精神には語りかけても、心に語りかける事が出来なくなった点である。精神は人間の一部であるのに対し、心は人間のすべてとも言える。充分理解されていないが、宗教を比べてみると、政治的観点において、哲学よりも受け入れられている。哲学よりも一般の人間に対して寄り添っている。なぜならば、宗教は頭ではなく心で神を愛せと人々に語るからである。ほとんどすべての個人は同様な、敏感で広大な心の領域に関わるものの、精神と呼ばれる不公平で狭い理性的な領域には関わらないからである。

324
歴史から判る事は、宗教と野蛮が混ざり合う場合、いつも宗教が勝つという事。しかし、野蛮と哲学が混ざり合う場合は、野蛮が目立つようになるという事である。言うならば、哲学は人間を意見の対立する二つに分ける。宗教は同じ原理の下にまとめる。このため政治と宗教は決して相容れない、対比がある。私流に言わせていただくと、すべての国家は天に錨を降ろした神秘の船である。

325
物理においては、自然の創造者に対する反論がある。形而上学においては、疑い、些細な問題がある。道徳と論理学には、政治の秩序、宗教の理念、財産を守る法律に対する大げさな反論がある。人間は世界をひっくり返すでもしないと、物事を作り直す事ができない。そして、自分たちがこの世界の中にいる事を忘れて、世界を支える柱をひっくり返してしまう。

326
善を諦めてしまう事もあるだろう。宗教心や道徳心は、私たちにお世辞を述べる程度に留まっている。人々の元気を奪い、うわべだけ善良にする程度でしかない。喜ばしくはあるが、弱々しい。真実はもっと凶暴なのである。困難な人生の中で、信念を持ち続けるために、福音書を読むのである。

327
しかし、とりわけ最大の誤りは、知識の最後あるいは究極の目的を誤るというか置きちがえるというかするということである。というのは、人が学問と知識の欲望をもつようになるのは、天性の好奇心と探求好きな嗜好のためのこともあるし、自分の心を変化とよろこびで慰めようとするためのこともある。また装飾や名声のためのこともある。才能と反論の勝利が得られるようになるためのこともある。そして多くの場合、利益と生活の手段のためのことがある。まじめに、自分の理性の才を真に働かせて、人の利益や利用できる

ためにしようとするためのものであることは、めったにない。知識の中に求めようとするのは、探求して落ち着かない精神を休ませるための寝台であるということのようである。あるいは、さまよい変わりやすい心が、あちこち散歩するための美しいながめのあるテラスみたいなものである。あるいは、また、高慢な心が、その上に立つためのりっぱな塔みたいなこともある。あるいは要塞や、見おろす有利な土地で、争いや競争のためみたいなところもある。あるいは利益や販売のための店みたいなこともある。そして、造物主の栄光と、人間の状態を救うための豊かな貯蔵所ではないのである。

328

労き疲れはてた心よ、労き疲れはてた時なれば、
きたれ　是非　善悪の網をぬけて。
笑え　心よ、また更に　灰色の薄昏にあって。
歎け　心よ、また更に　あさづゆのなかにあって。

329

私たちは、詮索好きな自己批判の精神を考える。私たちの心の中にまで入ってくる。彼は、冷たい目と長くて曲がった指をしていて心の部屋の暗い隅っこに座っている。老いた女性が絹や羊毛の衣服を引き裂くように私たちの存在を細かく破ってしまう。長く堅く曲がった指が、少しずつ私たちを壊していき、最後には、私たちはぼろ布の切れ端の山のようになってしまう。良い感情、深淵な思想、こういったものが前述のようにあら捜しされ、粉々にされ、冷たい視線を受ける事になる。歯のない口を開いて、いやらしく笑う。そして言う。「みろ、やっぱりただのぼろ布ではないか！」

330

永続的な努力を求めるところに、現代の道徳の特徴がある。苦痛な未来が、調和、平等、喜びをもたらす。たとえば、理想は隣人の清らかな自由ではない。悪者のヒドラとラオコーンとが戦う苦悩である。未来は飛び去った。成功し幸福な人間はもはやいない。天へ昇るものはいない。人間は地上のガレー船の漕ぎ手となる。港に辿り着くまでに、私たちはみな命を失う。モリエールは、合理的思考から合理性が消えたと言った。同様に私たちが信じている発展が、不完全さの見せ掛けを取り繕っているだけだという事もあり得る。そうなると未来を肯定的というより、否定的に捉える事になる。悪が少なくなっても善が無い。全体として不満であり、幸福ではない。辿り着く事のない目標をずっと追い続ける事になり、純粋な狂気であり、論理的ではない。出来もしない事への憧れであり、賢明ではない病的な行為である。

331

もし死ねば、私たちは生存を止める。もし真っ暗やみが
生命の短い閃光を永久に飲み込むのであれば、

ああ、人間よ、お前、偶然で、目的のない器よ、

このようにもし、根無し草であれば、
このように、お前の状態が実体のないものであれば、
立ち去って、お前の夢の重さを計れ。
お前の希望、お前の涙を、釣り合いおもりにせよ。
お前の笑いとお前の涙は、
それらのみを意味し、それぞれがお互いを創造したり、
報いたりするのにもっとも適している。なぜお前の心は
虚ろな善に対してうつろな喜びで歓喜するのか。
なぜお前は会葬者の頭巾の真下でお前の顔を覆うのか。
なぜお前の溜め息を、イメージのイメージ、
亡霊のような小妖精の亡霊、お前が暖かくあるいは冷たく
感ずるようなものであるお前の嘆きの声を無駄にするのか。
だが、もしお前がお前の影の自己のこのような費用のかからない影を
与えないとするならば、お前の利益は何か、それはどうしてか。
悲しめ、暮べ、どちらでもないようにせよ、求めよ、さもなくば、避けよ。
お前は何も理由なんか持っていないのだ。お前は何も持ちえないのだ。
お前は存在そのものが矛盾なのだ。

332
さびしい道を恐れおののいて歩き、
もう一度振り返って歩き、
それからは恐ろしい悪魔が、
すぐ後ろにくっついて歩いているのを
知っているので、

333
だが、それを恐れて、自然にたいする当然の貢物のように考えるのは、いくじのないことである。しかし、宗教的な瞑想の中には、虚栄心と迷信が混合していることもある。

たしかにストア学派の人たちは死をあまり高く評価しすぎ、準備を大げさにすることから、いちだんと死をおそろしいもののように考えさせたのである。

死ぬことは生まれることと同じように自然なことである。

334

自由の人は何についてよりも死について思惟することが最も少ない。そして彼の知恵は死についての省察ではなくて、生についての省察である。

335

人生の分かれ道、どちらを選ぶ？
市場に行けばいざこざが絶えず、商売は上がったり。
家事に、野良仕事。海難事故。
出掛けていけば、恐ろしい目にあう。
お金が無いのも心配。
嫁をもらって、心休まる事も無く
でも独り身はもっと寂しい。
子供が居れば、夫婦喧嘩のもと。
子供が居なければ、不具者と罵られる。
若い頃は馬鹿だった。
白髪が目立つ頃には頭が呆けてきた。
結論としてはどっちか。
生まれてこない方が良かったか。
生まれたならすぐに死ねば良かったか。

336

自らの道は自ら選べ
市場では朗らかさの中で、慎重な商売を。
家庭での休息、田舎の自然の美しさ、海の幸、
出掛けていけば栄光を掴み
金が無くたって、困るのは自分だけ。
嫁をもらって、家事はすっかり任せられる。
嫁が居なくても、気楽に暮らせばいい。
子供はかわいいもの。
子供が居なければ、心配の種が少ない。
若い頃は夢中で頑張り、
白髪が目立つ頃には尊敬されるようになった。
死ぬか生きるかなんて
突き詰めて考える事をやめれば、
人生は万事快調だ。

337

あなたは行って、喜びをもってあなたのパンを食べ、楽しい心をもってあなたの酒を飲むがよい。神はすでに、あなたのわざをよみせられたからである。
あなたの衣を常に白くせよ。あなたの頭に油を絶やすな。
日の下で神から賜わったあなたの空なる命の日の間、あなたはその愛する妻と共に楽しく暮すがよい。これはあなたが世にあってうける分、あなたが日の下で労する労苦によって得るものだからである。

338

疑問の余地のないことであるかどうかと思われるのであるが、他の何かよりも快楽を味わうことにいっそう快楽を得る人がいる。しかも、それにもかかわらず、それらを失ったり、それらを離れることに比較的煩わされることが少ない人である。

そして、哲学者たちの教義の大部分は、ものごとの本性に必要以上に臆病で、警戒心が強いように思われる。同様に、死の恐怖を治すといって、それを増大させている。というのは、人間の全生涯が死ぬための

訓練あるいは準備であるようにしたいと望むときに、それが恐ろしい敵であるようなふうに、人に考えさせずにおかない。

だから彼らは、人間の心を、あまりにも統一的で調和的であるようにしようとし、その心を乱す反対の動きを十分考えるように教えていないのである。その理由は、想像してみると、彼ら自身が、私的で自由な、人のことを考えなくてもよい人生行路に一生をささげた人間であったからである。

同様に、人間も、寛大さを破壊しないようにして、静穏さを得るようにすべきである。

339

シリアックよ。君の祖父は、イギリスの正義の女神、
シーミスの司る王座部の法廷で、わが法律を宣し、
著書でもそれを教えて、少なからず喝采を博した。
法令を、裁判でしばしば、曲た者がいたけれども。

だが今日は、われとともに、あとには悔いを残さぬ、
浮かれ心地で、深慮のうさばらしをするときめよ。
ユークリッドはお休み、アルキメデスもお預けだ。
スウェーデン王の軍略も、フランス王の政略もだ。

均衡を保って、人生を達観することを、早めに悟り、
どうするのが、真の善への、最短の近道かを知れ。
和やかな神は、あらぬことをもなすべき時を定め、

苦労性をとがめ給う。それの見かけはさかしらだが、
一日の上に、余計な重荷を、どっさり積みかさね、
神が気ばらしの一時を授けるとき、緊縮するからだ。

340

古典を学ぶ事で、この世界には、様々な事件の衝撃や、世論の変化の中で生き残った、真に偉大で素晴らしいものがある事が判る。強者にへつらう低俗な態度、出来たばかりの権力にへつらう態度から私たちを引き上げてくれる。私たちは、人間の思想、行動に、不死性をもたらし、すべての国のすべての世代に熱意をもたらす力が存在する事を感じる。
しかしながら、真に素晴らしい愛や、他に素晴らしいものがあるという信念を、自らの心の中に見出す事は難しい。

誰しも、自分自身の観念や目標という不誠実な水準に留まってしまう。教育を受けていない人は確かに、自分自身に対して、真剣さや心の強さを求める事はない。物事を観察したとしても、抽象化する力はなく、判断や意見の一般的な基準をもたない。近くばかりを見て、地平線に目をやる事はない。独学の特徴となるエゴイズムはこのようなところから生まれる。また、生来の思考の働きの悪さから、頑固な偏見や、子供じみたわがままな意見を生み出す。確信は出来なくても、自分の判断が正しいとする心理が働き、野蛮な提案へと変化し続け、最後の意見が正しいとする。一つ一つの連続した発見は、同じ光と証拠をもたらす。そして、新しい事実が古い仕組みをひっくり返す。この階級の人は考え方が一時的であり、正直で全体的な原理を求めてはいるが、頑固に礼儀を重んじる反面、自己矛盾から抜け出せないままでいる。

341

ロレンスよ、有徳の父の、有徳の令息よ。
田園は濡れ、道はぬかるむこのごろだから、
時おり、どこで出会って、そして厳寒の季節から、
収得しうるものをとり集め、そして炉ばたで、

陰気な一日をすごす手だてにしたら、よいだろうか。
時は、もっとなだらかに流れ、はては西風が、
凍てた土に息を新たにふきこみ、種もまかず、
紡ぎもせぬ百合や薔薇に、新しい装いを着せるだろう。

アタチカの風味に、酒をそえた、かるくて極上の、
どんな甘いご馳走が、ぼくらを楽しませるだろうか。
そこから起ちあがれば、タッチの巧みな笛の演奏か、

不朽の名曲や、イタリア歌謡をうたう美声を聞くだろう。
そうした娯楽を正しく判断し、合間にはさむ娯楽も、
度かさねる人こそ、思慮あさからぬものである。

342

沼辺にはいつも
葦をゆらす風の音が聞こえる
苔が地面を覆う
沼地の葬儀のように静かに
木の葉の音が音楽のよう
夜の風が鳴らしている

木の葉が落ちて
沼に波紋が広がるのが見える

しかし毎日、沼辺の事を
夢見心地で考える
過去の影が広がる
考えても意味の無い事
目を向けたときには消えている
蘇って来るたび心を満たしてしまう
魂の中で広い場所を占めてしまう
まるで嵐の日の雲のように

波の残りのようなものが
西の平原から伝わってくる
太陽が輝く
黄金の水が流れ落ちる滝のように
毎晩、僕は月を見る
寄せて返す雲の波
自然の中のものは見る間に大きくなる
季節が変わるたびに笑い声を立てて

しかし、これが僕に何の影響があるだろうか
僕が居なくても全ては進んでいく
僕にだって愛というものがある
心があり、両手がある
共に分かち合う
人生の闇も、苦味も
人の心の思いやりをもって
僕らは海へと漕ぎ出していく

343
西への道を見出そうと
怒りの門を通りぬけ　ひたすら
わたしは　わが道をいそぐ
甘美な慈愛がわたしの先頭に立つ

悔恨のやわらかな呻きをあげ
わたしは　夜明けを見る

剣と槍による戦いは
露のなみだに溶け
空高く蒸発する
太陽は　恐怖から解き放たれ
感激のやわらかな涙に濡れ
いま　空をのぼる

344

フリアエ

人間の心の内には恐れが残る、
心がむさぼり食った餌食が残る、――高潔の士は恐れる、
信じたくもないと思っていたものがみな真実だったことを――
「偽善」と「習慣」が、その精神を
様々な礼拝の神殿としたが、いまは廃れた。
それらのものは、人間の状態のために、よいことを考えだしもできない。
その上、できないことすらも分かっていないのだ。
善なるものは権力を欠き、ただ不毛の涙に咽ぶのみ。
力あるものは善を欠き―― さらなる悪しき欠如、――
智者は愛を欠く、――愛するものは知恵を欠く、――
このように、最善なるものみなが混乱し、悪となる。
強きもの、富めるもの、また、正しきものは多い、
だが、同胞が苦悩する中で、
何も感じぬように生きている―― 彼らにはしていることが分からないのだ。

プロメテウス

その言葉は、翼をつけた蛇の大群のようだ、――
だが、それを聞いて悩まされないものは哀れだ。

345

人間は最後には、今日のように美食とか、放蕩、傲慢、 自慢、妬みにみちた出世競争などといった冷酷な楽しみではなく、啓蒙と慈悲の偉業の内に喜びを見いだすようになる、これがはたして夢であろうか？　そんたはずはない、しかもそのときは間近であると、わたいは固く信じている。

わたしが思うに、この偉大な仕事はわれわれがキリストとともに解決するのだ。

わが国でもきっとそのようになるだろうし、わが民衆が世界に光を放ち、あらゆる人が「創設者の捨てた石が、いちばん大切な土台石になった」と言うにちがいない。嘲笑する人々には、こうききたいものだ。もしわれわれの考えが夢だと言うなら、あなた方はキリストに頼らず自分の知力だけで、いつ自分らの建物を建て、公平な秩序を作るのか、と。

実際、彼らはわれわれよりずつと浮世ばなれした幻想をいだいている。公平な秩序を打ちたてようと考えてはいるのだが、キリストを斥けた以上、結局は世界に血の雨を降らせるほかあるまい。なぜなら血は血をよび、抜き放った剣は剣によって滅ぼされるからだ。

346
仔羊よ　だれがおまえを創った？
だれがおまえを創ったか　知ってる？
おまえにいのちを与え　流れの側や
草原で　おまえに草をたべさせ
よろこびの着物　ふわふわと
つやのある　とても柔らかな着物を与え
どの谷をも　よろこびでいっぱいにする
こんなにやさしい声をおまえにくれた　そのかたを？
仔羊よ　だれがおまえを創った？
だれがおまえを創ったか　知ってる？

仔羊よ　わたしは知っている
仔羊よ　わたしは知っている
そのかたは　おまえと同じ名前だ
わたしは仔羊だ　と言われたから
そのかたは柔和だ　そのかたはやさしい
そのかたは　おさなごになられた
わたしは子供　おまえは仔羊
わたしもおまえも　そのかたと同じ名
仔羊よ　神さまのおめぐみあれ！
仔羊よ　神さまのおめぐみあれ！

347
愛はわれらを導びく誤まらざる光にして、
喜びはそれ自からの保證なるとき、
われらの生涯は静穏にして輝やかしく、
またわれらの生命は幸福ならん。

348
隣人、召使、子供、彼らが私を痛めつける。彼らもその事を苦しんでいる。イエス・キリストは、相手を納得させるときの説法でこのような原理を語っている。「あなたの敵を愛しなさい、あなたを罵る者を祝福しなさい。これが神の教えです。神の子であるならば、従いなさい」

349
口に尽せぬ　あわれさは、
恋ごころにぞひそむなる。
物を売り　物を買う衆庶
空の旅路をたどる雲、
吹いてはやまぬ寒き雨風、
薄鼠なる川を抱く
かげくらきはしばみの森、
わが恋する女の頭をおびやかす。

350
肉体の四肢が有機的個体においてあるその在り方の原理と同じ類いの原理を、理性的なものは、個々に存在するもののなかにあって、所有している。それは、もともと理性的なものが一種の協働をなすためにつくられたからである。

しかし、上のことがよりよくおまえの頭にはいるのは、こう自分に繰り返し言い開かせるばあいである。すなわち、「われは、理性的なものよりなる有機体の、手足である」と。そのばあい、「手足(melos)」のlをrに換え「われは部分（meros）である」というならば、おまえはいまだ心底より人々を愛しているのではなく、善行を施すことそのことが、いまだ端的におまえの心を悦ばせるにいたってはいない。おまえは依然としてそれを、義務のための義務としてなすのであり、おまえ自身の善をなすのだ、というふうには見なしていないのである。

351
人類だ、多くの魂が調和した一つの魂、

その本質は、それ自らの崇高な制御の力、
すべてがすべてに向かい流れゆく、川が海に向かうように、――
ありふれた行為も愛を通して美しいものとなる、――
「労役」「痛み」「苦しみ」は生命の森の緑の中で、
飼い馴らされた獣のように戯れる―― その優しさは誰が知ろう。

人類の意志の働きは、そのすべての卑しき想い、悪しき歓び、
自己中心の悩み、おびえ、取り巻くその衛星、
導こうにも無益だが、服従は素早い精神などを持ちながら、
大嵐を翼として疾走する船のようになる。だが、その船の舵は
愛が取る、転覆させることなどできない濤を突き進み、
生命の荒廃した岸辺に、その至高の権威をしっかりと認めさせてゆく。

万物は、いまや人類の力を認める。冷たい塊の
大理石と色彩の中を、人類の夢が通ってゆく、――
子らの着物を織る母親のきらめく糸、――
言葉は、とどまることを知らぬオルペウスの歌、
それはダイダロスのハーモニーで、
思想とその諸形式を支配する、さもなければ意味も形もなかったものを。

352
人を尊敬するためには、その人がどうであるかを忘れ、その人の中にある理想的なものを思い描く必要がある。正義で、誠実で、知的で、善良で、豊かな発想を持ち、高貴で、真正で、信頼すべき人、そして何よりも、私たちが魂と呼ぶものにあって、その神聖なるお手本。

353
夜は千の目を持つ
でも昼の目は一つだけ
日が沈み
明るい世界の光が消える

思考は千の目を持つ
でも感情の目は一つだけ
愛を失い
明るい人生の光が消える

354
兄弟たちよ、愛は教師である。だが、それを獲得するすべを知らなければいけない。なぜなら、愛を獲得するのはむずかしく、永年の努力を重ね、永い期間をへたのち、高い値を払って手に入れるものだからだ。必要なのは、偶然のものだけを瞬間的に愛することではなく、永続的に愛することなのである。偶発的に愛するのならば、だれにでもできる。悪人でも愛するだろう。

兄弟たちよ、人々の罪を恐れてはならない、罪あるがままの人間を愛するがよい、なぜならそのことはすでに神の愛に近く、地上の愛の極致だからである。神のあらゆる創造物を、全体たるとその一粒一粒たるとを問わず、愛するがよい。木の葉の一枚一枚、神の光の一条一条を愛する事だ。動物を愛し、植物を愛し、あらゆる物を愛するがよい。あらゆる物を愛すれば、それらの物にひそむ神の秘密を理解できるだろう。ひとたび理解すれば、あとはもはや倦むことなく、日を追うごとに毎日いよいよ深くそれを認識できるようになる。そしてついには、もはや完璧な全世界的な愛情で全世界を愛するにいたるだろう

355
ああ、幸せな生き物たちよ、どんな言葉も
その美しさを表すことができないだろう。
湧き出る愛の情がわしの心の奥から迸り出た。
わしはやつらをいつの間にか祝福したのだ。

356
〈気高い予言の女神よ、〉と　わたしは言った、〈どうか女神よ、
あなたがそれを快しとなさるなら、わたしの心の曇りを　浄め去ってください――〉
〈何人も　この高さには登り得ません、〉と　その影は答えた、
〈この世の悲惨を　みずからの悲惨とし、
そして　それらを休めしめぬ人々でない限りは。
この現世に　安息の土地を見出だし、そこで
思慮もなく日々の惰眠をむさぼるような　ほかの者はみな、
もし偶然にも　この神域に入るとしても、
そなたが半ば死にかけた舗道のうえで　朽ち腐るのです。――〉
〈この世界には　幾千もの人々がいないでしょうか、〉
　わたしは言った、その影のやさしい声に励まされて、
〈よしんば　身は死に至っても　かれらの同胞を愛する人々、
この世の巨大な悩みを感じる人々、
そしてさらに、あわれな人類の奴隷のように、

人間の善のために尽くす人々が。わたしは　確か　ここで他の人々を
見るはずだのに、だがわたしは　ただ独りなのです。〉

〈そなたの語る人々は　夢想家ではない、〉
と　その声が答えた――〈かれらは　か弱い夢想家ではなく、
かれらは　人間の顔のほかには　驚きを求めず、
楽しい調べの声のほかには　音楽を求めない――
かれらはここへは来ない、来ようともしないのです――
そして　そなたがここへ来たのは　かれらよりも小さいからです――
この偉大なる世に、そなたや、そなたのすべての同胞は
どんな至福をなし得るでしょうか。そなたは夢みるもの、
おのれの詩情に身を焦がすものです―― この地上のことを想いなさい。
希望のなかにさえ　どんな至福がそなたのためにあるのでしょうか。
どんな安息の地が。どの人もみな　家をもち、
それぞれみな　悦びと苦痛の日々を背負っていまず、
その日々の努めが　高くとも　低くとも――
苦痛だけ、悦びだけが明白なのです。
ただ夢想家だけが　おのがすべての日々を、罪にふさわしいよりも
さらに多くの悲しみに耐えて、苦味のあるものにするのです。

357
もし他人の悪行がもはや制しきれぬほどの悲しみと憤りとでお前の心をかき乱し、悪行で報復したいと思うにいたったなら、何よりもその感情を恐れるがよい。そのときは、他人のその悪行をみずからの罪であるとして、ただちにおもむき、わが身に苦悩を求めることだ。苦悩を背負い、それに堪えぬけば、心は鎮まり、自分にも罪のあることがわかるだろう。なぜなら、お前はただ一人の罪なき人間として悪人たちに光を与えることもできたはずなのに、それをしなかったからだ。光を与えてさえいれば、他の人々にもその光で道を照らしてやれたはずだし、悪行をした者もお前の光の下でなら、悪行を働かずにすんだかもしれない。また、光を与えたのに、その光の下でさえ人々が救われないのに気づいたとしても、いっそう心を強固にし、天の光の力を疑ったりしてはならない。かりに今救われぬとしても、のちにはきっと救われると、信ずるがよい。あとになっても救われぬとすれば、その子らが救われるだろう。なぜなら、お前が死んでも、お前の光は死なないからだ。行い正しき人が世を去っても、光はあとに残るのである。人々が救われるのは、常に救い主の死後である。人類は予言者を受け入れず、片端から殺してしまうけれど、人々は殉教者を愛し、迫害された人々を尊敬する。お前は全体のために働き、未来のために実行するのだ。決して褒美を求めてはならない。なぜなら、それでなくてさえお前にはこの地上ですでに褒美が与えられているからだ。行い正しき人のみが獲得しうる、精神的な喜びがそれである。

あらゆる人を愛し、あらゆるものを愛し、喜びと熱狂を求めるがよい。喜びの涙で大地を濡らし、自分のその涙を愛することだ。その熱狂を恥じずに、尊ぶがよい。なぜなら、それこそ神の偉大な贈り物であり、多くの者にではなく、選ばれた者にのみ与えられるものだからである

358
私の覚えている一軒の家　そこではみんな私にやさしかった
私がそんなことをしてもらえる人間でないことは　神様がよく御存知のはずだのに
はいって行くとすぐにかぐわしい香りが漂よい
どうもそれはどこかの木から摘んできたばかりの　美しい花から漂ってきたものらしい
そのようにあたたかい雰囲気が　そのやさしい人たちをまるで頭巾のように
すっぽりとくるんでいて　それはちょうど親鳥がその翼で卵を抱き
またおだやかな夜が　春の若芽をそっとはぐくんでいるようでもある
そうだ　それはごくあたりまえのこと　当然のことのように思えたのだ

森も水も映谷も美しく　また
ウェールズの世界をつくりあげているものの
すべてを包んでいる空気もみんな美しい
霊魂を愛したもう　隣れみをもってもろ人を計りたもう神よ
あなたの慈しみたもう被造物の　おお　足らざるところを補いたまえ
あなたは力強い支配者で　同時に情けある父親なのだから

359
確かに私たちは幸せな日々を過ごしたことがある、
聖なる鐘の音に誘われて教会へ通ったし、
立派な人の宴席に招かれもした、清らかな憐みの情から
涙を流し、そのしずくをぬぐったこともある。
だから穏やかな気持ちで腰を下ろし、
ここにあるものは何でも存分に取りなさい、
君の必要を満たすために出されたと思っていい。

360
愛というものは、暖かな日差しの中にあるのではないか
でも、彼は月光の中に生きている
愛というものは、昼間の温かさの中にあるのではないか

しかし、甘美な愛は、夜の慰めである

他者の悲しみの中に
他者から受けた優しい慰めの中に、愛を探す
夜の暗闇、冬に積もる雪の中へ
着るものもなく追い出された、そこに愛を探す

361
裸一貫の惨めな者たち、お前らもどこかで
この無慈悲な横殴りの風雨をじっと耐えているのだな。
頭を隠す家もなく、飢えた腹を抱え、
風が通り抜ける穴だらけのぼろを纏い、どうやって
こんな悪天候から身を守るのだ？　ああ、今日まで俺は
こういうことにあまりにも無関心だった。栄華に奢る者にはいい薬だ。
悲惨な者たちが感じていることを、生身をさらして感じ取れ。
そうすれば余分なものは振り捨て、貧乏人に分け与え、
神々の正しさを世に示すことになる。

362
昨夜は夜通し吹き荒れていた、
篠つく雨は土砂降りとなったが、
晴れ上がった今朝の陽は燦々と輝き、
かなたの森では鳥が囀る。
野鳩は甘い自らの声に聞きほれ、
カケスはカササギの歌声に応え、
大気は一面に快いせせらぎの音で満たされる。

陽を好むすべてのものは戸外にあり、
空は朝の始まりに歓喜し、
草は雨滴に輝く。荒野では
野兎が喜々として駆けめぐり、
その足でもって水を含む大地から
靄を蹴上げる。靄は陽を浴びて
駆けめぐる、野兎の行くところどこであれと

そのときわたしは荒野の旅人であった、
野兎が喜々として駆けめぐるのを見た、
森と彼方の流れとが轟くのを聞いた、
いや、幼子のごとく喜悦に浸り、聞こえてはいなかった。
心地よい季節は私の心を領有し、
不快な古い記憶はことごとく、
空しくも心塞ぐ人の生きざまとともに忘れ去られた。

だが、よくあることながら、高みの
極みまで昇りつめた喜びは、
喜びの極みに極まるにつれ、
失意のどん底に深く沈みこむのだ、
まさにその朝のわたしの心のように。
恐れと杞憂がどっと押し寄せたのだ、
漠とした悲しみ―― あてどもない、未知の、名もない思い。

雲雀が空で囀るのを聞き、
遊びまわる野兎のことを思った。
私はまさにこの世の幸せな子、
これら祝福された生きもののように私は歩む、
この世を離れ、憂いからも離れ。
しかしわたしにはべつの運命が訪れるやも――
孤独、心の痛み、苦悩、そして貧困が。

わたしはこれまで人生を楽しい気持ちで生きてきた、
まるで人生の営みは夏の気分であるかのように。
必要な物すべてが求めずして手に入るかのように、
生まれながらの善に充ち充ちた快活な信仰に対しては。
だが自分のためにどうして他人がなりかわって
家を建て、種蒔きをし、求めに応じて
愛してくれるだろう、自分自身が気配りもしないでいて。

わたしはチャタトンのことを思った、あの天才児、
人生の盛りに逝った休むことのない魂。
また別の詩人、栄光と喜びのうちに

山辺に沿って鋤を押して歩んだ詩人のことを。
わたしたちは自らの精神によって神にもなる。
わたしたち詩人は喜々として青春へと旅立つ、
だがやがては失意と狂気とが待ち受けている。

それは妙なる恩寵によってか、
天の導きによってか、天の賜物によってか、
この鄙びた場所で起こったことだが、
御し難い思いとの葛藤のさなかに
陽にさらされた池のほとりに
見るともなく目の前に現れた一人の男。
かつて見たこともないほどに老い果てて。

ときおり巨岩が横たわっていることがある、
剥きだしの山の頂上に。
それは見る者すべてにとっての驚異、
いかにして頂上に到ったのか、そしていずこから。
かくして岩は感覚を賦与されたかに見える、
這い出してきた海の動物、岩棚か
砂地で憩い、陽に浴す生き物であるかに。

それこそが老人の姿、全くの生でも死でもなく、
全くの眠りでもない、老齢の極致。
体は二つに折れ曲がり、足と頭とが
つかんばかりなのは、人生の巡礼の果て故のこと。
まるで恐ろしく押えがたい苦痛が
古傷の病の激しい発作が
人として耐えがたい重荷を身体に負わせたかに見えた。

手足も、体も、青い顔も、全身を
木を削って作った長い灰色の杖にもたせかけ、
わたしがゆっくりとした足どりで近付くのにつれ、
荒野の池の端に身じろぎもせず、
佇む老人はまるで雲のごとくに、
風が声高に呼びかけても応ぜず、

動くとなればどっと動く雲のごとくに。

この池に老人が来たのは
蛭を集めるため―― 老いて貧しく。
危険に満ち骨の折れる仕事。
これまでに耐えた数知れぬ苦難。
池から池へ、荒野から荒野へとさすらい、
神の御恵みによりここかしこと一夜の宿を得て、
かくして暮らし向きは正直一途。

かたえに佇み語り続ける老人の声はいまや
耳に残ることなく流れ去るせせらぎのごとく
一語一語が聞き分けられることもなく
老いたるその人の姿すべてが
かつて夢の中で出逢った幻であるかのごとく
はたまた遥かかなたの国から遣わされて
私を諫め鼓舞する人であるかのごとく。

またも甦る杞憂、心塞ぐ恐怖、
ふくらむことを拒む希望、
寒さ、痛み、苦役、すべての肉体の病、
悲惨な死を遂げた偉大な詩人たち。

うら寂しいその場所も、
老人の姿も、その声も、私の心をかき乱した。
私の心の中に映し出された老人は
荒れ果てた荒野を歩み続け、
ただ独り黙々とさすらう。
私は内心の思いを追い求めていたが、
老人は間を置いてのち語り続けた。

老人の告げる四方山の話の数々は
快活にして心優しくも威風堂々たる
物腰で語られた。老人が話し終えたとき
私はわが身を嗤うこともできたはずだ、

老い果てた老人に確固たる心を読み取るわが身を。だが
私は言うた――「神さま、強固な助けと支えとなり給え、
私は寂しき荒野の老人のことを心にとどめます故に。」

363
メグ婆さんは　ジプシー女、
荒野が原に　住んでいた。
寝床は茶いろの　枯れ芝生、
住むに家なき　露の宿。

黒い苺が　彼女の林檎、
えにしだ本の実が　葡萄のかわり。
白い野薔薇の　露が酒、
寺の墓石が　読み書き手本。

嶮しい山が　兄さんで、
落葉松林が　姉いもと。
大きな家族を　相手に独り
好きなことして　日を送る。

朝めし食べぬも　幾そたび、
昼めし食べぬも　幾そたび、
晩めし抜きの　ひもじさは
月をにらんで　痩せ我慢。

それでも毎朝　あたらしい
忍冬編んで　花束つくり、
夕べ来たれば　小暗い谷の
いちい綾織り、あとは歌。

それから老いた　鳶いろ指で、
燈心草の　ござを編み、
林のなかで　行き会った
小作男に　恵んでやった。

男まさりの　メグ婆さん
マーガレットか　アマゾンか。
おんぼろ赤毛の　外套まとい、
経木の幅子を　ちょとかぶる。
神よ　老骨を休ませたまえ！
彼女はとっくに　死んだのだ！

364
鋤、種を入れる籠、くびき、光る鍬の刃
鎌は切れ味良く研がれ
馬鍬、牛追い棒、鋭い大鎌で刈る
一日働けば、納屋がいっぱい

使い慣れた道具も今やこの手に重く
老いたパルミスは不死のレアに言う
種を撒いて育てる事に一生懸命だった
この仕事を八十年続けてきた

太陽の下で一世紀近く
荒地を耕して
他に楽しみもなく、後悔する事もなく

今ではすっかり疲れ果てた
いつか土の中で眠る日が来る
暗い空に嵐が吹きすさぶ、エレバスの土の中に

365
夏の朝、四時、
愛の睡気がなほも漂ふ
木立の下。東天は吐き出だしてゐる
楽しい夕べのかのかほり。

だが、彼方、エスペリイドの太陽の方、
大いなる工作場では、
シャツ一枚の大工の腕が

もう動いてゐる。

荒寥たるその仕事場で、冷静な、
彼等は豪奢な屋敷の準備
あでやかな空の下にて微笑せん
都市の富貴の下準備。

おゝ、これら嬉しい職人のため
バビロン王の臣下のために、
ヴェニュスよ、偶には打棄るがいい
心驕れる愛人達を。

おゝ、牧人等の女王様！
彼等に酒をお与へなされ
正午、海水を浴びるまで
彼等の力が平静に、持ちこたえられますやうに。

366
まずしい男があばら屋に愛を見つけた
森と小川に導かれ
星空の静けさの下で
寝るのはいつも、丘の上に一人

彼は部族の生来の高貴さを持っている
復讐や残酷な考えとは無縁
いつも変わらず高遠な場所にいる
逆境が知性を育てるのである

367
本当の幸福は苦難を乗り越える中で、さらに素晴らしいものへと変わる。
苦しみがなければ、楽ではあるだろうが、幸福を得る事は難しい。
人が他人に与えられるのは、自分の持つものである。
人生を生かすには、人生によるほか無い。
私たちが他者に与えるべきは、乾きや空腹ではなく、パンや果実である。

368
さらば、さらば、だが、つぎのことだけは
言っておかねばならぬ、婚礼の客よ。
人をも、鳥をも、獣をも、
よく愛する人は、よく祈る人なのだ。

大きなものも小さなものも、すべてのものを、
よく愛する人は、よく祈る人なのだ。
なぜなら、わしらを愛し給う神は、
わしらを造り給い、わしらを愛し給うからだ。

369
「でも君　言ってごらん　好きなものを　何を買ってあげよう？」――
「神父様　あなたの買って下さるものなら何でも大好きです」
いともやさしげにその子は言うのだが　しかし何度も繰り返し聞かれると
最初の慎重な内容の答えをまた返してくるのだ

何という心だろう！　まるで放たれた伝書鳩のように――
暗闇を取り去ってさえやれば　あとは帰巣本能というものがある――
だから　その心は自然で　おのずからなるそのすぐれた機能に従って
その方法と理由とを　もう十年も前から知っていたように　正しい道にふんわりと舞い戻ってくる

見目よい顔立ちにもまさる折目正しい心――
それは美しい態度よりも　昇り行こうとする精神の傾きよりもまさっている
しかしこの場合　すべていと高きところにある聖なる恩寵の恵みに浴している．．．

君　どんな贈物を天から買ってあげようか　それとも　お金では買えない
ごほうびにしようか！―― ただ．．．君が歩いているその道を
一生の間　たどって行ってほしいのだ　ああ　その気持をもっときびしく引き締めて！

370
その記憶は度々、私の中によみがえる
彼女は私の口にフルートをくわえさせ
喜ぶ私をひざに乗せ、胸元に抱き寄せる
ライバルたちから抜き出て勝者となる

不慣れでおぼつかない私の唇
美しく清らかな息を聞かせる
手馴れた手つきで小さな指を取り
上げたり下げたり二十回
まだ幼いけれど
指の押さえ方を繰り返し教えてくれる

371
黄金の門の向こうには寺院がある
神の手によってその門が開かれる
脅かされる事も無く静かな場所
しかし、何万もの人々が訪ねてくる
最初の日の出のように新しい
楽園のヒバリを呼び覚ます

汚れや疲れと共に
毎日の生活がある
小さな印、小さな土塊
その壁に残されている
天使の涙が優しい雨のよう
そこに各々の寺院が作られる

疲れ古びたこの世界を離れ
神聖な力を持つ扉を入っていく
時の流れが巻き戻される
そこには宗教も年令もない
全ての人間の心が
大きな共同体の中に優しく通い合う

私は門をくぐり、素朴な喜びの中へと入る
そこにあるのは、香木の煙や、彫刻に飾られた王座ではなく
清々しい朝の空気
優しい女性が、一人座っている
それは私の母、ここで会うべき人
ここで救済される、あなただけが

372

このような人々がいる。悪行を避け、悪意への復讐を避ける。幸福な未来を信じて耐える。生活する中で、数々の困難に疲れても、争いの中で生き残る事を望む。数々の誘惑を見通している。他者に対して悪意を持たず、騙されても耐えるのみ。なぜならそこに、神の慈悲と許しがあるから。従順であり、その人の人生は永続する真の愛である。争いではなく、希望によって、王国を掴み取る。そこに心がかしづいている。ただ神のみが喜びの主である。その他の何ものでもない。悲しみの中に見出される。憐れみを受けずとも、その先までもたらされる。悲しみ、抑圧の下にあって、不平を述べる事もない。喜びはなく、苦しみがあるのみ。世界の喜びの中で死んでいく。彼らのみが、見捨てられている。私の知っているこのような人々は、この地球上の荒れた土地に隠れ住む。彼らは死によって復活し、永遠の神聖な命が得られると考えている。

373

その人について聞かせて
門の所までやって来た
喜びの真珠は壊れてしまった
大きく白い柱の間から
死に行くものが見たのは
玉虫色に色彩を変える海
水晶のように柔らかな光

遠い楽園
手をつないで踊る天使たち
赤い翼を広げて降りてくる
大きく広がる
頭上いっぱいの甘く芳しい香り
音楽を奏でるよう
リュートの音色の代わりに

その街について聞かせて
小さな汚れ一つ無い
赤く燃える、ガラスよりも透明
偽りなき聖職者の場所
聖蜀の日には
ろうそくの本数に糸目をつけない
訪れた魂をもてなすために

騎士と婦人が集う場所
若く誇らしいその名前
力強い賛美歌の歌声
街の通りに響き渡る
巡礼者たちの手に
平和がもたらされる
この美しい神の街で

聖母メアリーが行くところ
銀色の百合の花が咲く
星や月が疲れて眠る
セシリーのいるところ
緑色のドロシー
真っ白なマグダレン
清らかなクイーン

歩みを止めて歌い続ける
神々の寺院に
香木の芳しい香りが立ち込める
涙を湛え
悲しき年月を
耐え忍び、畏れる
女性たちの泣き声

彼は座っている
その髪は紫色に輝く
その瞳は深く
すべてに公正である
これまでも、これからも
その真実の総体に
小さな祈りが加えられる

世界がこのようであると
わが殿下が示してくれる

ササナスから守られるよう
彼の友愛が
喜びの場所へと連れて行く
私たちの場所に夜明けが訪れ
神の姿を目にすることが出来る

374
辿り着いたのが、喜ばしき場所、心地よい緑が満ちた
浄福の森、幸福な住まいであった。
ここでは、上空がより広く、緋紫の光で野を
包み、住人は自分たちの太陽、自分たちの星を知っている。
芝生の格技場で体を鍛える者がある。
試合をして競い、黄土色の土俵で組み合っている。
足で拍子を取って踊る者、歌を歌う者がある。
裾の長い衣をまとつたトラーキアの神官も
調べに合わせて七つの音階を弾き分けている。
同じ音階をいま指で弾いたと思うと、今度は象牙の撥で響かせる。
ここには、その音にテウケルより生まれた美しい一族がいる。
よりよき時代に生まれた雄々しい英雄たち、
イールス、アッサラクス、トロイアの祖ダルダヌスだ。
アエネーアスは遠くから、この勇士らの虚ろな武具と戦車に驚嘆する。
槍は地面に突き立てられ、そのまわりで、ゆったりと
馬が野原の草を食べている。かつて命あるあいだにあった
戦車と武具への愛着と、艶のよい毛並みの馬たちに
草を食ませる心配りとを、大地に葬られたあとも変わらず抱いている。
見よ、そこで目にする他の者たちは、右にも左にも、草の上で
食事をしたり、喜ばしきアポロ讃歌を合唱したりしている。
この場所を囲み、月桂樹の芳香漂う森がある。そこから地上に向かって
エリダヌスの滔々たる流れが木々のあいだをうねっている。
ここには、祖国のために戦って負傷した一団がいる。
存命中には清らかな身の神官であった者、
敬虔なる予言者にしてポエブスにふさわしいことを語った者、
あるいは、技芸を編み出して人生に潤いを与えた者、
人々に尽くした功により記憶に留められた者など、
これらすべての霊が額に雪白の髪留めを巻いている。

この者たちがまわりに群がってくると、シビュラはこう語りかけた。
この言葉は、とりわけてムサエウスに向けられた。大群衆の中央に
彼がいて、肩の高さが見上げるほどに他に抜きん出ていたからだった。
「教えてくれ、幸福な霊たちよ、そなた、最良の予言者よ、
どのあたりに、いまどこにアンキーセスはいるのか。彼に会うためだ、
われらがエレブスの大いなる流れを渡って、ここへ来たのは」。
すると、これに答えて、言葉少なに英雄はこう言った。
「誰にも決まった住まいはない。われらは木陰濃い聖林に住み、
川岸の寝床と、小川の流れもみずみずしい草原に
暮らす。しかし、そなたらの心がそのように欲するなら、
この尾根を越えて行け。すぐそこの平坦な小道まで送ってやろうから」。
こう言うと、彼は先に立って進み、輝く野原を
眼下に示す。こうして一行は山の頂をあとにする。

さて、父アンキーセスは、緑なす峡谷の奥に
閉じ込められたのちに地上の光のもとへ旅立つ定めの霊たちを
一人一人入念に確認していたが、このときは身内の者たちが
すべてそろっているか点呼して、大切な子孫たち、
勇士たちの運命と運勢、品性と手腕を見ていた。
そこへ、草を分けてこちらに向かってくる人影を見た。
アエネーアスだった。気の逸るまま両手を差し伸ばした。
その頬には涙が溢れ出し、こぼれ落ちるように言葉が出た。
「ついにやって来たのか。おまえが期待どおり、父を
敬う心で非情な道を乗り越えたのか。おまえの顔を見ることができるのか
息子よ、懐かしい声を聞き、答えることができるのか。
こうなることを心に画し、算段して、
その日を指折り数えていたが、その心労の甲斐があった。
おまえは、なんという地平、どれほどの海を越えて、いまわたしに
迎えられることか。息子よ、なんという危難がおまえを翻弄したことか。
わたしはどれほど恐れたろう、リビュアの王国がおまえを害さぬかと」
アエネーアスは言った。「父よ、あなたの悲しげな幻こそがわたしの前に
何度も現われては、この住まいを目指すよう仕向けました。
艦隊はテュレーエアの海に停泊しています。お手を握らせてください。
お願いです、父よ。わが抱擁からすり抜けないでください」。
こう語るうちにも、溢れる涙が顔を濡らしていた。

その場で三度、首に腕をまわそうと試みたが、
三度とも、空しく幻は抱き留めようとした手をかいくぐった。
それは、そよ風のごとく、翼ある眠りにもよく似ていた。

そのあいだにも、アエネーアスの目に入るは、谷あいの奥に
他から隔絶した森、木々が葉音を立てる茂み、
平安な家々の前をゆったり流れるレーテの川。
この流れのまわりには無数の民族と市民が飛び交っていた。
それはあたかも、晴れ渡る夏の日に草原を飛ぶ蜜蜂のよう。
色とりどりの花の上にとまっては、純白の百合の
まわりに群がるとき、野原のいたるところに羽音が響く。
突然にこの光景を目にして、わけを尋ねる
アエネーアス。彼は知らなかった、向こうのあの川が何か、
これほどの大群で岸を満たす人々が誰かを。
父アンキーセスが言った。「この霊たちは、運命により、もう一つの
肉体を授かる定めであるゆえ、レーテの川波のもとへ行き、
懊悩を漱ぐ水と長い間の忘却を飲むのだ。
わたしはこれらの霊のことをおまえに語り、目の前に示すこと、
これら、わが一族の子孫を数え上げることをずっと以前から望んでいた。
おまえと分かち合うイタリア発見の喜びはいっそう大きいであろうから」。
「父よ、では、ここから地上に向かう霊もあると考えるべきなのですか。
崇高な霊魂がふたたび鈍重な肉体へと戻るのですか。
なんと哀れな。それほど忌まわしい命の光への欲望とは何でしょうか」。
「言って聞かせよう。息子よ、おまえを不安なままにはしておかぬ」。
アンキーセスは語り始める。順序を踏んで、　一つ一つ明らかにする。
「そもそも、天と地、潤いある野原、
月光の輪、ティータンの星、これらを
養うのは内なる霊気だ。精神が体内に浸透したとき、
巨軀全体が動きだす。精神が巨大な外形と融合するからだ。
じつにここから生き物が生まれる、人間も、獣も、鳥も、
海が滑らかな水面の下に育む奇怪なものたちも。
火と燃える活力と、天に発する起源をこれらの
種子はもつ。ただ、肉体が阻害するため、そのすべては発揮できない。
地上の体軀、死すべき四肢が動きを鈍らせるのだ。
このために、恐れ、欲望、痛み、喜びを覚える一方、天空を

見分けられぬまま、牢獄の暗闇に幽閉されている。
それどころか、最期の光とともに命が去ったあと、
なおまだ哀れにも、根本から、悪のすべて、すべての
肉体的病疫が抜け落ちることはない。どうにも仕方のないことなのだ、
長い間に多くの悪がこびりつき、驚くほど染み込んでしまうのは。
それゆえ、罰の苦しみを受ける。過去の悪行の
償いを支払うのだ。虚ろな身を広げて
吊られ、風に吹かれる者もあれば、深淵の底で
罪の汚れを漱ぐ者、あるいは、火で焼き落とす者もある。
われわれは各自の霊魂に応じて耐え忍ぶ。そののち、広大な
エリュシウムへ送られる。わずかな者のみが喜びの田野に達する。
そうして、ついには、長い歳月を経て、時のめぐりが満たされ、
こびりついた汚れが落ちると、あとに残るのは純粋な
高天の感性、単一な天空の火だけとなる。
このような霊はすべて、千年のあいだ時の車輪を回したのち、
レーテの川岸へと神に呼び出されて大群衆をなす。
もちろん昔の記憶はない。そうして、地上の蒼穹への再訪を
繰り返す。肉体へと戻る欲望が芽生える」。

夢の門は二つある。　一つは
角の門で、真実の亡霊なら容易にそこから出て行ける。
もう一つは白い象牙を光沢豊かに仕上げてあるが、
この門から下界の霊が偽りの夢を地上へと送っている。
アンキーセスは、このことを話してから、そこまで息子とシビュラとを
見送り、象牙の門から送り出す。
アエネーアスは道を急いで船まで行き、仲間たちに再会する。
それから、まっすぐにカイエータの港へ向かう。
舳先から錨が投げられ、船が岸に並ぶ。

375
これらの河のはるか彼方に、忘却の河レーテが
静かにそしてゆるやかに流れていたが、その流れは、
幾重にも曲りくねって漫々たる迷路を形づくっていた。
誰であろうと、この河の水を飲んだ者は、直ちに、今までの
状態と生活を忘れ、喜びも悲しみも、快楽も苦痛も忘れる

といわれている。この河の逢か遠い彼方には、荒涼無残な
大陸が、凍りついたまま黒々と横たわっていた。そこでは
颶風が絶え間なく吹き荒び、恐るべき霰も激しく
降りそそいでいた。この霰ときたら、固い地面に降っても
溶けるどころか、かえって固く積もる一方で、見たところ
古代建築の廃墟さながらであった。その他の所は、ただただ
深い雪と氷に閉ざされた世界であり、底知れぬ深淵であった。
それは、全軍がことごとく呑み込まれたという、ダミアタと
古来有名なカシオス山のちょうど中間にある、あのセルボニスの
沼さながらであった。そこでは焼けつく空気が凍てつくように
燃えており、寒さが火の役目を果たしていた。そこはまた、
すべての呪われた者が或る一定の周期毎に怪鳥の爪をもった
復讐女神たちに引きずられてやってきて、恐るべき極端から
極端への痛烈な変化を（それはまた変化によっていっそう恐るべき
極端となるのであったが）かわるがわる味わされる、―― つまり、
猛り狂う焔の床から一転して氷の中に引きずり込まれ、その
柔らかな天来の肌のぬくもりを凍らされ、そこで一定の間
身動きもできずに氷漬けにされて苛まれたかと思うと、次の
瞬間またもや火の中に引き戻される、―― こういう所だった。
天使たちは、このレーテ河の瀬戸を渡し船で往来したが、結局
悲嘆はいやましにつのるばかりであった。河を横切りながら、
その唆るような流れを掬って僅か一滴でも口に入れ、一切の
苦しみと悲しみを一瞬のうちに快く忘れ果てたいと
願い、いやむしろ焦り、必死になって水面に口を近づけようと
した。だが、「運命」がそれを許さなかった。ゴルゴン特有の
凄まじい形相をしたメドゥーサが、渡し場に陣取って彼らが水を
飲むのを妨害したばかりでなく、水そのものが生ける者に
飲まれるのを嫌って、かつてタンタロスの唇から逃げたのと
同じように、彼らから逃げていった。こんな風にして、これらの
探険の各集団は、混乱と寂寥のうちに彷徨い歩いていったが、
こうやって自分たちの悲惨な境涯を見、安らぎが失われたのを
知り、身震いするような恐怖を感じ、顔面は蒼白になり、
眼に異様な色を漂わせた。しかし、彼らはなおも暗く陰惨な
谷間をいくつも渡り、多くの鬼哭啾々たる場所を、多くの氷雪に
とざされた山々を、多くの燃えさかる火の山々を、いや、岩、

洞窟、湖、沼、沢、岩窟の数々を、死の影を、通っていった。
そこは見渡す限り死の世界であり、神が呪詛の念から
悪しきものとして、――ただひたすら悪にのみ益するものとして、
創造り給うた世界であり、すべての生命が死に、死のみが生きて
いる世界であった。そこでは、倒錯した自然が、あらゆる醜悪な
もの、奇怪なもの、を生み出していた。それらはおよそ忌むべき、
およそ名状すべからざるものであり、たとえばゴルゴン、ヒュドラ、
或はキマイラといった、虚構の物語がかつて作り出し、恐怖心が
かつて描き出したいかなるものより、さらに異形のものであった。

376
人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。
そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、
羊を右に、やぎを左におくであろう。
そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。
あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、
裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。
そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。
いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。
また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。
すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。
それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。
あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、
旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである』。
そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。
そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。
そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」。

377
しかし、シミアス、以上のべてきた事柄からして、なぜ、われわれがこの生においておのれのすべての努力をつくして、魂自身の卓越性である徳と、知に、あずからねばならないのか、その由縁がわかるであろう。たしかに、その努力のはてにあるものはうつくしく、希望はおおきいのだから。

ともあれ以上の事柄が、いまわたしが述べてきたそのままに、また真実そうあると断言するのは、知性というものにかかわる人間にはふさわしくないことであろう。しかしいまは、魂はまさに不死であるとあきらかになった以上は、われわれの魂と、またそれの住まうところについては、いま述べられたことかあるいは何かそれに類する事柄があるのだとすることは、たしかにふさわしいことであり、また、かくあるとおもう者には、あえてそれに賭けてみるだけの価値のあるものと、わたしには思えるのだ。まことに、その想定におのれを賭けることはうつくしいこと！　これを魅惑のうたのように感じて、みずからにくりかえし唱えねばならない。だからこそ、わたしもまたこうしてさきほどから、神話（ミュートス）をながく語ってきたのだ。

それでは、さあ、いまのことをしっかりとこころにとめ、それゆえに、みずからの魂のことに関しては、確信をもつがよい。いやしくも、その生涯において、肉体にかかわるもろもろの快楽や粧いは、自分にとってはよそごとであるとおもい、また、かえって害をなすばかりであると信じて、これと訣別し、ただひたすらに学びのもつ悦びに熱中した者であるならば。そして、けっしてそとからのものは用いることなしに、ただ魂をそれ本来のものに仕上げ、しつらえるもの――すなわち、思慮と、正義と、勇気と、さらには、自由であることと、真実そのもの―― でそれをかざり、かくしてハデスへの旅立ちのときをまつ者であるならば。

ところで、シミアスにケベスよ、それに他の諸君も、君たちはいつの日にか、ときがくればそれぞれハデスへと旅立つであろう。しかし、わたしのほうは、悲劇の舞台の人物ならいうであろう―― おのれのあずかりし、その定めは、いまやすでに、わたしを喚んでいる―― と。もうどうやら沐浴にむかうべき時らしいのだ。毒杯をあおぐまえに沐浴をすませて、女たちに、屍体を洗う手数をかけないほうが、よいと思われるからね」

378
私の跡を追いたい人々よ、
『徳』を愛して下さい。『徳』のみが自由です。
天上の音楽を奏している星よりも
高く登れる道を『徳』は教えてくれるのです。
もし『徳』の力が弱ければ、天は自ら

天降って『徳』を助けるでしょう。

379(A)
世俗を離れて真実に生きる
小さくても満ち足りていると考える
吝嗇は憎まれ、媚びにつながる
お世辞は妬みを生み、富は人を盲目にする
身の丈を知って、その範囲で楽しむ
助言に従い自らを律する
そうすれば真実は訪れるだろう、恐れる事はない

世俗を正そうと無理をしなくても良い
俗人はボールのように行ったり来たりと転がる
良識があれば雑事に惑わされる事は無い
釘の飛び出している所を踏まないように気をつけよ
食器棚に食器を陳列するような立派な事は不要
自らを律し、仲間を律する
そうすれば真実は訪れるだろう、恐れる事はない

与えられたものを謙虚に受け止めよ
世間の要求に取り組み、でも落ち込んではいけない
世俗は私たちの故郷ではなく、荒野であるのだ
巡礼者よ、立ち止まらず進め、動物の毛皮を脱ぎ捨てて
本当の故郷を見上げ、神に感謝する
志を高く持ち、理性を働かせよ
そうすれば真実は訪れるだろう、恐れる事はない

379(B)
私がオレンジの木であったなら
忙しく働くだろう！
たわわに実った果実を
自らには求める事なく
この果実を誰かのために提供する

380

（キリスト） わが子よ、逆境にいて忍耐と抑損（身をへりくだる）をまもるほうが、順境にあって多くの慰めと信心をもつことよりも、ずっと私をよるこばせる。小さなことで、お前はなにか非難を受けたといって、なぜそんなに悲しむのか。もっとひどかったとしても、非難すべきではなかろう。だが、とにかくまあ、ほうっておきなさい。これが初めてではないし、めずらしいことでもない。もしお前がもっと長生きするなら、これが最後でもなかろう。なにも不都合なことが起こらぬうちは、お前も十分勇気が出るのだ。そういう時には、お前もよい相談相手がつとまって、他人を言葉で元気づけもできたものだが、不意の難儀がお前の戸口へやってくると、思案も元気もなくしてしまう。お前がちょっとしたいざこざでよく経験する、自分のひどい心弱さに気をつけるがいい。だが、こうしたことや同様なことが起こるのは、つまり、お前の救いのためなのだぞ。

できるだけ、気落ちしないよう（つとめるがいい）。また、（そうしたことが）お前にふりかかっても、がっかりしたり、長いことわずらわされたりしないように。たとえ元気よくとはいかないまでも、すくなくともじっと辛抱しつづけるのだ。たとえば耳にしてあまり面白からず思ってから、怒りを覚えたにしても自分を抑え、けして過度にひどい言葉が口から洩れることのないよう、そのため、小さい者らがつまずくことがあってはなるまい。不意におこった動揺はすぐしずまろう、また神の恵みがたちもどれば、心の悩みもやわらげられよう。私は今でも生きている、そして、お前をすぐにも助けてやろうと待ちかまえてるし、いつもなおさら慰めを与えるのだ、もしもお前が私を信頼し、信心ふかく呼び求めるならばな、と主はいわれた。

381
法はきっと、こう言うことだろう。── 不幸のうちにあっては、できるだけ平静を保って、感情をたかぶらせないことが最も望ましいのだ。ほかでもない、そうした出来事がほんとうは善いことか悪いことかは、必ずしも明らかではないし、堪えるのをつらがってみても、前向きに役に立つことは何ひとつないのだし、そもそも人の世に起る何ごとも大した真剣な関心に値するものではないのだし、それに、悲しみに耽るということは、そのような状況のなかでできるだけ速やかにわれわれに生じてこなければならないものにとって、妨げとなるのだから、とね。

382
涙の快楽に身を任せるのは危険です。勇気や立ち直ろうとする気持ちさえも奪うからです。

383
生涯の半ばならずして、わたしの視力が使いはたされて、
この世界は暗く広いと思うとき、しかもあの一才能が、
それを隠せば死も同然だから、それでもってわたしの
創造者に仕え、創造者が帰ったときに叱られぬよう、

正しい釈明をしようと、心はさらにかたく決意するのに、
それが、わたしには、無益に宿っていると思うとき、
「視力は絶たれても、神は日日の労役を強い給うか」と、
愚かしくもわたしはたずねる。だがその愚痴をはばんで、

「忍苦」は直ちに答える。「神が必要とし給うのは、
人の働きでもその天分でもない。神の軽いくびきに
最もよく堪えるものが、最もよく神に仕える。

神威は王者の如し。何千という天使が休みなく、
神の命ずるままに、陸と海の上をかけまわる。
だが、ただ立って待つものも、また神に仕える。」

384
必要なものは一つだけです。誠実な意志による献身、家族への犠牲。悪とは自己の意思を求める事、即ち、自己愛、自負心、肉体的幸福、個人の健康。善とは運命を求める事、運命との結婚を受け入れ、神からの使命を求める事。

385
選ばれた沈黙よ　私のために歌うたい
私の巻貝の耳に聞かしておくれ
また笛を吹いて静かな牧場へと私を誘い
私をよろこばす楽の音になっておくれ

唇よ　ものを言わず　美しい沈黙を守っておくれ
現世の欲望をすべて棄て去ったあの場所から
送られてくる晩禱の鐘の音だけで
おまえは雄弁になりうるのだ

386
貝殻の中のような静けさを求めて
真実の靴を履き
喜びの紙幣と不死の食べ物
救済という飲み水

栄光を身にまとい、希望の物差しを持ち
そして私は、巡礼の旅に出る

血が香油のように香る
これ以上芳しい香油はない
私の精神は、静かな巡礼者のように
天国へ向かって旅をする
銀色の山々を超え
芳しき泉のある場所へと
私は口づけし
ひとすくいの幸福を飲み干した
この泉が枯れる事はない
豊かに広がる草原で
乾きに苦しんでいた私の魂は
永遠に満たされる

387
私は心の平和を求めている
私の犯した罪が
心を締め付ける
どうしたら許されるでしょう

私は心の真実を求めている
私には疑う心があり
それに惑わされ
若きの日々を浪費してしまった

私は愛を求めている
私は愛を失い
深く悲しんでいる
悲しみから逃れられずにいる

私はあなたを求めている
どうかここに来て欲しい
そしてこの私を

あなたの心と共にある場所へ連れて行ってください

388
すべての感覚、魂と精神のすべての力、外的世界の様々なものが神聖な扉を開き、神に親しみ、崇めるようにと、教えている。得られるものは奪われる、外的世界のもの、所有権がずっと続くようなものは得られないと心得よ。崇め、理解し、受容し、感じ取り、与え、行動する。これらは義務であり、幸福であり、宇宙である。起こるべきことが起こる、死のように。自分自身を理解し、神を見出し、神との関係を保ち、自分ではどうしようもない根源的な力の存在に身を任せる。死までの時間が残されているなら良い、残されていなくても良い、すでに半分死んだ後でも構わない、ヒロイズム、受容、大いなる道徳へと導く、成功への道が、死によって閉ざされてしまうまでは。

389
彼はまた入口の階段に腰を下ろし、生暖かい空気をみたしている白樺の若葉の強烈な香りを吸いこみながら、長いこと暗闇につつまれた庭を眺め、水車の音や夜鶯の鳴き声や、階段のすぐそばの茂みで単調な鳴き声をたてている名も知らぬ小鳥の歌に耳を傾けていた。

満月に近い明るい月が、納屋のかげからさし昇って、内庭に黒い影が横たわり、崩れかかった屋敷の屋根のトタンが光りだした。

ネフリュードフは、クジミンスコエ村で自分の生き方を考え、何をどのようにすべきかという問題を解きはじめたとき、その筋道を見失って、どうしても解決できなかったことを思いだした。個々の問題について、あまりにも解答が多すぎたからである。ところが、今やそれらの問題をふたたび思い浮べてみて、それらがあまりに単純なのに驚いてしまった。なぜ単純になったかというと、今では自分がどうなろうなどということをまったく考えなかったからである。いや、そんなことにはまったく興味がなく、自分は何をしなければならないのか、ということばかり考えていた。そして不思議なことに、自分に何が必要かという問題はどうしても解くことができなかったけれども、他人のためには何をしなければならぬかということは、彼もまちがいなく承知していた。

黒雲がもうすっかり空をおおって、もはや遠い余映でない本当の稲妻が走って、正面玄関の階段のこわれた荒れはてた屋敷や庭先をくまなく照らしだし、雷鳴がもう頭上で聞えるようになった。小鳥の声はぴったり鳴りを静めたが、その代り木の葉がざわめきはじめ、風はネフリュードフの腰かけている階段まで吹きよせて、髪の毛をなぶりはじめた。

ネフリュードフは家へ飛びこんだ。
《そうだ、そのとおりだ》彼は考えた。《この人生に起るいっさいの問題は、またその問題の意味は、おれ

にとって不可解だし、理解のできるはずのものでもないのだ。なぜ叔母たちがいたのか？　なぜエコーレンカ・イルテーネフは死んで、このおれが生きているのか？　なぜカチューシャがいたのか？　なぜおれはあんな気ちがいじみた気持ちになったのか？　なぜあの戦争が起ったのか？　なぜその後におれの放縦な生活がはじまったのか？こうしたすべてのことを理解するのは、主の御業のすべてを理解することは―― とてもおれの力にあまることだ。しかし、おれの良心に書きつけられた主の御旨を実行するのは―― おれの力にもできることだ。そのことはおれもまちがいなく知っている。そして、それを行なっているときには、おれも心の安らぎを得られるのだ》

390
「時」は若さを攫う巧みな盗人、二十三のわが年齢を、
なんとたちまち、翼にのせて盗んだことか！
わが急き立つ日日は、全力で飛んでゆく。
だがわれは晩春になって、花も蕾もみせはせぬ。

おそらくこの容貌が、間もなく大人になる、
わがまことの年齢をいつわるのであろう。
ましてや、心の成熟はあらわれもしない。
それをすでに授かった、早熟な者がいるけれども。

でもその成熟は、多かれ少なかれ、早かれ遅かれ、
「時」と神意にみちびかれて、わがたどる運命に、
運不運はどうであろうとも、まさにそれに

寸分たがわず、つねに相応するものであろう。
要はただ、わが偉大な「仕事の監督」の目に、絶えず
見られる如くに、すべてを用いる徳がわれにあることだ。

391
おまえは私を所有しなかったならば、
私をたずねなからたであろう。
「だから、心配しなくてもよい」

392
主の意思に従う
心の平静を保つ

日々、罪を告白し
正しき道を歩む
栄光に包まれた魂
神を探して進む

すがすがしい朝
悲しみが喜びに変わる
罪が許された喜び
天国への道を歩く喜び
天へ迎え入れられる喜び
神と対面する喜び

393
この世という畑では、善と悪の知識はほとんど見分けがつかず、一緒に生まれてきます。善の知識は悪の知識とからみ合い、巧妙にあれこれ似ており、区別ができないほどです。プシュケが刈り取り、より分けよと命じられた雑多な種でも、これ以上には込み入ってはいません。善と悪の知識が双子のようにくっついてこの世に来たのは、人類の始祖が食べた果実からであります。おそらくこれこそアダムが堕落したあと善と悪を知り、悪によって善を知るようになった運命であります。この地上の人間の状態がこうである以上、悪を知らなければ知恵は選択できず、慎むべき節制もありません。悪がもっている誘惑、外見の快感をも含めて理解し、考察し、しかも控え、弁別し、真により良いものを選択できる人、その人が真に戦うキリスト者であります。

出陣して敵と戦い、ちりと汗にまみれてこそ不滅の名誉が得られる戦場から脱落するような、実際に使われず鍛錬もされない逃避、隠遁の徳を私は称揚できません。

394
河の流れよ、もし君が
今すぐ凍ってしまうとしても
硬い氷の下には
温かな流れがあるだろう

でも、荒々しい自然の中で
冷たい風が吹くと
水面には波が起こる
でも凍らせる事は出来ない

395

あなたに与えられたものを生かすよう、啓示に従いなさい。人それぞれに能力の違いはあるが、啓示はそれぞれに与えられている。あなたの目前に示された一本の道を迷わず進みなさい。それが天使となってあなたを導く。障害にも誘惑にも邪魔されてはいけない。出来る限り道を外れないように、歩けなければ這ってでも、その道で死ぬ覚悟を持って、でも恐れる必要は無い。啓示に従って真実の道を歩んだものが、志半ばで死んだ事など、未だかつて無い。近道をしようとして、一時は有利に進んで満足に思っても、それは大切な財産と永遠の魂を売り払ったのと同じ事。

396

アダムに対して天使が答えた。「天と地の子よ、わたしの
言うことを注意して聞くがよい！　お前が幸福であるのは、
神の思し召しによっている。お前がそのような幸福な生活を
今後も続けうるかどうかは、お前自身に、つまり、神に対する
お前の服従如何にかかっている。

397

彼は本当の聖者
形の無い物に形を与え、私たちにそれを見せてくれる
儀式のような形式ばったやり方でなくても
神に会う方法を教えてくれる
扉を閉めるな
息をひそめ、世界から離れて待てと
私たちの心がどこにあっても
至高の精神の事を気付かせてくれる
自分自身の行いから抜け出せない事を教えてくれる
浴びるほど喜びを与え、怖れを取り除き
喜びの中で、互いの魂をつなぎ止めてくれる

398

幸福の視点から、人生の問題を解決することは出来ない。なぜなら、私たちが高い願望を持つ事で、幸福が遠のいてしまうからである。義務の視点からしても同じである。義務は平和をもたらすが、幸福はもたらさない。神が本当に持つ、神聖な愛は、この難題を解決してくれる。なぜならば、もし犠牲となる事自体が永遠の喜びならば、魂に必要なもの全てを無制限に得られるからである。

399

魚は水の中に棲んでいて、喉が渇いたなどと言ったら笑い種

自分の家の中に神がいる事に気付かず

森の中をあても無く探し回る

真実はあなたの家の中。ベネアスへ行っても、マトゥーラへ行っても、駄目

自分の精神を他人のように感じるのなら、世界中どこへ行っても、自分の居場所は見つからない

400

大切なことは、日常の仕事に対してよく考えて取り組むこと、神の存在の下で行動すること、個々の役割の中で神の教えに従うこと。そして、小さな事柄、一時的で重要ではないと思われる事柄の、美しさ、高貴さに立ち戻ること。些細な事柄を大切に、神聖に思うこと。そして、宇宙の働き、永遠の意思を思うこと。人生と調和し、死を恐れぬこと。平和の秩序に従うこと。

401

私が私の生涯に対して要求するあらゆる栄光は、一生を静かに生きたいということである。静かにといっても、メトロドロスや、アルケシラオスや、アリスティッポス流にではなく、私なりにである。哲学は万人に向く静かな生きかたを見いだすことができないから、各人はそれぞれ自分なりに、この生きかたをさがし求めるがいい！

カエサルとアレクサンドロスは、あの限りなく偉大な名声を、運命より以外の何に負っているであろうか？運命はいかに多くの人々をその出世の門口で吹き消したことであろう！彼らについてはわれわれは何も知らない。もし彼らの不幸な運命が、彼らをその企てのいとぐちにおいてただちに挫折させなかったならば、彼らはカエサルやアレクサンドロスと同じ勇気を発揮したことであろう。あれほど多くの極端な危険をくぐりながら、カエサルが負傷したということを、私は一度も読んだおぼえがない。何千という人々が、カエサルの越えた最も小さな危険よりもさらに小さな危険のために死んだ。無限に多くの立派な行為が、証人をもたないために、世に知られないままに消え去らなければならない。われわれは必ずしもつねに城壁の裂け目の高所に、軍の先頭に、総大将の眼につくところに、いわば舞台のうえに、いるわけではない。われわれは垣や堀のあいだで襲撃される。小さな砦に向かって生命を賭けなければならない。納屋のなかから取るにたりない四人の射撃兵を狩り出さなければならない。必要に追られれば、ただひとり部隊から離れて行動しなければならない。だから、よく注意してみるならば、経験のうえでは、最も目立たないばあいが最も危険なばあいであることがわかるであろう。われわれの時代におこった戦争でも、重要な名誉ある場所においてよりも、あまり重要でない些細な機会、小さな砦の争奪などにおいて、いっそう多く立派な人々が失われた。

めざましい機会において死ぬのでなければ自分の死を犬死だと考える者は、自分の死を輝かすどころか、そうしているうちに、生命を賭けるべき正当な機会を取り逃がすことによって、自分の生命をみずから暗くす

ることになる。正当な機会は、すべて輝かしいものである。というのも、自分の良心が各人に対して十分に喇叭を吹きならすからである。《われわれの栄光とは、われわれの良心の証言である。》

人々に知られるだろうという理由、人々に知られればそれだけ尊敬されるだろうという理由によってしか、善人でないような人、自分の徳が人々に知られるという条件でしか、善をおこなおうとしない人、そういう人には多くの助力を期待することができない。

われわれは自己の義務のために戦争に行くのでなければならない。そして、いかに隠れた行為であっても、立派な行為に対しては、そればかりでなく勇敢な考えに対しても、もれなくこういう報酬が与えられるということを、そこから期待しなければならない。この報酬は、規律正しい良心が、善をおこなうことによって、自己のうちに受けとる満足である。われわれは自分自身のために勇敢であらねばならない。また運命の攻撃に対して自分の心を堅固で安定した状態に保つという利益のために勇敢であらねばならない。

402
あなたに与えられた道はただ一つ
一人に一つの道を進みなさい
魂は無限の高みへと昇っていく
与えられた道を進んでいくと見つかる
喜びに満たされる
仲間と過ごす日々、この道を進め
あなたの道があり、あなたの一日がある
生きるために、あなたには行うべきことがある
他人の心の中、あなたの行い、満足
世界は一人一人が生きることを渇望する
あなたもその一人、他にはいない
あなた自身のために、神の仕事をしなさい

403
彼にはどれだけの事が
できるだろうか？

404
人の心を豊かにする事、力強く成熟した心、生まれつき持っている誠実な感情を育てる事、これらは私たちの大切な仕事である。そして個人の生活で大切にするだけでなく、公共に役立てなければならない。愛国者であるだけでなく、紳士である事も忘れてはならない。友情を育て、かつ競い合う、この二つを強く持ち、

また、使い分けなければならない。温和でありつつ、信念を持たなければならない。義務、立場に応じて行動の基準を持つ必要がある。確かに言えるのは、実行を伴わない善はうわべだけのもの。何もせず、役にも立たないが責められる事もないというのではなく、失敗に陥る危険があっても積極的に生きるべき。世の中での生活には活力が必要。居眠りしているような人間は、裏切り者と同じ。

405

われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわか範に習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨として、民主政治と呼ばれる。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによってすべての人に平等な発言がみとめられる。だが一個人が才能の秀でていることが世にわかれば、輪番制に立つ平等を排し世人のみとめるその人の能力に応じて、公の高い地位を授けられる。またたとえ貧窮に身を起こそうとも、国に益をなす力をもつならば、貧しさゆえに道を閉ざされることはない。われらはあくまでも由由に公につくす道をもち、また日々にたがいに猜疑の目を恐れることなく自由な生活を享受している。よし隣人がおのれの楽しみを求めても、これを怒ったり、あるいは実害なしとはいえ不快を催すような冷視を浴びせることはない。私の生活においてわれらはたがいに制肘を加えることはしない、だがこと公に関するときは、法を犯す振舞いを深く恥じ恐れる。時の政治をあずかるものに従い、法を敬い、とくに、侵されたものを救う掟と、万人に廉恥の心を呼びさます不文の掟とを、厚く尊ぶことを忘れない。

われらはまた、いかなる苦しみをも癒す安らぎの場に心をひたすことができる。　一年の四季をつうじてわれらは競技や祭典を催し、市民の家々の美しいたたずまいは、日々に喜びを改め、苦しみを解きながす。そしてわが国の大なるがゆえに、あらゆる土地のすみずみから万物の実りがここにもたらされる。すべての人々が産みいだす幸を、わが国土のめぐみと同様に実らせ味わうことができるのである。

また、戦いの訓練に目を移せば、われらは次の点において敵側よりもすぐれている。まず、われらはなんびとにたいしても都を開放し、けっして異国の人々を逐い払ったことはなく、学問であれ見物であれ、知識を人に拒んだためしはない。敵に見られては損をする、という考えをわれらはもっていないのだ。なぜかと言えば、われらが力と頼むのは、戦いの仕掛けや虚構ではなく、事を成さんとするわれら自身の敢然たる意欲をおいてほかにないからである。

子弟の教育においても、彼我のへだたりは大きい。かれらは幼くして厳格な訓練をはじめて、勇気の涵養につとめるが、われらは自由の気風に育ちながら、彼我対等の陣をかまえて危険にたじろぐことはない。

そしてかくのごときわが国のために、その力が奪われてはならぬと、いまここに眠りについた市民らは雄々しくもかれらの義務を戦いの場で果たし、生涯を開じた。あとに残されたものもみな、この国のため苦難をもすすんで耐えることこそ至当であろう。私がわれらの国についてかくも長く語った理由は二つ、　一つに

はこのような栄誉を担う諸君とそうではない敵勢とにとって、この戦いに勝つか負けるかはまったくちがった意味をもつことを諸君に自覚してもらいたかった。また一つには、明瞭な礎の上に戦没者の功を明らかにしたく思ったからである。

危険のさなかに残っては、命のかぎり立ちつくすことこそ、退いて身を守るより貴しと信じて、かれらは来たるべきものを生命でうけとめ、おのが名を卑怯のそしりから守った。ついに死の手につかまれたとき、恐れは去り、生死の分明はとるに足りぬ偶然のさだめという誇らかな覚悟がやどった。
こうしてこの市民たちは、われらの国の名にふさわしい勇士となった。残されたものたちは、道のより安らかならんことを祈るがよい、だが、敵勢にむかってはいっそう果敢なる戦意をゆめ忘れてはならぬ。

そしてその偉大さに心をうたれるたびに、胸につよく噛みしめてもらいたい、かつて果敢にもおのれの義務をつらぬいて廉恥の行ないを潔くした勇士らがこの大をなしたのである、と。かれらは身は戦いの巷に倒れようとも、おのが勇徳を国のために惜しむべきではないとして、市民がささげうる最美の寄進をさしのべたのである、と。なぜならば、かれらは公の理想のためにおのが生命をささげて、おのが名には不朽の賞讃を克ちえたるのみか、衆目にしるき墓地に骨をうずめた。いま安らぎを与えているこの土ばかりがかれらの骨を収めているのではない。かれらの英名は末ながく、わが国に思いをいたすものの言葉にも行ないにも、おりあるたびに語り伝えられる。世にしるき人々にとって、大地はみなその基というべく、その功はふるさとにきざまれた墓碑にとどまらず、遠き異郷においても生ける人々の心に碑銘よりしるき不文の碑となって生きつづけていく。かれらの英名をもし諸君が凌がんと望むなら、幸福たらんとすれば自由を、自由ならんとすれば勇者たるの道あるのみと悟って、戦いの危険にたじろいではならぬ。

406
イギリスは民主国家の中でも最も自由の進んだ国である。

407
元来政府というものは、非常に強力であるために国民の自由を侵害するに至るほどの力のあるものでなければ、重大な非常時局に際会した時、自ら存立を維持してゆくだけの力を持ちえないのであろうか、これは長い間にわたっての深刻な問題でありました。

408
八十七年前、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、すべての人は平等につくられているという信条に献げられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てました。現在われわれは一大国内戦争のさなかにあり、これによりこの国家が、あるいはまた、このような精神にはぐくまれ、このように献げられたあらゆる国家が、永続できるか否かの試錬を受けているわけであります。われわれはこの戦争の一大激戦の地で相い

会しています。われわれはこの国家が永らえるようにと、ここでその生命を投げ出した人々の、最後の安息の場所として、この戦場の一部を献げるために来たのであります。われわれがこのことをするのはまことに適切であり適当であります。

しかし、更に大きな意味において、われわれは、この土地を献げることはできません――聖め献げることができません――聖別することができません。生き残っている者と戦死した者とを問わず、ここで戦った勇敢な人々こそ、この場所を聖め献げたのでありまして、われわれの微力をもってしては、それに寸毫の増減も企てがたいのであります。われわれがここで述べることは、世界はさして注意を払わないでありましょう、また永く記憶することもないでしょう。しかし彼らがここでなしたことは、決して忘れられることはないのであります。ここで戦った人々が、これまでかくも立派にすすめて来た未完の事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろ生きているわれわれ自身であります。われわれの前に残されている大事業に、ここで身を捧げるべきは、むしろわれわれ自身であります――それは、これらの名誉の戦死者が最後の全力を尽じて身命を捧げた、偉大な主義に対して、彼らの後をうけ継いで、われわれが一層の献身を決意するため、これら戦死者の死をむだに終らしめないように、われらがここで堅く決心をするため、またこの国家をして、神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため、そして人民の、人民による、人民のための、政治を地上から絶滅させないため、であります。

409

私は英国領植民地に対して親しみを感じる。固有名詞が似ている、血縁者がいる、社会の階層が似ている、国防が共通、などの理由による。これらは空気のように自然でありながら、植民地と母国を鉄のように強く結び付けている。それぞれの政府での人権の考え方は、植民地に任せようではないか。彼らは母国との関係を保とうとするであろうし、あらゆる力を持ってしても、母国と植民地の関係を引き裂く事は不可能なのである。自由が保障されたこの国において、国王の権威を保とうという英知を持ち続ける限り、私たちの信念は寺院にて神聖化され、どこにあっても英国民の子孫は自由を信仰し、母国を振り返るであろう。英国領の人口が増えるほど、私たちの仲間は増え、人々はもっと自由を愛するようになり、英国への忠誠はさらに完成されたものとなる。奴隷制度は世界中どこにも見られる。地面に生える雑草のようなものである。スペインやロシアから流れてきたのだろう。しかし、英国が真実と生来の尊厳を目指し続ける間は、世界は英国にその自由を求める。英国がその輸出を独占している。英国憲法の精神は圧倒的な力で、帝国の隅々まで、英国領内の一人一人に至るまでその活力を行き渡らせている。このような言い方をすると、口さがない機械論者、罰当たりの政治家たちからいい加減な夢物語だと言われる事は私にもわかる。彼らの考え方は私たちには相容れないもので、何でも物質的な量で考えている。偉大な帝国を率いるリーダー、その車輪の一つとなるには不適格だ。しかし、正しい教育を受け、こうした英国の統治の理念を学んだならば、先に述べた人々のように、物質的ではない真実をすべて理解できる。政治においての寛容は真の英知である。偉大な帝国にあって、精神が病むという事はない。私たちが自分自身の役割を意識し、この国が私たちの理想となるよう、情熱を注ぎ続けるなら、神意が命ずるように、私たち自身の精神を立派なものへと成長させる事ができ

るだろう。このような高潔さによって、私たちの先祖は、荒野に偉大な帝国を築き上げた。そして特筆すべきは、破壊の力ではなく、人類の富、人口、幸福を促進する事で、それを成し遂げた事である。

410

上院・下院議員諸氏よ、あなたがたが制定した検閲令による、学識ある人たちの落胆についての論が、誇張や偽りだとある人があなたがたを言いくるめないよう、この種の取り締まりが専横をきわめている国で、見聞きしたことを述べましょう。外国の学識ある人たちと同席する光栄をもったとき、彼らは私がイングランドのような哲学の自由な地に生まれたことを幸せとし、自分たちの学問が陥った奴隷状態を悲しみました。イタリアの学者の光栄が失われたこと、この何年間に書かれたものはおべっかと法螺だけだと悲しみました。フランシスコ派やドミニコ派とは異なる考えで天文学を考えたため、異端審問所につながれているかの有名な老ガリレオを知って私が訪問したのはその地であります。私は当時イングランドが監督派の圧制で呻いているのを知っていましたが、外国の人たちがイングランドの自由をこのように確信しているのを、未来の幸福のしるしと解しました。

しかし、この世がすべて完了するために要するいかなる時間の回転によっても決して忘れられない解放に向かって、国民の指導者となる有徳の人たちが当時イングランドの空気を吸っていたのは願ってもない喜びでした。

411

太古の昔には
英国の緑の山を踏みしめた？
聖なる神の体
英国の美しい草原で？

神々しい様子で
雲のかかった丘の上に輝く？
ここにエルサレムを築くのだ
悪の蔓延るこの世界で？

燃える金の弓！
情熱の矢！
槍と！
炎の馬車！

戦う気持ちは高まった
剣に手を掛けいつでも戦える
エルサレムを築くまで
この美しい緑の英国に

412
これこそわが国、わが祖国なのだと
自らの胸に語りかけたことがないほど、
魂の死んだ男が果たしてこの世に生きているであろうか！
異境の地を放浪したあとで、
故郷へと、その足を向けたとき、
身内で心が燃えなかったような者はいるだろうか！

おお、カレドニアよ！きびしく荒涼たる国、
詩心豊かな幼な子にふさわしい育ての母よ！
褐色のヒースと生い茂る森の国、
山とそして湖の国、
私の父祖の国よ！お前の荒々しい国土に
私を結びつけているこの親子代々の血縁の絆を、
如何なる人の手が引き裂き得ようか！

413
体はズタズタになる
縄、斧、炎に痛めつけられる
でも彼は知っている
英国の名において、恥じる事は何もない

414
おお、長く圧制の下にあった正しき人々の魂にとって、
いかにふさわしく、いかに励みであることか！
神が解放者の手に
無敵の力を授け、
地上の権力者、圧制者を鎮圧されるときは。
また専制権力を支えるのにしぶとく熱心だが、
正しき人々と真理を尊ぶすべての人々を

迫害しようと荒れ狂う、暴力的な者どもの
野蛮で激しい勢力を鎮圧されるときには！
解放者は、敵の戦闘手段と
戦闘行動を悉く打ち破る、
飾らぬ英雄の雅量と
天の活気で武装して、
敵の兵器庫、弾薬庫をものともせず、
使用不能にしてしまう。一方、
稲妻の閃光のごとき翼駆る速さで
悪しき者に対する使命を遂行すると、
相手は不意打ちを食らって
茫然自失となり、防御を忘れる。
だが忍耐はときに聖徒たちを
修練するもの、彼らの勇気を試すもの。
忍耐は彼らをそれぞれ自らの解放者とし、
圧制や悲運がもたらす
一切のものに打ち勝つ勝利者とする。

415
剣を腰に結わえ付け、戦いに加われ！
友よ、命のある限り戦おう
敵の首を断ち、一瞬にして葬り去る
王の命令に従いやって来た
勇敢な戦士が戦場を去る事はなく
戦場を離れるものを戦士とは言わない
私たちの行く先に待っている、大切な戦い
情熱、怒り、プライド、豪胆
真実に満たされた清らかな祖国のために、私たちは勇敢に戦う
最も大きな音をたてるのは、わが戦士たちの剣だ

416
未知なる〈神〉から出でし、一つの霊なる
プロミーシュースの如き勝利者がやって来た。
勝利の道を歩むが如くに、
死と恥辱の茨の道を、彼は歩んだ。

死すべき人の姿は、彼にとっては
燦然と輝ける惑星が光線で活気づけた
朧なる蒸気のようなものだった

417
武器を取れ、勇気を持て、戦いの時が来た。私たちの国家と教会が怒りを感じるぐらいなら、戦いの中に命を落とす方がいい。神の意思は天にある。神の意思に従え。

418
私も志願します
英国の危機に
国の意志に
私も従います

息子も兄弟も
みな従軍します
王国の至宝を壊され
怒りが抑えきれません

英国は私たちに
幸福な暮らしを与えてくれた
でも私たちはそのような
幸福をなげうって加わります

英国が求めるのなら
命も差し出します
その報酬がたとて
死であったとしても

419
剣が光り、槍が空を斬る。残忍な敵との戦いの中にあってこそ、生きている事を実感する。古き時代には剣一つで敵に立ち向かった。濁流の中に切り立つ岩山のように、その栄光は生き続ける。たとえすべての戦士が倒れたとしても。

420

幸福な武士とは誰か？
すべて武士の望む理想の人は誰か？
――それは高貴な精神で、
實際生活の仕事に從事するに當っては
少年時代の理想的計畫に基いて實行した人だ。
その高貴なる努力こそ
彼の前途を常に輝やかす内心の光明。
彼は如何程多くのことを知識がなし得るかを認め
自然の本能を以て熱心に學んでゐる。
この決心を堅く守り、こゝで止まらないで、

精神的教養を第一にする。
苦痛、恐怖、流血の慘事に遇ふ時は
運命と戰って禍を轉じて福さいはひとする。
人間の最も高い天賦の力を
是等の困難と相對して揮ひ、
之等を支配し征服し改めて、
惡を轉じて善とする。
精神の感じを強ひて鈍にぶらせる事物によって
却って一層同情を深くされ、
犠牲を拂ふ機會の多きため

寛大の心は益々深くなる。
誘惑が多ければ益々自己を知り、
反って益々純潔を増す。
苦痛と悲歎に逢って益々忍耐の力は増し
同情心が一層強くなる。
彼は理性を行爲の標準とし、
最良の友としてこれに頼る。
そこで人々が大いなる惡を避けるために
小なる惡に誘はれ、
質又は效力が最善であっても
正しい基礎に立つことが稀である場合に、
彼は善の上に善を据ゑる。
彼の經驗する勝利成功は美德の賜物だ。

彼が若し高い位地に昇るときは、
公明正大な手段によって
少しも奸策を弄ばぬ。
然らずば退いて自ら己に安んずる。
彼の任務を了解するものがあれば、
一意専心これに忠實だ。
されば富、名譽、浮世の榮譽を
自ら屈して求めず、待ち伏せもしない、
かゝる榮譽は必然に伴ふものだ。
苟くも榮譽が來る以上は
神の賜物の如く授けられる。
普通の勞苦や日常生活の穩かな狀態で
彼は心力をその周圍に送り、
不斷の感化となり、特殊の恩寵となる。
天が人類の興廢を一擧に決しようとする
危機を生み出す非常の時機に遇ふ時は、
彼は戀人のやうに喜び、

感激に充ちて、全身は忽ち光彩を放ち、
戰に熱中する時は最も靜かな方針を保ち、
豫想通りに適中させる。
何時それが起らうとも
必要に應ずるだけの力がある。
斯やうにいへば爭亂と暴動に處する
適材のやうに見えるが、
主なる好みは家庭の怡樂いらくと
平穩な生活にあるのだ。
妻子の愛すべき姿を宿す美しい幻よ！
身は何處にあるも彼の心を占めてゐる。
かくの如き節操を證據立てることが
彼の切なる願ひだ。
愛すべきものを多く有もつため、
反って益々勇敢となる。
最後に高い位地にあって、
國民仰望の的となってゐるのも、

また國民から全く顧みられないのも、
運不運に拘らず
心のまゝに榮えるも榮えざるも、
それは人生の種々の勝負事だ。
その心に長も大切なものを獲ようと勵み、
外部の危險に驚かず、
妻子の愛を思うて卑怯な振舞ひもせず、
以前の功名の立派に輝いてゐるのに滿足せで
前途を見つめて最後まで奮鬪し、
日々に力つとめて善より善に進む。
彼の英名が永久に世の語り草となり、
多くの崇高けだかい事業を生むとも、
また受くべき名を受けずに朽ちて、
不用の人と呼ばれても、
自から己の主義事業に慰められる。
かくして死が近く迫る時、
彼は天の稱讃を受けて眠る。
これが幸福な武士だ。
これが武士の理想とすべき人だ。

421

こうヘルメイアスは言って、高いオリュンポス山へ去った。それでプリアモスは兵車から地上に跳びおり、イダイオスをその場に残した。彼は残って馬どもや騾馬たちの面倒をみたのである。しかし老人はゼウスに愛せられるアキレウスが常に坐っていた住家の方へ真直ぐに進んだ。すると、屋内に求めていた人を発見し、その人の戦友たちも、離れて腰を下ろしていた。もっとも、勇士アウトメドンとアレスの後裔、アルキモスとの二人だけが忙しげに待っていたのである。ところで、アキレウスは今しがた食事を、すなわち飲み食いを終えたばかりであったから、食事はまだ傍らに置かれていた。偉大なプリアモスは内へはいったが彼らに気づかれなかった、それで彼は近寄って、両手でアキレウスの膝を抱き、プリアモスの子らを多く殺した、恐ろしい、殺人的なその手に接吻した。それはあたかも、ある男が全く乱心して、生れ故郷で他人を殺害し、見知らぬ人々の国の、ある富める人の家に逃れると、それを見て、みんな驚く時のように、アキレウスは神に似たプリアモスを見たとき驚いた。他の者たちも同様に驚き、互いに顔を見合わせた。折しもプリアモスは懇請して言葉をかけて言った。

「おお、神々に似たアキレウスよ、わたしと同年輩の、痛ましい老年の域にある、あなたの父親のことを思い出してください。おそらくは、近隣の者たちが彼を苦しめはするが、彼から不幸や破滅を防いでくれるも

のは誰もありますまい。にもかかからず、彼はあなたがまた存命していると聞く間は、心に喜びを覚え、なおその上に、彼の愛する息子がトロイエの地から帰還するのを見たいと、来る日も来る日も待望しているのです。けれども、わたしほど不幸なものはありますまい。と申しますのは、広いトロイエの地でわたしは最も優れた息子たちを産んだけれど、そのうち誰一人生き残った者がいないと言わなければならないのだから。アカイア人たちの子らが来寇した時には、五十人ありましたが、そのうち十九人は一つの母胎からわたしのために生れ、他の者たちは（宮仕えの）女たちが官廷内で産んだものです。今はその大部分の者の膝を、兇暴なアレスがゆるめてしまった。それに、まだわたしに残されていて、城市とわれわれとを護ってくれていたヘクトルを、祖国のために戦っていた彼を、あなたがつい先日、殺してしまったのです。わたしがただ今、アカイア人たちの舟艇にまいりましたのは、息子のために、その身柄をあなたからもらい受けたいためなのです、それに、数えきれぬ賠償の品々もわたしは持参しております。どうか、アキレウスよ、神々を恐れ、あなたの父親のことを偲んで、このわたしを憐れんでください。誠にこのわたしは彼よりも遥かに憐れなものであり、地上の誰もかつて堪えたことのないことに堪えて、わたしの息子たちの加害者の顔に手を差し伸べようとしているのです」そう彼は言って、相手のうちに自分の父親のために悲しむ感情を掻き立てた。やがて彼は老人の手を取って、やさしく彼を自分から引き離した。そこで二人はそれぞれ自分の死者をしのんで、　一人はアキレウスの足許で身悶えしながら、人を殺戮するヘクトルのために涙を流し、アキレウスは自分の父親のために、またパトロクロスのために泣いた。すると彼らの歎きの声は家じゅうにひびきわたった。けれども神々しいアキレウスは思う存分泣き、その欲求が彼の心や手足から消え去ると、ただちに彼は席を立ち、老人の白髪の頭と白いあごひげとを憐れみ、その手を取って立ち上らせ、彼に翼のある言葉をかけて言った。

「ああ、不幸な人よ、あなたはこれまで心にずいぶん多くの不幸を堪えて来られました。どうしてあなたは敢然とひとりでアカイア人たちの舟艇に来て、あなたの多くの、雄々しい息子たちを殺した人間の眼前にお見えになったのでしょうか。まことにあなたの心は鉄でできあがっているのです。だが、ともあれ、さあそこに腰をかけてください、そうすれば、いかに苦痛であろうとも、われわれは悲しみを心のうちに静かに落ちつけ得ようというものです。なぜなら、ひややかな号泣からはなんの利益も生れて来ないから。神々は、隣れな人間どものために、彼らが苦難の生涯を送るように（運命の）糸をつむいだけれど、神々ご自身には苦労がないのです。というのは、ゼウス大神の床には二つの壺が置かれてあり、　一つは彼が与える災禍の贈物の、他は祝福の贈物のです。稲妻を喜びたもうゼウスが両者を提ぜ合わせて与えると、その人間は時には災禍に、時には幸福にめぐり会います。彼が悪いものだけを与えると、その人は人からののしられるようになり、恐ろしい飢饉が神聖な大地の全域に彼を追い、彼は神々にも、人間たちにも尊敬されずに流浪することになる。こうして神々は、ペレウスに対し、誕生の時からすばらしい贈物を与えた。なぜなら、彼は幸運においても富においても万人に優り、ミュルミドネス人たちの王であったし、また、彼は死すべき人間ではあったけれど、神々は彼に女神を花嫁として与えたほどだから。しかるに、このような彼にさえ、神は禍いをもたらしたのです、すなわち、彼には若くして死んで行くはずの一人息子を産む以外には、彼の営殿には王位を継ぐべき子孫ができなかった。わたしは、わたし自身の故国を遠く離れて、あなたやあなたの子

らを苦しめて、トロイエの地に留まっているからには、年老いた父の面倒をみることは到底できない。老人よ、われわれとしても、以前にはあなたが祝福されていたことを仄聞したことがある、すなわち、　マカルの王宮のあるレズボスと、山のかなたのプリュギエと、果しないヘレスポントス海とが囲む地方のすべての住民のうちで、老人よ、あなたは富においても、息子たちにおいても最もゆたかだと言われていた。けれども天の神々があなたにこの不幸をもたらした時から、戦闘と殺戮とが絶えず城市の周辺に起こりました。元気をお出しなさい、いつまでも際限なく心に悲しまないように。なぜならあなたは息子のために悲しんだところで、なんの益にもならないし、生命を取り戻すことにもならないのです。その前に何かほかの禍いに遭わないともかぎらないのだから」

422
最高の詩人よ―　アルビオンの雲たちよ、
われらの深き永遠の主題を　生み出す人たちよ！
わたしが年古りた樫の森を通り過ぎるときは、
空しい夢のなかを　さまよわせないでおくれ、
だが、その火でわたしが燃えつきるときには
思いのままに飛べる　新しい不死鳥の翼を　わたしに与えておくれ。

423
さあ心に勇気を持て
嵐のような世界を進んでいくために
巨大な雲が巻き起こる
素晴らしき日、光の中で眠る
地獄と天国から開放され
約束された宇宙へと

声無き死のことを語るのは誰？
誰がそのベールを取って見せる？
足元に影を描いて見せるのは
亡き人々が眠る、曲がりくねった洞窟？
希望は成し遂げられない
そこに現れたものを畏れ愛す

424
私はその秘密が何か知らない
でもそれは私の内にあるもの

その秘密は私に至福をもたらす
その為に死んだとしても神聖だ
くちづけの中にあるのではない
ため息の中にあるのでもない
その秘密だけで満ち足りる
この愛のため、私は死ぬ

425

またもやそれはかもしれないことの一事例であり、またもやかもしれないことがらがその事態の本質をなしている。目に見えぬ世界の存在そのものは宗教的な呼びかけにたいし誰もが示す反応のいかんに部分的に依存しないでいいわけが、正直なところ私には分らない。要するにわれわれが神を信じるからこそ、神自身の力は強まりその存在は増大されることになるのであろう。私自身としては、この人生の労苦や悲劇が人生以外のところでなにごとかを意味するとしても、それがなにを意味するかが分らない。もしこの人生が実戦でなく、またその勝利によって宇宙のためになにものかが永遠にかちえられるのでなければ、人生はいつでも勝手に幕にしてかまわぬ、しろうと芝居の上演とあまり変らないものになる。しかし、人生は実戦のように感じられる。――すなわち宇宙には、われわれが理想と誠実さをこめて贖う必要のある、そしてなによりもまず無神論や不安からわれわれの心情を贖う必要のある、まぎれもなく粗野なものが存在するようにおもわれる。われわれの天性はこのような半ば粗野で半ば救済された宇宙に順応させられている。われわれの本性のいちばん奥底にひそむものは、（あるドイツの学者の近頃の言葉をかりれば）内面の生であり、こうした心情の沈黙の層において、われわれは好むと好まざるとにかかわらず信仰または不安をいだいて孤独に生きている。洞窟の割れ目や裂け目をとおして泉の源から水がにじみでるように、われわれの外的な行為や決断はすべてこのほの暗い人格の深みにその源を発している。ここにものごとの本性と交流するわれわれのいちばん奥底の器官がひそんでいる。そしてわれわれの魂のこの具体的な動きに比べれば、あらゆる抽象的な言明や科学的な議論――たとえばわれわれの信仰にたいする厳格な実証主義者の拒否的発言――は、単に歯をカチカチいわせている音のように聞こえる。

かくて諸君に申しあげる私の最後の言葉は次のとおりである。人生を恐れてはいけない。人生は生き甲斐があると信じよ、そうすればこの諸君の信念がその事実をうみだす一助となるだろう。諸君が正しいということの「科学的証明」は、最後の審判の日（あるいはこの表現で象徴されうるようなある存在の段階）に達するまで明瞭にならないだろう。しかしこの時機あるいはそれに象徴される存在の到来を確信する人生の闘士が、目下それをめざして前進することを拒む臆病者にさしむける言葉は、アンリ四世が大勝利をえたのちに遅れてかけつけたクリヨンを迎えたさいの言葉に似たようなものであろう。「首をくくるがいい勇者クリヨン。われわれはアーキューズで戦ったがお前はそこに居あわせなかった。」

426

英国よ、立ち上がれ
エルサレムではシスターが呼んでいる
なぜ死ななければならないのか？
嘆きの壁から遠ざけられて

あなたの丘の上を、谷間を、彼女たちは歩んでいく
優しい胸の上を
清らかな天国への道の先に門が見える
そこに着けば喜びと愛がある

さあもう帰る時間だ
私たちの魂は歓喜する
ロンドンタワーには神が住まう
繁栄する英国の下に人々が憩う

427
あれた大地を泉が潤す
緑の木々が茂って広がる
太陽に向かって葉を広げる
光を受けて身震いする

生命とは色彩、温かみ、そして光
繁栄し続ける
戦わないものは死者と同じ
戦いの中で死ぬものは繁栄する

戦うものは太陽の使い
広がり行く大地から温かさ、生命を取り出す
光のような速さで風に乗って走る
新緑の森が生い茂る
戦いが終わった今
死という大いなる休息を見出す

天に住む美しい仲間
彼を恭しく招き入れる

シリウス、プレアデス
腰に剣を携えたオリオン

森林に木々が生い茂る
一つ一つが彼の友人
風が吹き抜ける中で優しく語りかける
谷間から山頂まで道を示してくれる

鷹はずっと空から見下ろしている
夜には小さなフクロウが現れる
彼に注意する
耳を澄ませ、目を見張れ

ブラックバードが歌いかける
「やあ兄弟、これが最後の歌かもね
　それなら素敵に歌わなくては
　歌おう、兄弟」

戦いが始まるまで
荒ぶる気持ちを静めて待つ
馬たちが力を貸してくれる
忍耐強い眼差し、勇気ある心

戦いが始まれば
すべてを忘れてしまう
戦う事を喜び
戦い以外が見えなくなる

盲目的な喜びの中で知るだろう
気づかなかったこと
鉛や鉄の弾丸が届かない事
それは運命の力だけではない

軍隊が進む地響き
死神は呻き、そして歌う

昼間は戦いに取り付かれ
夜は柔らかな羽に抱かれて眠る

428
そのとき　知恵と美と子孫が残る
さもなければ愚行と老いと　冷たい頽廃だけ

429
私たちと共にある神への感謝
幼い私たちを目覚めさせた
正しい手、全てを見る目、鋭い力
澄んだ水の中へと飛び込むように
古く冷たく弱った世界から、喜びの中へと
動かせないほどに病んだ精神はそのままに
半ば人間じみた俗な歌の楽しさ
愛が虚ろであるなどという事は無い

私たちも恥というものを知っている
病も悲しみも無い場所での休息は眠り
無は壊れ、命は残る
健康な笑い声が揺るがされる事はない
苦痛はやがて癒される
悪い友人や敵だって変えられる、死だけを除けば

430
アシア
おお、母よ、何ゆえに死の名を言うのか。
それらは、愛しも、動きも、息も、話しもしなくなるのか、
誰が死ぬのか。

大地
答えても分からないだろう――
あなたは死を知らない。この言葉は
交わす言葉を持たぬ死者だけにしか分からないこと、

死はヴェール、それを生けるものたちは生と呼ぶ――
彼らが眠ると、ヴェールは上げられる、―― そしてその間に、
穏やかな四季が穏やかに移ろう中で、
虹の裾をつけた俄雨や、かぐわしい風、
冴えない夜を洗い浄める、長く、青い隕星、
生命を目覚めさせる鋭い日の
すべてを貫く弓の矢、そして露と混じり合う
平静な月光の雨、穏やかな、柔らかな力、
それがみな、森や野に、そう、
不毛の海底の峨々たる岩の砂漠にすら
永生の葉や果実や花などの装いを衣せる。

431
いつか私も死ぬであろう
異国の地の片隅で
永遠なる英国のために
豊かな地球の上で
英国は広がっていく
その先々に花をもたらす
英国の空気を胸いっぱいに吸い込む
河が悠々と流れ、太陽が明るく照らす

その時、邪悪な心は洗い清められ
胸の鼓動は永遠となる
英国が示す道へ従え
朗らかな景色、幸せな未来
笑い声、仲間との友愛
英国という心の安らぎ

432
星のまたたく夜空の下で
私の体を埋めてください
誇りをもって生き、そして死んだ
ここで眠る事に後悔はない

私のためにこの詩をくちづさんで下さい

”ここに眠るものは
　自らの青山に眠る
　船乗りの青山は海の中
　狩人の青山は丘の上”

433
いかに眠るか勇者たちは、休息の中に身を沈め、
国をあげての祝福の言葉にめぐまれて。
春が冷たい露にぬれたその指先で、
かれらの尊い土を飾りに戻る時になると、
想像がその足を運んだいずれにもまさる
美しい芝土としてそれを装うことだろう。

妖精の手によって弔いの鐘は鳴らされ、
目に見えない存在によって挽歌が歌われる。
そこに灰色の衣の旅人 名誉は来て、
かれらの軀をつつむ芝草に祝福を与え、
自由は暫くの間そこに帰ってくるだろう
涙しつつ嘆く隠者として住まうために。

434
葬送の音楽など聞えない
彼の遺体を壕に運び入れた
私たちの英雄を葬る場所で
弔砲を撃つものはいない

真夜中、彼の体に土をかぶせる
銃剣で土をすくう
青白い月光が照らす
ランタンの灯りがほのかにに光る

彼を納める棺も無く
彼に被せる白布も無い

疲れて休む戦士のように
戦闘服のまま横たわっている

手短に祈りの言葉を唱えた後
みな、悲しみに黙り込む
死んだ彼の顔を見つめているうちに
明日の苦しい戦いの事を考える

彼を葬るには狭かっただろうか
頭を支える枕は綺麗にならした
彼が眠る場所の上を、敵や見知らぬものが行き交うのだろうか
私たちがずっと遠くに去った後も

去ってしまった魂の事を語っても軽々しいだけ
土の下の彼も安らかではいられない
彼をそっと眠らせておこう
英国が与えた場所で、安らかに眠るように

私たちの戦いはまだこれから
時計が知らせれば
私たちは銃弾の飛び交う場所へ進撃する
冷徹な敵が私たちを狙っている

彼の体をゆっくり静かに下ろしていく
輝かしい名誉と栄光が残された
私たちは墓石も墓標も作れないが
彼はその栄光と共に、一人、ここに眠っているのだ

435
その賛美の琴の音は私のものより気高い
戦死した者の中から彼が選ばれる
立派な家系の中にあって。
彼の父への不敬があったかもしれない
輝かしい名が歌までも気高くする
最も勇敢な者の一人

大砲の弾の雨の中
どれほど戦争が激しくなろうと
若く誠実なあなたの勇気には何でもない、ハワードよ

436
なおもう一度、おお汝ら月桂樹よ。そしてもう一度、
汝ら、黒ずむ天人花と、そして常緑の蔦よ。
汝らのしぶい、未熟の実をもぎに、われは来て、
心ならずも、あらけない指で、
熟れる時節もこぬうち、汝らの葉叢をかきちらす。
つらい思いの強制や、さし迫った悲しい事情があって、
われはやむなく、汝らの旬の季節を狂わせねばならぬ。
リシダスが死んだからだ。死んだのだ、盛りもまたず
若いリシダスが。しかも類う人材は後に残っていない。
リシダスのために、歌わないものが、誰があろう？
彼もまた歌う術を心得て、高尚な詩歌を築きあげた。
悲嘆する人もなく、水を棺にして彼を漂わせてなるものか、
干乾びしぼます寒風に、彼をいたがらせてなるものか、
詩につづった、哀悼の涙で、弔われることもなくして。

われら二人は、同じ丘で育てられ、同じ羊の群れを、
泉や、木蔭や、小川のほとりで飼っていたのだから。
二人ともどもに、朝の開きかかる験のもとで、
高台の草地が見えてくるまでに、
羊の群れを牧場へ追い、虻が暑くるしい
角笛をふくとき、それをきき、
夜露が降りはじめるころには、羊をふとらせた。
夕空の斜面にきらめく明星が、西向きの車輪を
傾けるほどの、時刻になったこともしばしばだ。

だがああ、つらいこの変り様、君はもう居ないからだ。
君はもう居なくなって、もうもどってはこれぬからだ。
君よ羊飼、君を悼んで、この森が、野生の立康香草や
はびこった蔓草の覆い茂る、人気なき洞穴が、
そしてそこに籠もる木班もすべて、悲しんでいる。

この柳が、はしばみの緑の林が、
君のやさ声の歌にあわせて、うれしげな
葉叢を振って扇ぐさまは、もう見られまい。
薔薇には花をむしばむ尺取虫、あるいは、
草食む子羊の群れには、病みつかせる毒虫、
または、山査子が咲きそめるころ、綺羅を
着飾る蕾に霜、と同じ命とりの恐ろしさだ、
リシダスよ、君の計報が、羊飼の耳には。

あわれ、なんの役にたつのか？　絶えず気を配って、
見さげられた、しがない牧羊のなりわいにはげみ、
利益なき詩神のわざに、ひたすら精進していても。
ほかの者どもが、いつもするならわしのごとくに、
牧婦のアマリリスと日蔭で戯れ、牧婦ニイーラの
頭髪のもつれ毛を弄が方が、ましではなかろうか。
名声は、（それは高潔の士に残る最後の弱点だが、）
気高い人を奮起させて、歓楽をさげすみ、
労苦の日日をおくらせる、拍車である。
だが、あのすばらしい報酬が得られるかと待望して、
ぱっと燃えたつ栄光のなかへ、躍進しようと思うとき、
盲目の運命の女神フュアリがゆゆしい鋏を携えて来て、
細く紡いだ命の糸をたち切る。「だが称讃はたち切らぬ。」
と詩神フォイボスが答え、藪えるわが耳をひいて戒めた。
「名声は、現世の上に生える草木ではない。それは、
現世の人に美美しくみえて煌めく、下敷箔の中にも、
流布する世評の中にも、あるものでなく、
一切を裁くジュピターの、明澄な眼力と、
厳正な立証によって、天界に生きて拡がるものである。
この主神が、　一つ一つの行為の最後の裁決を宣するとき、
天国で、かほどの名声の報酬が、汝にあることを期せよ。」

もう泣くなよ、悲嘆する羊飼たち、もう泣くなよ。
君らの悲嘆の原因のリシダスは、死んではいないから。

たとい彼が平らな水面の下に沈んでも、それと同じく、
昼の星の太陽は、海の寝床に沈むけれども、
ただちに、うつむいた頭を新たによそおい、
その光とを飾り、新たにきらめく黄金色に、
朝明けの空の額のなかで、燃えてかがやく。
そのように、リシダスも低く沈んだが、高く浮び上った、
波の上を歩いたお方の、尊いお力によって。
浮びでた所では、この世ならぬ森や小川を通り、
澄んだ神酒の水で、どろどろにじめつく
髪毛を洗い、至福で平和な、あちこちの
歓喜と愛の領域で、えも言われぬ祝婚の歌をきく。
そこでは天界の塾徒らがこぞって、荘厳な群衆や、
心地よい集団のなかで、彼を、楽しませる。
そのときは歌い、歌いながら華麗に踊って、
彼の目から、永久に涙をぬぐいさる。

437
傷つけられる事のない炎と刃
しかし、その眉は苦しみにゆがむ
その手には殉教のバラ
深い瞳の奥には賢明な思想
苦痛にも揺らぐ事はない
乗り越えた後に忘れてしまう
この戦いに勝つ
一人の戦士として
もはや出征のときの少年ではない
父の手に守られた髪
母の口づけに温められた頬
口に出さずとも心で判っている
孤独な死を覚悟しなければならない事
クロッカスの花の咲く故郷
心安らぐ海の音
気高き戦士を弔う
戦いの夜明けには思いもよらなかった事

438
正義を理解し、悪を許さない。社会の持つ様々な課題について深く考える。その名声は天にも届くほど。そして、聖者の一人として、その名が加えられる

439
ここには何一つ涙して、嘆き、
胸を叩くことなどない。弱さ、侮り、
謗り、咎めもない。あるはただ善き麗しきことのみ、
かくる気高き死にはわれらの心を鎮めるものがある。

440
沈みゆく太陽や終わろうとする音楽は、

441
しずかに　しずかに！　かれは死んではいない　かれは眠ってはいない――
かれは　生の夢からめざめたのだ――
激しい夢想におぼれ　幻影とむなしいたたかいをつづけ
我れを忘れて狂ったように　魂の刃で
傷つくことのない無を撃つのはわれら――
その私らこそが　納骨堂のしかばねのごとく朽ちていくのだ。
恐怖と嘆きは　日々　私らを悶えさせ
私らを焼きつくし、冷たい希望は
私らの肉体のうちに　蛇虫どものように群がる。

かれは私らの夜の暗闇を　高くこえて行った。
羨望　中傷　憎悪　苦痛　そして
まちがって歓びとよばれるあの興奮も、
かれを動かし、また苦しめることはできない。
この世をゆっくり汚していく害毒に　かれは
身をさらすことなく、冷たい心臓や
むなしく灰いろになった頭を　もう嘆くことはできない。
魂そのものが燃えるのをやめたとき
生命の失せた灰を　悲しむもののない骨壷につめることはない。

かれは「自然」とひとつになった――

雷鳴のうめきから　夜のやさしい鳥のうた声まで、
「自然」のあらゆる音楽のなかに　かれの声が聞える。
かれは闇のなか　光のなか
草や石から　感知される存在――
かれの生命をそのあるべきすがたに引きもどし、
けっして倦かぬ愛をもって世界を支配し、
下からそれをささえ、上からそれを燃えたたせる
あの「力」のうごくところは　どこにでも行きわたる。

かれは　かつてかれがより美しくした
美しきものの一部――かれはその役割をはたす一方、
あの至高の「霊」の形成する力が
愚鈍な世界を吹きはらい、さらにつづく
あらゆるものに　その装うかたちを新たにあたえ、
その飛翔をさまたげる　救いがたい滓には
できるかぎり　それに似た姿をよそおわせ、
樹木や　獣や　人間から
「天」の光のなかへ　美しく力強く　躍り込む。

時の空の壮麗な輝くものたちは
隠すことはできても　消えることはない。
星たちのようにさだめられた高さまでのぼり、
死はたれこめた霧、その輝きをおおうが
消すことはできない。高遠な思想が若いこころを
この世のねぐらからひき上げ、愛と生とがそこで
この世の運命はいかにあるべきか争うとき、
死者はその心のうちにあって
くらい荒れ狂う風に乗って　ひかりの風のようにうごく。

「一」は残り、多は変化し消滅する。
「天」の光は永遠にかがやき、「大地」の影は飛び去る。
「生」は多彩なガラスの円蓋のごとく
「死」がそれを踏みくだくまで
「永遠」が放射する白光をいろどる――死ぬがよい、
もしおまえが、おまえの求めるものと共にいようとするなら！

あらゆるものが飛び去ったあとを追え！

442
亡くなった勇者への敬礼
信じたくないが、二度とは戻らない
在りし日の姿が忘れられない
彼が天国へ出発した祝いにトランペットを鳴らせ
その背に後光が輝き
きっと生まれ変わって戻ってくる
高い志を保ち
美しく光を放つ
希望を朝日に白く輝かせる

443
それから「この世」で名は知られていないが、
火がその種火より長く生きのこるかぎり
他に及ぼす感化の滅びることのない　さらに多くのものたちが、
まばゆい不滅性をまとって　起ち上がった。

444
生けるものも、死せるものも、幸福によって互いに繋ぎとめられている
褪せる事のない愛の花、忘れられない様々な思い出

445
聖なる王国で聖者たちが喜ぶ。主なるキリストの道に従って進む。キリストへの愛のために、私たちの血が広がっていく。この王国の統治は、キリストと共に永遠である。

446
ヴァンサンは神の祝福を受け、信仰心を忘れず、苦痛に耐えた。そして言った。これはいつも、私が求めていたものです。私が祈り、願っていたものです。

447
神の忠なる僕よ、
汝はまことによくやった！　誰よりも
よき戦いを戦った！　汝はただ一人で無数の叛逆の徒に

抗して、蜂起した彼らが用いた武力よりもさらに強力な
言葉を用いて、真理の大義を守り、真理の証のために、
暴力よりもさらに堪え難い衆人の讒謗に堪え通して
きた。たとえ他のあらゆる者から頑迷固陋と非難されても、
ただただ神の前に嘉されることだけを、
汝はひたすら心がけてきた。

448
語れ―― あなたの強い言葉は消え去りはしないだろう。

愛が、賢き心のうちの堅忍の力の、おごそかな王座から、
また恐ろしき試練のめくるめく究極から、
危うく、険しく、
瓦礫の如き、苦悩の狭き縁から湧き出でて、
その癒しの翼を世界に広げ、包む日なのだ。

「優和」「高徳」「叡智」「堅忍」、
これこそが、最も堅固な保証の印、
「破壊」の力のわなの穴をふさぐものなのだ、――
また、もし力弱き「永遠」が、
諸々の活動と時間の母なる永遠が、あの蛇を放してしまい、
それが、全身で巻きつくようなことがあっても、
これらの保証の力によってこそ、
その「運命」は解きほぐされ、再び主権を手に治めるのだ。

終わることなしと「希望」が思う悲哀を忍ぶ、――
死や夜よりも暗い悪を赦す、――
全能に見える「力」を恐れない、――
愛し、そして耐える、―― 「希望」が
自らの残骸から、静思するものを創り出すまで望む、――
決して変わらず、たじろがず、悔やまない――
これこそが、あなたの栄光のように、タイタンよ、
善であり、偉大であり、喜ばしく、美しく、自由であるということだ、――
これのみが「生命」であり、「喜び」であり、「支配」であり、「勝利」なのだ。

449

真実の光の、何と神々しい事

美しく放たれ、葛藤する心を導く

キリストは私たちに、永遠に輝く場所を授けた

私たちは、永遠の幸福を得たのだ

引用文献一覧

冒頭の詩:ロバート・ブリッジズ:詩人:2016 年:安本
1:バールーフ・デ・スピノザ:哲学者:世界の大思想 9 スピノザ:河出書房新社:1970 年:高桑
2:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
3:ウィリアム・シェイクスピア:作家:テンペスト:筑摩書房:2000 年:松岡
4:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
5:マシュー・アーノルド:詩人:2016 年:安本
6:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
7:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
8:アルチュール・ランボー:詩人:ランボオ詩集:岩波書店:2013 年:中原
9:ジェラード・マンリ・ホプキンス:詩人:ホプキンズ詩集:春秋社:1982 年:安田、緒方
10:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
11:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
12:聖書:ヨブ記　3:
13:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ヘンリー 6 世:筑摩書房:2009 年:松岡
14:トーマス・カーライル:評論家:フランス革命史:春秋社:1948 年:柳田
15:聖書:コヘレトの言葉　1:
16:プラトン:哲学者:プラトン全集 1 :岩波書店:1975 年:松永
17:カビール:哲学者:2016 年:安本
18:作者不詳:2016 年:安本
19:バーバー・ターヒル:詩人:2016 年:安本
20:グレゴリウス 1 世:政治家:2016 年:安本
21:ジョン・ミルトン:詩人:劇詩　闘士サムソン:思潮社:2011 年:佐野
22:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワーズワース詩集:岩波書店:1938 年:田部
23:ジェフリー・チョーサー:詩人:2016 年:安本
24:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
25:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
26:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:イェイツ詩集:角川書店:1999 年:尾島
27:モスコス:詩人:2016 年:安本
28:プラトン:哲学者:2016 年:安本
29:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:政治家:世界の名著 1 3 マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968 年:鹿野
30:プラトン:哲学者:プラトン全集 1 :岩波書店:1975 年:松永
31:ジョン・ミルトン:詩人:仮面劇コーマス:南雲堂:1958 年:才野
32:アウグスティヌス:哲学者:告白:岩波書店:2006 年:服部
33:ジョン・キーツ:詩人:2016 年:安本
34:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
35:ジョン・ミルトン:詩人:仮面劇コーマス:南雲堂:1958 年:才野
36:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
37:プラトン:哲学者:プラトン全集 5 :岩波書店:1974 年:鈴木
38:ラビンドラナート・タゴール:詩人:タゴール詩集:岩波書店:1977 年:渡辺
39:アリストテレス:哲学者:アリストテレス全集 12:岩波書店:1968 年:出
40:プラトン:哲学者:プラトン全集 1 :岩波書店:1975 年:松永
41:聖書:箴言　8:

42:聖書:聖ヨハネの福音書　1:
43:カビール:哲学者:2016 年:安本
44:聖書:詩篇　139:
45:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
46:作者不詳:2016 年:安本
47:ジャラール・ウッディーン・ルーミー:詩人:2016 年:安本
48:プロティノス:哲学者:プロティノス全集３:中央公論社:1987 年:田中、水地、田之頭
49:ロバート・ブリッジズ:詩人:2016 年:安本
50:アントワーヌ・ド・リヴァロル:作家:2016 年:安本
51:プラトン:哲学者:プラトン全集１３:岩波書店:1976 年:森、池田、加来
52:レフ・トルストイ:作家:戦争と平和:岩波書店:2006 年:藤沼
53:ジェラード・マンリ・ホプキンス:詩人:ホプキンズ詩集:春秋社:1982 年:安田、緒方
54:アウグスティヌス:哲学者:告白:岩波書店:2006 年:服部
55:ジャラール・ウッディーン・ルーミー:詩人:2016 年:安本
56:ジョージ・ハーバート:詩人:ジョージ・ハーバート詩集:南雲堂:1986 年:鬼塚
57:カビール:哲学者:2016 年:安本
58:ジョージ・ハーバート:詩人:ジョージ・ハーバート詩集:南雲堂:1986 年:鬼塚
59:ジャラール・ウッディーン・ルーミー:詩人:2016 年:安本
60:ジョージ・ハーバート:詩人:ジョージ・ハーバート詩集:南雲堂:1986 年:鬼塚
61:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
62:エピクテトス:哲学者:人生談義:岩波書店:1958 年:鹿野
63:ジョージ・ハーバート:詩人:ジョージ・ハーバート詩集:南雲堂:1986 年:鬼塚
64:アウグスティヌス:哲学者:告白:岩波書店:2006 年:服部
65:聖書:詩篇　8:
66:カビール:哲学者:2016 年:安本
67:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
68:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
69:プロティノス:哲学者:プロティノス全集４:中央公論社:1987 年:田中、水地、田之頭
70:バールーフ・デ・スピノザ:哲学者:2016 年:安本
71:ジョン・キーツ:詩人:キーツ書簡集:岩波書店:1952 年:佐藤
72:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
73:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
74:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
75:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ヘンリー８世:白水社:1983 年:小田島
76:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
77:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
78:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
79:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
80:ウィリアム・シェイクスピア:作家:十二夜:筑摩書房:1998 年:松岡
81:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー抒情詩集:創芸出版:2006 年:床尾
82:フィリップ・シドニー:詩人:詩への弁護:2012 年:村里
83:ウィリアム・ワーズワース:詩人:抒情歌謡集:大修館:1984 年:宮下
84:フランシス・ベーコン:哲学者:世界の名著２０ベーコン:中央公論社:1970 年:福原
85:ディックビー・マックワース・ドルベン:詩人:2016 年:安本

86:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
87:ジョン・メイスフィールド:詩人:2016 年:安本
88:ウィリアム・ワーズワース:詩人:2016 年:安本
89:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
90:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
91:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
92:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
93:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
94:ウィリアム・ワーズワース:詩人:2016 年:安本
95:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワーズワース詩集:岩波書店:1938 年:田部
96:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
97:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
98:ルキアノス:作家:2016 年:安本
99:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
100:ジョン・キーツ:詩人:詩人の手紙:冨山房:1977 年:田村
101:作者不詳:土居光知著作集 3 :岩波書店:1977 年:土居
102:ウィリアム・シェイクスピア:作家:テンペスト:筑摩書房:2000 年:松岡
103:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:2009 年:八谷
104:ウィリアム・シェイクスピア:作家:テンペスト:筑摩書房:2000 年:松岡
105:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
106:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
107:エドマンド・スペンサー:詩人:スペンサー詩集:筑摩書房:2000 年:福田
108:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ヴェニスの商人:筑摩書房:2002 年:松岡
109:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:2016 年:安本
110:ジョージ・ダーリー :詩人:2016 年:安本
111:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:2016 年:安本
112:作者不詳:バラッドの世界:英語教育協議会:1979 年:平野
113:作者不詳:2016 年:安本
114:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012 年:野村
115:アルチュール・ランボー:詩人:ランボオ詩集:岩波書店:2013 年:中原
116:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
117:作者不詳:2016 年:安本
118:チャールズ・ラム:作家:完訳エリア随筆:国書刊行会:2014 年:南條
119:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
120:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012 年:野村
121:エミリー・ブロンテ:作家:2016 年:安本
122:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
123:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:イェイツ詩集:角川書店:1999 年:尾島
124:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
125:作者不詳:2016 年:安本
126:ジョージ・ダーリー :詩人:2016 年:安本
127:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
128:ジョン・キーツ:詩人:詩人の手紙:冨山房:1977 年:田村
129:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本

130:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981 年:平井
131:ジョージ・ダーリー :詩人:2016 年:安本
132:プラトン:哲学者:プラトン全集 5 :岩波書店:1974 年:藤沢
133:ウィリアム・ワーズワース:詩人:対訳ワーズワース詩集:岩波書店:1998 年:山内
134:エミリー・ブロンテ:作家:エミリ・ブロンテ全詩集:大阪教育図書:1995 年:藤木
135:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワーズワース詩集:岩波書店:1938 年:田部
136:チャールズ・フォンテーヌ:詩人:2016 年:安本
137:ウィリアム・ワーズワース:詩人:対訳ワーズワース詩集:岩波書店:1998 年:山内
138:ヘンリー・デイヴィッド・ソロー:詩人:森の生活:岩波書店:1995 年:飯田
139:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
140:ウラジーミル・ソロヴィヨフ:哲学者:2016 年:安本
141:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
142:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
143:シドニー・ラニアー:音楽家:2016 年:安本
144:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981 年:平井
145:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
146:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
147:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
148:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
149:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
150:リチャード・ルイス・ネトルシップ:哲学者:2016 年:安本
151:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
152:作者不詳:2016 年:安本
153:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー抒情詩集:創芸出版:2006 年:床尾
154:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:イェイツ詩集:角川書店:1999 年:尾島
155:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
156:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:英詩珠玉選:大修館:1990 年:石井
157:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
158:ラッセル・アバークロンビー:詩人:2016 年:安本
159:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
160:クラウディオス・プトレマイオス:学者:2016 年:安本
161:フランシス・ベーコン:哲学者:世界の名著２０ベーコン:中央公論社:1970 年:福原
162:アンドルー・マーヴェル:詩人:2016 年:安本
163:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966 年:前田
164:ロバート・ルイス・スティーヴンソン:作家:2016 年:安本
165:プロティノス:哲学者:プロティノス全集 2:中央公論社:1987 年:水地、田之頭
166:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
167:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
168:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
169:ロバート・ルイス・スティーヴンソン:作家:2016 年:安本
170:聖書:コヘレトの言葉　3:
171:ウィリアム・ブレイク:詩人:2016 年:安本
172:ブレーズ・パスカル:哲学者:2016 年:安本
173:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:政治家:世界の名著１３マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968 年:鹿野

174:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
175:カビール:哲学者:2016 年:安本
176:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー抒情詩集:創芸出版:2006 年:床尾
177:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
178:アルチュール・ランボー:詩人:ランボオ詩集:岩波書店:2013 年:中原
179:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
180:トマス・デッカー:作家:2016 年:安本
181:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:政治家:世界の名著１３マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968 年:鹿野
182:カビール:哲学者:2016 年:安本
183:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
184:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
185:ジョージ・メレディス:作家:2016 年:安本
186:ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ:詩人:2016 年:安本
187:ロバート・ブリッジズ:詩人:2016 年:安本
188:トーマス・ナッシュ:詩人:2016 年:安本
189:ウィリアム・シェイクスピア:作家:シンベリン:筑摩書房:2012 年:松岡
190:シャルル・ド・ヴァロワ (オルレアン公):詩人:2016 年:安本
191:ウィリアム・シェイクスピア:作家:お気に召すまま:筑摩書房:2007 年:松岡
192:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:2016 年:安本
193:シャルル・ド・ヴァロワ (オルレアン公):詩人:2016 年:安本
194:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
195:ジェフリー・チョーサー:詩人:カンタベリー物語:岩波書店:1973 年:桝井
196:ウィリアム・シェイクスピア:作家:十二夜:筑摩書房:1998 年:松岡
197:ウィリアム・シェイクスピア:作家:お気に召すまま:筑摩書房:2007 年:松岡
198:ウィリアム・シェイクスピア:作家:お気に召すまま:筑摩書房:2007 年:松岡
199:ウィリアム・シェイクスピア:作家:情熱の巡礼者:2016 年:安本
200:ウィリアム・ワーズワース:詩人:2016 年:安本
201:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
202:ウィリアム・ワーズワース:詩人:対訳ワーズワース詩集:岩波書店:1998 年:山内
203:アルフレッド・テニスン:詩人:2016 年:安本
204:ジェフリー・チョーサー:詩人:2016 年:安本
205:ヘリック:詩人:ヘリック詩抄:岩波書店:2007 年:森
206:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
207:ジョン・キーツ:詩人:詩人の手紙:冨山房:1977 年:田村
208:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ヴェニスの商人:筑摩書房:2002 年:松岡
209:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
210:ピエール・ド・ロンサール:詩人:ロンサール詩集:岩波書店:1951 年:井上
211:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
212:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
213:アルフレッド・テニスン:詩人:2016 年:安本
214:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
215:作者不詳:2016 年:安本
216:トマス・グレイ:詩人:墓畔の哀歌:岩波書店:1970 年:福原
217:ホセ・マリア・デ・エレディア :詩人:2016 年:安本

218:ジェームス・シャーリー:作家:2016 年:安本
219:ジョン・メイスフィールド:詩人:2016 年:安本
220:ピエール・ド・ロンサール:詩人:フランス名詩集:筑摩書房:2006 年:井上
221:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
222:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
223:ウィリアム・シェイクスピア:作家:テンペスト:筑摩書房:2000 年:松岡
224:ジョージ・ピール:詩人:2016 年:安本
225:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
226:エミリー・ブロンテ:作家:エミリ・ブロンテ全詩集:大阪教育図書:1995 年:藤木
227:フランソワ・ヴィヨン:詩人:ヴィヨン全詩集:岩波書店:1965 年:鈴木
228:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ハムレット:筑摩書房:1996 年:松岡
229:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
230:ニキアス（テオクリトスの友人）:医師:2016 年:安本
231:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
232:ロバート・ルイス・スティーヴンソン:作家:2016 年:安本
233:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
234:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ジョン王:白水社:1983 年:小田島
235:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012 年:野村
236:ジョージ・ヘンリー・ボロウ:作家:2016 年:安本
237:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012 年:野村
238:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
239:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
240:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
241:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012 年:野村
242:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
243:ロバート・ブリッジズ:詩人:2016 年:安本
244:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
245:エミリー・ブロンテ:作家:エミリ・ブロンテ全詩集:大阪教育図書:1995 年:藤木
246:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
247:ディックビー・マックワース・ドルベン:詩人:2016 年:安本
248:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
249:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
250:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
251:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
252:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワーズワース詩集:岩波書店:1938 年:田部
253:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
254:ジョージ・ダーリー :詩人:2016 年:安本
255:フランシス・ジャム:詩人:フランス・ジャム全詩集:青土社:1992 年:手塚
256:ロード・ド・タブリー:詩人:2016 年:安本
257:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
258:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966 年:前田
259:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013 年:寿岳
260:ジョージ・ハーバート:詩人:ジョージ・ハーバート詩集:南雲堂:1986 年:鬼塚
261:ジョン・ミルトン:詩人:劇詩　闘士サムソン:思潮社:2011 年:佐野

262:フランシス・ベーコン:哲学者:世界の名著２０ベーコン:中央公論社:1970年:福原
263:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974年:出口
264:ルパート・ブルック:詩人:2016年:安本
265:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974年:出口
266:ジョージ・ヘンリー・ボロウ:作家:2016年:安本
267:アルチュール・ランボー:詩人:ランボオ詩集:岩波書店:2013年:中原
268:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
269:ジェラード・マンリ・ホプキンス:詩人:ホプキンズ詩集:春秋社:1982年:安田、緒方
270:リチャード・ワトソン:詩人:2016年:安本
271:ウィロビー・ウィービング:詩人:2016年:安本
272:フョードル・ドストエフスキー:作家:カラマーゾフの兄弟:新潮社:1978年:原
273:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981年:平井
274:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:2016年:安本
275:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013年:寿岳
276:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981年:平井
277:ジョージ・ダーリー :詩人:2016年:安本
278:聖書:ローマの信徒への手紙　7:
279:ジョン・メイスフィールド:詩人:2016年:安本
280:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
281:リチャード・ワトソン:詩人:2016年:安本
282:ラビンドラナート・タゴール:詩人:タゴール詩集:岩波書店:1977年:渡辺
283:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009年:村松
284:ラビンドラナート・タゴール:詩人:タゴール詩集:岩波書店:1977年:渡辺
285:リチャード・クラショー:詩人:2016年:安本
286:ジョン・ダン:詩人:ジョン・ダン全詩集:名古屋大学出版会:1996年:湯浅
287:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
288:アウグスティヌス:哲学者:告白:岩波書店:2006年:服部
289:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:政治家:世界の名著１３マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968年:鹿野
290:ジョン・ミルトン:詩人:言論・出版の自由:岩波書店:2008年:原田
291:ミシェル・ド・モンテーニュ:哲学者:世界の大思想５エセー:河出書房新社:1970年:松浪
292:エイブラハム・カウリー:詩人:2016年:安本
293:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013年:寿岳
294:アントワーヌ・ド・リヴァロル:作家:2016年:安本
295:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
296:アリストテレス:哲学者:ニコマコス倫理学:岩波書店:2012年:高田
297:ラッセル・アバークロンビー:詩人:2016年:安本
298:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:政治家:世界の名著１３マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968年:鹿野
299:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:政治家:世界の名著１３マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968年:鹿野
300:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ハムレット:筑摩書房:1996年:松岡
301:アリストテレス:哲学者:ニコマコス倫理学:岩波書店:2012年:高田
302:アルフレッド・テニスン:詩人:対訳テニスン詩集:岩波書店:2003年:西前
303:ジョージ・ダーリー :詩人:2016年:安本
304:バールーフ・デ・スピノザ:哲学者:エチカ:岩波書店:2006年:畠中
305:プラトン:哲学者:プラトン全集１２:岩波書店:1975年:種山

306:ヘンリー・ワットン:作家:2016年:安本
307:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ハムレット:筑摩書房:1996年:松岡
308:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワーズワース詩集:岩波書店:1938年:田部
309:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966年:前田
310:ルネ・デカルト:哲学者:世界の名著２２デカルト:中央公論社:1967年:野田
311:ホメーロス:詩人:2016年:安本
312:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966年:前田
313:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966年:前田
314:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
315:ウィリアム・ブレイク:詩人:2016年:安本
316:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966年:前田
317:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981年:平井
318:バールーフ・デ・スピノザ:哲学者:エチカ:岩波書店:2006年:畠中
319:ミシェル・ド・モンテーニュ:哲学者:世界の大思想５エセー:河出書房新社:1970年:松浪
320:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
321:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981年:平井
322:エドウィン・ビーヴァン:哲学者:2016年:安本
323:アントワーヌ・ド・リヴァロル:作家:2016年:安本
324:アントワーヌ・ド・リヴァロル:作家:2016年:安本
325:アントワーヌ・ド・リヴァロル:作家:2016年:安本
326:ロバート・ルイス・スティーヴンソン:作家:2016年:安本
327:フランシス・ベーコン:哲学者:世界の名著２０ベーコン:中央公論社:1970年:福原
328:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:イェイツ詩集:角川書店:1999年:尾島
329:セルマ・ラーゲルレーヴ:作家:2016年:安本
330:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
331:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012年:野村
332:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012年:野村
333:フランシス・ベーコン:哲学者:世界の名著２０ベーコン:中央公論社:1970年:福原
334:バールーフ・デ・スピノザ:哲学者:エチカ:岩波書店:2006年:畠中
335:作者不詳:2016年:安本
336:作者不詳:2016年:安本
337:聖書:コヘレトの言葉　9:
338:フランシス・ベーコン:哲学者:世界の名著２０ベーコン:中央公論社:1970年:福原
339:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983年:宮西
340:ウィリアム・ヘイズリット:作家:2016年:安本
341:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983年:宮西
342:リチャード・ワトソン:詩人:2016年:安本
343:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013年:寿岳
344:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957年:石川
345:フョードル・ドストエフスキー:作家:カラマーゾフの兄弟:新潮社:1978年:原
346:ウィリアム・ブレイク:詩人:ブレイク詩集:岩波書店:2013年:寿岳
347:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワーズワース詩集:岩波書店:1938年:田部
348:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016年:安本
349:ウィリアム・バトラー・イェイツ:詩人:イェイツ詩集:角川書店:1999年:尾島

350:マルクス・アウレリウス・アントニヌス:作家:世界の名著１３マルクス・アウレリウス:中央公論社:1968年:鹿野
351:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957年:石川
352:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
353:フランシス・ウィリアム・バーディロン:詩人:2016年:安本
354:フョードル・ドストエフスキー:作家:カラマーゾフの兄弟:新潮社:1978年:原
355:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012年:野村
356:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974年:出口
357:フョードル・ドストエフスキー:作家:カラマーゾフの兄弟:新潮社:1978年:原
358:ジェラード・マンリ・ホプキンス:詩人:ホプキンズ詩集:春秋社:1982年:安田、緒方
359:ウィリアム・シェイクスピア:作家:お気に召すまま:筑摩書房:2007年:松岡
360:ウィリアム・ブレイク:詩人:2016年:安本
361:ウィリアム・シェイクスピア:作家:リア王:筑摩書房:1997年:松岡
362:ウィリアム・ワーズワース:詩人:対訳ワーズワース詩集:岩波書店:1998年:山内
363:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974年:出口
364:ホセ・マリア・デ・エレディア :詩人:2016年:安本
365:アルチュール・ランボー:詩人:ランボオ詩集:岩波書店:2013年:中原
366:ウィリアム・ワーズワース:詩人:2016年:安本
367:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
368:サミュエル・テイラー・コールリッジ:詩人:コウルリッジ全詩集:晃学出版:2012年:野村
369:ジェラード・マンリ・ホプキンス:詩人:ホプキンズ詩集:春秋社:1982年:安田、緒方
370:アンドレ・シェニエ:詩人:2016年:安本
371:ディックビー・マックワース・ドルベン:詩人:2016年:安本
372:ジェームズ・ネイラー:宗教家:2016年:安本
373:ディックビー・マックワース・ドルベン:詩人:2016年:安本
374:ウェルギリウス:詩人:アエネーイス:京都大学学術出版会:2001年:岡、高橋
375:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981年:平井
376:聖書:マタイによる福音書　25:
377:プラトン:哲学者:プラトン全集１:岩波書店:1975年:松永
378:ジョン・ミルトン:詩人:仮面劇コーマス:南雲堂:1958年:才野
379:ジェフリー・チョーサー:詩人:2016年:安本
380:トマス・ア・ケンピス:思想家:キリストにならいて:講談社:1975年:呉、永野
381:プラトン:哲学者:プラトン全集１１:岩波書店:1976年:藤沢
382:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
383:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983年:宮西
384:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
385:ジェラード・マンリ・ホプキンス:詩人:ホプキンズ詩集:春秋社:1982年:安田、緒方
386:ウォルター・ローリー:詩人:2016年:安本
387:ディックビー・マックワース・ドルベン:詩人:2016年:安本
388:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016年:安本
389:レフ・トルストイ:作家:復活:新潮社:1980年:木村
390:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983年:宮西
391:ブレーズ・パスカル:哲学者:世界の名著２４パスカル:中央公論社:1966年:前田
392:チャールズ・ウェスレー:宗教家:2016年:安本
393:ジョン・ミルトン:詩人:言論・出版の自由:岩波書店:2008年:原田

394:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
395:ジョージ・ヘンリー・ボロウ:作家:2016 年:安本
396:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981 年:平井
397:カビール:哲学者:2016 年:安本
398:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
399:カビール:哲学者:2016 年:安本
400:アンリ・フレデリック・アミエル:哲学者:2016 年:安本
401:ミシェル・ド・モンテーニュ:哲学者:世界の大思想 5 エセー:河出書房新社:1970 年:松浪
402:リチャード・ワトソン:詩人:2016 年:安本
403:ロバート・バーンズ:詩人:2016 年:安本
404:エドマンド・バーク:哲学者:2016 年:安本
405:トゥキディデス:歴史家:世界の名著 5 ヘロドトス、トュキュディデス:中央公論社:1970 年:村川
406:シャルル・ド・モンテスキュー:哲学者:2016 年:安本
407:エイブラハム・リンカーン:政治家:リンカーン演説集:岩波書店:1957 年:高木、斎藤
408:エイブラハム・リンカーン:政治家:リンカーン演説集:岩波書店:1957 年:高木、斎藤
409:エドマンド・バーク:哲学者:2016 年:安本
410:ジョン・ミルトン:詩人:言論・出版の自由:岩波書店:2008 年:原田
411:ウィリアム・ブレイク:詩人:2016 年:安本
412:ウォルター・スコット:詩人:最後の吟遊詩人の歌:評論社:1983 年:佐藤
413:フランシス・ヘイスティングス・ドイル:詩人:2016 年:安本
414:ジョン・ミルトン:詩人:劇詩　闘士サムソン:思潮社:2011 年:佐野
415:カビール:哲学者:2016 年:安本
416:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:渓文社:1992 年:高橋
417:チャーチ・サービス:2016 年:安本
418:作者不詳:2016 年:安本
419:作者不詳:2016 年:安本
420:ウィリアム・ワーズワース:詩人:ワァヅワス詩集:新潮出版社:1935 年:幡谷
421:ホメーロス:詩人:河出世界文学大系 1 :河出書房新社:1980 年:田中、高津
422:ジョン・キーツ:詩人:キーツ全詩集:白鳳社:1974 年:出口
423:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:2016 年:安本
424:アンドリュー・ラング:詩人:2016 年:安本
425:ウィリアム・ジェームズ:哲学者:信ずる意思:日本教文社:2015 年:福鎌
426:ウィリアム・ブレイク:詩人:2016 年:安本
427:ジュリアン・グレンフェル:詩人:2016 年:安本
428:ウィリアム・シェイクスピア:作家:ソネット詩篇:鷹書房弓プレス:2009 年:村松
429:ルパート・ブルック:詩人:2016 年:安本
430:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
431:ルパート・ブルック:詩人:2016 年:安本
432:ロバート・ルイス・スティーヴンソン:作家:2016 年:安本
433:ウィリアム・コリンズ:詩人:英詩珠玉選:大修館:1990 年:石井
434:チャールズ・ウルフ:詩人:2016 年:安本
435:ジョージ・ゴードン・バイロン:詩人:2016 年:安本
436:ジョン・ミルトン:詩人:ミルトン英詩全訳集:金星堂:1983 年:宮西
437:ディックビー・マックワース・ドルベン:詩人:2016 年:安本

438:チャーチ・サービス:2016 年:安本
439:ジョン・ミルトン:詩人:劇詩　闘士サムソン:思潮社:2011 年:佐野
440:ウィリアム・シェイクスピア:作家:リチャード 2 世:筑摩書房:2015 年:松岡
441:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
442:ジェイムズ・ラッセル・ローウェル:詩人:2016 年:安本
443:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:シェリー詩集:新潮社:1980 年:上田
444:アンドレ・シェ二エ:詩人:2016 年:安本
445:チャーチ・サービス:2016 年:安本
446:チャーチ・サービス:2016 年:安本
447:ジョン・ミルトン:詩人:失楽園:岩波書店:1981 年:平井
448:パーシー・ビッシュ・シェリー:詩人:鎖を解かれたプロメテウス:岩波書店:1957 年:石川
449:チャーチ・サービス:2016 年:安本